

文部省科学研究費補助金特定領域研究 (A)118

「古典学の再構築」

(平成10年度～平成14年度)

研究成果中間報告集

平成12年9月10日現在

「古典学の再構築」総括班編

凡 例

- 1 本冊子は、文部省科学研究費補助金特定領域研究（A）「古典学の再構築」に参加する計画研究・公募研究の平成12年9月10日現在の中間報告を纏めたものである。
- 2 報告は、【要旨】、【位置付け】、【研究成果】の3部に分かれる。
- 3 【要旨】は、【位置付け】と【研究成果】の概要である。
- 4 【位置付け】は、研究対象である古典の、文明中における位置付けと、現代における価値を記述する。
- 5 【研究成果】は、発足以来、1年半の研究成果の概要を述べる。ただし総括班研究は、平成10年8月に開始されたから、2年1ヶ月間の研究成果である。研究によって解明された事実のほか、入手した新資料、採用した新方法・新視点等を含む。
- 6 中間報告は、(1) 総括班研究、(2) 調整班研究、(3) 専門研究、の順に置かれ、専門研究内部では、(a) 計画研究、(b) 公募研究の順に、また計画研究、公募研究の内部では、「日本」、「中国」、「インド」、「イスラム」、「イスラエル」、「西洋」、「その他」の順に配列されている。

研究成果中間報告集

目 次

1. 総括班研究(計画研究)

1. 古典学の再構築 20世紀後半の研究成果総括と文化横断的研究による将来の展望 中谷英明他11名 7

2. 調整班研究(計画研究)

2. A01 「原典」 池田知久他27名 10
3. A02 「本文批評と解釈」 関根清三他17名 11
4. A03 「情報処理」 徳永宗雄他25名 12
5. A04 「世界の古典像」 内山勝利他19名 13
6. B01 「伝承と受容(世界)」 中務哲郎他20名 14
7. B02 「伝承と受容(日本)」 木田章義他18名 15
8. B03 「近現代社会と古典」 中川久定他10名 16

3. 専門研究(計画研究・公募研究)

A01 「原典」

9. 『明月記』『吾妻鏡』の写本研究と古典学の方法 五味文彦他12名 18
10. 原本『老子』の形成と林希逸『三子齋口義』に関する研究 池田知久他1名 20
11. チベット大蔵経とチベット蔵外文献研究 御牧克己 21
12. タミル古典の文献・写本・電子ファイルに関する情報および現物の収集 高橋孝信 23
13. チャガタイ・トルコ語、ペルシア語文献の諸写本研究 間野英二他1名 24
14. 西洋近代哲学と中国古典 堀池信夫 26
15. スコイエン・コレクションのアフガニスタン出土仏教写本の研究 松田和信 28
16. いわゆるティムール朝ルネサンス時代におけるペルシア語・チャガタイ語文献の研究 久保一之 30
17. 中央ユーラシア地域に伝播した仏典の研究 吉田豊他3名 32

A02 「本文批評と解釈」

18. 六朝期の著作における伝統の継承と変容 斎藤希史他1名	34
19. インド哲学における聖典観の展開 本文批評の方法論的反省を踏まえて 丸井浩他1名	35
20. 旧約聖書の本文批評と解釈 その方法論的反省から翻訳の実例まで 関根清三他1名	38
21. 初期キリスト教におけるイエス伝承の変容史的研究 佐藤研	41
22. 韓孟聯句研究 川合康三他1名	42
23. 古典としての古典学 宋学文献を中心に 土田健次郎	44
24. 北朝文化の研究 言語学的考察 木津祐子	46
25. 元明代の散曲研究 金文京	48
26. 漢代における古典の成立と文学の変容 釜谷武志	49
27. プラーフマナ研究 ヴェーダ散文文献の翻訳と注解 後藤敏文	51
28. 法称の推論説とその展開 岩田孝他1名	52
29. 古典インドにおける聖典解釈技術法の基礎的研究 吉水清孝	56
30. 北西セム語碑文資料に基づくヘブライ語聖書本文批評研究 月本昭男	57

A03 「情報処理」

31. 古典文献の計量的分析 村上征勝他1名	59
32. 日本古典文学本文データベース(実験版)の試験公開 安永尚志他11名	60
33. 古典テキストのデジタル化とデータベース構築・利用支援システムの開発 及川昭文他4名	63
34. 古典文献データベースの表記体系確立 徳永宗雄	66
35. 平安時代物語文の比較計量的研究 今西裕一郎他3名	68
36. インド古典天文学書の研究と伝統暦プログラムの改良 矢野道雄	70
37. 古典学のための多言語文書処理システムの開発 高島淳	71

A04 「古典の世界像」

38. 中国における制度と古典 科挙制度と言語史・文学史の相関から 平田昌司	73
39. 東アジアの科学と思想 川原秀城他1名	75
40. 原始仏教思想の解明 パラモン教聖典の同時的解明を通じて 中谷英明	77
41. オスマン朝における伝承知と理性知 濱田正美他1名	79
42. イラン・イスラーム文献が描くモンゴル時代の世界像の研究 杉山正明他1名	81
43. ユダヤ教の法論理的思考の特徴とその形成に果たしたタムレードの影響 市川裕	83
44. 古代ギリシア像の再検討 内山勝利	86
45. 中国古典に現れる通常語についての再検討 木下鉄矢	87
46. 朝鮮古刊本及び古鈔本の調査とその文献学的研究 藤本幸夫	89
47. インド古典における言語論の展開の解明とその比較論的考察 赤松明彦他1名	91
48. イスラーム哲学におけるアリストテレス『デ・アニマ』受容と靈魂論の展開 小林春夫	93

49. 古典ハンバリー派法学の成立と発展の比較思想史的研究 中田考	95
50. 古典古代の弁論家と修辭的伝統 小池澄夫	97
51. 古典期ギリシア哲学の変容 新プラトン主義による文献的・思想的改竄の問題 中畑正志	98
52. ギリシア哲学における倫理思想の再検討 朴一功	100
B01 「伝承と受容(世界)」	
53. ギリシア・ローマ文献の形成・伝承・受容史の研究 中務哲郎他 2 名	102
54. ユースティニアヌス帝「学説彙纂」研究 元首政期法学著作の伝承と受容 西村重雄他 1 名	103
55. ビザンツ帝国と古典継承・創造活動 マケドニア朝期の古典再生とその歴史的意義 大月康弘	105
56. 李氏朝鮮における中国古典の受容と学問知の形成 吉田光男	107
57. シヤーンティデーヴァ作『入菩薩行論』の伝承と変容 斎藤明	109
58. 古ジャワ版『マハーバーラタ』の伝承と受容 安藤充	110
59. 旧約聖書における歴史伝承の研究 特に「サムエル記」「列王記」「歴代誌」を中心に 山我哲雄	111
60. 初期ギリシア文学におけるゼウスの主権 安村典子	112
61. ラテン文学におけるギリシア神話の受容と継承 叙述技法から見た研究 高橋宏幸	115
62. ヨーロッパと日本における西洋古典文学の伝承と受容 西村賀子	116
63. 西洋古典文献の伝承史と中世東西地中海世界の修道制をめぐる実証的研究 秋山学他 1 名	118
B02 「伝承と受容(日本)」	
64. 中世における外国文化の受容と展開 木田章義他 1 名	120
65. キリタン文献の文化横断的研究 米井力也他 1 名	123
66. 近代日本における西洋古典文化の受容と教養文化の変容に関する歴史社会学的研究 筒井清忠他 1 名	124
67. 禅林聯句に関する基礎的研究 朝倉尚	126
68. 「大航海時代の語学書」としてのキリタン文献 インド・コンカニ語諸文献との対比を中心にして 丸山徹	128
69. 日本における唐律令・礼の継受と展開 大津透	130
70. 古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究 金水敏他 1 名	131
71. 古典和歌データベースにおける表現技法の歴史的研究 南里一郎他 2 名	134
72. 近衛家熙考訂本『大唐六典』の研究 礪波護	136
B03 「近現代社会と古典」	
73. 『シャーンナーメ』の伝承とイラン人意識の形成 羽田正他 1 名	138
74. 近現代社会における西洋古典学の継承 フランスにおける文学研究と文学史の成立 中川久定他 1 名	140
75. ヨーロッパのレトリック教育 古典との関わりにおいて 月村辰雄他 2 名	143
76. 西洋世界における古典の伝承と解釈 中川純男他 2 名	145

1 総括班研究

1 「古典学の再構築」総括班研究

領域代表 中谷 英明
評価委員 藤沢 令夫・高崎 直道
調整班代表 池田 知久・関根 清三・徳永 宗雄・
内山 勝利・中務 哲郎・木田 章義・
中川 久定
事務担当 丸井 浩・斎藤 希史

【要旨】

1. 「古典学の再構築」は、19世紀に西欧で成立した近代古典学を刷新し、地球文明時代にふさわしい一般古典学の確立と新しい古典像の提示をめざしている。
2. このために、古典学が内包する近代西欧固有の価値観を見直し、情報処理技術を応用し、古典学の全主要領域の連携研究を重視する。
3. 一般古典学によって提示される諸文明の新しい古典像は、日本人の世界観を、近代の開始以来初めて西欧の借り物でなく、日本人自身のものとすることに貢献するであろう。
4. これまでの1年半においては、シンポジウム、研究会、論文集、ニューズレター、雑誌の刊行など、当初計画どおり、順調に共同研究の実をあげている。
5. 日本学会会議に「新しい価値観の構築と古典学研究所の設置について」という提案を行った。

【位置付け】

1 文明と古典

古典は、人々の叡智の精髓を集成した宗教聖典、神話、哲学書、法典、文芸作品、史書などとして諸文明において創造され、伝承され、またそれが素材となって新しい古典が創造される、ということが繰り返されてきた。宗教規範や社会慣習、あるいは法律や政治綱領となり、また倫理的、美的源泉となりつつ、古典は文明の精神的根幹を形成し、その活力の本源となってきた。

大規模な社会変革が生起すると、それに沿う古典が創出された。新しい社会体制は新しい古典によって求

心力と推進力を獲得し、次の変革までの安定を維持した。何を古典と見なすかは、したがって、宗教的、文化的事象でもあり、場合によっては優れて政治的、社会的事象でもあった。

2 近代古典学の使命

近代古典学の諸学は、自然学において顕著な成果を挙げた近代科学を人文学に応用するべく、18世紀末から19世紀前半のヨーロッパにおいて、ギリシア・ラテン、イスラエル、イスラム、インド、イラン、中国、日本、チベットなどの古典を対象として、次々に成立した。これは産業革命とフランス革命を経たヨーロッパが、外の諸文明の古典を当時の西欧の新しい価値観に従って把握し、近代社会にふさわしい新しい古典像を生成する試みに他ならなかった。

近代古典学は、科学的思考に裏打ちされた文献学的手法によって伝統的古典学の恣意性、非論理性、非実証性を打ち破り、サンスクリット文法学などごく一部の例外を除き、伝統古典学を圧倒し、確たる学的基盤を確立した。

日本は、明治の中期からこれら諸古典学をヨーロッパから移植し、今日ではすべての主要な文明の古典に関して高水準の研究を擁するに至っている。これら古典諸学の成果は、明治以来、日本人の世界観を形成する上で少なからぬ役割を果たしてきたと言える。

3 「古典学の再構築」の目標

特定領域研究「古典学の再構築」は、このような経緯で今日に至った古典学を根本的に刷新することを目的とする。それは、(1) 方法論や学的枠組みに潜む近代西欧的価値観(キリスト教以外の宗教の軽視、合理主義の偏重、西欧中心主義)の見直し、(2) 高度の情報処理技術の応用、(3) 史上初の古典学の全主要領域の研究連携、という3種の方法によって、新しい古典学、「一般古典学」の構築に努め、またそれによって古典の新しい日本語訳を創出することである。

4 「古典学の再構築」の意義

(1) 学的意義

i. 個別古典学から一般古典学へ / 近代古典学から現代古典学へ

文明ごとに個別に行われてきた古典学が領域間の積極的対話を通じてより精密かつ普遍的な新方法論を確立すること、すなわち「一般古典学」の構築は、19世紀西欧社会にふさわしい形で形成された近代古典学を、

グローバル化の進展とともに成立しつつある地球文明時代にふさわしい、現代古典学に変容させることである。

ii．新しい古典像の提示

それは、古典の理解、古典の評価・取捨選択、古典の日本語訳において、近代西欧的価値観から独立した、新しい古典像を提示することになるであろう。

iii．情報処理技術による古典学の刷新

情報処理技術によって、古典学の水準は飛躍的に向上する。これは所謂「テキストの氾濫」に対処し、それを制御して、知識の宝庫に変えることでもある。

(2) 国内外における意義

i．多様な文化の承認

一般古典学は古典に表される人生観、世界観、美的感覚を、その多様性において正確に認識することにつとめるから、諸文明は、一文明の価値観に偏せず評価されることになる。

ii．新しい価値観の形成

現代世界における無秩序感の浸潤と碎片化した価値観の錯綜は、人類の文明が新しい段階に入り、ひとつの地球文明が醸成されつつあることを映している。一般古典学は、諸文明の古典の多様性の認識を踏まえて、地球時代の世界の精神基盤となる新しい普遍的価値観の創出に貢献するであろう。

iii．科学技術と価値観

遺伝子工学、情報処理、核兵器を含む軍事技術等の科学技術の飛躍的発展は、これらを使用する人々が正しい価値観を持つことを必須の要件としている。この意味において上記価値観の創出は、現代世界において極めて緊要である。

iv．新しい日本文明の礎と日本発の文化的発信

日本において構築される一般古典学は、日本人の世界観を、初めて西欧の借り物でなく、日本人自身のものとなすであろう。

排他性の強い宗教や哲学を持たない日本文明は、古代から周辺文明の高い文化を謙虚に摂取し発展させてきたが、近世絵画や陶芸などの僅かの例を除き、他の文明に影響を与えたことはほとんどなかった。一般古典学の構築と普遍的価値観の創出は、受動的な日本文明史の中で、初の世界に向けての日本発の本格的文化的発信となるであろう。

【研究成果】

1 概要

(1) 研究活動

特定領域研究「古典学の再構築」は、平成10年8月

より総括班研究が発足し、11年度から計画・公募両研究の全体（75課題・参加研究者138人・評価委員4人）が開始された。

この間に、5回の公開国際シンポジウム、10回の総括班会議、19回の調整班会議（研究会議）を開催し、熱心な討議を行ったほか、ニューズレター『古典学の再構築』（7号を発行）や雑誌『古典学の現在』（1号を発行）によって研究成果を参加研究者全員に周知させ、共同研究を一層充実させた。

(2) 日本学術会議への提案

総括班は、日本学術会議第1部に「新しい価値観の構築と古典学研究所の設置について」を提案し、3研究連絡委員会において報告として採択された。この提案は、新しい価値観構築において古典学が主要な役割を果たすことに鑑み、古典学の拠点となる大学共同利用機関「古典学研究所」の設置を提案するものである。

(3) 総括と見通し

高度の論理性と実証性を備える近代古典学において、最近、自らその内にある近代西欧固有の価値観を払拭しようとする努力もなされているが、なお不十分と言わざるを得ない。このような努力を継続する必要がある。

ことに翻訳における訳語は、原典のヨーロッパ語訳の訳語としての日本語でなく、あるいはまた漢訳仏典の訳語など既成の語彙を借用するのではなく、原典本文そのものに最もふさわしい日本語を用いなければならない。翻訳は文化的創造であることを自覚し、古典研究者自身の日本語の感性を洗練する必要がある。

近代古典学発足以来、後代の注釈によって原典を読み解く方法が王道とされてきたが、テキストデータベースが整備されつつある今日、注釈によらず原典の読みを確定し得ることが多くなりつつある。このような方法論的反省も必要である。

戦後、古典は価値評価を抜きに研究される傾向がある。古典研究者自身が古典を文明史中に位置付けることはもちろん、古典の現代における価値も明らかにするよう努めなければならない。研究の緻密さを追求する結果、細分化が進んでいるが、同時に文明全体を俯瞰する視野を持ちつつ研究を遂行するべきであろう。

情報処理の応用は、今後の古典学を飛躍的に向上させる可能性を秘めている。諸古典学が共同してこの可能性を追及することが望ましい。

全体が発足して以来1年半が経過し、以上のような認識が共通のものとなったといえる。いわば行くべき道がようやく明らかになった段階であり、今後は具体的な成果がより多く現れてくるものと期待される。

2 研究活動の詳細

A. 公開国際シンポジウムの開催

- (1) 「古典学の再構築に向けて」平成10年12月27・28日 於京都大学芝蘭会館
基調講演：1. Michael WITZEL (ハーヴァード大学) 2. 加藤周一(評論家) 3. 上山春平(京都大学名誉教授)
- (2) 「いま古典を問う」平成11年7月17・18日 於文部省統計数理研究所
基調講演：1. 石井紫郎(国際日本文化研究センター) 2. 藤沢令夫(京都大学名誉教授) 3. 今道友信(英知大学教授)
- (3) 「文明と古典」平成12年3月24・25日 於日本学術会議・東京大学文学部；日本学術会議と共催 基調講演：1. 裘錫圭(中国北京大学中国語言文学系(古文字学)教授) 2. 服部正明(京都大学名誉教授) 3. 石川忠久(二松学舎大学大学院教授)
- (4) 中国学分野国際シンポジウム「文化的制度としての中国古典」平成12年7月15日・16日 於京大会館 基調講演：興膳宏(京都大学名誉教授) 発表者：1. 李零(北京大学) 2. 陳平原(北京大学) 3. 吳承学(中山大学) 4. 林梅村(北京大学) 5. 葛兆光(清華大学) 6. 夏曉虹(北京大学)
- (5) 「現代世界と古典学」平成12年9月22日・23日 於芝蘭会館・京大会館
基調講演：1. 久保正敏(東京大学名誉教授) 2. Heinrich von STADEN (Princeton 大学教授) 3. Guenther POELTNER (Wien 大学教授)

B. 諸委員会の活動

- (1) 出版委員会：『講座古典学』(岩波書店刊行予定)の企画検討。
- (2) 古典学会準備委員会：古典学を連合する「古典学会」(仮称)を構想中。
- (3) 古典教科書検討委員会：古典教科書のあり方の検討。
- (4) 広報委員会：ホームページをインターネット上に開設。(http://www.kotengaku.bun.kyoto-u.ac.jp)

C. 出版物

- (1) ニュースレター『古典学の再構築』
 - 1号：平成10年10月・31頁
 - 2号：平成11年2月・32頁
 - 3号：平成11年3月・64頁
 - 4号：平成11年9月・39頁
 - 5号：平成12年1月・59頁
 - 6号：平成12年4月・30頁
 - 7号：平成12年7月・73頁

- (2) 『古典学の現在 I』(平成12年3月・112頁)
- (3) 池田知久『郭店楚簡老子研究』(平成12年2月・東京・371頁)
- (4) 東京大学郭店楚簡研究会編『郭店楚簡の思想史的研究』第3巻(平成12年3月・東京・224頁)
- (5) 東京大学郭店楚簡研究会編『郭店楚簡の思想史的研究』第4巻(平成12年8月・東京)

D. データベース公開

サンسكريットテキストデータベース公開(『シャクンタラー』、『ニルクタ』)

E. 本特定領域総括班提案「新しい価値観の確立と古典学研究所の設置について」の日本学術会議における審議経過

- (1) 平成11年12月17日：第1部語学・文学研究連絡委員会において本特定領域総括班が提案した「大学共同研究利用機関「古典研究所」(人文社会科学基礎研究所)設立申請趣意書が審議され、採択される。
- (2) 平成12年1月24日：第1部西洋古典学研究連絡委員会において上記設立申請趣意書が審議され、採択される。
- (3) 平成12年2月7日：第1部西洋古典学研究連絡委員会において上記設立申請趣意書が審議され、採択される。
- (4) 平成12年2月17日：上記設立趣意書が第1部会において審議される。
- (5) 平成12年2月23日：日本学術会議運営審議会において、上記趣意書を増広した「新しい価値観の確立と古典学研究所の設置について」(報告)が、語学・文学研究連絡委員会委員長の石川忠久氏から報告される。
- (6) 平成12年7月6日：上記報告が第1部会において審議される。

F. その他

- (1) 岩波書店発行『文学』(平成12年7・8月号)において「転換期の古典」と題する特集が組まれ、本特定領域からは、領域代表中谷の他、中川久定、興膳宏両氏が座談会に出席。中務哲郎、鎌田繁、安永尚志、今西祐一郎の各氏が執筆。
- (2) 日本学術振興会刊行『学術月報』(平成12年11月号)において古典学特集が組まれ、本特定領域からは、領域代表中谷の他、中川久定、池田知久、内山勝利各氏が吉川弘之会長、石井紫郎国際日本文化研究センター教授とともに「現代における古典学の役割」と題する座談会を行い、また15人の研究者が執筆する(近刊予定)。

2 調整班研究

2 A01班・調整班研究

A01 「原典」

研究代表者 池田 知久

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

【要旨】

「古典学の再構築」全体の中で原典研究は特に重要。「原典」班の目的は、(1) 諸原典の状況を把握し結果を告知させ、それらの共通性と相異性を文明横断的に解明。(2) 半世紀間の各文明の原典研究を総括、古典学全体への大局的な総括も行う。(3) 古典伝承の形態である口承と書写につき各文明内部で研究、原典形成の一般理論を確立、等々。

世界の諸文明の中に近代西欧以外にも優れた文明があることを究明し、21世紀の新たな文明観を展望する、現代の世界的レベルから見ても画期的な研究である。

参加する各研究者の専門分野を超えた相互理解・共通認識が構かれ、文明の相異を超えた共通点として口承と書写の重要性を強く意識するに至った。

【位置付け】

古典諸学の中で原典研究は最も基礎的位置を占める。その意味で、本特定領域研究「古典学の再構築」全体の中でも原典研究は特に重要である。「原典」班には、計画研究5件19名、公募研究6件9名、合計11件28名の研究者が参加している。

「原典」班の研究目的は、以下のとおり。

- (1) 原典をとりまく状況はそれぞれの文明によってまちまちであるが、各文明における原典の状況を把握しその結果を報告して広く研究者・市民に知らせること、このような活動の中でそれらの共通性と相異性を文明横断的に明らかにすること。
- (2) 最近半世紀間に進展した各文明における原典研

究(校訂・注解・方法論等)を当該文明の中で総括すると同時に、古典学全体に対しても諸文明の研究の相互理解を通じて大局的な総括を行い、以上の中から来たる21世紀の新たな古典学の方向を見出すこと。

- (3) 古典が伝承されてきた形態である口承と書写について、各文明の内部におけるその種類・特徴等の研究を進めるとともに、その研究成果の上から立って原典形成の実際の姿を文明横断的に考察しながら、一般的な原典形成の理論の確立を目指すこと。
- (4) 各研究が諸原典の写本・版本の所在を実地に調査し、電子機器等を用いてそれらのデータベース化に努め、各テキストの比較検討・批判的校訂等の作業を進めるが、「原典」班としては共同利用の機器等を購入してそれらの作業を奨励すること。

日本・中国・インド・チベット・イスラム等々の諸原典やそれに対する研究は、現代に至る世界の諸文明の中に、今日世界を圧倒的に支配している近代西欧文明以外にも優れた文明が多々あることを究明しようとし、また東西両文明を積極的に取り入れてきた日本人による、21世紀の新しい文明観の可能性を展望しようとするものである。このような位置づけを持つ大型の研究計画は、国内外を通じていまだかつて提起されたことがなく、それ故、本研究は現代の世界的なレベルから見ても画期的な業績となりうるであろう。

【研究成果】

「原典」班に参加する各研究者が、この1年半に上げた具体的な研究成果については、当該研究者の中間報告を参照。重複を避けるためにここでは省略する。

今日、諸原典の置かれた状況、諸原典の研究されている状況は、それらを生んだ文明の相異によってまちまちであり、全ての原典に共通する状況を見出すことは困難である。

この状態を克服する目的で、本「原典」班はこの1年半の活動の重点を、各研究者の専門分野を超えた相互理解・共通認識の構築に置いた。そのために、平成11年度は2回の研究集会と1回のシンポジウム、平成12年度は3回の研究集会をそれぞれ開催し、毎回数名の研究者による報告とそれに基づく討論を行った。そ

の結果、各研究者の専門分野を超えた相互理解・共通認識が構築されつつあり、その中から、文明の相異を超えた共通点として、原典伝承の形態である口承と書写の重要性を強く意識するに至った。

また、近年、簡帛資料の出土が相次ぎ古典学の再構築が猛烈な勢いで進行している中国から、専門研究者として北京大学の裘錫圭教授を招いて開催したシンポジウム「文明と古典」では、「疑古・信古・釈古（古典を疑う・信ずる・解釈する）についての理論的な問題提起を受け、研究者の国境を越えた相互理解・共通認識を進めることができた。

なお、今年度下半期以降には、古典学、特に原典研究全体に対して大局的文明横断的な総括を行うこと、口承と書写の位置づけを含む原典形成の一般的理論の確立を目指すこと等が、重要な研究課題として残されている。

3 A02班・調整班研究

A02 「本文批評と解釈」

研究代表者 関根 清三

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

【要旨】

調整班研究「本文批評と解釈」の研究目的は、インド・中国・イスラエルの諸古典学が結集して、本文批評と解釈の、新しい理論と実際を提示することである。

従来の古典学では、その方法論に潜む価値観（例えば近代西欧特有の自然観や人間観など）が古典本文の客観的な読みを阻害する傾向が少なからずあり、また近年急速に発達してきたコンピューターの総合的な利用法について十分な検討がなされて来なかった。

本調整班研究のこの1年半の活動は、この二点の不備を補い、諸古典本文固有の論理を解釈学的方法論に基づいて記述する視座を創出すること、またコンピューターを駆使した本文批判学の標準を確立し、これを

普及させることを目指し、1999年6月に京都で、99年7月と2000年2月には東京で、また2000年7月には浜松で、計四度にわたる企画会議、共同研究会を催し、またその成果をニューズレターに公にした。またニューズレター第5号は、本調整班が編集にあたり、企画執筆に当たった。

【研究成果】

個別の具体的成果としては、インド学とイスラエル学において次のような成果が報告・討論された。まずインド学では、クマーリラのヴェーダ聖典論が、テキスト内部に中核的部分と階層的構造を設定し、更に個人の実践にその構造を反映させようとした点で、古来伝承されてきたヴェーダを新たに意義付けるという時代の要請に応えたものであることが報告確認された。バラモン哲学諸派のうちで、古代の祭式文献であるヴェーダの解釈学を担当したミーマーンサー学派は、従来からヴェーダを古代人の創作ではない天啓聖典であるとしてヴェーダの権威を絶対視していたのに対し、6-7世紀に学派を代表したクマーリラは、個人の認識能力でもって普遍的な倫理的・宗教的規範を見出すことはできないと強調してヴェーダの伝統を守りつつも、行為における人間個人の自発性を尊重する聖典解釈理論の新たな枠組みを企てたのである。これは古典の解釈をめぐる、人間個人と伝統との関わりという、独りインドだけでなく、諸分野に普遍的な問題に展望を開く研究成果であった。またイスラエル学の分野では、1947年以降、死海北西岸のクムラン洞窟とその周辺で発見された所謂「死海写本」が旧約聖書の正典化過程の解明にどのような光を投じたかについて、コンピューターを駆使した研究成果が確認された。古典としての聖書の一特徴は、長期間に亘って成立してきた様々な性格の書物が、紀元後1世紀以降の特定の時代に正典化過程を経てその内容と範囲が限定されていることであるが、死海写本発見以前には、ヘブライ語（マソラ）本文ではレニングラード写本（1008年ないし1009年）とアレppo写本（10世紀始め）、断片のナッシュ・パピルス（紀元前1世紀以前）などが知られていた。ヘレニズム時代にはギリシア語訳聖書が出現するが、それらは4世紀以降のヴァティカン写本、シナイ写本、アレクサンドリア写本が中心である。その外に1616年に再発見されたサマリヤ五書があった。これらの諸テキストの間には少なからず相違があり、どちらが正しいかの判定を下すことは困難であった。死海写本は一挙に千年以上古い時代状況を照射し、テキスト間の相違が既に紀元前3-1世紀に存在したこ

とを明かにした。いくつかの死海写本テキストについて、マソラ本文、ギリシア語訳、サマリヤ五書との比較検討を行い、三つの系統への分類と相互の関連を明らかに出来た。こうした研究は、イスラエル学に限らず、他の分野における本文批評的研究にコンピューターを利用して、テキスト比較をする方法論的示唆に富むものである。なお中国学の分野については、来たる9月22日京都での、第5回共同研究会で、最新の成果が報告される予定である。

4 A03班・調整班研究

A03 「情報処理」

研究代表者 徳永 宗雄
京都大学大学院文学研究科 教授

デジタルテクノロジーの急速な進歩にともない、人文学の領域でもコンピューターを利用した研究が日常化しつつある。このような状況に鑑み、「情報処理」調整班では、古典研究にデジタルテクノロジーを有効利用する方法の開発を研究の主たる目的としている。

これまでの研究成果は以下の四項目である。

- (1) 研究資源となる電子テキストの作成
- (2) ポータブル「マハーバーラタ」の完成
- (3) インターネットを利用した国際的なオンライン共同研究
- (4) 人文学に特化した XML データベースの構築

以下、個々の項目について簡単に説明を加える。

- (1) 過去一年半に、古典インド文学の最高傑作「シャクンタラー姫物語」、古代インド語源学書「ニルクタ」、主要ウパニシャッド全15巻の電子化を完了し、「古典学再構築」のサーバ、

(http://tiger.bun.kyoto-u.ac.jp/mtokunag/skt_texts) で公開している。これらはいずれもインド古典研究に不可欠なテキストであり、その公開に対しては、国内外の研究者から惜しみない賛辞が寄せられている。

- (2) 「マハーバーラタ」は全20巻からなる世界最大に叙事詩であるが、その全巻をデジタル画像にして CD ROM に取り込み、ノートブック PC で持ち運べるようにした。(ポータブル・マハーバーラタの完成)これにより、迅速に「マハーバーラタ」を参照し、かつ場所を問わずその研究を行うことが可能となった。
- (3) インターネットの急速な普及によりオンラインでの国際共同研究が可能となってきた。本調整班では、世界に先駆けてこの試みに取り組み、現在「マハーバーラタ」中の哲学篇として有名な「解脱法品」に関する国際研究をオンラインで行っている。この共同研究では、数名の研究者からなる「編集班」がイニシアティブをとり、同篇の訳注を交代で作成して Web ページに公開し、この訳注に関して、外国人数名を含む10数名からなるコメンテータ・グループが、常時、電子メール (mdhp@tiger.bun.kyoto-u.ac.jp) で議論に参加し、成果をリアルタイムに Web page に公開している。
- (4) 本調整班では、(2) で述べたオンライン共同研究の成果を HTML テキストの他に XML 形式のテキストで公開している。古典研究への XML の使用も世界に先駆けた試みであり、海外の研究者からも大きな期待が寄せられている。XML を使用する第一の理由は、この言語が個々の研究者の研究成果を統合するのに適していることである。つまり、これまで、研究者が別個に行ってきた研究を、XML を共通の言語として使用することによって、統合化され、研究成果を共有することが可能になる。これにより学問の進歩が促進されることは言うまでもない。第二に、XML のテキストにしておけばそのテキストを変換して様々な形式で出力できることが挙げられる。これまで、古典学の研究成果は大半が書物として出版されてきた。しかし、現在では、書物の他に、Web ページのような HTML テキストの他に PDF, TeX 出力, GIF や JPG の画像出力, 音声出力, 動画, そしてこれらを組み合わせたマルチメディア形式など、出力形式が極めて多様化している。XML

はそれらの出力形式のソースとなるものであり、XML を使用することにより、今後、研究者は研究の成果を、時代の要請に応じて、様々な形式で発表することが可能になる。

古典学者に限らないが、これまで研究者の多くは、他の研究者や社会との間に壁をつくり自分の研究室に閉じこもって閉鎖的な研究を行ってきた。このため、学問の蝸壺化は今や極限に達している。(1)電子テキストの共有,(2)ポータブル・マハーバーラタの完成,(3)オンライン国際共同研究,(3)XML データベースの応用は、いずれも、現在の憂うべき領域限定型研究スタイルを根本的に打破して、開かれた環境で研究できる環境を構築する試みに他ならない。その意味で、本研究班の意図は、単に古典研究の促進にとどまらず、旧来の人文研究のスタイルを根本的に見直しITを基盤とする開かれた研究環境を構築して、21世紀の学問研究のあるべき姿を先取するところにある。

今後の研究目標としては、以下のことを考えている。

- (1) インド古典文献の電子化を一層促進する。
- (2) オンライン国際共同研究を発展させる。
- (3) 古典学、人文学に特化されたXMLの一層の改善を図る。

(付記・調整班の予算が余りにも僅少であるため、(4)古典学XML開発の技術的研究は、計画研究「古典文献データベースの表記体系の確立」と共同で行っている。)

A04 「世界の古典像」

研究代表者 内山 勝利

京都大学大学院文学研究科 教授

【要旨】

- 1) 当調整班を当該特定領域研究全体の集約的役割を担うべきものと位置付け、各古典領域の思想的内実を明らかにしつつ、それらを共通の場へともたらし、真に有効かつ有意義な総合化・普遍化への方途を確立することを目指している。
- 2) そのために、共同研究会を特に重視し、毎年3 - 4回の定例会を開催してきた。
- 3) 定例会では研究発表とともに、多分野間での実質的な共同研究を進めるための指針が検討され、それに沿って現在いくつかの試みが着手されている。

【位置付け】

当班の研究活動は、ある意味で、当該特定領域研究全体を集約する役割を担うべき位置にある。多様な領域のそれぞれにわたる文献学的研究の成果をふまえて、各古典領域の思想的内実を明らかにしつつ、さらにそれらを共通の場へともたらすことで、単なる比較研究のレベルにとどまることなく、真に有効かつ有意義な総合化・普遍化への方途を確立することが、この調整班研究の目的である。

その第一段階として、当班メンバーは、発足以来共同研究会を特に重要視して、毎年3回ないし4回の定例会を開催してきた。そして、従来の比較思想的研究の水準を超えるための糸口として、まず参加者各自が現在推進している研究を報告しそれについて討議を交わすことで、相互認識を高める試みがなされてきた。この方法は、きわめて地道な活動であるが、議論の過程を通じてしばしば共通の問題基盤が明らかにされたり、また各自の専門研究にとって貴重な示唆を得る機会となることも多く、この研究会は今後も引き続き重ねていく予定である。

またこの間、「世界の古典像」を集約するための、

より積極的・具体的方法的についての議論も重ねられてきた。その結果として、現段階までの確認として、今後は以下のような仕方で多様な分野間での共同研究を実質的に進めていくことが申し合わされた。

- 1) 従来の作業を継続し、特定課題を設定して各古典領域の小レポートを持ち寄り、それについて共同討論を行う。
- 2) 共通の比較的高水準にあると認められる比較古典文化論や領域横断的研究について、複数領域の専門研究者が批判的に検討しあい、より高度な「比較研究」を通じて、そこに通底する、真の問題基盤を明らかにしていく。
- 3) 異文化間の相互接触や相互影響について、あるいは複数の文化領域間における伝承の過程の精密な追跡は、従来の古典研究においては必ずしも十分に行われてこなかった。今回のグループ研究においては、いくつかのテーマにしばらくつ、そうした新分野に着手する。

【研究成果】

これまでの段階は、いわば目標に向けての試験的蓄積の過程であり、メンバー各自の研究成果として公表された多数の業績を別にして、具体的成果のかたちで発表されたものには、いくつかの課題レポートの取り纏めがある。特に、各古典領域ごとの「学の理念とその内実」については、比較および総合に向けての手掛かりを有効に見いださうものとして、興味深い点が多かった。それについては、平成11年度の第2回シンポジウムにおいて、「東西古典世界における学の理念と内実」と題する調整班講演を行った（『古典学の再構築』第5号に発表要旨収録）。また、さきに記した定例研究会での発表内容も、同ニューズレターの各号に随時掲載されている。

なお、現在、上記1)から3)に対応した共同研究がすでにいくつか着手されている。たとえば、ガレノスの医学書についてのギリシア語版とアラビア語版の比較対照、中国倫理学とギリシア倫理学の根底にある思想基盤の解明などがそれである。これらは今後、上記ニューズレターに成果概要を公表していくとともに、ガレノスについては、『ヒポクラテスとプラトンの学説について』（注解付き）の邦訳刊行が、具体的に予定されている。また、雑誌『思想』で「古典学の再構築」特集を予定し、現在その編集計画の立案を進めているところである。

B01 「伝承と受容(世界)」

研究代表者 中務 哲郎
京都大学大学院文学研究科 教授

【要旨】

本調整班は計画研究4件10名、公募研究10件11名の21名で構成され、研究分野はインド学、イスラエル学、西洋古典学、ローマ法、ピザンツ学、ジャワ文芸、李氏朝鮮文学に広がっている。本調整班は研究目標として、(1) 古典の伝承の実態を把握することにより、古典を理想的な形で次代に伝え、(2) 古典受容のあり方を研究することにより、各文明の特質を明らかにすると共に、(3) 従来の各分野内で完結していた研究法に反省を加え、異分野横断・文化横断の新しい古典学の構築を目指すこと、を掲げた。しかし、各人の研究は着実に進んでいるものの、第三の課題にはいまだ取りかかりえていないのが実状である。

【位置付け】

伝承と受容の研究の意義を、大きなもの三つだけ挙げてみよう。まず、古典を正しく読み解釈しようとしても、断片の形でしか伝わらぬもの、あるいはオリジナルから大きく歪められて伝えられるものが多いので、古典研究には原典批判と並んで伝承と受容の研究が必須の基礎となること。次に、各時代の、あるいは文明から文明への伝承と受容を研究することが、古典(作品)の解釈そのものに直結することが多いこと。第三は、伝承と受容といってもその意味するところは文明圏によってかなり相違しており、その相違を共同の場で比較考察することにより、逆にそれぞれの文明の特質を明らかにできることである。

聖書や仏典のように聖典として伝承されたもの、中国の儒教典籍のように国家管理の下に伝承されたもの、ギリシア古典のように早くから文献学的処理の対象になったもの。ギリシアではしかし、前3世紀に文献学が興る以前には、作家たちは前代から伝えられた物語を必ず作り変え、新しい命を付与した上で次代に伝え

た。これは創作と文献学の違いのようでもあるが、われわれの古典研究にも役立つ観点であろう。古典のテクストはできる限りオリジナルに近いものを復元する、しかしそこから引き出す意味は不断に新しいものでなければならぬ、と。

【研究成果】

初めに述べたように、本調整班研究は個別の研究を統合して新しい古典学の方法を提言する段階には至っていないが、多くの異分野の研究者が会することにより初めて気づかれたことも少なくない。伝承や受容という言葉が各文明圏でかなり違った意味で用いられていることが認識されたのは重要である。そして、いずれの文明圏においても、伝えられたものより失われたものの方がはるかに多いことが知られたことは、自覚的に伝承に関わらねばならぬことを痛感させた。このことを西洋古典学を例として略述する。

古典を守ることの重要さと危うさを知るには、一つの対比に思いを致すだけで十分である。中世最大の学者の一人、セビリヤのイシドルス（6, 7世紀）はその図書館に約400冊の写本を蔵したといわれる。これに対して、前3世紀のアレクサンドリアのムーセイオンに設置された図書館は、ギリシア語・ヘブライ語を初めとする世界中の書物を収集し、蔵書は50万巻に及んだと伝えられる。50万と400と、この差に象徴されるほどの知的遺産の湮滅は容易に起こりうる。アレクサンドリアの図書館が消滅した原因として、ローマとエジプトが交えた戦火、キリスト教徒による焼き討ち、アラブ人の侵寇、等様々な推測が行われているが、ギリシアの古典が失われる契機は沢山あった。まず、口承から書承に移る文化段階で多くの口承叙事詩が失われた。ギリシア悲劇はコンテスト形式で上演されたため、入賞を逸した作品は消え去り、千を単位に作られた悲劇も現存するのは僅か33篇のみである。アリストテレスらによる学問の集大成は、先行の弁論術書の抜粋集を編むことで、皮肉にもオリジナルを忘れさせた。キリスト教はギリシア・ラテンの文学を異教の書として排斥したが、異教（heresy）という語がギリシア語 *hairesis*（選択）に由来するのも皮肉である。パピルスの書物が耐久性に劣り滅び易かったのは今日の酸性紙問題と重なるが、パピルス文献をより恒久的なメディアに託そうとして羊皮紙に転写した時代、また印刷術発明以後の写本の活版化の時代にも、選択が働いて多くの古典が忘れ去られたという事実は、古典テクストの電子化の時代に対しても警鐘を発していると思われる。

B02 「伝承と受容(日本)」

研究代表者 木田 章義

京都大学大学院文学研究科 教授

【要旨】

調整班研究 B - 02「伝承と受容(日本)」の扱う対象は、時代的にも、分野的にも極めて幅が広い。それを一つの有機的なまとまりのあるものにするのは難しい。わずか9班の人員で、外国文化の受容と展開をまとめようとするのは、一枚の風呂敷で家を包もうとするようなものである。しかし、本特殊領域研究の B - 02班では、はじめから、中世のキリシタンと禅宗に焦点を絞っており、その中世を核として、前後の時代を関連させるというやり方をとっている。本調整班の役割も、それに徹した。

【位置付け】

中世のキリシタン研究と禅宗（五山文学）の研究とは、研究者が少なく、日本文化・日本文学の研究史の中で、もっとも研究の進んでいない分野である。そこに一つの山を作り、日本文学史・文化史の流れをつなげることが、この特定領域研究の発足の時点から、B - 02が果たそうとしている使命である。

【研究成果】

調整班研究 B - 02「伝承と受容(日本)」の研究班は、9班に分かれており、各研究班のテーマも文学・思想から宗教にわたり、対象とする年代も古代から近代に到る。さらに対象とする外国の文献も、中国の律令、禅宗をはじめとして、ヨーロッパのキリスト教にいたるまで極めて範囲が広い。

B02 - 62 「中世における外国文化の受容と展開」

(木田章義・鈴木広光)

B02 - 63 「キリシタン文献の文化横断的研究」

(米井力也・エンゲルベルト＝ヨリッセン)

B02 - 64 「近代日本における西洋古典文化の受容と教

養文化の変容に関する歴史社会学的研究」
(筒井清忠・田中紀行)

B02 - 65 「禅林聯句に関する基礎的研究」
(朝倉尚)

B02 - 66 「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献」
(丸山徹)

B02 - 67 「日本における唐律令・礼の継受と展開」
(大津透)

B02 - 69 「古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究」
(金水敏・李長波)

B02 - 69 「古典和歌データベースにおける表現技法の歴史的研究」
(南里一郎・竹田正幸・福田智子)

B02 - 70 「近衛家熙考訂本『大唐六典』の研究」
(礪波護)

これらの研究班が一年に三回ほどあつまり、各テーマの基本となる点の修正や論議をおこなった。

キリシタン資料と中世五山文学の研究については、それぞれのテーマの研究成果はでているが、それらをつなげて論じるには、まだ時間がかかる。しかし、キリシタン資料の内部では、東アジアにおける日本という共通した視点で研究が進められ、これまでなら別々に研究されてきたようなテーマが共通の基盤のもとに研究されている。また、西欧文化の移入という点から、近代とのつながりも見通されており、中世以降の西欧文化の受容については、連続して分析できる態勢になっている。

五山文学の方では、文学と宗教という点からの接近がなされ、この調整研究の中では扱う班はないが、仏教の受容と、仏教と文学との関係については、これまでの研究があり、それらの研究との連関が付けることが可能になってきている。これらを通して、日本の散文がどのように成立してきたか、外国文学がその文体にどのように影響してきたかという視点での研究も行っている。

社会体制としての律令は古代と近世の間で、どのように伝承されてきたかという点で、つながりを持たせているが、これについても、この調整班では扱わないが、奈良時代から平安時代にかけての社会体制や文学との関連なども追及できる状況に近づいている。

和歌のデータベースについては、本調整班ではやや毛色が異なるが、これは、和歌を材料にはしているが、用語や文脈をコンピューターによって分析し、その中から関連するものを探し出すという面で、一般性をもち、これを応用すれば、日本の文献の中から、中

国古典やキリシタン文献の語彙や表現を探し出すことも可能になる。

8 B03班・調整班研究

B03 「近現代社会と古典」

研究代表者 中川 久定
京都国立博物館 館長

【要旨】

1. ヨ - ロッパ中世の大学におけるスコラ学は、アリストテレス哲学に大きく依拠していた。
2. ルネサンス期から始まり出したスコラ学、特にアリストテレス学説に対する批判は、それ以後18世紀まで続く。
3. 18世紀に、アリストテレスの自然学と哲学の失墜は決定的なものになった。

【位置付け】

アリストテレス思想の位置

アリストテレス哲学は、中世から18世紀にいたるまで、長くヨ - ロッパの学問を支配していた。その意味で、アリストテレスの体系は、学問的伝統を保証する中心的な古典であり続けた。その生きた使命は、18世紀で終わるが、しかし歴史的古典の1つとしての意義と価値は、今日でもなお揺るぎなく続いている。

【研究成果】

ヨ - ロッパにおけるアリストテレス受容の伝統（中世から18世紀まで）

ヨ - ロッパ中世の大学の指導原理であるスコラ学は、アリストテレスの『オルガノン』、聖書、教父の著作などを主たるコーパスとし、ある命題を提示するとそれを真とする立場と偽とする立場の双方から三段論法による証明を積み重ね、それらの証明の相互的な検討から真偽を決する緻密な論証法で、当時のヨ - ロッパ

の論証能力を飛躍的に高めたといえる。しかし、いくつかの欠陥を有していたことも事実で、その後のルネサンス期の知のパラダイムから振り返れば、その欠点は次の2点に要約される。すなわち、(1) 真偽の決定はコーパスとなる著作内での論理関係の矛盾・無矛盾の問題に還元されてしまったこと。たとえばアリストテレスであれば、『自然学』の記述は現実の事象との対応においてではなく、アリストテレスの他の著作との論理的連関において真偽が決定される。また(2) コーパスとなる著作からの引用が、全体としての意味を顧慮することなく、恣意的に切り離された断片として論証中に用いられたこと。スコラ学の時代の読書が各種のアンソロジーに基づくものであった点は、近年、読書史の方面から注目を集めている。

スコラ学、なかでもアリストテレスに対するルネサンス期の批判は、まず(2)の引用の恣意性をめぐる問題から始まった。例えばエラスムスは『痴愚神礼賛』などで、神学者は聖書やアリストテレスの一文を勝手に伸び縮みさせて引用すると揶揄しているが、原典の新しい読み方を組織的に提示したのはパリ大学学芸学部教授時代のルフェーヴル・デターブルである。彼は15世紀末、アリストテレスの諸著作の注釈書を矢継ぎ早に公刊しているが、初めに難解な述語を当該著作内の語彙で解説し、次いでアリストテレスの教説を当該著作における前後の文脈に即し順番通りに説明し、しかる後にまとまりのつく部分ごとにレジユメしてゆく。つまりコーパス内の一文がそのコーパス内の文脈に即した意味において把握される読書法が展開されるのであり、これがその後、大学内における講読法の主流を占める。また、(1)の著作の内容と現実との対応に関していえば、16世紀半ば、同じくパリ大学で教えたベトルス・ラムスの活動が重要である。彼はアリストテレスの全著作をコーパスとして相互に矛盾する箇所を網羅的に集め、それらの引用間の矛盾が絶対に解消されないことを論証した上で、矛盾を含むアリストテレスというコーパスは真ではありえないという結論を提示した。次の世紀以降になって展開される、テキストと現実の事象との対応関係から矛盾を指摘する方法の、前段階であると評価することができる。こうして大学内においてアリストテレスの絶対性は後退し、16世紀末から17世紀初頭にかけておこなわれたパリ大学カリキュラム改革とイエズス会の『学則』の最終決定を通じて、ヨ・ロッパの中等教育課程からアリストテレスは撤退しなければならなかった。

すぐこれに続く時代、18世紀は、アリストテレスの権威の失墜を2つの面から決定的なものにした。すな

わち、まず第1が、自然学に関してであり、第2が形而上学を中心とする哲学に関してである。

- (1) 18世紀に入ると、ニュートン物理学と実験的精神が、従来の自然学の全領域をほぼ完全に制覇し、自然学は自然科学としての形態を整えるにいたる。こうして成立した新しいパラダイムに立ってアリストテレスの自然学を見ると、それは断片的で、不完全な観察事実を、不当に一般化しただけの、きわめて恣意的な認識体系に過ぎないことが明らかになる(例えば、『百科全書』第6巻、1756年、項目「実験的」は、実験的自然科学によって下されたアリストテレス自然学の敗北宣言として読むことができる)。
- (2) 他方、アリストテレスの形而上学と哲学は、カトリックの神学者たちの厳しい検討にさらされ、これまた従来の権威を完全に否定されてしまう。アリストテレスの、動かされないで動かすあるもの(不動の動者)としての神が、神性に関して誤った観念を与えるものとして排撃される。さらに、彼の心理学は、魂の不死の教義に背くものであり、倫理学説も、人間的優しさを人間の欠点と見なすなど、さまざまの謬説を含むとして、ほぼ全面的に否定されてしまう。

以上見てきたことは、18世紀まではアリストテレスが生きた思想であったことを、逆説的に証明しているであろう。次の19世紀に入ると、アリストテレスを、その歴史的脈絡の中で研究する道が新たに開け始め、今日に至っている。

3 専門研究 (計画研究・公募研究)

A01 「原典」

9 A01班・計画研究

『明月記』『吾妻鏡』の写本研究と古典学の方法

研究代表者	五味 文彦 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
分担者	安田 次郎 お茶の水女子大学文教育学部 教授
分担者	近藤 成一 東京大学史料編纂所 教授
分担者	今村みよ子 東京工芸大学 助教授
分担者	田淵句美子 国立国文学資料館 助教授
分担者	桜井 陽子 熊本大学教育学部 助教授
分担者	本郷 和人 東京大学史料編纂所 助教授
分担者	高橋慎一郎 東京大学史料編纂所 助手
分担者	尾上 陽介 東京大学史料編纂所 助手
分担者	菊地 大樹 東京大学史料編纂所 助手
分担者	井上 聡 東京大学史料編纂所 助手
分担者	高橋 典幸 東京大学史料編纂所 助手
分担者	小川 剛生 熊本大学文学部 助教授

【要旨】

- 1 研究の対象。日本中世の歌人の日記『明月記』と鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』。
- 2 研究の価値。古典研究の動機や役割を知ることを目指し、古典の学習が新たな文化や政治にどのような影響をあたえ、古典的なものがいかに形成されてきたのかを考える。
- 3 研究内容。『明月記』治承四・五年記のテキストの確定、注釈と現代語訳。定家の古典研究のあり方や『明月記』本文の研究。『吾妻鏡』写本の収集と表現方法の吟味。
- 4 研究成果。『明月記研究』4号(1999年11月)、同5号(2000年11月)、五味文彦『『明月記』の史料学』(青史出版、2000年7月)、五味文彦『増補 吾妻鏡の方法』(2000年10月刊行予定)に報告。

【位置付け】

本研究の対象の一つである『明月記』は、日本中世の歌人である藤原定家の日記である。定家は、それまでの古典研究が中国の古典の研究を行っていたのに対して、日本の王朝の古典である『源氏物語』や、『古今和歌集』などの勅撰和歌集を研究も行った古典学者でもあって、日本の古典研究は実に定家とともに行われたともみなされる存在である。したがってその日記の解明は、定家により古典研究がいかに始められたのかという点から重要であるが、同時に定家の和歌そのものが後世に古典としてみなされるようになっており、古典がいかに形成されたのかを考える点からも重要となる。

もう一つの対象である『吾妻鏡』は、王朝に対抗しつつ形成された鎌倉幕府の歴史書として編纂されたもので、その原史料には『明月記』も使われている。これが古典としての位置を占めるようになったのは、戦国時代の大名が武家の歴史を考えるにあたって参考にようになってからであり、特に徳川家康が江戸幕府を形成するにあたって重視したことから広く版本も作成され、研究が行われるようになった。

この二つの古典研究は、古典の研究がどのような動機において行われ、それがどのような役割を果たしてきたのかを知るうえで、また現代における古典の意味を考えるうえで重要なことであろう。古典の学習が新たな文化や政治にどのような影響をあたえたのか、古

典型的なものがどのような形で作られてきたのかを考える重要な手掛かりをあたえてください。

【研究成果】

まず『明月記』の研究では、治承四・五年記のテキストを確定し、その注釈と現代語訳を行ない、さらに定家の古典研究のあり方や、『明月記』の本文・写本の研究など幅広く行ってきた。それらの成果は『明月記研究』4号（続群書類従刊行会、1999年11月）と、現在編集集中の同5号（2000年11月）、五味文彦『『明月記』の史料学』（青史出版、2000年7月）に報告した。また五味の研究の一部は雑誌『UP』（東大出版会）の2000年7月号から9月号に連載して報告した。それぞれの報告内容を次に記しておこう。

『明月記研究』4号

明月記研究会編「『明月記』を読む（治承四年）」
尾上陽介「天理図書館所蔵『明月記』治承四五年記について」
高橋典幸「『明月記』建仁元年五月記断簡紹介」
田淵句美子「新出『明月記』断簡」
五味文彦「定家と故実 付、九条基家書状」
櫻井陽子「紅旗征戎、非吾事」再考
菊地大樹「後白河院政期の王権と持経者」

『明月記研究』5号

明月記研究会編「『明月記』を読む（治承四五年）」
尾上陽介「『明月記』自筆本の筆録形態」
櫻井陽子「『征戎』と『征戎』」
小川剛生「『警固中節会部類記』について」
今村みよこ「月講式と藤原教家」
五味文彦『『明月記』の史料学』
「新・定家の時代誌」・「九条家と定家」・「後鳥羽院政と定家」
「藤原定家の写本形成」・「『明月記』の書写とその利用」
「紙背から『明月記』を探る」・「『明月記』嘉禄元年秋記の復元」
「『明月記』嘉禄三年四月記の復元」・「『明月記』の群像」・「九条基家と慈円」
「説話としての『明月記』」・「中納言定家と上卿故実」

次に『吾妻鏡』については後世の写本しか残されていないため、北条本や吉川本などの写本の収集を広く行い、『吾妻鏡』の表現方法を吟味してきたが、その成果は現在編集集中の『明月記研究』5号（続群書類従

刊行会、1999年11月刊行予定）と、同じく編集集中の五味文彦『増補『吾妻鏡』の方法』（吉川弘文館、2000年10月刊行予定）に報告した。また本年11月に行われる史学会の大会においてもシンポジウムを企画している。詳しくは以下の通りである。

『明月記研究』5号

五味文彦「縁に見る朝幕関係」
井上聡「北条本『吾妻鏡』考」
前川祐一郎「室町時代における『吾妻鏡』」
五味文彦『増補『吾妻鏡』の方法』
『吾妻鏡』の筆法

以上において明らかになったのは、まず『明月記』の日記としての特質である。『明月記』の自筆本の研究によって料紙の利用方法と書写の態度が明らかとなり、また『明月記』を歴史学・国文学においていかに活用されるべきか、その資料の基本的な性格が明確になった。続いて、定家が古典学者として古典や故実の写本の形成してゆく努力のあり方がわかり、それが和歌の家を興し、さらに故実の家を確立しようとした意図に基づくものであったことが明らかとなり、この時代における古典学の位置が見えてきた。

『吾妻鏡』については、本文を形成する地の文、文書、交名の三つのそれぞれの性格が明らかとなり、『吾妻鏡』がどのような編纂意図があったのか、編纂したのは誰か、といった従来からの疑問が解けてきたの同時に、室町時代に以降にいかに写本が形成され、何を目的に諸本がつくられたのかも明らかになった。

さらに二つの書物の関係において、公家・武家の自己認識のなかで古典学の研究が行われていたことも明らかになってきたのは特筆されよう。

本研究の新味は、『明月記』においては、自筆本の徹底的な研究を進めること、歴史学・国文学の研究者による総合的な研究を行うこと、注釈や現代語訳を行って、問題点を現代に引きつけて探ること、『明月記』の記主である定家の多角的な研究を行うことにある。

『吾妻鏡』においては、写本研究が中途半端に行われていたのを徹底的に行うとともに、『吾妻鏡』の表現方法にメスを入れること、そして『明月記』との関係を探ることによって、これまでの研究にはない視野が開けてきた。

原本『老子』の形成と林希逸『三子虜齋口義』に関する研究

研究代表者 池田 知久

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

分担者 関口 順

埼玉大学教養部 教授

【要旨】

『老子』の思想は、中国文明の歴史上、儒教と並んで巨大な位置を占める。本研究は、(1) 原本『老子』の形成を、(2) 林希逸『三子虜齋口義』について、東アジア三カ国の朱子学が『老子』等の三子を受容したことを研究する。世界の諸文明の中に、近代西欧文明以外にも優れた文明があることを究明し、21世紀の新たな文明観を展望する。

代表者と分担者の具体的研究成果は、合計7つの著書・雑誌・論文となって結実。戦国後期の楚国に始まる原本『老子』の著作・編集の過程を突き止めることができた。林希逸『三子虜齋口義』の所在・分布状況は、東アジア三カ国の異同を推測することができた。

【位置付け】

『老子』とその系統の道家の思想は、古代より現代までの中国文明の歴史において、正統である儒教と並んで巨大な位置を占めており、その上、反対の立場にあった儒教の中にも古代以来、陰に陽に受容されて現代に至っている。現代における『老子』の思想は、中国・韓国・日本の東アジア三カ国の近代文明の形成に多大の影響を及ぼしてその根底を築いてきたのみならず、その平等主義の社会政治思想、非形而上学的な自然観、個人の身体・生命を重視する心身論などが、実践的な問題意識から欧米においても熱い注目を集めている。

本研究は、(1) その原本『老子』の写本による形成を研究するものであり、(2) また、林希逸『三子虜齋口義』の研究については、中国・韓国・日本の東アジア三カ国における近世の儒教(特に朱子学)が受容の程度に濃淡の差はあるものの、いずれも『老子』

『莊子』『列子』の三子の思想を受容していったことを研究するものである。

これらの古典やそれに対する研究は、現代に至る世界の諸文明の中に、今日世界を圧倒的に支配している近代西欧文明以外にも優れた文明が多々あることを究明しようとするものであり、東西両文明を積極的に取り入れてきた日本人による、21世紀の新しい文明観の可能性を展望しようとするものである。

【研究成果】

この1年半の具体的な研究成果の主なものは、以下のとおり。

池田知久著『郭店楚簡老子研究』(1999年11月、東大中思文研究室)

池田知久監修『郭店楚簡の思想史的研究』第3巻(2000年1月、東大中思文研究室)

池田知久「郭店楚簡『五行』研究」(2000年5月、中国武漢大学『国際簡帛研討会論文集』)

池田知久監修『郭店楚簡の思想史的研究』第4巻(2000年6月、東大中思文研究室)

池田知久「郭店楚簡 窮達以時 之研究」(上・下)(中国文、2000年6月・12月、台湾中央研究院歴史語言研究所『古今論衡』4・5)

関口 順「天下觀念の成立とその思想史的意義」(1999年、埼玉大学教養学部『埼玉大学』35-1)

関口 順「儒学の国教化」(2000年12月、北海道大学中国哲学研究会『中国哲学』22)

研究代表者と分担者の採用した研究方法は、

(1) 中国における最新の出土資料である『郭店楚墓竹簡』(1998年、文物出版社)の中の『老子』3種の読解・分析を、従来の文献資料と突き合わせて総合的に研究するという方法である。その際、『老子』や道家系以外の思想、特に後に正統とされるに至る儒教やその学問(すなわち経学)との、内面的及び形式的な絡み合い(協調・融和と批判・反発)を重視して研究を進めた。

(2) 林希逸『三子虜齋口義』については、東アジア三カ国における『三子虜齋口義』の所在・分布状況及びその特徴を調査し、それらを相互に比較・対照するという方法であり、そのために日本の多数の専門研究者たちとは言うまでもなく、中国・韓国の若干の専門研究者たちとも連絡・協力関係を強化して研究を進めた。ちなみに、『三子虜齋口義』の版本調査を目的として、研究代表者は、中国の杭州大学(1999年12月)

と韓国の嶺南大学・成均館大学（2000年11月予定）を訪問し、また中国、浙江大学の周啓成教授を東京大学に招聘している（2000年11月予定）。

研究代表者と分担者の上げることができた研究成果は、相当に多いと自負している。その主なものは、3冊の研究書・研究雑誌の刊行、いくつかの学術論文の公表という形で世に問うことできた。内容の面では、（1）『老子』という書物は、『史記』老子列伝以来言われてきたような、一人の思想家が一時あるいは短期に著作した作品ではなく、戦国時代の後期以来、多数の思想家たちにより長期間に渡って徐々に形成されていったものである。原本『老子』は、戦国時代後期の楚国において楚系文字を用いて初めて書かれたものであり、主として儒家の荀子の作為「偽」の思想や「礼」の社会政治思想を批判のターゲットとしているらしいこと等々、を解明することができた。

（2）林希逸『三子齋口義』の所在・分布状況については、同じ近世儒教としての朱子学が盛行した東アジア三カ国においても、かなりの相異のあることが本研究によって初めて判明した。

中国では、南方の非正統的な朱子学としてあまり高い評価を受けなかったらしいのに対して、日本では、朱子学による『老子』『荘子』『列子』の解釈として（さらには仏教をも加味したシンクレティズムの解釈として）極めて高い評価を受け、徳川将軍四代の侍講である林羅山の推賞もあって江戸時代初期に非常に流行した。

朝鮮では、目下のところ韓国の専門研究者の協力を仰いで調査続行中であり、まだ正確な結論を出すには至っていないが、大雑把に言えば、中国と日本の中間の状態であったようである。北朝鮮の状況は、（朝鮮書誌学の先駆的研究者が北朝鮮に居住しているにもかかわらず）現在は不明のままに放置せざるをえないけれども、韓国における林希逸『三子齋口義』の所在・分布状況は、今回、本研究の研究協力者である嶺南大学崔在穆教授及び成均館大学李基東教授の調査によって、歴史上初めてその流行ぶりが大体のところ明らかになり、本研究の与えた刺激により韓国の何人かの研究者がこの問題に関心を寄せる状況が生まれている。

チベット大蔵経とチベット蔵外文献研究

研究代表者 御牧 克己
京都大学大学院文学研究科 教授

【要旨】

本計画研究は、チベット学に於ける古典学の再構築を目指し、以下の二点より研究を遂行した。

1. 未入手文献の入手。チベット大蔵経の写本、チベット蔵外文献、ボン教大蔵経について従来我が国に将来されていないチベット文献の入手に努めた。
2. 主要文献の整理（目録、解題、批判的校訂本、翻訳、データベースの作成等）。チベット大蔵経とチベット蔵外文献について夫々に行う必要があるが、特に、具体的な分野研究としては、宗義文献の体系的な整理と、ボン教教義文献の解明（仏教教義文献との比較にも留意しつつ）に主眼を置いて研究を遂行した。

【位置付け】

チベット仏教文献は、インド仏教文献の散逸して伝わらない多くの部分をチベット語訳で保持しており、また、漢訳仏教文献に含まれない多くの文献を含んでおり、いわばインド仏教文明、中国仏教文明を有益な仕方でも補足する役割を担っている。仏教文献は一般に、生きとし生けるものに対する慈悲、生きとし生けるものを苦悩から救うという救済論的使命に根ざした生命倫理に関する金言に満ちており、モラルの指標を見失いつつある現代社会に対して有効なモラルの規範を提供している。また、文献中には仏教学の文献のみならず、菩薩が一切智者となるために学ぶべき学問分野としての医学、薬学、天文学、占星術、美術、工芸、文法学、論理学等の分野の文献も多く含まれており、比較思想史的に重要な視点を提供している。ボン教文献の現代文明に対する意義については、未だ未解明の文献が多いため簡単に述べることは現時点では困難であるが、既に解明されている部分に限定して考えても、他の文明に類を見ない神話や伝承を多く含んでおり、

世界の宗教史や文学史に特異な視点を提供しようといえる。

【研究成果】

チベット学は、「古典学の再構築」のプロジェクトを構成する他の諸分野に比べて最も立ち遅れている部門ではないかと思われ、古典学の再構築どころか、その前段階である「古典学の構築」のための基本文献を蒐集することから始めているのが現状である。

チベット文献は大きく分けて仏教文献とボン教文献に分けることが出来る。仏教文献は、(1)チベット大蔵経(カンギュル, テンギュル), (2)チベット蔵外文献, (3)敦煌出土チベット文書に分けることが出来る。敦煌出土チベット文書は、分類すれば大蔵経或いは蔵外文献のいずれかに含まれるものであるが、文献としてのまとまりをもっているので別出して扱うのが通例である。ボン教は、チベット土着宗教と考えられる古い時代の「古ボン教」と、11世紀以降に仏教の影響を受けて組織化される「新ボン教」とに分けられる。「古ボン教」は敦煌出土チベット文書より明らかになるように、生者と死者の仲介のシャーマン的な役割を演じていた。一方、「新ボン教」には、仏教と同じように、「カンギュル」と「テンギュル」が存在(但し、テンギュルの綴り字は仏教のそれ *bstan 'gyur* と少し異なり *brten 'gyur* と綴る)し、写本、版本の数種類が確認されているが、膨大な文献群は大部分が未研究のまま残されている。ボン教文献は分類するとすれば全て上にいう蔵外文献であるのは言う迄もない。

本プロジェクト(原典班チベット学)は、(A)未入手文献の入手、(B)従来明らかになっている主要文献の整理、即ち、目録、解題、批判的校訂本、翻訳、データベースの作成、という二つの大きな目標の下に研究を遂行して来た。特に、(B)については、諸学派の思想を教相判釈的に解説したいいわゆる(B-1)宗義文献と(B-2)ボン教文献の解明に特に主眼を置いて研究をすすめてきた。以下には以上に述べたチベット文献について、これらの目標の下に遂行された研究の進展状況と成果の中間報告をしておきたい。

(A) 未入手文献の入手。

(A-1)チベット大蔵経の版本(チョネ版, デルゲ版, ナルトン版, 北京版のカンギュルとテンギュル, ラサ版のカンギュル)並びに敦煌出土チベット文書については従来入手済み、或いは何時でも入手可能(公開等)なので特に問題はないが、近年世界のチベット学者の研究が集中している諸写本のカンギュルの中に

未だ設置の遅れていたもの(テンパンマ写本系のカンギュル写本でロンドンに保存されるシェルカルカンギュル, 1696年から1706年の間に書写されたと推定され、西チベットのプダク寺院に保存されていたプダクカンギュル)をこの機会にマイクロフィッシュの形で購入設置した。また、写経の意味があるため圧倒的な数を誇る写本のカンギュルに比べ、テンギュルでは珍しい写本の「金写カンギュル」(1733-40年ポラネの後援の下に刊行)を購入設置した。

(A-2)チベット蔵外文献は、“PL480”と呼ばれるプロジェクトによりアメリカの Library of Congress の指揮の下にインドにおいて遂行された文献複製事業のお陰でかなりのものが入手可能になったが、アメリカの20の大学は Library of Congress のお陰でそれらの文献の一セットを自動的に設置するのに比べて我が国の場合は全国レベルで一セットすら設置されていないのが現状であった。幸いなことにこれらの文献はマイクロフィッシュの形でも入手が可能となったので、先ず少なくともマイクロフィッシュで全文献を設置し、重要なものについては実物をこの機会に購入設置した。

(A-3)ボン教の大蔵経の内、先ずカンギュルを購入設置した。テンギュルは次年度以降平成14年まで購入設置を予定している。

(B) 文献整理, 批判的校訂本作成, 翻訳等。

(B-1)宗義文献。宗義文献はインド仏教の諸学派(有部, 経量部, 瑜伽行唯識学派, 中観学派)の思想をチベット人が分析叙述したものであるが、画一的ではなくチベット人諸著者の様々な思想が反映されており、インド仏教にとっては諸学派の思想内容と諸論師の学派所属をチェックする「試金石」的役割を果たすのに対し、チベット仏教にとってはチベット人がインド仏教をどのように消化してチベット仏教の諸思想を形成するに至ったかをその中に具体的に見る上で大変興味深い。宗義文献は、初期宗義文献(前伝期のもの並びに後伝期初頭の12世紀頃までのもの)、中期宗義文献(13-16世紀のもの)、後期宗義文献(17-8世紀のもの)の三段階に分けることが出来る。

本プロジェクトに於て、平成11年度は初期宗義文献を集中的に整理し終わり、平成12年度は中期宗義文献を集中的に整理しつつ現在に至っている。翌年度以降には後期宗義文献を含めて全宗義文献を整理し、将来は『宗義文献集成』(仮題)といったものにまとめあげることを最終目標としている。

(B-2)ボン教文献研究。14世紀のボン教学者の著作した『ボン門明示』を中心にその批判的校訂本と

翻訳注を作成しつつ、その中に引用されている夥しいボン教文献を現存のボン教のカングル・テンギル目録中に同定し、その解題を行う作業を継続して行ってきたが、不思議なことにカングル・テンギル目録中に同定出来ない多くのテキストが引用されており、この事実をどう考えてよいのか現在のところ未解決である。この解題の作業は継続蓄積して将来『ボン教文献解題辞典』（仮題）にまとめあげてを最終目的とする。「新ボン教」は11世紀以後仏教の教義をその中に取り込みながら成立したと考えられており、学者の中には仏教の一派と考える人もいる程である。しかし、一体何処までが仏教の影響であり、何処からが従来のボン教の土着の要素であるのかは従来ついで明確な形で論証されたことはなく、その点を明らかにするのが本プロジェクトの目的の一つであった。同書に説かれるボン教のコスモロジーを仏教のそれと比較した結果、この14世紀のボン教文献は、確かに枠組みは仏教のものを借用しているということが出来るが、細部に於いて独自の土着の要素を多く保持していることがわかった。他のトピック（存在論、認識論等）についても同様の比較を継続しつつある。

12 A01班・計画研究

タミル古典の文献・写本・電子ファイルに関する情報および現物の収集

研究代表者 高橋 孝信
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

【要旨】

- (1) タミル古典学の現状：タミル文学はサンスクリット文学とともにインドを代表する文学であるが、わが国では欧米と比べ研究が立ち遅れ、タミル原典さえあまりない。
- (2) 本研究の目的：多くの古典テキストは今日では絶版であり入手は困難であるが、インドで出版され始めた一部復刻本の入手、大英図書館などの所蔵本調査およびコピー入手、インドの研究機関が作成している

電子テキストの実態調査および購入、さらにインドや欧州諸国所蔵の写本の実態調査、およびそれらのマイクロフィルム等の収集。

- (3) 古本・復刻本・電子テキストの入手と、欧米図書館所蔵本の調査は進行中。写本のマイクロフィルム化は実現が難しい。

【位置付け】

- (1) わが国は文化受容においても大国主義であり、タミル古典は間違いなく世界の古典の一つであるにもかかわらず、その研究はこれまで等閑に付されてきた。しかし、タミル古典は高度に様式化されているという点で他の古典に類を見ない（俳句の季語と多少の共通点を見出せる）。諸文明における古典比較に新たな視点を加えられよう。
- (2) タミル古典に描かれる世界観と、後にヒンドゥー化（アーリア化）されてからの文学に描かれる世界観とは相当異なる。したがって、タミル古典学は、一民族の文化的変遷とそれともなう世界観の変遷について好例を提示している。

【研究成果】

- (1) 1年半の成果：

海外調査は、予備調査も含め下記の4回行っている。

1. インド：平成10年12月20日～平成11年1月4日（16日間）、特定領域研究(AⅩ1)による。
2. インド：平成11年12月4日～平成11年12月19日（15日間）、特定領域研究(AⅩ2)による。
3. 英国：平成12年2月27日～平成12年3月13日（16日間）、特定領域研究(AⅩ2)による。
4. 英国・仏国：平成12年8月15日～平成12年8月30日（16日間）、特定領域研究(AⅩ2)による。

2度のインド出張では、復刻本や地方の小書店に残るテキストを入手できた。原典テキストの場合、世界の書籍流通ルートに乗らないため、郵送手続きなど苦労も多いがどうしても現地へ赴く必要がある。また、研究機関A（機関名を公表できない理由については別紙にて文部省に報告済み）では、電子テキスト入力進捗状況の調査をし、入力済み電子テキストの購入に成功、また未入力テキストについては本プロジェクトとの協力関係を結ぶことで合意に達した。ただ写本に関しては、U. V. スヴァーミナタアイヤル図書館（チェンナイ、旧マドラス）が本プロジェクトに関心を示さず、目下暗礁に乗り上げている。

つぎに、英国および仏国への出張に関してであるが、これは次項で述べる。

(2) 当該研究によって明らかになったこと:

大英図書館には膨大な量の刊本あるいは資料が所蔵されている。それらの目録は充実し(公刊されてもいる)オンライン検索も整備されている(Web上でも(<http://opac97.bl.uk>)検索は可能である)。しかし問題は少なからずある。1)まず目録に載っていてもオンライン検索でなかなかヒットしないこと(したがって、目録にないものは余計オンライン検索では見つけれないこと)、2)したがって、筆者が最も関心を寄せる最初期(19世紀半ば頃までの)の刊本、あるいは写本になかなか出会えないこと、3)ヒットするのは今世紀初頭頃からの刊本であるが、原本保護・著作権の関係でコピーは面倒な上にコストがかかり、それらを丸々コピーする意義は余りないこと、などである。

他方、今回のフランス国立図書館の調査で、これまで19世紀前半にはタミル古典はほぼ完全に忘れ去られていたとされているにもかかわらず、当時の宣教師が古典写本の一つを持ち帰っている事がわかった。大英図書館もフランス国立図書館もWeb検索は居ながらにして出来る(もっとも多大な時間を要するが)。しかし、この例からもわかるように、やはり現地に出向いて地道な調査をすることが結局大きな成果を生むことを痛感する。

また、ロンドン大学アジアアフリカ学院(SOAS)図書館は開架形式である。さまざまな問題はあるだろうが、本を見るのに開架形式はやはりもっとも優れている。

(3) 今後の展望:

1. これまでも古典関係については語彙索引が整備されている。しかし、古典期以後の作品についてはそれらはない。電子テキストの整備により、語彙索引集もできるであろうが、筆者の関心はむしろ格語尾や時制を表わす各種接辞や人称語尾の通時的変化で、それらの研究にこそ電子テキストが効力を発する。電子テキストの整備が待たれる。

2. 古典テキストの伝承に関する最も有力な情報は、16世紀以降の西欧宣教師の記録であろう。大英図書館をはじめとした欧州の図書館で、彼らの手記などを丹念に調べたい。

チャガタイ・トルコ語、ペルシア語文献の諸写本研究

研究代表者 間野 英二

京都大学大学院文学研究科 教授

分担者 真下 裕之

京都大学人文科学研究所 助手

【要旨】

1) 位置付け: 世界の各国の図書館に写本として所蔵されているチャガタイ・トルコ語およびペルシア語による古典の研究は、ティムール朝時代の中央アジアやムガル朝時代のインドのイスラーム文明の性格を解明する上で不可欠なものである。この研究は、ソ連の崩壊後、世界の注目を集める中央アジアのトルコ系諸民族の感性・心性・美意識の基層を探る上でも重要であり、特にその点に現代的な意義が認められる。

2) 研究成果: 研究代表者(間野)と研究分担者(真下)はこれまでに、ロシア、イギリスに調査旅行を行い、チャガタイ・トルコ語の古典『パーブル・ナーマ』などの諸写本を収集し、これらをコンピュータを用いて精査して、諸写本の性格や先に刊行した『パーブル・ナーマ』校訂本の内容の再検討などの面で一定の成果をあげた。成果の一部はすでに論文・研究発表などの形で公表されている。

【位置付け】

1) チャガタイ・トルコ語およびペルシア語の写本は、英・仏・露・イラン・インド・パキスタン・トルコ、それに中央アジア諸国など、世界の各国の図書館に分散して所蔵されている。

2) これらの写本は、イスラーム文明の中でも、特にトルコ=イスラーム文明、イラン=イスラーム文明の解明に不可欠な素材である。その意味で、これら写本の研究は、まず、イスラーム文明の多様性を解明する上で大きな意義がある。

3) 諸写本の中でも「古典」と呼び得る文献の研究は、そのような古典を生み出した民族の感性・心性・美意識の基層を探る上で不可欠といえる。

4) 本研究で扱うチャガタイ・トルコ語およびペルシア語の古典は、中央アジアのトルコ系イスラーム教徒が樹立したティムール朝・ムガル朝の時代に生み出された。この点からすれば、これらの古典の研究は、中央アジアのトルコ＝イスラーム文明の性格を解明する上で不可欠なものであり、現在、世界の注目を集める中央アジアのトルコ系諸民族の感性・心性・美意識の基層を探る面で、特に現代的な意義を持つと思われる。

【研究成果】

[論文]

研究代表者

- ① The Collected Works of Babur preserved at the Saltanati Library in Tehran, Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko(The Oriental Library) No. 57, 1999
- ② 「トルコ・イスラーム社会とトルコ・イスラーム文化」『中央アジア史』(間野英二編)(同朋舎, 1999年)
- ③ 「ティムール帝国とヘラートの発展」『西アジア史』(間野英二編)(同朋舎, 2000年)

研究分担者

- ④ 「Akbar Namah と Tabaqat-i Akbari-mansab 制度史研究序説 - 」『西南アジア研究』51, 1999年 .

[口頭発表]

研究代表者

- ① 「チャガタイ語、ペルシア語写本に関わる今年度の研究状況について」原典班研究集会, 1999年11月, 京大会館

2) 研究経過と研究によって明らかとなったこと

研究代表者(間野) が1999年7月にロシアのサンクト・ペテルブルグにおもむき、ロシア科学アカデミー東洋学研究所所蔵のチャガタイ語写本を調査した。この調査の結果、中央アジアのティムール朝の王子でインドにムガル朝を創設したバーブルのチャガタイ・トルコ語による回想録『バーブル・ナーマ』の写本2種、中央アジアのモグールの貴族で、バーブルのいとこに当たるミールザー・ハイダルがペルシア語で執筆した中央アジア史・回想録である『ターリーヒ・ラシーデー』のチャガタイ語訳本写本3種、さらにバーブルのイスラーム法関係のチャガタイ語韻文による著作『ムバイン』の写本1種の、計5種の写本のマイクロフィルムを入手した。これらは直ちに焼き付け、すでに一部をコンピュータに入力して研究に利用している。

これらの研究の結果、まず『バーブル・ナーマ』に

については、このたび入手したサンクト・ペテルブルグの『バーブル・ナーマ』2写本が、先に間野が『バーブル・ナーマ』校訂本(1995年刊行) 作成の際に利用した4種類の写本、および校訂本刊行後に入手したイランのテヘランに所蔵される『バーブル著作集』に含まれる1写本とは、かなり性格を異にする特異な性格のものであることが判明した。この点については、『バーブル・ナーマ』冒頭部見える導入部、日付、地名などについての写本間の異同を検討し、その検討の内容を、上記のように、1999年11月に京大会館で開かれた原典班研究集会の席上で報告した。

また『バーブル・ナーマ』関係では、従来、国際学界で様々な憶測が飛び交っていたイランの1写本(行間にペルシア語訳を付した写本) について、上記した英文論文で、この写本の内容を学界に詳しく報告した。この論文で、この写本が質的には良質であるが、バーブル在世中の写本ではなく、16世紀末から17世紀はじめにかけて作成された写本であること、またこの『著作集』に従来散逸したと考えられていた韻律学に関するバーブルの著作『504のリズム』を発見したことを報告した。

さらに、上記の『中央アジア史』『西アジア史』の2つの概説的論文では、トルコ・イスラーム文化の形成と発展に関わる諸問題を整理し、本研究の対象であるティムール朝・ムガル朝時代の文化活動の背景を確かめる作業を行なった。

一方、研究分担者(真下) は1999年11月にイギリスのロンドンとオックスフォードにおもむき、大英図書館、王立アジア協会、ボードリアン図書館において主にペルシア語文献を調査し、『パードシャーフ・ナーマ』『グルシャネ・イブラーヒーミー』など、ムガル朝関係を中心とするペルシア語写本19種のマイクロフィルムを入手した。いずれも未公開、ないしは学術的価値の低い印刷本が流布している作品の写本であり、また標準的に引用される写本であることから、ムガル朝史にかかわる史料の利用を格段に整備・改善することができた。

さらに真下は上記論文において、ムガル朝時代の歴史書『タバカーテ・アクバリー』の伝える年代に機械的な錯誤が生じていることを指摘したが、上記の現地調査では同書の写本21点を対照し、この錯誤にかかわる諸写本の異読の検証をおこなった。これにより、原テキスト復元の第一段階としての異読統合について、一定の見通しを得ることができた。またムガル朝時代の貴族の回想録『アフワレ・アサド・ベグ』を研究中であるが、大英図書館所蔵のこの作品の写本を調査

し、すでに調査済みのインド、ラームブル・ラザー図書館所蔵の写本ときわめて近い関係にあることを確認した。

また真下は、これらの他に、『サングラーフ』と呼ばれる18世紀のイランで作成されたチャガタイ語・ペルシア語辞典の写本2種のマイクロフィルムをも将来した。

3) 採用した新方法, 新視点など

チャガタイ語, ペルシア語の写本研究にはコンピュータを全面的に利用している。『パーブル・ナーマ』『ターリーヒ・ラシーディー』などの重要写本をアラビア文字でコンピュータへ入力し, 入力済みのテキストについては, 校訂本の改訂や新たな作成に向けての作業を行っている。

イスラームの古典中の古典はいうまでもなくアラビア語による『コーラン』であるが, チャガタイ・トルコ語やペルシア語で書かれたイスラームの古典に積極的に目を注いだ点が新しい研究の視角といえる。

4) 準備段階の成果

『ターリーヒ・ラシーディー』のチャガタイ語訳本については, 3種とも訳者を異にする興味深い作品であることが判明しているが, 現在, 研究代表者(間野)を中心に, 鋭意その内容を比較・検討中である。『パードシャーフ・ナーマ』などの19種のペルシア語写本については, 現在, その概要を検討中である。研究分担者(真下)は『タバカーテ・アクバリー』の年代錯誤に関する論考を準備中であり, 『アフワレ・アサド・ベグ』については校訂本の出版を念頭に, テキストの電算化をすでに完了させた。『サングラーフ』の2写本については, 現在, 研究代表者(間野)を中心に, かつてG・クローソンが出版したギブ記念財団所蔵の1写本のファクシミリ本とも対照しつつ, コンピュータを利用した校訂本作成へ向けての下準備を進めている。さらに研究代表者(間野)は『パーブルとその時代』(『パーブル・ナーマの研究 IV』)という著書を準備中である。また, コンピュータ関係では, ホーム・ページを開設し, データ・ベースを公開する可能性をも探りたいと考えている。

西洋近代哲学と中国古典

研究代表者 堀池 信夫

筑波大学哲学思想学系 教授

【要旨】

- 本研究は18～19世紀の西洋の哲学者の中国の古典受容の探求を目的とする。
- 今回は, まず問題を絞り込んで, この時期最も重要な哲学者であるヘーゲルと, 中国古典として最も重要なものの一つである『老子』を取り上げた。
- 両者の関係は広くは知られていないが, ヘーゲルの哲学体系において『老子』は一定程度の重要性を占めている。
- 本研究では, とくに従来ほとんど言及されていない両者を結びつける資料の問題に焦点を当て, それを媒介にして, ヘーゲルの『老子』受容の特徴を明らかにした。

【位置付け】

ヘーゲル哲学が近代哲学を大成したものであることはいままでもない。テキストとしては『歴史哲学講義』『哲学史講義』『宗教哲学講義』を用いる。これらについては最近ヘーゲル・アルヒーフによって新訂版が出されているが, 本研究ではそのことは問題としない。もっぱら『老子』との関係が問題である。一方『老子』のテキストも, 近年新出土資料によって見直しが行われているが, 今回の問題はそれとは異なる。問題は, ヘーゲルは中国語を読めなかったのであるから, 彼が『老子』の情報を取り入れたのはどの回路によったのかということにある。すなわち, 本研究の課題はまずその回路となった資料を確定することにある。そしてその確定した資料にもとづいてヘーゲルにおける『老子』受容の特質が何故に生じているのかを明らかにすることが次の課題となる。筆者がその資料として突き止めたものは, 主としてイエズス会によって1776年～1814年にわたり全16巻として刊行された『北京の宣教師による中国の歴史, 学問, 芸術, 風俗, 慣習等に関する報告集』(なかでもアミオ宣教師によるレポート)

と、1823年に刊行されたアベル・レミューザの『老子の生涯と思想』である。本研究の主な内容は、これらの原典資料にもとづく比較研究によって上記の課題を達成することにあるのである。すなわち、原典研究としての実際の作業は、ヘーゲルでも『老子』でもなく、それらをつなぐ位置にあるものを分析することにある。

これらの原典は、啓蒙後期から近代に至る過程において、ヨーロッパの中国観・東洋観を形成するのに非常に重要な役割を果たしたものであるが、ヘーゲルにおいてはそれら原典の役割がきわめて明瞭に現れている。逆にいえば、これらを通じてヘーゲルの『老子』受容を分析することは、今日本質的には何も解決されているとはいえない東洋(日本)における「西洋近代」の意味を、歴史的に根本の所からもう一度振り返ってみるということにつながるのである。

【研究成果】

本研究はもともと13世紀から、20世紀前半に至るまでの西洋の哲学者における中国哲学の受容という構想の一端をなすものである。この研究はいわば東西の古典同士を付き合わせることによって成立するものであるが、本特定領域研究に参加するにあたっては、とりわけ「古典学の再構築」という課題に沿う方向で研究を進めるよう企画を立て、とくに古典同士の関係を中心に置くこととし、ヘーゲルと『老子』の関係を主題とした。

本研究を遂行してゆくなかで明らかになったことは、まず、ヘーゲルは『老子』を理解するにあたって彼自身の哲学体系を基準において評価・受容しようとしたのであるが、単純にみずからの体系に当てはめることができず、一定の修正を施していたことである。それは、①彼自身の歴史哲学・世界史の構想は本来「理性の世界史」ということであり、そのかぎりにおいては「世界」は地中海・ヨーロッパに限られるものであった。②しかし、地理学上知見の拡大により世界はヨーロッパだけではないことは明らかであった。したがって彼はみずからの「世界」の観念を地理学上の「世界」と一致させる必要があった。③しかし、地理学上の世界は「理性」の展開には対応していない。そこで彼は「理性の世界史」に加上して「理性への世界史」を考えた。「理性」に向かいつつある途上の世界を認めたのである。そしてその途上の世界の端緒に当てられたのが、最も東方にある中国であった。④中国は理性の世界であるヨーロッパに到達するために経なければならない精神の展開のプロセスの最初の段階で停滞してしまった。ヨーロッパが山の頂上とすると、登山

口のあたりで止まってしまったのが中国である。

このような中国の位置づけのもと、ヘーゲルは中国哲学研究にはいったのであるが、その際に彼の導き手になったのが、主に『北京の宣教師による中国の歴史、学問、芸術、風俗、慣習等に関する報告集』であった。中国哲学の中でも『老子』に関しては、その報告集中に載る宣教師アミオの報告がヘーゲルの『老子』理解の依拠となった。また、ヘーゲルはソルボンヌの東洋学講座の初代教授であったアベル・レミューザの『老子の生涯と思想』も重要な依拠とした。

これら、アミオとレミューザの原典を比較すると、じつはレミューザはアミオの議論に依拠するところ少なくなく、結局の所、ヘーゲルの依拠はアミオに遡ることがわかり、アミオがヘーゲルと『老子』を結ぶ重要なリンクであることが判明した。

また、ヘーゲルの『老子』受容の哲学面に関していうと、彼は結論的には、たとえば『老子』の哲学は「まだ原始の段階に立つものである。ところでわれわれは、この全教説の中で何を見出すだろうか」(『哲学史講義』)として、きわめてネガティブな評価を与える。ところが、『老子』の哲学の具体的紹介の場面では、「道家ではその生活原理を「道」(すなわち理性の基準または理性の法則と称する)(『哲学史講義』)、「彼ら(道家)は、その生涯を理性の研究にささげる。そうして理性を根本的に認識するものは全く普遍的な学問、普遍的な救済手段および徳を所有することになる」と述べる。このように「道」を理性と捉えるのなら、彼の哲学システムからして、『老子』(道家)を全面的にネガティブに見る先の結論は変である。

ヘーゲルにおける『老子』の理解(あるいは中国哲学理解)はこのようなところがしばしばある。そして一見矛盾するこのような事態がなぜ生じたかは、じつはアミオとレミューザを調べると了解できる。すなわち、「道という言葉は、……われわれが一般にフランス語で徳(virtu)・知(science)・理性(raison)・基準(doctrine)などの後で表現するものを意味する」(アミオ)、「この道という言葉は、至高なる存在・理性・言葉あるいはまた話す動作・理性を働かせること・理性をもたらすことを表現するためという、三つの意味からすると、ロゴス(logos)である」(レミューザ)と、彼らは述べているのである。

すなわち、ヘーゲルは彼が依拠した資料に述べられている「理性」という解釈語をそのまま用いているのであって、彼本来の哲学体系による概念としての「理性」として用いていたわけではなかったのである。つまり、これらの文脈における「理性」はヘーゲル本来

のものではないのであって、それゆえに『老子』へのネガティブな評価も矛盾というわけではないことが了解できるのである。これは一つの具体例であるが、ヘーゲルと『老子』を結ぶ媒介項というべき資料の検討は、こうした成果をもたらすことになるのである。

スコイエン・コレクションのアフガニスタン出土仏教写本の研究

研究代表者 松田 和信
佛教大学付置研究所 教授

【要旨】

本研究はノルウェーのスコイエン・コレクションに近年収蔵されたアフガニスタンのパーミヤン渓谷出土の仏教写本を調査し、それらに対する解読研究を行うことを目的としている。研究代表者は、現在までの1年半の間にノルウェーにおける現地調査を2度行い、ほぼすべての写本断簡の写真複写を入手した。そしてこれらの写真を用いて断簡類を書体、内容別に分類して解読研究を行いつつある。現在までに研究代表者により解読の終了した文献の中から、『勝鬘經』および『新歳經』の断簡が本年度中に公刊される予定である。前者は我が国においても著名な仏教文献のひとつである。たとえ断簡とはいえ、すでに失われたと思われていた原典の一部が発見された意義は大きい。

【位置付け】

今世紀の初頭、各国の探検隊は競って中央アジアへ足を踏み入れ、シルクロードに点在する遺跡を発掘し、様々な言語で書かれた膨大な量の出土文献を持ち帰った。そしてそれらの文献は、その後の仏教研究に大きな影響を与えることになった。発見された資料のほとんどは断簡にすぎなかったが、既に失われたと思われていた数々の重要文献の原典がその姿を現したからである。

ところで、このような中央アジアにおける発見がそ

の後も続いたわけではない。1931年に現在のインド・パキスタン間の国境紛争地帯に位置するギルギットの仏塔跡から発見された約3000葉の樺皮写本、いわゆる「ギルギット写本」を最後に、探検ブームが去り、あるいは世界情勢の変化等により、その後例外的に少数の写本発見の報はあったが、大規模な発見は今後もはや望むべくもないものと思われていた。しかし、この数年の間に状況は劇的に変化した。旧ソビエトのアフガニスタン介入と、それに続いて現在に至るアフガン内戦は、現地の荒廃と引き換えに、世界の古写本マーケットに膨大なアフガニスタンおよびパキスタン出土文献の流入という皮肉な結果をもたらしたのである。マーケットに現れた写本類の大部分は最終的に欧米の研究機関あるいはコレクターに引き取られて行った、あるいは現在行きつつある。

そのような状況の中、今から数年前、正確な場所は伝えられていないが、アフガニスタンのパーミヤン渓谷北部の洞窟の中で、原理主義勢力に追われたアフガン難民によって大量の仏教写本が発見された。それは入り口がひとつ、内部が数本に分かれた自然の洞窟で、一本の奥まったところに仏像が安置され、周囲に写本が散乱していたらしい。写本は分割されてパキスタンからドバイに持ち出され、さらにロンドンの複数の仲介業者を経て、最終的にそのほとんどはノルウェーの蒐集家マーティン・スコイエン氏に引き取られ、氏のコレクション（スコイエン・コレクション）に収められた。貝葉（ターラ椰子の葉）、樺皮（白樺の樹皮）、動物の皮が用紙として用いられた写本類は、使用された文字から判断して、紀元2世紀から8世紀に遡り、大部分は破損した断簡であったが、サンスクリット（梵語）あるいはガンダーラ語の仏典が書写され、その総量は微小破片も含めて1万点以上にのぼった。スコイエン・コレクションにおける仏教写本入手の情報に接した研究代表者は、ヨーロッパの研究者3名とともにスコイエン氏の山荘を訪ね、氏から許可を得て共同研究を開始することにした。スコイエン・コレクションを調査研究することを通して、これまでは漢訳あるいはチベット訳でしか知られていなかった、さらには翻訳すらも存在しなかった仏教文献の原典発見が期待されたからである。もしそのような文献が発見されれば、現在の仏教研究に対して大きな影響を与えることは間違いないと思われたのである。

【研究成果】

「古典学の再構築」における研究が開始されてから現在までの1年半の間に、研究代表者はヨーロッパの

研究者3名とともにスコイエン・コレクションを2度訪れて、現地調査行っているが、その結果、さまざまな重要文献の存在が明らかとなった。点数から述べると、コレクションは破片を含めると全体で1万点以上の写本断簡を含むが、研究資料としてある程度の文章の回収可能な断簡だけでも、カローシュティー文字写本(200点)、クシャーナ文字写本(240点)、グプタ文字写本(1000点)、ギルギット・パーミヤン第1型文字写本(550点)、同第2型文字写本(110点)が含まれていることが判明した。

さらにその内容についても、カローシュティー文字で貝葉に書かれたガンダーラ語の『大般涅槃経』(2世紀)あるいは同じく貝葉にクシャーナ文字で書かれた『八千頌般若経』(2世紀/3世紀)の断簡といった、思いもよらぬ文献が見い出された。前者はいわゆるブッダ最後の旅路を記した小乗涅槃経のことであるが、いずれの漢訳にも一致しない未知のヴァージョンであった。後者は般若経典類を代表する文献であるが、V世紀以降の般若経写本に見られるようなサンスクリットではなく、俗語で書かれている。2世紀から3世紀といえバインドにおける般若経の成立とそう遠く離れていないであろう。般若経が最初から梵語で書かれていたのではなく、それに先立って俗語の般若経がインドに存在していた直接の証拠が初めて現れたのである。しかもこれは現存最古の大乗仏典の写本である。クシャーナ文字による大乗仏典の写本など、これまでだれも聞いたことがなかった。

さらに我が国でも著名な、如来蔵・仏性思想を説く『勝鬘経』、さらに『阿闍世王経』、漢訳では鳩摩羅什訳で知られる『諸法無行経』、あるいは『新歳経』の大乗ヴァージョンといった、他文献における引用を除いて原典の知られていなかった大乗経典類の断簡も次々とその姿を現した。これらには北西型グプタ文字が用いられ、4世紀から5世紀に遡る写本であると推定されるが、こちらも驚くべき年代の写本である。

コレクションの中で最も新しい写本は、7世紀から8世紀にかけてのギルギット・パーミヤン第1型、および同第2型文字による写本である。その中には第1型文字による『摩訶僧祇律』の樺皮写本断簡、さらに同じ書体による散文で因縁物語のついた『法句経』の断簡も見い出された。さらに『法華経』『金剛般若経』『葉師経』『月上女経』『宝星陀羅尼経』などが認められた。

しかしこれらもコレクション全体から見れば、ほんの数パーセントにすぎない。クシャーナ文字写本など、あまりにも時代的に古い写本が多く含まれるため、漢

訳あるいはチベット語訳に対応文献の存しないこと、また文面から阿含、律、阿毘達磨の三蔵文献の断簡も数多く認められるが、その中にはすでに失われた教団文献が数多く含まれていると推定され、その正体を突き止めるのは容易ではない。なおコレクションには1点だけバクトリア語の皮革文書断簡が含まれているが、これも仏教文献である。興味深いことに、種々のブッダ名が列挙されているが、それらは『無量寿経』の冒頭に現れる種々のブッダの名称とほぼ一致しているのである。

スコイエン氏のコレクションの重要性は、スタインやペリオ等の蒐集した中央アジア出土写本と異なり、直接的なインド文化圏、すなわちガンダーラより現れた初めての大規模仏教写本だという点である。同じようなものに上述のギルギット写本もあるが、こちらにはそれよりはるかに古い時代の写本が数多く含まれている。また、カローシュティー貝葉写本断簡も『大般涅槃経』を含めて約200点が見い出されたが、これまでのカローシュティー資料は樺皮か木簡であって、貝葉写本の発見は世界初である。

現在、研究代表者は、ヨーロッパの研究者3名とともに、さらに世界各国の研究者の協力を得て、解読の終了した文献からそれらを出版する準備を進めている。その最初の出版は本年度中にオスロより刊行される予定であるが、その中で研究代表者は『勝鬘経』と『新歳経』の断簡を担当している。前者は我が国においても著名な仏教文献のひとつである。たとえ断簡とはいえ、すでに失われたと思われていた原典の一部が発見された意義は大きいものがあると思われる。

最後に

スコイエン・コレクションに対する研究は始まったばかりであり、その全体を解読して写真とともに出版し、学界共有の財産とするには今後相当の時間と費用がかかるものと思われる。上述のように、その最初の出版は本年度中に刊行されるが、これはコレクション全体のごくわずかをカバーするにすぎない。今後の継続的な研究が望まれているが、「古典学の再構築」プロジェクトからの支援を期待している。

いわゆるティムール朝ルネサンス時代におけるペルシア語・チャガタイ語文献の研究

研究代表者 久保 一之

京都大学大学院文学研究科 助教授

【要旨】

(1) いわゆる「ティムール朝ルネサンス」時代のヘラートで著されたペルシア語・チャガタイ語古典作品の文献学的・歴史学的研究によって、それらの特徴および歴史的意義を明かにし、「ルネサンス」という言葉の妥当性を探ることを目指した。

(2) 今回の特定領域研究では、まず最初にペルシア詩人サイフィーのシャフル・アーシューブ『驚くべき者たちの諸技術』を考察した。その結果、この作品が当該時代の都市文化の成熟や職人・商人層の台頭を裏付けていることを明かにできた。

(3) 上述の成果に関連して当該時代の「インシャー作品」にも注目したが、未公開のものが多いため、トルコ・イラン等で写本調査を行ない、適宜複写を入手した。

【位置付け】

ティムール朝スルターン・フサイン時代(1469-1506)の首都ヘラートを舞台とした学芸の高揚、いわゆる「ティムール朝ルネサンス」時代のペルシア語やチャガタイ語による古典作品は、イスラーム、イラン、中央アジア各々の文明において重要な位置を占め、これらの文明の一種の融合形態を表していると言える。それゆえ、文献学的・歴史学的研究に依拠して、当該時代に成立した古典作品の特徴および歴史的意義を明らかにすることはきわめて重要である。このような研究成果によって、これまで主に建築や書物装飾の分野で用いられてきた「ティムール朝ルネサンス」という言葉の、当該時代の文化・社会状況における妥当性を探ることが可能となるであろう。

また、これらの古典作品の中には現在も読まれ続けているものが多い。それゆえ、当該時代だけでなく、現代の中央アジア、イラン、アフガニスタンにおいて

も、教養や価値観の上で少なからぬ影響を及ぼしていると考えられる。当該地域の現代的な諸問題を検討する上でも、重要な材料を提供できると考える。

【研究成果】

(1) 研究成果の概略

当該研究において最初に研究対象としたのは、ティムール朝末期のヘラートで活躍したペルシア詩人サイフィーが詠んだ詩集『驚くべき者たちの諸技術』で、この作品は「シャフル・アーシューブ(またはシャフル・アンギーズ)」と呼ばれる特異なジャンルに属する。シャフル・アーシューブとは、特定の都市およびその住民に対する称賛や非難を詠んだ韻文作品のことで、ペルシア古典文学におけるシャフル・アーシューブの位置付けや変容、およびヘラートを対象とした上述サイフィーの作品を具体的に検討することによって、いわゆる「ティムール朝ルネサンス」をもたらした都市社会の成熟や全般的文化水準の上昇を裏付けることができた。

資料収集活動としては、平成11年12月20日から平成12年1月21日まで海外出張(トルコ、エジプト、シリア、イラン)を行なった。特に、トルコのスレイマニエ図書館とヌル・オスマニエ図書館、イランのテヘラン大学中央図書館と国会図書館に所蔵されるペルシア語写本については、かなり充実した調査を行なうことができた。研究課題に直接関わる成果としては、ティムール朝期の著名文人による公・私文書の書式集・実例集(一般に「インシャー作品」と呼ばれる)の写本所在状況を明らかにすることができた。また、イギリスの大英図書館とケンブリッジ大学図書館、およびフランスの国立図書館に所蔵される写本の内、本研究に不可欠と思われるものについてはマイクロフィルムを入手し、紙に焼付けて利用し易い形にした。

(2) 研究成果の詳細

上述の研究成果の一部については、本特定領域研究調整班(原典班)の研究集会(平成11年11月13日京大会館)において、「いわゆる「ティムール朝ルネサンス」時代のペルシア文学作品に見る都市文化の繁栄 ―ヘラートの「シャフル・アーシューブ」について―」と題して口頭発表を行なった。以下平易な表現を用いて、その内容を紹介する。

ペルシア韻文学の1ジャンル、シャフル・アーシューブはシャフル・アンギーズとも呼ばれ、辞書的には「美しさにおいて町を騒がす者や世間に騒がれる者、あるいは町の住人たちに対して詩人たちが行う賞賛と

非難」を意味する。トルコ起源説やインド起源説もあるが、ほぼ間違いなくイラン起源である。古くは12世紀前半の作品に始まり、16世紀になってシャフル・アーシューブやシャフル・アンギーズという名称が用いられるようになった。このようなジャンルの詩を詠む目的は、ゴルチーン・マアーニー（イラン）によれば、「娯楽・気晴し」もしくは「風刺」と考えられる。

いわゆる「ティムール朝ルネサンス」時代のヘラートを対象としたシャフル・アーシューブが、サイフィー・ブハーリー（1503-04年没）による『驚くべき者たちの諸技術』である。この詩集は124のガザル（叙情詩）で構成され、各々のガザルに表題が付されている。職人と商人を中心に、芸術家、軍人、宗教者などあらゆる職業が題材とされ、さらに遊興者、特定の人物、宗教上の行事・施設などを対象とした詩も見られる。当時のイスラーム世界屈指の大都市ヘラートの風物・事物を詠み込んだ詩集であるということができる。いずれの詩も題材とされる職人・商人等を「マーシューク（恋される者）」、詠み手や一般住民を「アーシク（恋する者）」としており、この点ではペルシア古典文学の伝統を着実に受け継いでいる。各々のガザルの内容は、題材となっている職業に関連する事物名や術語が多用され、同時代人の言葉によれば、当時の格言も数多く用いられているという。

これらのガザルの内容は、現時点で解釈を試みた限りでは、純文学的テーマにあてはまるものではなく、「大衆的」という表現がふさわしいものである。先に紹介したイラン人研究者の見解では、シャフル・アーシューブを詠む目的は「娯楽・気晴し」もしくは「風刺」であるが、サイフィーの作品の場合は、「娯楽・気晴し」ではあっても「風刺」ではないと言えよう。今後さらに各々のガザルの解釈を進めた上で結論を下すべきではあるが、サイフィーの作品は、単なる「娯楽・気晴し」を超えて、ヘラートの繁栄を喜び、その繁栄を支える人々を慈しむ心を感じさせる。このような詩が生まれた背景には、ヘラートの繁栄を支える一般住民、特に職人層への注目度の高まり、社会的地位の向上を想定することができる。

（3）まとめ

「ティムール朝ルネサンス」時代のヘラートを対象としたサイフィーのシャフル・アーシューブ『驚くべき者たちの諸技術』を考察することによって、当時のヘラートの職人層の台頭、ひいては都市社会の成熟を語る材料が得られたと言える。今後上述作品の解釈を深めてゆけば、当時の職人・商人等、これまでほとんど

語られることのなかった社会層の研究が進み、「ティムール朝ルネサンス」の社会的背景のみならず、その文化的基盤を広く追及することが可能となるであろう。

今後の見通しを付け加えておくと、当該時代のヘラートで流行した「インシャー作品」の分析も重要である、と考えている。「インシャー」は公・私文書の作成を意味し、当時の著名文人による勅令・命令書や書簡等の書式集が数多く残されており、これらは多くの場合実例集である。15世紀末から16世紀前半に活躍した著名な歴史家・文人ホーングダミールは、自らのインシャー作品『高名なる書』において、「古の書記たちやその後の文人たちは、職人や商人のいかなる人々にあてても、個別に書簡を作成することはなかった。この集団の中に時折優れた才能の持ち主が見い出されるので、この書の14の節を彼らの幾人かにあてて記した」と述べている。つまり、当時のヘラートにおける職人・商人層の台頭、文化水準の上昇が、この一節にはっきりと裏付けられているのである。いわゆる「ティムール朝ルネサンス」時代のヘラートにおける都市社会の成熟、都市住民の文化水準の向上は疑いを容れず、これが当時の古典作品とどのように関わっているのかを追及することで、「ティムール朝ルネサンス」なる言葉の妥当性をより深く検討することが可能となるであろう。

中央ユーラシア地域に伝播した仏典の研究

- 研究代表者 吉田 豊
神戸市外国語大学外国語学部 助教授
- 分担者 影山 悦子
日本学術振興会特別研究員 神戸市外国語大学外国語学部
- 分担者 松川 節
日本学術振興会特別研究員 京大大学生態学研究センター
- 分担者 松井 太
日本学術研究会特別研究員 大阪大学文学部

【要旨】

ユーラシア大陸のオアシス地帯およびその北方の草原地域に、伝播した仏教・仏典についての研究。具体的には、シルクロードの商業民族であったイラン系のソグド人の仏教信仰とそれを反映する仏典及びその原典の究明；さらには遊牧民族であったウイグル族及びモンゴル族に広まった仏典及びその導入経路についての研究した。特に最も有名な仏典の一つであるヴェッサンタラジャータカを例にとり、ソグド語・ウイグル語・モンゴル語訳の間の相違を研究し、その3訳のみ共通し、他の言語の版には見られない特徴があることを明らかにした。それにより、この地域で大衆化したテキストの脱大衆化の実態と、伝播のありかたの一端が解明されたと考える。

【位置付け】

中央ユーラシア地域は、かつて遊牧民及びシルクロードを往来する商業民族が活躍した地域であり、彼らは既存の大文明圏を結びつけることによって世界文明の発展に多大な貢献をしてきた。一方で彼らは各文明圏から多くのものを受容し、自らの文化の一部としていった。この地域に仏教が伝播したときも同様で、彼らは熱心な仏教徒となり多数の仏典が翻訳されることになった。たしかに中央ユーラシアに伝播した仏典の多くは、原典の翻訳からの重訳であるという点で、仏教そのものの研究に資する所は多くない。それ故に、仏教学者がこの地域の仏教を本格的に研究の対象にしたことはほとんどなかった。本研究は仏教研究の本流

から見れば周辺に当たる地域ではあるが、その地域では仏教が文化の本流となった中央ユーラシアに伝播した仏典について研究することを目的にしている。特にモンゴルやウイグルは、彼らが政治的・武力的に支配した民族から文化面で強い影響を受けるというパターンの典型的な例となっており、その研究から得られる知見は、文明史上の一つの類型であるという点から貴重である。

また仏教が中国へ伝わる経路であるシルクロードの仏教は、図像資料と文字資料がどちらも断片的にしか残されておらず、興味を持つ人が多いにもかかわらず、未解明の部分が多い。それらは、出発点であるインドと到達点である中国の仏教を研究する研究者との共同研究によってかなり解明されるものと期待される。従ってこの地域の仏教について、現在までの到達点を、他の分野の研究者が利用できる形にして公表することは重要である。

【研究成果】

中央ユーラシアの北部はおおむね、中国仏教及びチベット仏教の影響下に入った。一方中国で古くから西域と呼ばれたシルクロードには、おおむね（北西）インドの仏教が広まった。そしてモンゴル大蔵経に典型的に見られるように、そこには膨大な量の仏典が原典のまま、或いは翻訳によって伝播した。その伝播のパターンは、各民族によってまちまちである。我々はまず最初にそれを明らかにしようと考えた。

イラン系の商業民族であるソグド人に流布した仏典に関しては、彼らの仏教信仰の形態と翻訳された仏典の関係をほぼ明らかにし、その成果を、*Buddhist Literature in Sogdian* としてまとめたが、これは現在アメリカで編集集中の *A History of Persian Literature: Buddhist Literature* の一章となる予定である。

ウイグル人及びウイグル語が、ソグド人及びソグド語から強い影響を受けたことは良く知られている。ソグド文字でウイグル語を表記したものがウイグル文字と呼ばれているものであり、ウイグル語の中のソグド語の借用語も非常に多い。しかしソグド語仏典とウイグル語の仏典との関係については、従来、強い影響関係があったとする説（ウイグル仏教のソグド起源仮説と呼ばれる）と、それを否定する形で提案された（トカラ起源）仮説がある。この二つの仮説のどちらを採用すべきかについて、判断を可能にする直接的な資料が存在していなかった。我々は、西域北道で流布していた『十業道物語』という説話集のなかの「カンチャナサーラ王物語」のソグド語版とそれに対応するウイ

グル語版（どちらもベルリンにあるトルファン出土資料）を発見することができ、それらを比較することにより、ウイグル語版がソグド語版の翻訳ではないことをほぼ明らかにすることができた。これは特定の一仏典に関する発見であり、他の似たような例を探して検証する必要がある。なおこの発見を含む、ベルリンのソグド語資料についての研究史および将来の研究課題について、短い講演をベルリンで行い、その原稿が近く公表される。（“In search of traces of Sogdians ‘Phoenicians of the Silk Road’”, in: Berlin Brandenburgische Akademie der Wissenschaften. Berichte und Abhandlungen, Band 7, 2000）

これらとは別に、モンゴルに流布した仏典の一つのパターンとして、中国で作られた偽経が、いったんチベット語やウイグル語、さらにはソグド語に翻訳され、最終的にモンゴル語に訳されるパターンを確認し、『天地八陽神呪経』、『善悪因果経』、『佛説北斗七星延命経』について、詳しく検討した。特に最後のものについては、チベット語、ウイグル語及びモンゴル語の種々の版本や写本の断片の写真の収集を行い、テキストの作成を終えた。この間には、小田寿典氏による『天地八陽神呪経』の諸版の関係についての優れた論文が発表され、その研究も我々の枠組みに利用できることになった。

昨年度の後半からは、仏典の流布のもう一つのパターンを探るために、説話の仏典、そのなかでも最も有名なヴェッサンタラジャータカの流布についての研究を集中的に行っている。2000年8月5日、京都大学会館で行われた原典班の研究集会では、現在までの研究について次のような中間報告を行った。

従来の仏教学者の研究は、専らパーリ語の該ジャータカを対象にして、その中に見られる新旧の要素の区別に重点を置いていた。すなわち、仏教以前の説話の素材、仏教の中に取り込まれた後に導入された部分、さらには二次的に混入した要素などである。しかしこの種の研究では、我々が興味を持つ資料も含めて、パーリ語以外のものについては、パーリ語版との類似性が言及される程度で、それらの間の関係についての本格的な研究は為されていなかった。それ故、我々はまず最初に、中央ユーラシアに伝わった該ジャータカの資料を集め整理した。その際、該ジャータカがしばしば図像化されるという特徴に注目して、伝播のありかたを探る資料のなかに図像資料も加えることにした。

この過程で明らかになったことはいくつかあるが、比較的重要と思われるのは：(1)モンゴル語に訳されたこのジャータカは5訳存在する。そのうち、カン

ジュール、タンジュールに入っているものは、対応のチベット語版の翻訳である。別にある1点は、それらとは全く系統を異にするものであり、最も人口に膾炙したものである。そのオイラート語版も存在する；(2)トカラ語版には、トカラ語A方言とB方言に各々1断片ずつ存在し、どちらもJatakamalaの比較的忠実な翻訳である；(3)従来の研究でチベット語版としてしばしば言及されていたものは、根本説一切有部の律の一部にすぎず、これを特別な伝承として扱う必要がない；(4)従来の研究では1985年に発表されたウイグル語版が全く考慮されていない；(5)漢訳では唐の時代に義浄が訳した根本説一切有部の律の中の2点以外は、非常に古い時代の翻訳で、古さの点ではJatakamalaと同じかそれ以前である。しかもその内の2点は、ガンダーラ地方の伝承に遡るように思われる；(6)ソグド語版は古い漢訳の一つとよく似ていて、同様にガンダーラの伝承につらなるものと思われる。しかも最もよく似ている漢訳とも異なるので、別のヴァージョンが祖型であったという推定も成り立つ；(7)ミーラーン地方で発見されたこのジャータカのみを描く一大壁画にはカローシュティーの銘文があり、これもやはりガンダーラの伝承に基づいたものであることが推定される；(8)ソグド語版、ウイグル語版、モンゴル語未入蔵本にはそれらだけに共通する要素が見られ、その伝播のあり方について特別の研究を要するなどである。

我々はこの研究の過程で、説話のような大衆に好まれるテキストは、流布するにつれて、多くのヴァリエーションを内包する生きたテキストとなり、祖型との差異を増すが、ある段階が来ると、次第に最も流布したテキストが定着しヴァリエーションが少なくなるという、大衆化と脱大衆化の繰り返されるサイクルがあるらしいことに気づいた。そして図像資料は、祖型よりむしろ大衆化したテキストに対応することがあるらしいことも判明した。

六朝期の著作における伝統の継承と変容

研究代表者 斎藤 希史
国文学研究資料館 助教授

分担者 興膳 宏
京都大学 名誉教授

【要旨】

六朝期は、古代以来の典籍の整理、それにもとづいた新たな創作の開始に見られるように、中国古典世界が確立する画期となる時代であった。

しかしながら、六朝学術文化の全体は、いまだ十分に解明されているとは、言い難い。

本研究は、1) 六朝学術文化の典型的著作でありながらほとんど研究されていない『金楼子』、2) 六朝学術文化を中国古典世界に位置づける鍵となる一連の批評用語、3) 六朝知識人の生き方を総体的に捉える材料となる六朝詩人伝記、の三つの研究対象を設定し、上記の課題に取り組んでいる。

研究成果として、1) 『金楼子』全篇の訳注、2) 六朝批評用語辞典、3) 六朝詩人伝訳注、の三つを準備し、3) については、今秋刊行の運びとなった。

【位置付け】

六朝期の学術文化は、この時期に古代以来の典籍の整理・系統づけが始まり、また自覚的な文学創作意識にもとづく詩文の創作が活発に行われるようになり、併せて体系的な文学理論・批評が成立して、書画理論との異分野間での相互交渉も進むなど、中国文化史上においても、きわめて注目すべき現象を呈している。いわば、中国古典世界が確立する画期となった時代であり、後世の文化全般に及ぼした影響もきわめて大きい。現代的観点から見ても、統一帝国崩壊以降の戦乱の時代にあって、いかにして過去の総括を行ないつつ未来への基盤形成を果たしたか、今日の我々に無限の示唆を与えて続ける時代である。しかしながら、目下のところ、その実情が十分に解明されているとはい

がたい。本研究は、上記の主要な諸現象を相互に関連・統合させつつ探索を加えることにより、六朝期の学術文化の全体像を解明しようと意図するものである。

具体的には、1) 梁元帝蕭繹の著書『金楼子』の研究、2) 文学批評用語の研究、3) 六朝詩人の伝記資料研究という三本の柱を立てて、所期の目的を達成する計画である。

1) の『金楼子』は、六世紀の南朝梁最後の皇帝となった元帝蕭繹が、広く古典のことばに依拠しつつ「一家の言」を確立しようとした書である。この時期の学術文化の様相を理解するために重要な意義を有する資料でありながら、テキストの乱れもあって、これまで中国や日本においてもほとんど詳しい研究がなされてこなかった。この書のテキストを確立し、その正確な訳注を作成することが、本研究の直接の目的である。また同書にはさまざまな典籍が引用されているので、その調査と分析を通して、六朝期における古典の受容のありかたを知ること、本研究の意義の一つである。

2) の文学批評用語については、文学批評の基礎が形成された六朝期のみならず、視野を六朝以前の典籍や後世の文学理論・批評にも向けて、批評用語の概念や用法の変化の跡をあとづける方針である。さらに、その批評用語が文学以外の分野において用いられる場合も積極的に視野に入れることによって、中国古典世界における「ものの見方」を通時的かつ横断的に再構成することを目指す。抽象的な概念でなく、具体的な語彙に着目することによって、言葉を最も重んじる文明の一つである中国文明のパースペクティブを得ようとするものである。

3) の六朝詩人の伝記資料研究については、これまで個別の詩人の伝記研究はあっても、それらを総合して広く六朝詩人全体の生き方を探索する研究はなかった。過去の個別の伝記研究の達成を生かしながら、個別の伝記研究を総合するような形で、基礎的な蓄積の成果を提供することにより、六朝詩の研究者や愛好者のみならず、日本古代文学の研究のためにも資することをねらいとする。

【研究成果】

1) 『金楼子の研究』

『金楼子』の原テキストは存せず、現在行われるテキストは、最も広く行われている「知不足齋叢書」本をはじめとして不備が多いので、『太平御覧』などの諸書に散在する逸文をも活用しながら精密な本文校訂を進め、より原型に近い定本を作成する必要がある。この目的を達成するための基礎作業として、まず「知

不足齋叢書」本をデータベース化することとし、すでに全書の入力を終えた。今後はこれをもとにして、引きつぎ所期の目標に向かって作業を進める予定である。同時に「知不足齋叢書」本のもととなった『永樂大典』をはじめとして、広く『金樓子』の文章を収集して、テキスト間の校勘を進めつつある。

上記の本文校訂と平行して、全六巻の訳注作成を計画し、これまでに「金樓子序」「自序篇」「立言篇」の会読を終えた。残る諸篇についても同様の会読を進めるとともに、その成果をまとめて、できるだけ早い時期に、良好なテキストにもとづく全書の訳注を完成して公刊するつもりである。六世紀の南朝梁では、古典の整理が集中的に行われたことが知られているが、すでに完了した「立言篇」の会読の過程で、著者蕭繹が多様な典籍を自在に活用しながら、それに依拠しつつ自分の思想を展開しているさまがつぶさに窺えるのは、当時の文化の様相を示す現象としても興味深い。

2) 文学批評用語の研究

基礎作業として、六朝詩人の伝記、『文心雕龍』・『詩品』などの六朝期の文学批評、さらに唐宋以降の詩話を中心として、文学批評用語を収集し、データベースを作成した。現在ののべ語彙数は数千に達しているが、なお収集範囲を広げて増加中である。得られた語彙を分析すると、核となる文字の相互の組み合わせによって微妙な差異が表現されていること(例えば「清」「高」「潔」三字の相互の組み合わせなど)、それらの組み合わせが一定の語彙群を形成していることが、まず確認される。さらに、それぞれの語彙群が相互に補完しあって、より複雑な批評概念を作り上げようとしていることが看取される。こうした分析からは、単純なプラス評価もしくはマイナス評価を越えて、一定の構造をもつ世界への位置づけの行為として批評用語が選択されていることが解明されつつある。現段階では、基礎作業によって得られたこれらの知見をもとに、批評用語相互の關係に着目した用語辞典を、成果の一つとして企画している。

分析にあたっては、コンピュータにおけるテキスト処理言語として最も強力と思われる Perl を用い、人の目だけでは気づきにくい傾向を顕在化させることに功を奏している。

なお、中国における批評用語においては、音律の効果も忽せにできないところであるが、これについても、平仄の組み合わせ、二字語の場合に語頭に来やすいもの、語末に来やすいものなどのデータが集まっており、成果に盛り込む予定である。

3) 六朝詩人伝記資料の研究

三国から隋に至るまでの、四百年間にわたる六朝の代表的詩人七十九人を取り上げて、正史などを資料としながら、各詩人の伝記について、二十二人の研究者の共同研究により、精密で正確な訳注を施す作業を進めてきた。その成果は、このほどようやく最終的な整理を終えて、この秋、『六朝詩人伝』と題し、大修館書店から出版される運びとなった。本書の内容と構成は次の通りである。

序説：六朝の詩人とその伝記

本文：七十九詩人の伝記(原文、書き下し文、口語訳、注、参考資料)

正史所載の主要な文学論(同上)

付：六朝時代の官職解説、主要氏族の系譜、関係地図、索引(人名・作品名)総ページ数は千ページを超える巨著となったが、単に分量だけでなく、六朝詩人の伝記を集成した書として、内外ともにその先例を見ない画期的な意義を有するものと確信する。今後の六朝詩や六朝詩人の研究のために、基本文献として活用されるであろう。六朝詩人の伝記資料研究は、この書の公刊によって、基本的に完結した。

上記の1)2)3)は、それぞれ独立した研究であるとともに、相互に密接な連関性があり、今後はすでに完成した3)の成果を十分に活用しながら、1)2)の研究をさらに推進してゆくつもりである。

インド哲学における聖典観の展開

本文批評の方法論的反省を踏まえて

研究代表者 丸井 浩

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

分担者 金沢 篤

駒沢大学仏教学部 助教授

【要旨】

1. この研究は、インド思想における哲学と宗教の相互補完的關係を、10世紀前後のバラモン哲学文献(ジ

ャヤンタとヴァーチャスパティ)に見られるヴェーダ聖典観を解析することによって、具体的、文献実証的に解明することをめざしている。

2. 関連文献の蒐集，サンスクリット原典の解読作業はおおむね順調に進んでいる。

3. 古典学の各分野との分野横断的なシンポジウム，討議，研究発表等を通して，広い視野からの問題意識が高まった。特に「古典としてのヴェーダ」という概念が，この研究を通して明らかになりつつある点は大きい。

4. 文献解読の精度を高めるため，関連するインド哲学文献の電子テキスト化も進んでおり，その成果の一部として『シュローカ・ヴァールツェカ』の索引が完成した。

5. ジャヤンタ研究の方は順調で，その成果の一部が論文として近く発表されるが，ヴァーチャスパティの聖典観との比較分析には，未だ課題が少なからず残されている。

【位置付け】

1. 根本テキストに対して注釈を書くことはインドの伝統的学問の基幹をなす。伝統的知識の枠組みは保持しつつ，たえず補正や読みかえを行うことで，伝統の蘇生を図っている。「インド哲学」として括られる学問伝統もまた同様であり「六つのダルシヤナ(六派哲学)によって代表される正統バラモン哲学の諸学統も，それぞれ簡潔文の集成から成る根本テキストを保持する。しかしこうした学統間の差異を越えた共通の根本テキストとしてヴェーダ聖典を掲げる，いわば「古典としてのヴェーダ」という理念もまた，特にグプタ期以降の哲学文献には顕著になってくるように思われる。

2. この理念がいかにして構築され展開したのか。この研究課題を推進するためには，ヴェーダ聖典解釈学の伝統から発展したミーマーンサー学派，および論理的思考を重視するニヤーヤ学派の諸文献が解読されなければならない。本研究ではこのうちニヤーヤの資料に重点を置く。特に10世紀前後に相次いで活躍したジャヤンタ・バツタと，ヴァーチャスパティ・ミシュラに注目する。二人とも哲学諸派の思想に通じ，ヴェーダ聖典の権威論証をめぐるニヤーヤとミーマーンサーの論争の詳細を探るのに恰好の資料を提供するほか，ニヤーヤ思想史の展開をさぐる上でも二人の関係を明らかにする意義は大きい。

3. このようにインド哲学におけるヴェーダ聖典観を辿る研究は，一つには，インド思想における「古典

としてのヴェーダ」という理念の解明につながる。それは同時にヴェーダの権威を認める「正統派」(アースティカ)と認めない「異端派」(ナースティカ)という，ヒンドゥー社会における思想的色分けの問題を含んでいる。もう一つは，インド思想における宗教と哲学，あるいは伝統知と論理的思考の相互関係を，抽象的にではなく文献に即して具体的に解明するための糸口となるだろう。

【研究成果】

一年半の研究経過と研究成果

1. 本研究を推進するための基礎資料を蒐集し，意見・情報を交換するために，平成11年度に丸井，金沢はそれぞれ一回の海外出張を行い，『ニヤーヤ・マンジャリー』のアーメダバード写本などサンスクリット原典の写本のコピー数点を入手したほか，二次資料としてニヤーヤ，ヴァイシェシカ関連の論文を数多く複写することができた。またドイツ Halle 大学のスラーエ教授，オーストリア Wien 大学のプライゼンダンツ教授からは，特に本研究に関連する有益な示唆・助言を受けることができた。

2. 基礎資料の解読として丸井は，ジャヤンタの『ニヤーヤ・マンジャリー』第4章における，ヴェーダ聖典の権威証明を目指したニヤーヤとミーマーンサーとの論争部分，ならびに同第5章におけるヴェーダ命令文の本質をめぐる諸議論に焦点をあて，前者については議論の骨子を整理，後者については訳注研究を推進しつつある。その際，テキストの版本間の異読を網羅的に蒐集し，いわゆる consolidated text の作成をめざしている。またヴェーダ命令文の本質をめぐる議論に関してジャヤンタとヴァーチャスパティの思想的段階を測定するため，『ニヤーヤヴァールツェカ・タートパリヤ・ティーカー』の該当箇所を分析し，ジャヤンタはミーマーンサー学者シャリカナータの影響が認められず，ヴァーチャスパティはその影響が顕著に認められるとの見通しを得ており，近くその成果を発表する予定である。

3. 一方，金沢はヴァーチャスパティの聖典観の解明にあたっている。資料的にはミーマーンサーの作品である『ヴィディ・ヴィヴェカ』の注釈書『ニヤーヤ・カニカー』や独立作品『タットヴァビンドウ』，あるいはヴェーダ元論派の注釈書『パーマティー』を視野に入れつつも，中心テキストとしてはニヤーヤの注釈書『タートパリヤ・ティーカー』に絞り，ヴェーダ聖典の権威証明に関連する箇所の解読を進めている。またこれとは別に，関連文献のテキス

ト・データベースの作成・活用を推進、『タットヴァ
ビンドウ』や『シュローカ・ヴァールツィカ』など
のデータベース化がほぼ完了している。これらの電子
テキストは、複合語の分解や外連声の適応以前の形に
もどす作業を経ており、これをもとに近く『シュロー
カ・ヴァールツィカ』の網羅的索引を刊行する予定。
ちなみに本書はインド哲学史上、もっとも重要なテキ
ストの一つであり、ジャヤンタも多くの点で本書に依
拠し、引用頻度もきわめて高い。

4. ジャヤンタとヴァーチャスパティのどちらが時
代的に先行し、思想的に見て両者の関係はいかなる
ものか。この問題は今まで多くの学者によって論じ
られてきたが、本研究課題の成果の一部として丸井は
「Jayanta Bhatta と Vacaspatimisra の先後関係をめ
ぐって」と題する論文を、近く刊行予定の『江島恵教
博士追悼論集・空と実在』（春秋社）に寄稿した。そ
こにおいてはまず、ジャヤンタとヴァーチャスパティ
の先後関係をめぐる従来の研究を網羅的かつ批判的に
概観した上で、残された問題点を明確した。すなわち、
ジャヤンタの年代自体は9世紀後半に確定しており、
また思想史段階から見てヴァーチャスパティよりも前
であることはほぼ確実であることを確認し、したがっ
て『ニヤーヤ・スーチー・ニバンダ』がヴァーチャス
パティの真作だとするならば、その奥書にある作成年
代“898”は、シャカ暦紀元（西暦976年）で解釈す
るのが自然であろうとの見解を支持しつつも、しかしむ
しろ偽作の可能性の方が高いことを二つの根拠を示し
て論じた。なおウダヤナによればヴァーチャスパティ
はジャヤンタの類比（upamana）論を批判している
とされるが、はたしてその通りかどうかは該当資料を
もっと綿密に分析してみなければ分からない。以上が
この論文の骨子である。

5. そのほか近く刊行される加藤純章博士還暦記念
論集に寄稿した丸井「ジャイナ教文献における Jay-
anta Bhatta の引用断片 “Pallava” の正体」
、ならびに同じく近刊予定の日本南アジア学会モノ
グラフシリーズ3, The Way to Liberation: Indological
Studies in Japan, Vol. I に寄稿した H. Marui, “Some
Remarks on Jayanta's Writings: Is Nyayakalika his
Authentic Work?”も、本研究課題と関係する。

6. 「古典学の再構築」公開シンポジウムやA02班
「本文批評と解釈」の調整班会議に参加して、古典学
の各分野で個別的に蓄積されてきた研究方法、研究成
果に対する知見を拡大するとともに、今後はもっと分
野横断的な広い視点から、古典という理念を再検討し、
本文批評の方法論的問題に対する自覚を高める必要性

と意義がある、という認識を深めた。

研究の斬新性

1. インド哲学文献におけるヴェーダ聖典観を、イ
ンド思想における「古典理念」の一典型として捉える
視点。

2. 電子テキスト化が遅れているインド哲学の分野
において、テキスト・データベースの積極的活用によ
る精度の高い文献解読にもとづいて、インド思想にお
ける宗教と哲学の相互関係という大問題に、文献実証
的に迫ろうとする方法。

3. 旧来は各研究分野ごとに分断されていた古典研
究に、分野横断的な視点を導入して、古典という観念
のインドの特異性と他の諸文明との共通性を追求し、
かつ本文批評の方法論に対する問題意識を高めようと
する試み。

進行状況と今後の課題

1. ジャヤンタとヴァーチャスパティの聖典観の突
き合わせはまだ不十分である。

2. 版本がかかえる問題点を克服するためには写本
研究が必須であるが、『ニヤーヤ・マンジャリー』の
最も重要なシャーラダ写本が入手できない状況にある
など、なお文献解読の精度を高めるための努力が必要
である。

3. 関連文献の電子テキスト化はもっと強力に推進
しなければならない。

4. 本文批評の方法論について、分野横断的な対話
をもっと促進する必要がある。

5. 本研究に関連するインド哲学文献の一部に、学
術的水準も高くかつ一般読者に理解しやすい現代語訳
を付す計画であるが、まだその段階まで達していない。

旧約聖書の本文批評と解釈

その方法論的反省から翻訳の実例まで

研究代表者 関根 清三

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

分担者 守屋 彰夫

東京女子大学文理学部 教授

【要旨】

本研究は、解釈の歴史的意味規定と思想的意味規定の望ましいバランスについての理論を模索することを、主たる課題とする。その理論を旧約解釈の場合に実際に適用した成果は、昨年度二つの編著『死生観と生命倫理』『性と結婚』に纏めて発表した。それを踏まえて今年度は、研究計画に明記したとおり、「ヘブライとギリシアの比較論」へと進むことを企図していた。この夏『倫理思想の源流 ギリシアとヘブライの場合』という400字で約800枚の単著を脱稿し、来年3月に出版の予定である。本書は15章からなり、各章40～50枚で多岐にわたる個別の研究成果が含まれており、しかもそれらが相俟って、古典が現代に語り掛けるものを探求しているので、以下全体の要約と各章ごとの梗概を掲げて、研究成果の報告とする。

【位置付け】

ギリシアの古典とヘブライ（イスラエル）の古典は、爾後の西洋思想の根底に流れ続ける二大潮流であり、現代に至るまで常に西洋の人々がそこにインスピレーションとインサイトを仰ぐ源泉である。しかも国際化が進み世界が一つに結び付けられつつある現代においては、善くも悪くも西洋化の同義語としての近代化の波が全世界に及び、科学的合理的精神や、自由主義ないし民主主義的な政治経済形態、また個人の尊厳と人権を尊重する姿勢などに代表される西洋思想は、現代世界文明の共通の基盤になりつつあると言ってもよい。ギリシアとヘブライの古典を学ぶことは、或いは広く世界的に広がった「西洋思想」一般の、或いは少なくとも西洋化の著しい現代日本の我々の「思想」の、「源流」を探索することにも通ずるはずである。

【研究成果】

a：本書全体のねらい

西洋の倫理思想史の様々な潮流がそこに発する、ヘレニズムとヘブライズムという2つの源流に遡って、基本テキストを読解し、多様な思索に学びつつ、そこで何が問題となり、それが倫理的にどのような意味を持つのか、について考察することを課題とする。そのことを通して特に、愛・正義・超越・犠牲等、現代人の思索に挑む問題系の射程を見定め、特に「驚き」を基底に据えた倫理学の可能性について、何某かの展望を開くことを目指すものである。

b：各章のテーマと内容

序論 「驚き」

プラトン、アリストテレスが哲学の始めに「驚き」があることを指摘しているが、実践哲学としてのギリシアの倫理学もここに起点を持つだろうことを、様々なテキストを引きつつ、確認する。ヘブライの宗教倫理においても、「驚き」が鍵語となることについては、現代のユダヤ教哲学者ヘッセルが、正当にも注目しているが、これについても、本論を先取りして、主要テキストを参照する。

第I部 古典ギリシアの実践哲学

① ソクラテス前の哲学者たち（1）イオニア学派

紀元前6世紀、ギリシアの植民地イオニアに、ほうはい澎湃として出現した哲学者たち、タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスは、万物の無限な原理を探り、さらにはクセノファネスはその原理を擬人神観的に捉えることを批判し、ヘラクレイトスは万物を操る叡慮について思索した。それらは哲学の嚆矢であると同時に、超越への驚きに基づく知的探求を善とする倫理学の誕生を告げるものである。

② ソクラテス前の哲学者たち（2）イタリア・トラキア学派

前5世紀のイタリア・トラキア学派では、憎しみが惹起する争いによる罪の意識とそれを償おうとする意志、更には愛の調和への復帰を語ったエンペドクレス、上機嫌や中庸の徳、さらには畏怖の重要性を指摘したデモクリトスが、倫理思想の上からは注目される。しかし両者に影響を与え、現代のハイデッガーに至るまで広汎な影響力を有する、パルメニデスの独創的な存在論も刮目に値する。

③ ソクラテスとプラトン（1）ソクラテス・ソフィスト・プラトン

プラトンの初期対話篇の主人公であるソクラテスと、

中期・後期対話篇のプラトン自身の思想を分けて、それぞれを比較する。徳が幸福のために十分と考え、徳を知と同一視し、また靈魂不滅を信じたソクラテスに対し、徳は幸福に至る手段ではなく、また知識以上のものと考えたプラトンは、独自の正義論・愛論を展開する。また彼は靈魂不滅の信仰を論証しようと試みた。両者の比較を通して、またその間に位置するトラシマコスらのソフィストの警見に基づき、倫理的な問答の真髄を探る。

④ ソクラテスとプラトン(2) プラトンを中心に
プラトンにおける徳と正義、愛と快樂、靈魂とイデアといった中心問題を、中期の『国家』篇の読解を通し、適宜、中期の『パイドン』『パイドロス』『メノン』『饗宴』、後期の『テアイテス』『フィレボス』その他の対話篇も参照しつつ、論ずる。

⑤ アリストテレス(1) 幸福と倫理的卓越性
以下3回にわたって、アリストテレス『ニコマコス倫理学』を読み解きつつ、ギリシア倫理学の帰趨を見定める。先ずこの書の位置付けと構成を押さえた上で、プラトン倫理学との相違点を整理する。特にアリストテレスの視点からするプラトンのイデア論批判の妥当性を検討する。次に、善と幸福とは何か、から説き始め、最高善の指摘をもって結ばれる、『ニコマコス倫理学』全体の結構を俯瞰する。続いて倫理的卓越性(徳)論を整理する。

⑥ アリストテレス(2) 中庸と徳論
徳論の中心である中庸論とそれへの後世の批判、それらをめぐる論者の評価について論じた後、勇氣、正義、愛の三つの徳に絞って、その意味について考える。配分的・矯正的・相補的正義の解釈、自愛は総じて非か否かをめぐる議論等をめぐって、考察する。

⑦ アリストテレス(3) 知的卓越性と観照
まず倫理的卓越性に対する知的卓越性の諸相を、思慮(実践知)に焦点を合わせて論ずる。行為と責任、放埒と抑制といった問題圏から、独自の快樂論とその位置付けについて考察する。最後に、幸福としての観照をめぐるアリストテレスの結論部を分析し、プラトンとの比較、政治論への移行行きについて押さえる。またその理性尊重の基本姿勢とその包含する問題性、ギリシア的自由民の倫理からヘブライ的捕囚民への展望を開いて、第I部の結びとする。

第II部 古代ヘブライの宗教倫理

⑧ 十戒(1) 第六戒から第九戒を中心に
第I部の宗教倫理としてのヘブライ倫理についての論じ方をめぐって注意点を押さえた上で、旧約の第一

部分「律法」から先ず十戒を取り上げる。殺人・姦淫・偷盜・偽証を禁ずる第六戒から第九戒をめぐって、ヘブライ語に遡った広狭二つの解釈の可能性を確認し、更にそれらが禁ぜられる根拠を探る。カントの定言命法からの根拠付けとヘーゲル以降の批判、和辻哲郎の信頼理解からの根拠付けとその当否について論ずる。

⑨ 十戒(2) 第一戒を中心に
和辻の第六戒以降の根拠付けは、第一戒から四戒、すなわち神関係の戒めを無視するところに、十戒解釈としては瑕疵が存することを指摘した上で、論者自身神関係の戒めを哲学的に解釈する可能性を模索する。それを踏まえて、和辻に代わる、十戒の根拠付けを試みる。倫理が突き詰められたところ、何らかの超越的原理と関わらざるを得ないことを、現代の象徴論などを考慮しつつ論じ、そこから古代の倫理に通底する「驚き」へと論じ進む。

⑩ 法集成 「契約の書」「申命記法」「神聖法典」
「律法」中唯一の断言法たる十戒に対し、決疑法の代表的集成である、「契約の書」「申命記法」「神聖法典」の三つについて、倫理思想上の落穂拾いをする。捕囚民・社会的弱者へのアガペーの思想、愛敵の思想が、新約に先駆けて語られることに、注目する。

⑪ 知恵文書(1) 『箴言』
旧約聖書の第三の部分「諸書」中、倫理思想の上から逸することができないのは、所謂「知恵文書」である。その代表的三著『箴言』『ヨブ記』『コーヘレス書』について、以下三章にわたって学ぶ。『箴言』については、これを徳目表として読むというのが、論者の視点となる。しかもその錯綜した叙述を、ギリシアの『ニコマコス倫理学』の徳論との比較の視座を導入して、哲学的に整理しつつ読むというのが、ここでの方法である。そこから、ギリシア・ヘブライそれぞれの徳論に共通するものと独自のものの別も見えて来るはずである。なお『箴言』中にも愛敵の思想が顕著であることを、パウロと比較して付言する。

⑫ 知恵文書(2) 『ヨブ記』
『箴言』では基本的に応報信仰が保たれていたが、義人が苦しむ現実を前に、応報思想の破れを問題にした後期知恵文書が、『ヨブ記』である。キルケゴール、ユングなど後世の解釈を批判的に紹介した上で、『ヨブ記』作者のこの問題に対する独自の答えを読み解いて行く。

第III部 ギリシア・ヘブライ倫理の帰趨

⑬ ヘブライ宗教における応報倫理 『コーヘレス書』を中心に

『ヨブ記』は例外的な義人の苦難を問題にしていたが、より一般的に応報の破れた現実を剔抉し、伝統的な信仰の革新を試みた最後期の知恵文書が、『コーヘレス書』である。全てを空、と断ずるその思想を、語の十全の意味でニヒリズムと規定すべきことを、ニーチェ・ハイデッガーのニヒリズム定義を参看しつつ論じた後、現代の哲学的に整理されたニヒリズム理解との比較において、『コーヘレス書』の迷路のようなテキストを読み解くことを試みる。特に倫理思想の観点から重要なのは、応報倫理の破れたニヒリズムを、個人のささやかな愉悦を楽しむことによって超克しようとする、コーヘレス独自の思想だが、そこには終始他者が忘れられていることも、他方限界として指摘せねばならない。

⑭ ヘブライの宗教倫理と贖罪思想 預言者を中心に 応報の破れを率直に認めつつ、コーヘレスのようにエゴイズムに閉じこもることなく、他者関係に開いた新しい神の模索を、旧約の他のテキストに探っていくことが、ヘブライズムについての最終章である14章の課題となる。旧約中第二の部分「預言者」から先ずイザヤを取り上げ、彼の義の神とその限界、また歴史書と文学書からダビデのパテシェバ事件における愛の神の発見とその問題性を読み解いた後、義だけでも愛だけでなく、両者の統合を贖罪思想において発見した、捕囚期の預言者第二イザヤに注目する。ヴェーバーの古代ユダヤ教理解を批判的に援用しつつ、第二イザヤこそ、応報倫理の破れを逆手に取って、却ってそこにこそ顕れる新しい神の働きを見出したことを確認する。それを踏まえて更には新約のイエスの十字架理解の系譜へと論じ進む。しかしこの贖罪思想の系譜こそ、カント、若きヘーゲル、またニーチェ、レヴィナスなどの諸家が激越な批判の対象とした、思想上の争点でもあった。最後にそれぞれの視点からの批判と、贖罪思想からの応答の可能性を探る。

⑮ 愛と義をめぐるギリシア哲学の省察 アリストテレスに即しつつ

ヘブライの倫理思想の根本問題は、応報倫理の破れをどう解するか、という点に収斂したが、これに対するユダヤ・キリスト教の贖罪信仰からする解答を、より一般的な哲学の理性の言葉で敷衍するとどうなるであろうか。最終回は、『ニコマコス倫理学』に戻って、その行間にまで分け入りつつ、愛が贖罪にまで至り得、また至らざるを得ない事情について、何某かの展望を開き、あわせ哲学と宗教の相補的緊張関係について確認して、結びとする。

結語と展望 再び「驚き」をめぐる

ギリシア・ヘブライの倫理思想に底流するものとして、序論で確認し、本論でも適宜注意を喚起して来た「驚き」をめぐる、その現代的意義について省察するのが、最後の課題となる。謙虚、謎解き、愛、超越など現代人に挑む問題系を包含する驚きという概念の、倫理思想にとっての豊かな可能性を示唆し、読者の思索への誘い水とする。

c：本研究の方法と成果の獨創性

本研究の獨創性について、自分で言うのはシャイな日本人としては憚られるが、これも一つのアカウンタビリティとして、最後に箇条書きにしておこう。

- ギリシアの倫理思想の通史は、マッキンタイアのものなど難解で簡単なものしかなく、ヘブライのそれも、最近のオッターのように引用箇所を羅列したまま一貫した思想的視点を欠くものしかない。それぞれについて網羅的かつ思想的解釈を踏まえて独自の主張にまで至ったものは、寡聞の限り知らない。
 - ギリシアとヘブライの比較はかつては、ボーマン、ヘッセン等の研究があったが、思惟方法やプラトニズムと預言者に限局された研究であり、倫理思想の観点からとはいえ、全般の比較は、欧米にも見当たらない。
 - しかも両者に通底するものとして、「驚き」に着目し、非宗教的な現代において一定の宗教色を超えつつ、しかし存在の超越的根拠を眼差す驚きの復権と、それに基づく新しい倫理学の提唱は、応用倫理といった社会生活の約束事に自己限定しがちな現代の倫理学への新しい挑戦として、独自である。
 - ヘブライの徳論をアリストテレス『ニコマコス倫理学』のそれと比較したり、コーヘレスの思想をニーチェ・ハイデッガーのニヒリズムと比較したり、そうした哲学的に整理された論述との比較の視点を導入することにより、非哲学的な論述の読解を企図する方法も独自である。
 - 歴史的批判的解釈学の客観的成果を踏まえつつ、テキストの地平との葛藤・融合を目指す哲学的解釈学の主体的対話を交えた、その解釈学的な両面攻撃がまた新しい。
 - その結果出て来た、ダビデの罪の赦しの信仰の、積極的な評価と、それでもそこに蟠る、神義論的な問題性の指摘等々は、従来の解釈の護教的偏狭と、歴史的意味の確定を言い放して終わる無責任を、超えるものである。この種の個々の解釈の成果は枚挙に遑がない。
- 書き始めると、脱稿した直後でテンションがあがっ

ているせいもあって、accountability を超え、とめどもなく boastfulness になる恐れがあるので、以上をもって研究成果の一端を報告したこととし、筆を擱くこととしたい。

初期キリスト教におけるイエス伝承の変容史的研究

研究代表者 佐藤 研

立教大学コミュニティ福祉学部 教授

【要旨】

新約聖書、とりわけその中の福音書は、西洋では最も代表的な「古典」と見なされてきたし、近代以降の日本に於いても、その果たした「古典的」役割は否定できない。そこで、新約聖書および福音書の中心テーマである「イエス」の研究、とりわけ「イエス伝承」の分析・解釈の試みが西洋でも日本でも長らくなされてきたわけであるが、今回の私どもの研究ではそれを総括的に吟味しようとしている。そのためのツールとして、彩色を施して観察しやすくした、ギリシャ語および日本語によるコンピューター用「共観表」を作成中である（特に日本語のものは一般の読者層の入手できるものにしたい）。これを通して、最終的にはイエス伝承の変容力学を明らかにしたいと考えている。その際の最大の問題の一つは、なぜあれほどの数の「非真正な」イエス伝承が二次的に誕生したか、その力学は何か、という問題である。

【位置付け】

新約聖書およびその中の「福音書」が西洋文明の中で、いわば「古典中の古典」と見なされ続けて現在に至っていることは、何人も否定できないであろう。それは、ギリシャの文学・哲学を一方の、旧約・新約の両聖書を他方の基として展開してきたのがヨーロッパ文化であることを思えば、当然である。そしてその中でも、キリスト・イエスの言動は、キリスト教西洋人

の思考の共通財となってきた。したがって、イエス伝承の研究は、この「古典中の古典」のいわば「核」の部分の研究とすら見なすことができる。

ここ日本においても、とりわけ明治時代以降、聖書それも新約聖書の影響を無視してはその文学・哲学・法思想を語り得ないであろう。それは、キリスト者の数が日本では未だに1パーセント以下であるという教会的事態とは必ずしも一致しない。西洋精神の根幹にある新約聖書そしてその中心の「イエス・キリスト」の思想的影響は、教会の枠を遙かに乗り越えた文化史的現象なのである。明治以降を視野に入れる場合、日本においても福音書は「古典的」重要性を認められてきたと言って良い。そして、最近とみに重要とされてきた「人権」の思想やマイノリティーの権利の問題を考察する上でも、新約聖書とりわけその根幹のイエスの言動の意義は、これからの日本でも無視することができないであろう。

当然ながら、こうした事態は久しく認識され、西洋では19世紀中頃から（新約）聖書学が精力的な発展を見せてきた。日本でも、とりわけ戦後以降、（新約）聖書学の高度な展開を見てきている。今回の私どもの研究は、そうした先行研究とりわけイエスに関する諸研究を前提とし、その総括をはかって成果を一般的読者にも接近しやすくするだけでなく、新約聖書の「伝承」研究の更なる次元への視野を確保しようとするものである。

【研究成果】

具体的には、私どもの研究は二つのステップに分かれる。一つは、イエス伝承の多岐性および複雑性に鑑み、それらを視覚的に整理できる「共観表」の作成と、もう一つはそれを土台にしたイエス伝承変容の行程の総体的観察である。この双方は同時進行しているが、現在の労力の重点は前者に置かれている。

「共観表」とは、四福音書の共通テーマの箇所を「共観」できるように配列したものであるが、これには現在 K. Aland, Synopsis quattuor evangeliorum という標準作品が既に存在している。私どもの新しい方法とは、この共観表を土台にしつつ、その共通語の部分を色彩によって識別可能にすることである。こうすることによって、各福音書間にイエス伝承がどのように受容され、変貌させられていったかが瞭然となるのである。これは、過去一年半近くの手作業によって、四福音書中もっとも重要な「共観福音書」（マタイ、マルコ、ルカの三福音書）においてはコンピューター上でほぼ完成した（マタイ、マルコ、ルカに共通な語

は「青」、マタイとマルコに共通な語は「緑」、ルカとマルコに共通な語は「赤」、という分類が主体)。これを私どもは、現在実際に授業で使用するなどして、福音書研究におけるその有効性を確認しつつある。残されている作業は、これに4番目のヨハネ福音書を、共観福音書に並行する箇所に関する限り追加して、「共観」の幅を一層広げることである。さらには、使徒教父および外典(とりわけトマス福音書)のイエス語録を並行登録し、それらに関しても色彩による共通要素識別を可能にすることである。

以上の「共観表」づくりの作業は原語のギリシャで行っている。「共観表」関連の他の作業は、上記のものに対応する「日本語版」を作ることである。この土台になるはずの日本語版福音書の和訳に関しては、共観福音書の分は1996年に岩波書店から発刊し、またヨハネ福音書のほうは今回新たに完成させた。また共観福音書の訳はもう一度見直す必要を感じたので、その改訂を進めてきたが、その過程も今終わりつつある(最終閲読をお願い中)。したがって2000年の秋が終わるまでは、「共観表」用の和訳が新しく出そろうので、それを土台にして日本語の彩色分析を施した「共観表」づくりに着手する。これは何よりもまずコンピューター上で行ない、将来研究者ないしは一般の人々にも入手可能にしていきたい(予定では岩波書店でCDRomおよび書籍形式で出版)。もちろん、この改訂版福音書の訳自体も出版社に新たに出版してもらい、福音書を斬新な新訳で提供するという課題を完成させたいと思っている。

他方、こうしたツール作りと並行して、イエス伝承自体の観察も継続してきた。その中で浮かび上がってきたのは、元来ナザレのイエスに遡源すると思われる語句ないしは伝承の変貌プロセスと、元来イエスには遡らないと判断される語句ないしは伝承の発生および展開のプロセスの相異点である。前者では、イエスの言動の伝承が古く成立した場合、一般的原則として、当の伝承ないしその重要部分が削除されるという事態が起こることは稀であるが、極めて高い頻度で当の伝承に様々な言葉が二次的に付加されることが確認できた。おそらくこの点では旧約聖書の伝承形成・展開と類似しているのではないかと思われるが、他の文化圏の伝承の推移といかに比較されうるか、討論が待たれる。後者の、歴史的にイエスには遡らない言葉がイエスのものと見なされるケースは、実は数の上では非常に多く(全体の半数以上か)、なにゆえそのような現象がこのように頻繁に発生するのか、その際の力学はどのようなものか(単に自分たちの都合のいいように

「イエス」の名を語って捏造した 多くの場合そのように解されてきた と判断して済む事態ではなさそうである)、これから改めて考察していく必要を感じている。

韓孟聯句研究

研究代表者 川合 康三

京都大学大学院文学研究科 教授

分担者 愛甲 弘志

京都女子大学文学部 助教授

【要旨】

聯句は中国にもあるが、日本の連歌ほど浸透せず、研究も乏しい。

交遊・遊戯の場から生まれる聯句であるが、韓愈・孟郊の聯句は、そうした条件を生かして、表現の新たな試みを模索する場となっている。

そこで試みられた表現は中国の詩的言語の可能性を広げ、その後の中国の詩に浸透していく。

聯句は「城南聯句」を例外として一聯は一人の作者の手になり、それは日本の連歌と大きく異なるところで、一人の作者が詩の最小単位を一人で作ることにこだわるところは、日本と中国の文化の差異を反映しているかも知れない。

「城南聯句」は質量ともに韓孟聯句の代表作である。そこでは語彙・語法、そして書かれた対象世界、すべてにわたって、従来の枠組みを取り外そうとする作者たちの意図が見られる。

【位置付け】

「聯句」は中国の韻文のなかにもジャンルとして存在している。漢武帝が臣下の者たちと作った「柏梁臺聯句」がその最も早いものといわれるが、それは詩の形式、語彙などから見て、明らかに後世の偽托である。しかしそれを模擬して皇帝が家臣と作る聯句は一つの伝統として継承されていく。

私的な集まりのなかで聯句を作るのは、南朝の早い時期から見えるようになる。陶淵明を初めとして、謝朓・何遜などに見られるが、量的にも多くはないし、また聯句にたずさわった詩人たちの代表的な作品でもない。つまり、南朝以降、聯句はぼつぼつと作られるようにはなるものの、質量ともに詩の重要な様式とはならなかった。

唐代では半ばを過ぎた大暦年間、江南に赴任した文人官僚たちとその地の詩僧たちが詩酒の楽しみを共有し、そこを場として聯句が繰り広げられる。中央から赴任した官僚としては顔真卿、江南の詩僧としては皎然がその中心である。もともと聯句には人と人とが集い合う喜び、楽しみが動機になっているが、これはそれを意識的に展開したものであり、まとまった聯句の製作がここで行われた。

それにすぐ続いて、長安では白居易・元稹を中心とする聯句、そしてまた韓愈・孟郊を中心とする聯句が、作られるようになる。これは江南で繰り広げられていた文人の遊びを意識的に継承しようとしたものであろう。白居易が江南の文人の集いに少年時代からあこがれていたことはよく知られているし、孟郊は若い時期に実際にそこに交わった経験があった。

元白の聯句は交遊の場としての遊戯的な性格が強く、やがては唱和詩の方向へ発展していく。一方、韓孟の聯句は当初は流謫の地から長安に戻った韓愈を囲んで交遊の喜びとして出発したのであったが、韓愈と孟郊という個性の強い作者どうしが、新たな表現を模索する試みとなり、そこで実験された表現は中国の詩に斬新な手法をもたらし、後続する李賀などによってさらに洗練された詩的表現として開花していくことになる。聯句が中国の詩の様式として完成するというより、詩の表現に大きな変化をもたらしたのである。

その後も聯句は詩の伝統のなかで継承されていったにしても、中国古典詩の中心にはついにならなかったことは、日本の「連歌」が様々な規則をこらして一つの様式として定着し、浸透していったのと較べて、大きな違いであり、ここに中国と日本の文化の差異が反映されているかもしれない。複数の人が作り合う詩としては、中国では聯句よりも唱和詩が盛んになるのである。唱和詩は座をともしなくても応酬しあえるという点が聯句と異なるが、さらに大きな違いは、聯句が複数の作者の手によって一篇の詩が作られるのに対して、唱和詩はあくまでも独立した詩篇の集合であることだ。聯句の場合ですら、後述するように韓孟「城南聯句」を例外として、一聯、つまり詩の最小のまとまりをもつ二句は、一人の作者によって作られるのが

ふつうである。日本の連歌が複数の作者が一つの連歌を巻くことに意味があるのに対して、中国では個々の作者の独立性を捨てきれないかに思われる。

中国の聯句がこのように中心を占めるジャンルにならなかったせいか、或いはまた韓孟聯句はとりわけ難解を極めるせいか、今日に至るまで聯句の研究は至って乏しい。中唐文学の様々な相が活発に掘り起こされている今、聯句にも光をあてなければならない。

中国古典詩の研究は、今日では内容よりも表現に重心が移ってきた。詩の表現の探求には、韓孟聯句はまたとない材料となるだろう。もともと作者たちはそこで新たな表現を模索していたのであるから。そしてそれは聯句のみならず、中国の韻文学全体に対しても、或いはさらに日中の文化を比較する上でも、有用である。

【研究成果】

韓孟聯句については、ほぼ全作品を読了した。いずれその訳注を公刊したいと考えている。これまで日本語ではその一部についての訳注があるが、参照してみると読解の助けになるものではなかった。中国の宋代以来の幾多の注釈にはおおいに裨益され、それなしに読み進めることはできなかったが、もともと読解が困難な作品であるために「何を述べているか」に関心が向いているもので、我々が注意する「いかに書かれているか」という表現手法、またそれによる表現効果については、手探りで始めるほかなかった。

十数首のこっている韓孟聯句のなかでも、「城南聯句」が代表的な作品である。それは長さの点でも三百六句という最大の長篇であるのみならず、他と異なる大きな特徴は、一聯二句を韓愈と孟郊とが分担するという、中国の聯句では極めて希な形式を採っている。複数の作者が一篇の詩を作るという聯句においても、一聯は一人が担当するという個人による製作を崩さないのが中国の聯句の原則であるのに、「城南聯句」ではそれをも取り払うのである。この方法は、それ以外のところにもあらわれていて、たとえば「柏梁臺聯句」からして明らかのように、個々の作者は担当の句において個別の作者であることを明示してしまう寄せ合わせであるのに対して、「城南聯句」ではそうした齟齬を避けて、統合的な一篇の詩としての完成度を求めるのである。そもそも書き手はほとんど素顔を見せることはなく、長安南郊の自然物をひたすら描写していくだけである。そこには一般の詩に見られる情懷の吐露などは一切ない。外界も既成の風景を見る目ではなく、ふつうには取り上げられないような微細な事物

を執拗に描いていく。ここには盛唐までに作り上げられた美意識を拒絶し、新たな目で自然・外界を捉え直そうとする態度がうかがわれる。そのためにしばしばグロテスクな様相を呈することになるが、決して暗鬱ではなく、むしろ滑稽味を帯びることもしばしばである。要するに二人の目は従来の世界を見る枠組みを意識的に破ろうとしている。

用いられる語彙、語彙を組み合わせる語法、いずれも従来の詩に定着したものではない。先行する使用例を見つけることはむずかしく、彼らの造語とおぼしきものが多い。そうした新たな語彙が後の詩には見られることから、彼らの表現が詩のなかに浸透していったものであることが了解される。定着した詩語がある場合でも、敢えて一字を改めて読解に摩擦を生じるような仕掛けがほどこされている。これは詩的言語が内容の伝達よりも言葉そのものへの注目を引き起こそうとするのを本質とするからであろう。また、造語の構成については、対象物の特徴を端的にあらわす語、知覚に直接訴える特質をあらわす語が組み合わされていることが多い。この手法は、のちに李賀が認識よりも感覚を優先した詩語を繰り広げて新たな詩的世界を構築したのにつながっていく。

こうして見てくると、「城南聯句」は中唐の文学、直接には韓愈・孟郊の文学のもつ特徴を最も先鋭的に具現した作品であるといえよう。

中国の古典の受容には、訓詁注釈の方法が伝統としてあり、それが今日まで続いている。それが明らかにしようとしているのは、作品は何を書いているか、言葉が指し示す事物である。しかしことに文学作品の場合には、より大切なのは、それがいかに書かれているか、そこからどのような世界が立ち現れるかであって、そのためには従来の訳注の形式では不十分であり、原文を詳細に、精緻に分析する言葉を費やさねばならない。我々は韓孟聯句全作品の訳注を目指しているが、そこには可能な限り詳しい分析を施すことを心がけている。

古典としての古典学 宋学文献を中心に

研究代表者 土田健次郎
早稲田大学文学部 教授

【要旨】

宋学の中心人物朱熹の主著は『四書集注』という古典の注釈書であって、朱子学の流布とともにこれ自体が古典となった。いわば古典としての古典学である。本研究では、古典としての宋学文献、古典学としての宋学を特徴づける口語の語録と方法論を取り上げた。

中国の古典は文語が中心であるが、宋学文献の場合は口語の語録も古典としての地位を固めていく。なぜそのような現象が発生したのかを究明し、また口語の語録についての宋儒の言及を集め分析した。

各種語類を比較検討することで、従来とは異なった朱子学像が描ける可能性を模索した。

朱子学の経注が古典となりえたのは、朱熹が明確な経書解釈の方法論を持っていたからである。その資料を収集し分析した。

【位置付け】

宋学は中国思想史の一大潮流となり、更に朝鮮、日本など東アジアに展開した。宋学の中心人物は朱熹であるが、その主著は『四書集注』という古典の注釈であって、朱子学の流布の結果、それ自体が古典として研究の対象になった。ここに古典が新たな生命力を得ていく一つのパターンが看取できる。本研究の題目を「古典としての古典学」とした所以である。

本研究では特に次の二点にしばって検討した。

第一は、宋学文献を特徴づける口語の語録がどのように定着しそれ自体が古典化したのか、またかかる文献が経書解釈にどのような意味を持ったのか、である。これは古典としての宋学の特質の解明に資するものである。また語録が集積されると内容ごとに類別されて語類が作られるが、その編集のしかた次第で学問体系の捉え方が変わる。従来は黎靖徳の『朱子語類大全』の項目をもとに朱子学の体系を説明することが多かつ

たが、別系統の朱熹の語類を見ることで、別の像が描ける可能性を模索した。

第二は、宋学の代表である朱子学の経書解釈の方法論の解析である。多くの古典の解釈の中でなぜ朱子学の注釈が古典となりえたのか。その解明のためには経書解釈の方法論の徹底した分析が必要だからである。従来は朱熹の訓詁や文献考証の成果を、宋学の中での朱熹の性向、あるいは「格物」重視の結果という程度の説明ですませていたが、実は朱熹は中国でも異例なほど文献解釈の方法論を自覚していた。朱熹の経書解釈は最終的には経書の内容を全身的に解釈することを目的にするものであって、それゆえ客観と主観の両面にわたる了解を求める。その了解を他者にもまた自己にも説得力を持たせるものとして方法論があった。この方法論は宋学に限らず、古典を全身的に理解するというこの意味の解明にも資するものである。

以上の二点が今回の研究の中心であって、ともに古典としての宋学文献と、古典学としての宋学を、強く特徴づけるものである。これを更に発展させていくことで、中国における古典の多様な形態の開示と、古典学がいかに古典になりうるかを解明できよう。

【研究成果】

まず第一の宋学の口語の語録であるが、これは文語で書かれた文献とともに宋学の体系を知るうえで必読の古典として定着していった。また宋学、特に朱熹の注の再註釈の類には、理解を助けるために語録が多量に引用され、古典学としての朱子学を補助する働きも担っていた。本研究ではこの『朱子語類』がはらむ諸問題の多角的検討に着手した。

まず資料の収集については、現在最も利用されているのは黎靖徳の『朱子語類大全』140巻であるが、それと別系統の語類である葉士龍『晦庵先生語録類要』や楊与立『朱子語略』も現存している。楊与立の語録は、内閣文庫所蔵のテキストの焼き付けを入手し、呂柟『宋四子抄釈』中の『朱子抄釈』がこの語録の節録であることから、両者の比較を行なった。その結果、内閣文庫本が前半のみのテキストであることが判明した。葉、呂二氏の語類の検討を通して、語類編纂のしかたによって、『朱子語類大全』によって持たれてきた朱子学像がいかに変わるかを検証した。例えば朱子学の大きな話題として理気先後の論がよく挙げられるが、これは朱熹自身の他の文献から推して必ずしも朱熹自身の本意ではなく、このような現象が起こるのは『朱子語類大全』が冒頭にこの議論をまとめて置くからである。かくて『朱子語類大全』の類別をもとにし

て朱子学の体系を語ることの危うさが確認される。

検討すべき資料としては、その他に『朱子語類大全』に吸収されていく前段階の徽州刊行語類の朝鮮古抄本、池州刊行語録の南宋版本などがあるが、これらの資料と『語類大全』の対応関係の調査にも手をつけた。

また語録は弟子の記録であるため、当人の肉声を伝えている反面、記録者によるぶれが生じる。これらの問題については、朱熹自身はじめ、朱熹が属する道学の諸儒も既に意識していた。二程や朱熹などの語録に対するこの方面の言及を集め、彼らが語録に対していかなる見解を有してたかを調べた。その結果、北宋の二程と南宋の朱熹とでは、語録に対する容認の程度に差があること、その差には二程以後の道学の展開が深く関わっていることを明らかにした。

また道学の語録がなぜ口語で書かれているのか、一部でなされた口語語録の文語化の試みがなぜ定着しなかったのか、禅宗の口語語類との関係はどうか、という問題に関する朱熹の言葉を集め、語録という資料の特質を再考するてがかりを得ようと試みた。その結果、文語に比して文意を一義的に決定しやすく、細かい議論が可能であるという口語の性格が、極めて体系的な朱子学の学説の説明にむいていたこと、助字の多用による方向、経過、持続、推測を表す表現の豊かさが、朱子学の言葉を超えた境地や修養に対する重視に効果的であったことなどを明らかにした。

朱熹の語録は、朱熹の経注に更に注を付したいいわゆる末疏の類に頻りに引用されたが、語録の内容の多様さは朱熹の経書解釈のぶれを浮き上がらせるとともに、そのぶれの調整から朱子学に対する教学研究を深化させた。語録が古典としての古典学を補佐する複雑な側面をここから抽出することを試みた。なお中国では語録自体に注がつけられることは少なかった。むしろそれが見られるのは日用語が中国の口語から距離のある日本や朝鮮であるが、その量も多くはない。

従来の語類研究は、訳注作成が主で、報告者もそのための研究会に参加したことがあるが、語類（あるいは語録）という資料の性格について、全面的に検討されたことは少なかった。その空白を埋めるものとして上記の研究を推進した。

第二の経書解釈の方法については、朱熹の文献中の、「血脈」、「語脈」、「文脈」、「意脈」、「文勢」、「文理」、「語義」、「字義」、「意義」、「意味」、「意思」、「左驗」、「事証」など一連の用語の収集を行った。これに関するデータベースを利用するための機材の購入も行った。また文献によっては資料の抽出を手作業でせねばならず、抽出した資料のデータ化のために謝金も使用した。

現在は更に収集を継続するとともに、これらの資料の個々の分析を行っている。なお上記の諸語は、「意味」、「血脈」、「左駿」の三つの系列に整理できる。この方法論として提示されたものが実際にどのように適用されているかの解明が要求されるが、それには朱熹の経注の個々の例を分析せねばならず、今後継続して検討すべき課題である。

朱熹以後、朱熹ほどの明確な方法論の提示がなされたことは多くはない。ただ江戸時代の伊藤仁斎は激的な朱子学批判者でありながら、その意味・血脈の方法論は朱熹からの触発を受けているのであって、このような朱熹の方法論の射程の範囲もこれから検討していく。

北朝文化の研究 言語学的考察

研究代表者 木津 祐子

京都大学大学院文学研究科 助教授

【要旨】

- 1 北朝学術は、中国文明の核心である「華化」メカニズムの解明にとって、重要な分析対象である。
- 2 文化面における『切韻』の完成、政策面における孝文帝の漢化政策は、「華化」にともなう「正統」の獲得という視点によって、その成立と性格を捉え直すことが可能であり、これによって「華化」メカニズムへの新たな視点が獲得される。
- 3 1によって解明された「華化」メカニズムを、中国文明の各時代・各領域に即して検証することにより、東アジア世界における中国文明の意義を、新たな観点から明らかにした。

【位置付け】

北魏から隋建国に至るまでの北朝期（386～581）は、中国で最初に異民族が「中華」において確固たる地位を築いた時代であった。遊牧の民、鮮卑族出身の拓跋氏によって建国された北魏は、当初においてこそ独自

の風習を守る国家として中華を警戒したのであったが、時が経つにつれ政治的・軍事的には寧ろ南朝を凌駕する制度を整えるようになった。そのような北朝も、文化的には依然として南朝に一步譲ると従来評価されてきたのだが、南朝の学術文化が、外来文化であった仏教の影響から新たな命を得た分野を除いては、成熟から爛熟への道をたどったのとは対照的に、北朝のそれは地理学や儒学の新解釈そして言語学などの分野で創新の活力を内に有し、隋唐文化の生命の源となつたのであった。隋初に公にされた発音辞典『切韻』は、その典型的な精華の一つと言えよう。

北朝文化を考えるときに、忘れてはならない大きな要素は、「華化（シノライゼーション）」という問題である。それは、単に非漢族が圧倒的な中華の勢力下に取り込まれていく漢化の過程を指すのではなく、周縁地域において、同時交替的に「華」の「非華」化という現象を孕みながら、大きな流れとしては双方による作用と反作用を繰り返しつつ、「華」のエリアを拡大していくことを指す。

北魏の国家としての成長は、まさにこの「華化」の過程そのものであった。道武帝時代に尊重された固有の風俗習慣も、太武帝の時代になると抗いがたい「華化」の勢いに飲み込まれ、一方でそれ故の強い反撥が生まれたことはいうまでもなく、漢族出身の馮皇后が推し進めた漢風の体制を引き継いだ孝文帝が、過激とも言える勢いで、姓氏の改変・鮮卑語の禁止・旧族の墓地の中原への移動・洛陽遷都など、数々の漢化政策を実施した際にも、群衆的な鮮卑旧族による反撥を引き起こしたのであったが、北魏期に起こったこれらの「華化」現象は、中華の周縁部に常に繰り返される「華化」メカニズムを考える上で、貴重なモデルを提供してくれる。

東アジアの歴史を考えるときに、この「華化」は不可避の問題であろう。それは、中国の北辺に臨界面を有した北朝のみならず、東北部における朝鮮、西部のチベットや内陸アジア、西南部のタイやベトナム、そして東南における日本と琉球、みなこの「華化」という現実にとどのようにつき合うかという問いへの答えを探りながら、近代までの歴史を形成してきたのであった。東アジアの今日ある諸文化を考える時に、このような「華化」の軌跡は至る所で見いだすことができる。言語的な側面に絞っても、中国の文字・漢字・をどのように自らの古典を記すために用いたか、文字のみならず、語彙や思考様式、ひいては教育において、中国の古典と自らの古典をどのように位置づけ、どのような言語文化を創り上げていったのか、そこにも「華化」

への作用と反作用の歴史を見出すことができるのである。

現代社会も、決してこの歴史と無縁ではない。一度西洋文化の波にさらされたこの地域も、コンピュータや情報網の発達により世界観が再編成される中で、学術交流における文字コードの統一問題などが再浮上し、その局面においても、かつてそれぞれが行なった「華化」への取り組みは大いに参照する意義を有していると考えられるのである。

【研究成果】

この一年半の研究は、大きく三つの柱を立てて進めてきた。以下、この三つの課題に沿って述べることにする。

(1) 南朝と北朝の言語学史上の比較

南朝と北朝の双方の学術を熟悉した顔之推の著作『顔氏家訓』をもとに、当時の教養のあり方を整理し、特に彼が重視した「ことばの規範」に関して検討した。彼は、南朝に生まれながら、亡国の移民として北朝に本意ならず仕えたのであったが、伝統的古典また当時尖端の学問に対しては極めて公正な立場を貫いていた。『顔子家訓』の諸篇は、南北朝の学術文化全般に、的確な批評を行なっていて、中でも「音辞篇」は、南北両朝の言語状況を熟知する彼ならではの言語観が表明されていて、後に言語規範となった発音辞典『切韻』の成立と意義を理解する上では、不可欠の文献である。本年はこの「音辞編」を北朝文化史の中の諸問題と関連づけながら訳注・分析を行なった。

(2) 北朝、特に北魏のエスニシティと「華化」の位置づけ

北魏の「華化」史において最も重要なのは北魏孝文帝の諸政策であろう。彼の急激な漢化政策は、時代を先取る形で進行したために、彼の死後（場合によれば生存中すでに）強烈な反作用を引き起こしたのであった。その中でも特に朝廷において母語たる鮮卑諸語の使用を禁止して漢語を話すことを決定した政策の意味を考えるために、本年は、『魏書』孝文帝紀に関連する諸王の伝や、同じ史実を伝統的な「華」の立場から記そうとする『南齊書』魏虜伝などと対照させながら訳注・分析をおこなった。

(3) 「華化」の通時的意味づけと他地域・他時代における「華化」との比較

北魏孝文帝によって推進された「華化」の通時的意味を探るために、清初に福建語・広東語の話者に対して行なわれた官話教育との比較検討を行った。清初の方法としては、当時の官話教科書『官話彙解便覧』の

成立について考察した。なお、これらの諸問題に関連して、社会学的著述も含め、東アジアの民族と言語学に関する文献目録を作成しつつある。

(1)~(3)の作業によって以下のことが明らかとなった。

隋初に成立した『切韻』は、中国語の規範として増改訂を繰り返しつつ長く継承された。その成立については、従来、南北朝の言語を広く雑多に反映したものである、とか、南北朝の規範として洛陽と建康（現南京）の士人階級の言語をまとめたものである、また、編纂過程で音の正否を判断したのが南朝出身の顔之推と蕭該であったことの帰結として南朝の言語状況をより濃厚に反映する、という意見まで、様々であった。それに対して、本研究は北朝の言語文化状況を支配した「華化」メカニズムに照らして、当時の北朝が求めたのは、「華」の正統として自らを位置づけることであり、『切韻』はそれを直接的に反映しようとしたものである、という新たな視点を提示できる段階に達した。

北魏孝文帝が朝廷言語として漢語を採用したという史実も、「華化」の過程において言語の正統を手に入れようとした政策であった。北朝後に中国全土を統一した、自らの血統にやはり北辺の民、鮮卑の流れを汲む隋王朝にとって、その「華化」を完成させるためにも、前代までの伝統と古典を総括する「正統な言語」を獲得することが不可欠で、その機運の中、南北朝末期の最高の叡智によってまとめられた発音辞典『切韻』が世に問われた、と考えることができるのである。この考えは、「華化」の歴史の中で言語政策と言語自体の転変を考えようとする点で、従来の研究とは異なる新しい視点を有するものであろう。

また、新しい「正統」王朝を建てようとする時、言語の正統を摸索するのは、北朝に限らず、清朝も、中華民国も、そして域外では明治政府すらも実は同じであった。

ヌルハチの建てた後金が、漢族の明朝を倒して清朝を起こした当初、朝廷では民族の言語たる満語と漢語が併用されていたにもかかわらず、北京に入った満人は急速に満語を失い、流ちょうな漢語の話者として北京語の形成に一役買ったのであった。そして、清朝第二代雍正帝の時代には、滅ぼされた前王朝を護ろうとして最後まで抵抗した福建・広東など華南地域の諸方言話者に対して、「華」の立場から官話（マンダリン：規範的中国語）を強制する言語政策（正音学制）を採用したのであった。

これは、北朝の言語政策が自らを「華化」するため

のものであったことと比較すると、他を「華化」しようとした、という点で一見大きな違いを有するかのようであるが、実はこれこそが「華化」メカニズムなのである。本報告冒頭の、「華化」とは作用反作用を経つつ周縁における「華」のエリアを拡大することである、という定義を思いおこすなら、「シノライゼーション」が「シビライゼーション」と大きく異なるのは、まさにこの点なのであることが理解されよう。つまり、「非華」が「華」となり、「華」が「非華」となるという動きは、文明化の作用・反作用としてよりも、「正統」の伝播・交替・再生産のメカニズムとして捉えるべき問題であり、これが「華化：シノライゼーション」の重点である。

その考えを推し進めると、清初において、「華」つまり「正統」の地位についた清朝が他を「華化」しようというのは、北朝において行なわれた「華化」と類似の性格を有していることが理解されよう。これによって、新たな「華」のエリアが獲得されるのである。

こうした理論的枠組みのもとに、現在、中国における「華」の拡大に関する論考を準備中である。清初の「華化」は、一人中国境内に止まるのではなく、日本や琉球などの境外においても学術を理解する上でも、この「華化」とそれにまつわる「正統」の獲得という視点は有効な切り口を与えてくれる。今後の研究は、北朝学術の「華化」メカニズム解明によって得た視点で、これら境外の「華化」を総体的に分析する方向に進む予定である。

25 A02班・公募研究

元明代の散曲研究

研究代表者 金 文京

京都大学人文科学研究所 教授

【要旨】

- 1 本研究は中国古典詩歌の中で特殊な地位を占める元代（1260 - 1367）に流行した「散曲」およびその延長としての明代の「散曲」のテキスト解釈、

校訂について基礎的な作業を行い、さらにその社会背景を総合的に探究することを目的とする。なお散曲と同じ形式をもつ当時の演劇（「雜劇」）の歌詞の部分についても併せて検討を加える。

- 2 まず元代散曲のテキストを網羅的に集めた『全元散曲』をコンピューターに入力し、データベースとして使用できることを目指すとともに、それを利用しての語学的研究をおこなう。
- 3 古典詩およびおもに宋代（960 - 1279）に流行した韻文の一形式である「詞」など、他の形式の詩歌と「散曲」との関係性をさぐり、その時代、社会背景について研究する。

【位置付け】

中国古典文学の各時代における代表的ジャンル、およびその時代的変遷を言いあらわした表現として、よく「漢文・唐詩・宋词・元曲」ということが言われるが、その最後に位置する「元曲」は、中国文学史上最初の戯曲文学である元の「雜劇」とも密接に関係する特異な分野である。この戯曲文学としての「元曲」については、今世紀以来、中国の王国維、日本の青木正児、吉川幸次郎をはじめとする先学によってすでに多くの研究がなされて来たが、一方「元曲」のうち戯曲に関係しない歌謡としての「散曲」については、比較的研究がおくられており、特に日本では田中謙二氏の「元代散曲の研究」（『田中謙二著作集』第一巻 汲古書院平成十二年）をはじめとする一連の関連論文のほかは、ほとんど見るべき業績がなく、中国古典文学研究のうちもっともおくれた分野であると言っても過言ではない状況にある。

しかし「散曲」は、中国古典詩歌の発展史上、その最後の到達点を示すものであり、また古典詩歌と民間歌謡、民間芸能、小説などとの接点をなすその特異な性格は、文学史上重要な意味をもっているばかりでなく、その描かれた当時の社会の実態は、歴史研究にとっても貴重な資料たるを失わない。その本格的な研究は、日本における中国古典文学研究の再構築にとって、欠かすことのできない重要な課題であると考えられる。

このように重要なジャンルである「散曲」の研究をはばむ最大の要因は、当時の口語、俗語、流行語、隠語などを大量に用いたその言語表現にある。実際、「散曲」の多くの作品は、中国文学史上もっとも難解なものであると言ってよい。この障害を取り除くため、本研究は、元代の「散曲」およびその延長上にある明代の「散曲」について、まずその正確なテキストを校訂作成し、さらに元代のすべての「散曲」作品をデータ

ベース化することによって、研究のための基礎資料を提供するとともに、それを利用して、難解な語彙の意味をできるだけ解明し、あわせて古典詩詞との比較をおこなって、その文学的特性を解明することによって、「散曲」研究に新たな地平を切り開こうとするものである。

このような研究は、中国をふくむ諸外国においてもいまだ行われておらず、今後の研究のために多大の貢献をなしうるのである。本研究によって、「散曲」の文学的特性およびその時代的意義が少しでも明らかになれば、従来の中国文学史、なかんずく詩歌の発展史に、これまでとは異なる視点を提供することも可能となるであろう。

【研究成果】

この一年半の間に、以下のふたつの成果をあげることができた。

1 元代の「散曲」作品を網羅的に集めた『全元散曲』をすべてコンピューターに入力した。現在、これをデータベースとして使用できるようテキストの校訂および特殊文字の処置をおこなっているところである。なおこれと並行して、「散曲」中のいくつかの難解語彙についての検索調査をおこなっている。

2 論文「黄泉の宿 - 臨刑詩の系譜とその背景」を『興膳宏教授退官記念中国文学論集』（汲古書院 平成十二年三月）に発表した。この論文は、日本で最初の漢詩集である奈良時代の『懐風藻』にみえる大津皇子の詩「臨終一絶」とほぼ同じ内容の詩が、その後の中国および朝鮮の複数の人物の臨刑詩として十世紀から二十世紀にいたるまで、広く伝えられていることに着目して、その背景にある口承文学の伝統と、時代による詩の解釈の変遷を、「元曲」の一作品である「盆児鬼」の中に引用された同じ詩の使われ方を手がかりとして考察したもので、従来の比較文学研究あるいは元曲研究にはなかった新たな方法と視点を試みたものである。

『全元散曲』のコンピューター入力にともない、語彙の検索が自由にできるようになったことにより、これまで難解で意味の分からなかった多くの語彙について、それらを解釈する基礎的な条件が整ったといえる。今後はそれらを隣接ジャンルである元の「雑劇」、さらには小説やその他の同時代資料、特に口語語彙を多量にふくむ『元典章』などに見える語彙と比較対照することによって、正確な意味を解明し、作品理解を深め、さらにその時代背景を探ることを課題としたい。

2に挙げた論文については、これによって従来試み

られなかった古典詩と「元曲」との比較検討がおこなわれ、いわゆる古典詩の中に口承文学的な伝統がかなり強く存在することについてのひとつの実例を示すことができたと考える。これまで「散曲」をふくむ「元曲」は俗文学の一ジャンルとして、古典文学とは別途に研究される傾向が強く存在したが、実際には両者の間にはさまざまな連続性があり、その影響関係や共通の文学的、社会的背景が探究されるべきである。古典文学と俗文学という、現在学界に見られる二分法は止揚されることが望ましいであろう。そのためにも、この方法による研究は貴重であると考えられる。

今後、残された期間を利用して、ひとつには「散曲」の語彙面の研究をすすめ、主要作品の解釈、注釈のための一助とし、また「散曲」と他の古典文学との関係について、さらに新たな視点を模索してゆきたい。

26 A02班・公募研究

漢代における古典の成立と文学の変容

研究代表者 釜谷 武志
神戸大学文学部 教授

【要旨】

漢代は儒学古典の成立時期であると同時に、後の中国文学の特質の一つである典故の使用が初めてまとまって見られる時期である。

儒学古典の成立を承けて、前漢末の揚雄あたりから、文学作品の創作方法が変質し始め、過去の作品の模倣をふまえた上で独創性を打ち出すようになる。

先行作品の模倣という創作方法の確立が、後漢時期からの文学ジャンルと作品数の激増の主要な原因と考えられ、それが後の二千年になんなんとする中国古典文学の特質、たとえば典故の頻用などの方向付けをした。

【位置付け】

当該古典の文明中における位置付け：

儒学古典は、二千年以上にわたる伝統的な中国文明

のバックボーンたる儒学の精華である。また揚雄に代表される漢代の文学作品は、後の中国文学の基礎となるもので、常に回帰すべき規範として位置付けられてきた。中国文学の一大特徴である典故の使用は、ここにその原型を認めることができる。

当該古典の現代における価値：

礼や儀といったものが封建時代の残滓として否定的にとらえられてきたが、近年の社会風紀上の混乱を目にするにつけ、儒学の古典がもつプラスの側面を再検討する必要がある。古典の成立を承けて文学がどう変容したかを考察することは、今日において過去の文化遺産をどう継承していくかの指針となりうる。

【研究成果】

1年半の研究成果：

漢代は、古典というべき儒学の典籍が確立した時代である。それは前漢の武帝（在位前140～前87）の時代に、儒教が国教の地位を獲得したことにおいて象徴的にあらわれているが、より具体的には、儒学の経典である易・書・詩・礼・春秋を、専門に教授する五経博士の官が設置されたことがあげられる。こうした古典の確立によって、当時の文学は影響を受けたか否か、受けたとすれば、文学の創作はどのように変容したかについて、前漢後半から後漢の初めにかけての作品を対象に考察を加えた。

具体的には、前漢末から後漢にかけての時期の揚雄（前53～後18）を主な対象とした。揚雄は、言語・思想・文学の幅広い分野において業績を残した碩学であり、その文学作品であるいくつかの賦（たとえば「甘泉賦」「河東賦」等）には、『詩経』をはじめとする儒学の古典からの直接の引用が見られる。また揚雄の作品に使われている語の表記に注意してみると、故意に同音同義の別字を使用したり、先人の同類の作品とは表記が異なるように工夫していることが確認できる。このことは、揚雄における創作は才能のおもむくままに筆を走らせて書き上げるのではなく、先行する作品を丹念に検討した上で、その延長線上において作るものであったことを示している。

同時期の他の分野に目を転じてみると、儒学の古典からの引用は、皇帝の詔勅や臣下の上奏文にも見られ、時期的には文学作品よりもやや先行している。漢字そのものに対する鋭い関心は、漢代という時代を特徴づける風潮で、儒学古典の解釈学ならびに施注の盛行と密接な関係にあることが考えられる。すなわち、古典の成立とその解釈が、文学を含めた広い分野に影響を及ぼしていることが確認できるのである。

揚雄が先行作品の模倣の上に立って、独創性の創出に腐心していたことは、揚雄をめぐる様々な記述からも確かめられ、また当時宮中で秘蔵書籍の整理と校訂にたずさわっていた劉向父子と揚雄との交流からは、文学作品創作の根底に、書籍の整理、いわゆる目録学の存在があったことが理解できる。

先行作品の模倣という創作方法の確立は、後漢時期から文学ジャンルの種類と作品の総数が激増する現象を説明する上で、大きな意味をもつであろう。従来こうした現象の説明として、後漢における紙の発明とその普及が指摘されていたが、紙の普及がかかる現象を大いに加速したことは事実であるにしても、紙の発明以前からこうした現象が見られていたことを考えると、上のような創作方法の確立が、むしろ有力な原因の一つとして上がってこよう。

また、書物の整理、図書の分類は、儒学古典の成立と不可分の関係にあり、漢代から増え始める『史記』太史公自序などの「序」が、歴史的視点から書物の特質を記述していることとも共通する。これらの中に、文学史観が萌芽的形態で見られることから、文学史観の形成には、儒学古典の成立とさらには過去の作品の模倣を含む創作法の確立が指摘できよう。

以上のような研究成果を、平成12年7月のシンポジウム「文化的制度としての中国古典」で報告して、会場での議論をふまえて加筆訂正を施し、当該会議論文集に掲載する予定である。また、文学史観を中心とした問題については、「中国における文学史観の誕生」（『神戸大学文学部紀要』27号）と題する論文にまとめた。

当該研究によって明らかになったこと：

前漢文学と後漢文学との性質の違いについては、従来から指摘されていたが、その理由についてはあまり詳細には検討されていなかった。本研究では、両時期にまたがる文人である揚雄の作品に即して詳しく検討を加えた結果、前漢中期の儒学古典の成立が、主要な原因の一つであることを明らかにした。

儒学古典の成立が、文人の思考方法はもとより、文章制作法にも影響を及ぼして、文学作品の創作法に改変をもたらしたこと、そしてかかる創作法が後漢以来の文学ジャンルと作品総数との激増の要因となったことを提示した。

漢代から増加する書物や作品に冠せられた「序」に、文学史観が見られること、文学史観の形成と古典の成立、過去の作品の模倣に基づく文学作品創作法の確立との間に密接な関係があることを明らかにした。

採用した新方法、新視点など：

文学作品の内容だけでなく、そこに引用されている古典の表現に着目して、作品が書かれる過程、作品が読まれる形態、とりわけどのようにして創作するかという形成過程に焦点をしばったこと。

書物や作品の「序」に注目して、書物の整理や文学史観といった背景の中で作品をとらえたこと。

ブラーフマナ研究

ヴェーダ散文献の翻訳と注解

研究代表者 後藤 敏文
東北大学文学部 教授

【要旨】

紀元前2000年期から仏教興起に先立つ時代にかけて成立したヴェーダ文献はインド世界の理解においても、インドヨーロッパ語族の言語文化の理解においても、出発点となる重要性を持つ。また、文献に跡付けられる資料としての人類史上の価値も大きい。その総合的解明へ向けての前提条件が漸く揃いつつある今、重要部分を選び、文法・語彙・祭式・宗教・思想・社会・当時の科学等、多面的な注記を付して翻訳を提供する。原稿は概ね揃いつつあり、今後出版に向けて調整、増補に努める。

【位置付け】

「ヴェーダ」は紀元前二千年期の後半から仏陀の出現に先立つ時代に懸けて順次製作・編集された、古インドアーリヤ語の古層（所謂ヴェーダ語）で書かれた宗教文献群の総称である。その中、祭式をめぐる議論は紀元前800年頃にまで遡ると推定され、以後200 - 300年の間に、各学派の「ブラーフマナ」として集成された。比較的良く知られているウパニシャッドはこれを引き継いで成立した文献である。言語の点ではインドヨーロッパ語の純度の高い散文としては最古の形を示し、ギリシャのホメロスの叙事詩がほぼ同時代の韻文であることを考えてもその重要性が理解できる。後

の叙事詩・古典サンスクリットや、パーリ語をはじめとする中期インド語の展開を理解する上でも基本的意義を持つ。内容は儀礼に用いられる讃歌・祭詞と祭式行作の意義付けをめぐる思弁を中心としつつ、世界の創生・構成・生命の発生と循環、日・月・季節・年ごとの儀礼の根拠、社会構成の原理と掟、生物の分類、言語の分析などに互って、当時の「世界理解の学」が背景に総動員されている。ウパニシャッドの思想を経て、仏教・ジャイナ教を始めとする非伝統的思想、ならびに、後のヒンドゥー正統哲学の基本的枠組み用意されたのもこの文献群においてであった。特に輪廻と業の理論の成立は決定的意味を持つ。従来、仏教興起以降のインド思想史については研究が積み重ねられてきたが、その源となったブラーフマナ文献の研究は一部の専門家の間のみ受け継がれてきたといえてよい。また、一見良く知られているように見えるウパニシャッドの理解も、それに先立つ祭式文献の文脈中で見直すと、皮相な段階に止まっていたと言わざるをえない。こうした婆羅門教正統思想を前提として、これを乗り越えるべく現れた仏教や、更にこれに対抗して整備されたヒンドゥー正統思想を含む、いわゆるインド哲学の理解にも基本的反省を促すものとなることを確信している。

150年以上に互る言語・祭式を中心とした原典研究の地道な積み重ねは、漸くこれら文献群の統合的解明を可能にする前提条件を満たしつつある。今回、この文献群から代表的な、比較的纏まった部分を選び、文法・祭式・宗教・民族・生産等の各分野に互る詳細な注記を施して、翻訳を提供する。内容的には今日盛んなフィールドからの文化人類学的諸研究と照合できる点が多々あり、古い文献に実際記録されている事柄がその歴史的展開が迎れる形で提供されることの意義は大きい。また、近づきにくかった当分野の研究を志す人にとっては始めて入門のための手引きが与えられることになる。古代から古典期へ懸けてのインド研究が将来の地球規模での人類史・世界史の理解の中に位置づけられることへと向けて、些かの貢献を為せるものと期待している。

【研究成果】

これまでに10箇所ほどについて原稿を推敲し、完成している。この過程で協力してもらった学生達や同僚との意見交換から、始めの計画より詳細・多面的な注記を付すことが目的に適切であることが分かり、目下採用する題材の絞込みと注記の取捨選択、翻訳スタイルの統一に取り掛かっている。本年の残りの期間はこ

れに専念できるので、年末までに約300 400頁分の完成原稿が出来上がる予定である。貴重な機会なのでできるだけ有意義な形で出版を目指したく、来年も引き続き手直しと、必要に応じて題材を補い、更に語彙と文法・シンタクスに関する章を新たに書き加える予定である。

これまでの作業によって明らかになった事項は多岐にわたるが、文法・シンタクス等に関する個々の成果の一部は既に論文によって発表済み、または印刷中である。テキストの正確な理解を提出することができるが、更に、牧畜・焼畑・乳加工等の実態に関しても具体的な諸点が明らかになりつつある。「ブラーフマナ」において達成された思想の中核は「祭式と布施の効果」をめぐる思弁にあると考えられ、これが業（カルマン）に置き換えられ、さらには仏教、インド正統思想、特に祭事学派的「新得力」へと展開してゆく過程については略そ概略が見通せるようになってきた。古代世界の理解には当時の祭事暦、農耕牧畜暦の把握が欠かせないが、祭式の準備過程としての「誓戒」を中心にその端緒だけでも示せるところまできている。

方法論的には綿密は原典・原文の理解の追求が中心であり、これまでの研究史の蓄積に立ってこの文献学的正統的手続を更に推し進めることによって、未だ見えなかったことが見えるようになるという事実を示しうると自負している。これまでのこの方面での方法論的には綿密は原典・原文の理解の追求が中心であり、これまでの研究史の蓄積に立ってこの文献学的正統的手続を更に推し進めることによって、未だ見えなかったことが見えるようになるという事実を示しうると自負している。これまでのこの方面での成果と比べて特に強調すべき点としては、インドヨーロッパ語比較言語学の訓練がバックボーンとなっていることであろう。これは本研究者の学的背景に負う。この研究から得られた内容に関わる諸成果は世界の各地各時代の報告と照らし合わせることによって、インド世界の理解においても、より広い東西古今の古典、さらには人類学的文脈でも有意義な位置づけがなされるよう、提示の方法と注記とに努めている。

法称の推論説とその展開

研究代表者 岩田 孝
早稲田大学文学部 教授

分担者 桂 紹隆
広島大学文学部 教授

【要旨】

仏教論理学における古典とされる書物。印度論理学が形式論理学と異なる点は、实例により推論を行う所にある。

古典を整合性から捉える法称（七世紀前半）の姿勢は、現代人に古典の読み方の一つを示す。

研究成果

- (a) 法称の『知識論決択』の他者の為の推論の定義を文献学的に解説（独語訳注）
- (b) 推論の成立の主要な条件である論証因と所証との関係を、「疑い」の視点を含めて分類、これは陳那説にない法称の独自の視点。
- (c) 实例に依る推論の限界。法称の疑似論証因の記述に、实例に依らない推論の可能性が示唆される。
- (d) 法称による世尊の公準たることの証明、それに対する註釈者の哲学的な解釈の特色を分析。
- (e) サハジャヴァジュラ（十一世紀）の哲学綱要書の写本解説。

【位置付け】

印度における多種多様な思想の歴史は、論難の歴史でもある。各学派は、他学派との論難を契機として、自説を形成して行ったからである。論難においては、如何にして自らの主張命題を他者に認知させるかが問題となり、その為には論拠となる論証因を述べなければならない。陳那（六世紀前半）は、主著『知識論集成』において、他者に対して論証因を顯示することを他者の為の推論と定義し、推論に必要な諸項目を規定した。その後、法称（七世紀前半）は、主著『知識論決択』において、陳那の論理学の基礎づけを行った。両者の著作が、仏教論理学において古典と見なされている。他者の為の推論における基本的思考は、まず、

主題と証明されるべき事柄とからなる主張命題を挙げ、その論拠として論証因を述べ、論証因が所証を導くことを具体的な事例を挙げて示す、という過程から成り立っている。これを、概念的に、主題 - 論証因 - 所証という概念の大小関係で捉えると、形式論理学での三段論法と類似するように見える。しかし、印度論理学には、概念関係のみで割り切れない部分があり、印度論理学と形式論理学との同異を明確にすることが、最近の重要なテーマの一つとなっている。形式論理学との相違を示す最も顕著な点は、仏教論理学には、推論の成立を実例によって帰納的に示す、という発想方法が残されていることである。今回の研究では、法称の仏教論理学において、この帰納的な発想を超える得ることを示唆する典拠を取りあげ、その部分の解説と分析を行った（当該古典の文明中における位置付け）。

古典とされる書物にも、思想全体の発展からみると、自他の学派から批判される問題点が含まれるものであるが、印度においては、古典に対する信により、無理な解釈を用いて自派の古典を擁護する場合も少なくない。しかし、何が客観的に妥当なのかを問題にする状況では自派の身勝手な解釈の入る余地はない。法称は、将にこの姿勢をもって、陳那説を解釈している。即ち、古典として権威のある陳那説であろうとも、整合性のない場合には、これを躊躇することなく批判している。古典と見なされる書物のなかに、既にこうした整合性を優先する論述があることは、現代において我々が古典を如何に理解するのかという問題について、改めて考える契機を提示している（当該古典の現代における意義）。

【研究成果】

（a）法称の推論説を分析する為の第一段階として、仏教論理学での他者の為の推論の定義を考察した。他者の為の推論とは、自らの主張命題を他者にも理解させる為に、主張命題の論拠となる「対象（論証因）を顯示すること」である。本研究では、『知識論決択』の当該箇所を文献学的に解説し、他者の為の推論を規定する「対象（論証因）の顯示」という用語の意味を解析した。論証因が「（実際に存在する）対象」とあるという規定は、立論者の勝手な思い込みによる論証因や、特定の学派の伝承教説を拠り所にした論証因を排除する為にある。「（論証因を）顯示する」という規定は、論証因こそが帰結を導く証明の要因であり、それ以外の主張命題などは証明の要因ではないことを示す為にある。これは、論証の成立の為の最低限度必要な要因は何かという問題に対する答えである。この解

読結果を、『知識論決択』の独語訳研究の一部として、Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens (Band 43, 1999, pp. 213 - 230) に発表した。また、この部分の和訳研究では、仏教論理学の印度論理学における歴史的な位置付けを説明しつつ、難解な用語の解説を付した（『東洋の思想と宗教』17, 早稲田大学東洋哲学会, 2000, pp. 1 - 17等に発表）。

（b）法称は、独自の論理系を導入して、陳那の論理学を説明しつつ、自らの論理系が、陳那のそれと矛盾しないことを多くの箇所を示している。本研究では、法称の論理系が陳那の独創である九句因説と矛盾しないことを論じた『知識論決択』の箇所を分析した。その結果、陳那には見られない法称の視点が浮き彫りになった。陳那は、推論の成否の拠り所となる論証因と所証との関係は、論証因が正論証因であろうと疑似論証因であろうと、常に「確定される」ものと見なしたが、法称は、その論証因と所証との関係には、確定できない場合も有るとし、「疑い」の視点から、論証因と所証との関係を新たに考察している。この疑いの概念の導入により、他者が日常的に認識できない不確定な事柄を証明する場合（例えば常住不変なる実体としての実我などの存在を証明しようとする場合に）これを批判することが可能になる。以上については、今年度カナダのモントリオールで開催された国際アジア・北アフリカ研究会議でのパネル「古典印度の論理学推論と存在論」において、The purpose of the division of the reasons into nine types in the Hetucakra in the Pramāṇaviniścaya と題して発表した。

（c）論証因と所証との論理的関係を確定する為に、印度の論理学では実例が不可欠である。しかし、実例に基づく論証の場合には例えば次のような不合理が生じる。「声は常住（或いは無常）である、聞かれるものであるから」という論証の場合、「聞かれるものが常住（無常）である」ことを示す実例が必要であるが、この実例がない。即ち、実例とは、声と似たものであるから、声以外のものである、ところが、聞かれるものは声のみなので、声以外で聞かれるものという実例がない。従って、「聞かれるものだから」という論証因は、実例を欠くというだけで、疑似的論証因とされることになる。その理由は、論証因が声なる主題のみに所属する点にある、つまり、主題と論証因とが同じ外延を有する点にある、というのである。形式論理の場合には、両者が同じ外延を有していても問題は生じないが、仏教論理学では、上記の不合理が生じる。これは、実例に基づく印度論理学の限界を示している。しかし法称の『知識論決択』での疑似論証因の論述を

調べてみると、その中には、この種の論証因の欠陥の理由が、主題にのみ所属する点にある、とは見なさない考え方もあることが判明した。これは、実例に依らずに、論証因の成否を検討するという見方の萌芽を示唆している。この分析の結果を、昨年のスイスのローザンヌにおける国際仏教学会のパネル「印度論理学」にて、The negative concomitance (vyatireka) in the case of inconclusive (anaikāntika) reasons と題して発表した。

(d) 上記の他者の為の推論の文献学的解読研究は、仏教論理学の基礎論の研究である。以下の研究は、その応用部分に相当する。ものごとの認識を成立させる根拠を定め、その根拠に基づいて、何が妥当なものとして残るかをラディカルに追求した法称は、世尊自身についても、何ゆえに人々にとって信頼される拠り所としての公準(量)になるのかを問題にし、これの証明を試みた。本研究では、この証明に関するプラジュニャーカラグプタ(八世紀後半)の解釈を分析し、世尊の量性の証明が、世俗の上での証明と、勝義上での証明に分類されることなどの特徴を指摘した。(「世尊は如何にして公準となったのか」『駒沢短期大学 仏教論集』6, 2000, 掲載予定。)

(e) 密教の学匠で十一世紀に活躍したサハジャヴァジュラの哲学綱要書『定説集成』の梵文写本の唯識説の一部を解読した。後期大乘仏教の教理の形成の基礎となった仏教の認識論的及び論理学的思考を抽出した。(『定説集成』(Sthitisamuccaya)和訳研究(2), 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』45, 1, 2000, pp. 13-26 掲載。)

(岩田 孝)

【要旨】

本研究が主として対象とする古典文献は、ディグナーガの『プラマーナ・サムッチャヤ(集量論)自注』とダルマキールティの『プラマーナ・ヴァールツェティカ(量評釈)自注』である。

前者に関しては、主として本文解釈に従事し、1999年8月スイスのローザンヌ大学で開催された国際佛教学会において「ディグナーガ論理学における喩例の役割」というタイトルで研究発表した。さらに、2000年8月モンリオールで開催された国際会議(ICANAS)において「インド論理学の性格：演繹、帰納、アブダクション」というタイトルで研究発表を行った。

後者に関しては、カルナカゴーミンの復注を含めた和訳研究を進行中である。

新しい視点としては、西洋における「レトリック」の伝統との比較を行いつつある。

【位置付け】

本研究が主として対象とする古典文献は、ディグナーガ(480-530年頃)の『プラマーナ・サムッチャヤ(集量論)自注』とダルマキールティ(600-660年頃)の『プラマーナ・ヴァールツェティカ(量評釈)自注』である。

ディグナーガは、インド論理学に新しいモデルを提供した仏教論理学者であり、ダルマキールティはその最大の後継者である。紀元後5世紀以降、インドの哲学思想は一種の「論理主義」の時代を迎え、パラモン教系の諸哲学派も仏教・ジャイナ教などの沙門系の諸派も多数の論理学者を輩出する。ディグナーガとダルマキールティは、ヴァスバンドゥ(400-480頃)とならんで当時の仏教を代表する哲学者・論理学者である。

インドにおいては古くから討論の伝統があり、その勝敗を決定するための規則集とも言うべきマニュアルも多数作成された。一方、確実な認識手段は何かを追求する認識論の伝統も古くから見いだされる。この二つの伝統を体系的にまとめ上げ、「認識論的論理学」を確立したのがディグナーガである。彼があらゆる形而上学的前提から比較的自由的な、したがっていかなる哲学派にも受け入れ可能な論理学を樹立しようとしたのに対して、ダルマキールティは仏教哲学の立場に立った「仏教論理学」を構築しようとした点に大きな特色がある。

両者の著作は、インドにおける合理的思弁の発展の歴史を知るための貴重な資料を提供するものであり、仏教論理学の代表的な文献である。

1970年代以降、「レトリック」の新しい価値が見直されつつある現代において、インドの問答法や論理学の実際を広く紹介することは、21世紀におけるグローバルな「説得の論理」を構築するための重要な資料を提供するものである。

【研究成果】

『プラマーナ・サムッチャヤ自注』の文献学的研究は、北川秀則・服部正明両氏によって始められ、ディグナーガの自説を扱う部分に関しては、ほぼ30年以前にはほぼ完了していると言える。目下は新出資料によって、その全面的見直しが行われつつある時期である。したがって、新たな批判的校訂本が完成されるまでは、本文批評よりも、本文解釈に重点をおいた研究を行ってきた。

特に、『プラマーナ・サムツチャヤ自注』第4章に提示される、論証式中の「喩例」に関するディグナーガの見解を整理して、1999年8月スイスのローザンヌ大学で開催された第12回国際佛教学会において「インド論理学における 喩例 の役割」というパネルで研究発表した。その要旨は以下の通りである。

- (1) ディグナーガは「ドリシュタータ」という語を二つの意味で用いている。すなわち、実例となる対象そのものと、論証式中で実例を含む一般的な法則を表示する喩例の言明とである。
- (2) 実例と喩例の言明は、それぞれ2種であり、肯定的実例は 論証されるべき属性 と 論証する属性 とが共存する対象であり、否定的実例は両者がともに存在しない対象である。肯定的喩例は 論証する属性 の 論証されるべき属性 による肯定的随伴関係 (anvaya) を、否定的喩例は 論証されるべき属性 の 論証する属性 による否定的随伴 (vyatireka) を表示する。
- (3) 肯定的喩例と否定的喩例は論理的に等価である。したがって、両者を同時に提示する必要はないにもかかわらず、ディグナーガは「両喩並記」を主張する。それは、彼の論理学の「帰納法」的正確を示すものである。
- (4) ディグナーガは、論証式、特に喩例の言明が適切に提示されるべきことを主張し、他学派の不適切な定式化を批判した。
- (5) ディグナーガの論理学における 喩例 の役割は、 論証する属性 と 論証される属性 とのあいだの「不可離の関係」あるいは「遍充関係」を提示することにあつた。遍充関係を推理・論証の基盤においたのは、ディグナーガが最初であり、これこそ彼のインド論理学に対する最大の貢献であつた。

さらに、2000年8月モンリオールで開催されたアジア・北アフリカ研究国際会議 (ICANAS) における「インド論理学」に関するパネルで「インド論理学の性格：演繹、帰納、アブダクション」というタイトルで研究発表を行った。その要旨は、以下の通りである。

- (1) 最初期の5支からなるインドの論証形式は、討論の伝統を色濃く反映しており、トゥールミンの実質的論証のモデルと対比されるべきである。また、「常識への訴え」が論証の基盤となっている。
- (2) ディグナーガ以前のインド論理学は、「類推」による帰納的論証である。
- (3) ディグナーガの論理学は、未だ帰納法的性格を色濃く持っているが、彼自身「帰納法の問題」を良く自覚している。彼の提示する一般的法則の仮説的性格

に着目すると、パースの提唱した「アブダクション」(仮説による証明)がディグナーガの論理学に対応する可能性がある。

- (4) ダルマキールティは、ディグナーガの仮説的論証に異議を唱えた。彼が推理・論証の根拠として「本質的結合関係」を提唱したことは、彼の論理学の性格を帰納法から演繹法へと転換する契機となった。

次に、ダルマキールティの『プラマーナ・ヴァールツティカ自注』に関しては、やはり30年以前にイタリアのニョーリ、インドのマルヴァニア両氏によって校訂出版されている。また、カルナカゴーミンによる復注もつとにサーンクリティヤヤナ氏によって出版されている。近年、その写本の複製版が出版された。目下、これらの資料やシャーキャブッディのチベット語訳にのみ残された復注などを丹念に参照しながら、『プラマーナ・ヴァールツティカ自注』およびカルナカゴーミンの復注の和訳を行いつつある。その成果は、上記の発表にも反映されている。

この間に獲得した新しい視点として、1970年代以降盛んになってきた「新しいレトリック」の考え方がある。2000年8月はじめ東京で開催された第1回国際議論学会において「インドにおける討論の伝統」という題で基調講演を行ったが、その際世界各地から集まったレトリックや非形式論理学者たちとはじめて接触した。そして、インドにおける論理学の性格を考えると、トゥールミンの強い影響を受けているこの新しい動きが重要なカギを握っていることを実感した。その後、出席したモンリオールのパネルで少数であるが同様の感想を他のインド論理学研究者が共有していることを発見した。今後は、西洋におけるレトリックや弁論術の伝統と対比しながら、インド論理学の性格を考察し、その結果を西洋や中国の古典研究者に紹介して、果たして、グローバルな対話は可能であるかどうか追求していきたい。

(桂 紹隆)

古典インドにおける聖典解釈技術法の基礎的研究

研究代表者 吉水 清孝

北海道大学文学部 助教授

【要旨】

- ① 聖典解釈学の起源は祭式文献ヴェーダの天啓聖典化と文献での規定方法への関心。
- ② クマーリラによる聖典解釈学派の総合的哲学学派への革新と後代からの評価。
- ③ 『原理の評釈』第2巻の主題：「行為規定の弁別基準」。第2章から本論。
- ④ 第2巻第2章のデータベース化，India Office 写本の異読入力，科段式梗概作成。
- ⑤ 第2巻第2章に見られる聖典論の二面性：ヴェーダの文の分析から，果報を求めて祭式を行う現場での個人の行為の分析へ（個人中心の側面）。及びヴェーダの中心部分から周縁部分への「規定作用の転移」による階層的啓示（聖典中心の側面）。
- ⑥ 普遍的規範と人間個人との関係の面でのアリストテレス思想との近似。

【位置付け】

本研究がその一部を研究対象とする『原理の評釈』は、インドの聖典解釈学派（ミーマーンサー学派）の代表的思想家であるクマーリラによる大部の主著である。インド・アーリア人たちが生み出した古代の祭式文献ヴェーダは、祭官階級であったパラモンたちによって口伝で忠実に伝承された。パラモンたちの間では幾世代にも渡る伝承の過程で、ヴェーダは過去の人間が作り出したものではない天啓聖典であるとの信念が広まり、ヴェーダの言葉自体への言語学的関心から文法学が、「祭式をヴェーダがいかに規定しているのか」というテキストの対象への関わり方への関心から聖典解釈学（ミーマーンサー）が生まれた。後に仏教などの個人の理性的判断を重視する宗教が社会で有力者の庇護を得、更に一般民衆の間に人格神崇拜を中心とするヒンドゥー教が広まっていく。仏教は人間個人の認

識能力をヴェーダ聖典の権威に従属させる聖典解釈学を批判しつつ、独自の聖典論を生み出し、ヒンドゥー教神学者はヴェーダを太古における人格神からの啓示とみなして、ヴェーダ聖典解釈学の解釈規則を応用して神学の体系を築いた。またインド社会を統治するための様々な法典が作られた後、法学者たちはヴェーダを法源として尊重しつつ、聖典解釈学で整備された解釈規則に準拠しながら合理的な法体系の構築に努めた。また華やかな宮廷で活躍した宮廷詩人たちが文芸理論書を書く際にも、聖典解釈学派で発達した、比喩や含意や暗示などの言葉の重層的な機能の理論に依拠した。

このように聖典解釈学派はインド古典文化の幅広い分野に強い影響力をもっているが、6世紀末から7世紀初頭にかけて活動したクマーリラは学派の最も独創的な思想家であり、後代には聖典解釈学派以外の諸分野においても、理論的思想家のうちで最も注目すべき人物として認知された。クマーリラはヴェーダの解釈規則の整備という学派固有の分野で伝統的理論を革新したのみならず、認識論や論理学、さらに一般言語理論の分野でも、それまでの様々な哲学学派の理論を総合し独自の体系を構築したからである。インド思想史上でクマーリラが果たした役割は、古代ギリシャにおけるアリストテレスのそれに比することができる。しかもクマーリラには、事物の何であるかを決定する「形相」をプラトンのように天上界に独存しているアイデアとせず、現実世界内の個物に内在して発現してくる本質とみなすアリストテレスに近い思想傾向が見出せることが、本研究によって明らかになりつつある。

【研究成果】

この一年半の間に研究経過の報告を二度行った。2月19日の「本文批評と解釈」班の第1回調整班会議（東京・学士会館分館）と7月29日の北海道印度哲学仏教学会第16回学術大会（札幌大谷短期大学）においてである。また本年10月に刊行予定の論文集 The Way to Liberation（南アジア学会英文モノグラフ）に寄稿した論文“Change of View on apuurva from; Sabaravaamin to Kumaarila”は、『原理の評釈』の第2巻第2章を対象とする本研究のための準備的研究として本研究より先に着手した、同書第2巻第1章の研究成果であるが、この論文の中に本研究を通じて得られた知見を盛り込むことができた。論文のレビューを受け、本研究の成果報告執筆に生かすことにしたい。

『原理の評釈』全三巻（全15章）のうち第1巻は、ヴェーダ文献の文章のタイプを三種に分類し、そのうちの一つである規定文（儀礼規範の規定）に他の全て

の規範テキストが従属することを詳論する。第3巻は、ヴェーダ内の諸規定文が相互に形成する階層的関係の解釈技法の解明である。宗教行事における個々の儀礼相互の関係を確定する以前に、まず錯綜したヴェーダのテキストの中から個々の行為規定を弁別しなければならない。この弁別基準を検討するのが本書第2巻である。このため本書第1巻を「総論篇」、第2巻を「中核篇」、第3巻を「応用篇」とみなすことができる。第2巻のうちでも第1章は序論に過ぎず、本研究が対象とする第2巻第2章こそが第2巻の本論部分であり、「行為規定の弁別基準」のうちの主要なものを検討している。

クマーリラのもう一つの著作『韻文による評釈』については、この書が当時の諸学派に共通のテーマであった認識論や論理学さらに言語理論を主に扱っているため、他学派の研究論文の中で取り上げられ、かなり解明が進んでいる。しかし聖典解釈学の本領を発揮している『原理の評釈』に関しては、祭式の複雑な規定を問題としており、しかも刊本の校訂に不備が多いため、従来はほとんど等閑に付されていた。このため『原理の評釈』の現行の刊本では用いられていない Oriental and India Office Collections, British Library 所蔵の『原理の評釈』本文の写本マイクロフィルムを収集した。さらに北海道大学大学院生に謝金により協力を求め、『原理の評釈』刊本の第2巻第2章部分のテキスト・データベースを作成させ、研究代表者がそれを校閲し、British Library 写本の異読箇所を追加した。この結果、Ānandāśrama 叢書版で約140頁ほどの刊本の分量のうちに、綴りの類似による単語の誤記や否定辞の脱落などの校訂上の不備が相当数見つかった。

さらに研究代表者は、『原理の評釈』第2巻第2章の骨組みを呈示するための科段式の詳細な内容梗概を作成した。現在写本を再読しつつ、この内容梗概に更に改良を加えている段階であり、次のようなクマーリラの聖典観が明らかになりつつある。

クマーリラ以前の聖典解釈学派では、天啓聖典とみなされたヴェーダの中で各祭式の章の中心となる規定文（教令）は、果報を得るにはその祭式独自の類型（apūrva）に忠実に祭式を遂行するよう、教令を学んだ人間個人に働きかけるとされていた。クマーリラは、“apūrva”の意味を、祭式の実行により個人の自我に蓄積されていく、将来の果報獲得のための潜在的形能力に転換した。そして啓示を受ける個人の立場に立って、第2巻第2章での問題関心を、各祭式での行為理念の規範であるヴェーダの文の分析から、果報を求め

て祭式を行う現場での個人の行為へと方向転換していった。

しかし他方では、同じ第2巻第2章で説かれた「教令の規定作用が転移する」という発想に、聖典は個人に先立つという学派の伝統的思想が窺われる。教令の中の動詞語尾が、まず聞き手に「現実化の働きを発動すべし」との抽象的な命令を発し、教令の動詞語根部分の働きにより、その命令が具体的な行為へ転移し、教令以外の規定文における諸々の単語の働きにより、それがさらに行為成立のための諸要因の取り扱いへと転移していくと言う。第二段階の転移が完了すると、教令を中核とした諸々の規定文が序列化され、文相互の階層的連関によるヴェーダの自律的な啓示が完成する。

このようにクマーリラの聖典解釈論においては、聖典解釈のための立脚点が個人と聖典とに二極化している。しかしクマーリラはこれら二極を相互に疎遠なものとは考えていない。普遍的妥当性をもつヴェーダ聖典の分析を現実世界で人間個人が聖典に従って行為する現場での行為形式に沿って行い、しかも人間個人を普遍的な規範体系のもとで行為する主体と捉えている。クマーリラの聖典論のこの両面性に、普遍を認識するのに個体から離れて普遍それ自体を捉えようとせず、しかも個体を普遍の体現者とみなすアリストテレスの思想との近似性を読み取ることができる。

30 A02班・公募研究

北西セム語碑文資料に基づくヘブライ語聖書本文批評研究

研究代表者 月本 昭男
立教大学コミュニティ福祉学部 教授

【要旨】

- 1) 本研究の目的：北西セム語碑文資料に基づく旧約聖書聖書の本文批評研究。
- 2) 位置付け：旧約聖書はユダヤ教ならびにキリスト教の正典の一部をなすだけでなく、人類の古典として読み継がれ、現代思想の淵源としての役割を

果たしている。

- 3) 研究成果：過去1年半の間に、当該研究に基づく成果として単著1点並びに学術論文3点を公刊した。
- 4) 旧約聖書本文批評に関わる聖書外文書の資料化は進行中である。

【位置付け】

1) 旧約聖書の古典としての意義。

紀元前のユダヤで成立した旧約聖書(ヘブライ語聖書)はユダヤ教の思想的核心をなすヘブライズムの原点であるに留まらず、後のキリスト教を生み出す宗教・思想的土壌を形成し、さらにはイスラム教に大きな影響を及ぼした。欧米キリスト教圏における旧約聖書研究は主としてキリスト教神学の一分野として展開されてきたが、いまや、文書として残された人類の精神的遺産、すなわち世界の古典として研究されるべきである。日本における旧約聖書研究は、その点で、キリスト教神学の枠組みにとらわれずに遂行しうる利点をもつ。

2) 旧約聖書の現代的意義。

旧約聖書の現代的意義は、この書物がキリスト教圏において新約聖書と並ぶ正典として読み継がれていることに加え、それがユダヤ・キリスト教的世界観・人間観・歴史観の源として再解釈され、そこから様々な思想が再構築され続けていることにある。

【研究成果】

北西セム語碑文資料に基づく旧約聖書聖書の本文批評研究を目指す本研究は、具体的には以下①～④の実施を掲げている。

- ①北西セム語碑文の蒐集とその資料化。
- ②シリア・パレスティナ出土のアッカド語文献の資料化。
- ③死海文書中の旧約聖書写本の資料化。
- ④旧約聖書の学問的翻訳事業。

1) 過去一年半に公刊した研究成果は以下の通りである。

- a) 単著『エゼキエル書』(岩波書店)1999年12月刊
概要：「エゼキエル書」原典の翻訳に脚注を付し、解説を加える。
- b) “By the Hand of Madi-Dagan, the Scribe and Apkallu-Priest” -A Medical Text from the Middle Euphrates Region-” in K. Watanabe, ed.,

Priests and Officials in the Ancient Near East, Heidelberg: C. Winter, 1999, 187-200

概要：前1300年頃のシリア出土のアッカド語医学文書の解読と解説。

- c) “Mittelassyrische Texte zum Anbau von Gewürzpflanzen” in B. Böck et al., eds., *Munuscula Mesopotamica*. FS Johannes Renger, Münster: Ugarit-Verlag, 1999, 427-443 (mit W. Röellig)

梗概：紀元前1100年ころのシリア出土の複数のアッシリア文書の解読と解説。

- d) 「旧約聖書の日本語訳」 鈴木範久監修, 月本昭男・佐藤研編集『日本人と聖書』(大明堂)2000年3月刊所収
梗概：最新の邦訳聖書『新共同訳聖書』の旧約聖書部分の批判的検討。

2) これらの研究によって以下の点が明らかにされた。

- a) 旧約聖書の思想的独自性は古代西アジアの宗教文化史的背景に照らしてはじめて明らかにされること。
- b) 旧約聖書本文は未解決部分が少なくないが、とくに「エゼキエル書」のようなバビロニア捕囚期の文書の場合、アッカド語の援用が必要なこと。
- c) 従来の邦訳聖書は再検討されねばならない重要な箇所が少なくないこと。

3) 本研究で採用した新たな方法として、とくに上記2)- a) 及び b) と関連して、同時代のアッカド語文書と旧約聖書本文との比較検討を行った。

4) シリア・パレスティナ出土のアッカド語文献、北西セム語碑文、死海文書中の旧約聖書写本などの資料化のための文献資料は基本的なものを蒐集し終えた。目下、大学院生の強力を得て、データベース化に取り組んでいる。

古典文献の計量的分析

研究代表者 村上 征勝
統計数理研究所 教授

分担者 古瀬 順一
宮崎大学教育学部 教授

【要旨】

文章の数量的性質の分析による新たな古典研究の方法の確立を目指し、以下のような研究を行った。

- ①『源氏物語』に関しては、
 - 物語における地の文と会話文の文体の差異の確認
 - 複数作家説が生じる原因の探求
 - 54巻の成立過程に関する仮説の提案
- ②計量的文献比較法に関しては
 - 『うつほ物語』のデータベース作成
 - 『うつほ物語』と『源氏物語』の文章の計量的観点からの比較と問題点の検討
- ③『法華経』に関しては
 - 『八千頌般若経』、『十地経』との文章の計量的比較による成立過程の解明
- ④西鶴作品に関しては
 - 『好色一代女』、『諸艶大鑑』、『椀久一世の物語』、『好色五人女』、『好色一代男』の5作品のデータベース作成
 - 作成したデータベースに基づく、語彙索引の出版

【位置付け】

古典学研究のための、コンピューターを利用した新たな研究法の確立が本研究の目的である。

コンピューターに入力した古典テキストの文章の数量的特質（文長、品詞の出現頻度、単語の出現頻度）の計量分析を中心に、従来の古典学の研究方法とは異なる切り口で古典を分析する方法を確立し、古典学研究の新しい分野を開拓することを試みる。

古典に関する研究を進める上で、語彙、構文、文法、音韻に関する情報の分析は基本的かつ重要な意味を持

つ。しかし、これまでこのような情報の分析を計量的な観点から行った研究は少ない。本研究では、古典に関する具体的問題の解決を通じて、古典研究における語彙、構文、文法、音韻等の計量的分析の有効性を示す。そのため、下記の文献

- 『源氏物語』及び関連文献
- 『うつほ物語』
- 梵文『法華経』、『八千頌般若経』、『十地経』
- 井原西鶴作品

の、語彙、構文、文法、音韻等の情報をコンピューターで計量分析し、それらの文献の著者や成立などに関する疑問点の解明を試みながら、文章の計量的分析による古典研究という新分野を開拓する。

このような、コンピューターを積極的に利用した文章の計量的分析の研究は始まったばかりであるが、すでに諸外国では『旧約聖書』、『新約聖書』、プラトンの著作など、古典の研究に計量的分析を用いた研究がいくつかみられる。しかし、日本の古典に関しては、

- 日本語が分かち書きされていないため、単語処理が困難である
- コンピューターでの日本語処理が遅れた
- 漢字、かな等文字の種類が多い

等が原因で、研究が非常に遅れており、研究代表者の一連の研究以外見当たらない。

計量分析の際には、すでに完成している『源氏物語』のデータベースや『法華経』、『八千頌般若経』、『十地経』等のデータベースを利用するが、西鶴作品、『うつほ物語』等幾つかの必要な文献のデータベースは作成することとした。

【研究成果】

- ①『源氏物語』の計量分析
 - 作成済みの『源氏物語』のデータベースを用いた計量分析で、以下のことを明らかにした。
 - 主要7品詞（名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、助詞、助動詞）に関する計量分析で、『源氏物語』の中の会話文と地の文における種々の言葉の出現率の差異を明らかとし、従来からいわれていた「会話文と地の文では使用される言葉が異なる」という説を数量的に裏付けた。
 - 『源氏物語』の後半の10巻（「宇治十帖」）と前半の44巻では、名詞、助動詞などの品詞や、「ひと」「こと」などのよく用いられる言葉の出現率に統計的に有意な差があることを明らかにし、「宇治十帖」他作家説が出てくる根拠を明確とした。
 - 21種の助動詞の出現率の計量分析結果から、54巻

の成立課程に関する仮説を提案した。

②計量的文献比較法の研究

現存する平安散文作品のなかで、語彙数が最も多い『源氏物語』とその次に多い『うつほ物語』の文章を計量的な観点から分析することによって、平安時代の語彙使用の実態を明らかにすると同時に、二作品の文章を比較分析する方法について検討した。なお、この分析で必要となった『うつほ物語』のデータベースを下記の手順で作成した。

まず『源氏物語』データベースと同じ規準に基づき、『うつほ物語』(前田本)をコンピューター上で単語分割した。その後、本文の乱れや、同じ語彙であっても表記が異なればデータベースとマッチしないなどの理由から必ずしも正確な分割となっていない単語について、コンピューター分割したものを、人間の手で修正し、約26万語のデータベースを作成、これを用いて今後の比較計量分析に必要な基本的な統計量の算出を行った。また、この『うつほ物語』のデータベース作成において、世の中に数多く存在するプレーンな文章データ(文章を単に入力しただけで単語分割・品詞コードが付加されていないデータ)を計量分析用に加工する方法についても検討した。

③サンスクリット『法華経』の計量分析

『法華経』28章の成立過程を文章の計量分析の視点から探るべく、『法華経』及び『法華経』と前後して成立したと考えられる代表的な二つの大乘経典『八千頌般若経』『十地経』の比較分析を試みた。

これら三つの経典はおよそ『般若経』『法華経』『十地経』の順で成立したと考えられているが、単語の音節数の分布と平均値の分析、及び長行(散文)部分における主要な13種の不変化辞の出現率の分析から、この3経典はこの順で並ぶという結果が得られた。このことが必ずしも3経典の時代的差異を表しているとは即断はできないが、『法華経』の中で『般若経』に近い章は古く、『十地経』に近い章は新しいというように『法華経』の成立過程を解明する上での手がかりを得た。

④『西鶴作品』のデータベース化

江戸時代の古典文献の計量分析のために、井原西鶴作品のデータベース作成を行った。

- これまで、
- 『好色一代女』
- 『諸艶大鑑』
- 『椀久一世の物語』
- 『好色五人女』
- 『好色一代男』

の5作品の文章を単語に分割し品詞コード等の情報をつけデータベース化、それらを用いて基礎的な計量分析を試みた。なお、このデータベースは約16万語からなるが、このデータベースを利用して、2月に勉強出版より『新編西鶴全集』第一巻自立語(用例)索引篇上下2巻を出版した。

日本古典文学本文データベース(実験版)の試験公開

- | | |
|-------|------------------------------|
| 研究代表者 | 安永 尚志
国文学研究資料館 教授 |
| 分担者 | 松村 雄二
国文学研究資料館研究情報部 教授 |
| 分担者 | 武井 協三
国文学研究資料館研究情報部 助教授 |
| 分担者 | 中村 康夫
国文学研究資料館研究情報部 助教授 |
| 分担者 | 山田 哲好
国文学研究資料館史料館 助教授 |
| 分担者 | 近藤 泰弘
青山学院大学文学部 教授 |
| 分担者 | アンドル・アーマー
慶応義塾大学文学部 助教授 |
| 分担者 | 相田 満
国文学研究資料館研究情報部 助手 |
| 分担者 | 原 正一郎
国文学研究資料館研究情報部 助教授 |
| 分担者 | 柴山 守
大阪市立大学学術情報総合センター 教授 |
| 分担者 | 石塚 英弘
図書館情報大学図書館情報学部 教授 |
| 分担者 | 山田 奨治
国際日本文化研究センター研究部 助教授 |

【要旨】

1999年3月、特定領域研究（当初、重点領域研究と称した）「人文科学とコンピュータ」が完了し、その各種情報資源および研究成果の継承と継続的進展を目的の1つとして、当特定領域研究「古典学の再構築」に、「古典学のための情報処理」計画研究班が組織された。当計画研究班が抱える研究課題は多く、また研究成果も着実にあがっている。ここでは、特記的事項として、日本古典文学作品のフルテキストデータベースの試験公開を開始したので、その研究経緯の概要を述べる。また、複数の情報資源をネットワークで統合し、利用者に仮想的に1つの情報資源を提供し、共同研究を実施するための研究環境であるコラボレーションシステムの開発研究を開始した。

【位置付け】

1999年4月15日から2ヶ年の予定で、懸案の日本古典文学本文データベース（実験版）の試験公開を開始している。日本古典文学本文データベース（実験版）は、岩波書店刊行の旧版「日本古典文学大系」全百巻の全作品の本文（テキスト）をデータベース化したものである。本文データベースは国文学研究資料館大型コンピュータで実験的に管理されている。本文データベース検索システム（実験版）は、この本文データベースをインターネットに接続されたパソコンなどから、利用するための試験的なシステムである。国文学研究資料館のホームページからアクセス可能としている。全100巻中の約600作品から作品を選び、語彙を検索したり、全文を表示したり、ダウンロードすることができる。

試験公開としている目的は幾つかある。第一は、より良いデータを作ることである。このデータベースの計画は1987年（昭和62年）にスタートしているから、試験公開に至るのに10年余を要している。ただし、実際にはデータ入力が終わった段階で中断の止む無きに至り、リスタートしたという経緯がある。リスタート時点での本文データベースは、データファイルであってデータベースではなく、またデータ校正も完了していなかった。したがって、本文データベース化を進め、同時に最低限のデータ校正を行う必要があった。とくに、従来の研究の範囲ではデータ校正に最善を期すというパワーを持ち得ず、試験公開による利用者のフィードバックに期することとせざるを得ない。

第二は、出版社との知的財産権などに関わる問題である。印刷刊行された古典テキストの全文をデータベース化するには、出版社との契約が必要である。この

他にも、翻刻、校訂者の著作権あるいはデータベースの著作権など多くの解決すべき課題がある。

試験公開では、本文データベースはプレーンテキストとKOKINルールによる符号化テキストの提供を行っている。システム機能も主としてダウンロードによる利用者自身の環境への資源提供を柱とする。語彙検索、語彙統計程度の必要最低限のシステム機能の提供しか行っていない。

ここでの本文データベース研究は、テキストデータ記述の研究、並びにそのデータベース化の研究である。KOKINルールは古典文学作品テキストのデータ記述のための記述文法である。すなわち、マークアップ文法である。これはテキストの本文構造、レイアウトなどのメディアに関わる表現構造を記述でき、また様々な表記（傍記と言う）を記述可能である。さらに、品詞や古文独特の掛詞などの表現や意味構造をも表現可能である。

なお、これらの諸機能がSGMLで表現可能かどうかの研究が従来の研究の目的の1つであった。これについてはそれらの報告書に譲り、ここでは割愛する。

電子化テキストはプレーンテキストでもよいかも知れないが、やはり符号化テキストが望まれる。また、データ記述されたままでのデータ流通が考えられるが、出来ればデータベース化したい。しかしながら、未だ一般に有効なフルテキストのためのDBMSはない。KOKINルールで記述されたデータから、関係モデルを利用したデータベースが開発されている。国文学研究資料館のホームページ経由での試験公開はこの方式である。論理レコードと言う概念を定義し、これは原本の本文の1行分に相当するが、これに属性として論理レコードの継続IDを持たせて対応している。

なお、SGMLで書かれたデータのDBMSも未だないが、例えばOpen Textなどのフルテキスト検索システムが強力な手段となることが分かり、現在この方式の実装が進んでいる。SGMLは構造を記述しているので、単なる全文検索ではないより深い構造検索が可能である。また、SGMLからHTML、XMLへの変換は比較的簡単で、それにより直ちにインターネットで提供可能となる。SGMLをベースとすることにより、コラボレーションシステムが現実解として期待される。すなわち、具体的に人文学領域において、メタデータと標準の情報検索システムを用いるシステムの実証実験を開始した。メタデータはDublin Coreの適用を考えている。また、標準の情報検索プロトコルとして、Z39.50を考えている。

【研究成果】

日本古典文学本文データベース（実験版）の利用の状況を評価する。以下の考察において、利用統計は全て1999年4月15日から12月末までの9ヶ月間のものである。ただし、データベースは大型コンピュータにあり、運用時間の制限があるため、実際にこの間に利用できた日数は164日である。全期間を通じての利用回数は16,000件を超える。1日当たり平均約100件の利用がある。本文データベースの利用には利用登録が必要である。この期間に824名の登録があった。余り意味がないが、1人当たりの平均の利用回数は約20回である。なお、個人の最大利用回数は661回である。また、登録したものの利用のない人も多く、408名を数える。すなわち、実利用者は416名で、約50%である。

一方、全体のうち、約6%の海外の利用者（53名）がいる。欧米が主であるが、全世界（30ヶ国余）に渡っている。利用も全体の5～6%に渡っている。以下でも触れるが、この本文データベースはほとんど宣伝をしていないが、海外での関心が高いことを示していると言えよう。日本文学の古典テキストを電子化テキストで入手し、様々な研究、教育活動などに活用するというのを聞いている。海外の研究者とのコラボレーションの具体的な契機をつかむことに役立っている。現在、主要な海外拠点として、ヴェネチア大学、フィレンツェ大学、オックスフォード大学、パリ大学、コレジドフランス、UCLAなどとのコラボレーション実装が進みつつある。

なお、ホームページへのアクセス回数は約13,000回である。利用回数との差異は、ホームページアクセス回数の統計採取開始は約1ヶ月遅れであること、同じアクセス中に複数の利用があることなどによる。

この試験公開版のシステムは高度な機能処理を提供していない。所望の作品テキストのダウンロードを行って、後は利用者の利用環境で自在に使ってもらうことを主としている。

試験公開はほとんど宣伝はしていない。ホームページにニュースがある程度である。したがって、利用の申し込みもホームページを見てということになる。海外からの問合せ、アクセスもかなり多い。我々とのコラボレーションとしての共同研究者の利用もあるが、全般的に見ても海外における日本古典文学作品への関心の高さをうかがうことができる。

よく利用される文学作品の上位10位をあげてみる。上位から、今昔物語、日本書紀、源氏物語、宇津保物語、栄華物語、太平記、平家物語、万葉集(訓み下し)、古事記、萬葉集(白文)である。この傾向が何を物語

るかについては興味のあるテーマであるが、ここでは詳細な検討は割愛する。ただし、一言付加するならば、これからは利用層の広がりや教育面での活用などをうかがうことができる。これらは大変メジャーな作品であるばかりでなく、量的にもかなり膨大な作品である。利用者は文学者だけではなく、広く人文科学全般に渡っていること、大学、大学院の教育ではほとんど必須の作品であることなどが、要因として考えられる。さらに、現在文学研究者の関心の高いものとして、説話文学の研究があるが、429件のダウンロードがあり、これはその裏付けとも見えよう。

現在までに、利用者から80余件の貴重な意見、問合せなどをいただいている。試験公開の目的は、使っただきながら内容を正すということでもあり、大変貴重である。指摘していただいたテキストのエラーなどはその都度修正を行っている。検索システムに関する問合せ、意見も多く、今後のシステム開発に大いに参考としたい。とくに、大型コンピュータを使っていることから来る運転時間の制約に対する要望が多く（とくに、時差のある海外から）、国文学研究資料館において時期システムでの24時間を念頭にした計画が進められている。

現在、出版社との約束から、利用者の登録が必要である。利用目的も学術研究に限定している。多くの方々から、利用資格の緩和の要望がよせられている。現時点ではやむを得ないが、次期システムでは考慮したいと考えている。また、試験公開は2ヶ年の時限となっている（2001年1月末まで）。今後、本格運用に向けての、および運用継続のための詰めを進めなければならない。なお、利用期間がまだ1ヶ年あり、国文学研究資料館のホームページから、利用登録およびアクセスができる。ホームページのアドレスをあげておく。

<http://www.nijl.ac.jp/>

最後に、これからの主要な研究テーマは人文学におけるコラボレーションシステムの実装と、その利用による研究の新たな進展である。海外の拠点を含め、実証実験を進める計画である。

古典テキストのデジタル化とデータベース構築・利用支援システムの開発

- 研究代表者 及川 昭文
総合研究大学院大学 教授
- 分担者 吉岡 亮衛
国立教育研究所 研究室長
- 分担者 山元 啓史
筑波大学文系言語学系 講師
- 分担者 湯川 哲之
総合研究大学院大学 教授
- 分担者 出口 正之
総合研究大学院大学 教授

古典テキストのデジタル化をテーマに、以下の4項目について研究を進めてきている。1), 2) は1999 (平成11) 年度に実施したもので、3), 4) は現在進行しているものである。

- 1) 古典テキスト原典の PDF ファイル化
- 2) データベース構築・利用支援ソフトウェアの開発
- 3) 日本語・ギリシャ語混在表記
- 4) 古今集の平行・テキストデータベースの作成

1) 古典テキスト原典の PDF ファイル化

スキャナで古典テキストを取り込み、PDF (Portable Document Format) 型式で蓄積する方法について検討した。PDF 型式のデータは、エクスプローラやネットスケープなどのブラウザがあれば、インターネットを介して、どこからでも簡単に利用できるもので、非常に汎用性の高い型式である。スキャナで読み込むときの最適な解像度や、利用上の問題点など、基礎的なことから分析し、古典テキスト原典のデジタル化として PDF が適しているかどうかのフィージビリティ・スタディを行った。

2) データベース構築・利用支援ソフトウェアの開発

これまでに開発を続けてきたいたプログラム群を集大成し、ホスト・コンピュータ上でデータベースの編集やエラー修正、冊子体資料の作成等を容易に行える

プログラム・パッケージを開発した。

3) 日本語・ギリシャ語混在表記

西洋古典学を専門としない研究者であっても、人文科学系の研究に従事していると、時として古典ギリシア語の単語を表記する必要に迫られることがある。ギリシア語に特有のアクセントや氣息記号を無視し、単にギリシア文字だけを表記したいのであれば、TeX の数式モードで一語ずつギリシア文字を記述することによって、一応の目的をはたすことはできる。しかし、アクセントや氣息記号などを遺漏なく表記しようと思えば、この方法ではほとんど絶望的である。

多言語環境を備えた一部のワープロソフトを使用すれば、ある程度このような要求を満たすはできる。しかしこの場合には、フォントライセンスの関係から、PDF ファイルなどに出力したとき、ギリシア語フォントを埋め込みできないといった問題の発生することがある。これは一般に公開することを目的とした PDF の使用において、きわめて大きな問題となる。さらにプリントアウトの品質や、文献データベースとの動的連携などを考慮すると、できる限り TeX 上で日・希混在環境を実現することが望ましいとも言える。

日本語 TeX 環境を実現する事実上の標準は、pLaTeX2e であると言ってよい。pLaTeX2e 上で日・希混在環境を実現する方法には二つある。一つは GNU Emacs / Meadow 上でギリシア語を使用するための CGreek パッケージを導入し、さらに入力・編集結果を pLaTeX2e 上で処理するために、lbycus4 パッケージと Levy フォントを導入するというものである。この方法については CGreek プロジェクトの詳細な解説がある。もう一つの方法は、LaTeX2e に多言語処理機能を付加するものとして有名な Babel パッケージを利用するというものである。

CGreek パッケージを利用する方法には、二つの大きな利点がある。一つは、GNU Emacs / Meadow によるテキスト入力時点において、日・希(欧)の混在文が視覚的に確認できるという点である。さらに CGreek パッケージは、TLG が制作・配布するギリシア古典を収録した CD ROM の利用環境を統合しているため、極めて完成度の高いギリシア古典データベースを活用しながらテキストの執筆が可能であるという特徴をもっている。したがって、西洋古典学を専門とする研究者は、迷わずこの方法を選択するべきであろう。

しかしこの方法は、エディタに GNU Emacs / Meadow が使用されていることを大前提としているため、特に西洋古典学を専門とするなどの特別な理由

がない場合、日ごろ使い慣れているエディタのまま、日・希（欧）混在環境を実現したいと思う研究者も多いことだろう。この場合に有効なのが上記第二の方法、すなわち LaTeX2e に Babel パッケージを導入するというものである。またこの場合、一般に TeX 上で多言語処理を行うためには Babel パッケージを使用するという方法が多くとられているところから、すでに Babel パッケージを利用している研究者にあっては、これまでの環境を維持したままギリシア語処理機能を付加できるという利点もある。

しかしながら、Babel パッケージは、本来、欧文 LaTeX2e 用に開発されたものであり、そのままでは日本語 pLaTeX2e 上で使用することはできない。Babel を pLaTeX2e 上で使用するためには Babel および pLaTeX2e システムに対して種々の調整を加える必要がある。よって本研究では、Babel および pLaTeX2e のシステム構成を調査し、両者の間に互換性を実現するための方法を確立することによって、日・希混在環境の構築をめざしている。

4) 古今集の平行・テキストデータベースの作成

古典文学においては解釈や吟味が研究の多くを占める中、近藤（『古今和歌六帖の歌語 - データベース化によって見た歌語の位相』『歌ことばの歴史』笠間書院、1998）のような作者の性別により、和歌を計量分析し、和歌におけるジェンダを発見する試みや村上（『文章分析と統計学』、特集／知としての統計学、数理科学 11、サイエンス社、1995）らのように作品の真贋、作者の推定を多変量解析による判別する研究が近年行われはじめた。これらの試みは、統計学やプログラミング、データベースなどの計算機技術が人文科学においても科学的分析の方法として取り入れられている事実を示している。

本研究では、このような古典文学の計量分析を支援するためのデータベースを開発することを目的としている。「古今集」とはいても文化・歴史があるだけにその研究分野は幅広い。「古今集」をキーワードに国立国語研究所国語学文献総索引データ第102版を検索、集計した結果、表のように文章・文体、文法に関する研究が多いことがわかる。また、古語にもかかわらず、音声・音韻に関する研究が少なからずあることから、日本語音韻の歴史の変遷を分析する上で重要な意義があるのであろう。

国語学文献総索引による「古今集」の研究分野の集計

順位	頻度	分類	順位	頻度	分類
1	52	文章・文体	9	7	音声・音韻
2	21	古典の注釈	10	5	年鑑単行本
3	20	国語史	11	4	国語資料
4	18	大辞典	12	2	文字・表記
5	18	語彙・用語	13	2	国語教育
6	16	白紙台紙	14	2	国語学一般
7	14	文法	15	1	書評・紹介
8	11	追補	16	1	敬語・丁寧語

日英平行テキスト：人手による翻訳が存在している場合、それと原文とを並べあわせたデータベースを作成しておけば、原文を利用した文法的解析に加えて、翻訳を利用した意味的解析も同時に行うことができる。本研究では、古今和歌集を題材に原文（国文学研究資料館開発）のデータと Laurel Rasplia Rodd 翻訳の英文を電子化したデータをあわせ持つ、平行テキストデータベースを開発した。設計思想の第一は、上記のように、文法的特徴の抽出だけでなく、意味的特徴の抽出の可能なこと、第二に、単なる検索・参照の道具としてではなく、計量的目的を可能にする構造を備えていることである。

- 調査目的の語が五七五七七のどこにあるのか、容易に計算できること
- 作者名など異なる記述（例えば、きのつらゆき / つらゆき / 貫之 / 紀貫之など）が複数あっても、数えあげられること
- 注記、校異、異本、枕詞、係結び、切れ字、掛詞、物名などの参照が容易なこと
- 字あまりの句が容易に抽出できること
- 撥音仮名表記 / ム表記 / ノン表記 / 無表記の計量が容易にできること
- 「いなおほせどり（208 = 読み人知らず、307 = 忠岑）のような同一語句の発見が容易にできること（N-gram の実装）
- 「かきつばた」のような折句の発見が容易にできること
- 体言止め句の参照が容易にできること
- 語彙量 / 延べ語数 / 異なり語数などの計算が容易にできること
- 品詞ごとの計算が容易にできること

- 2語以上の任意の語句が接続している場合の計算が容易にできること
 - 上記におけるそれぞれの計算や抽出が原文だけでなく翻訳文においても同様に行えること
 - ある単語の翻訳が容易に参照でき、その翻訳の異なりが容易に抽出できること(たとえば、「花」は234首で、その内、“flower”は46首、“blossom”は88首、“bloom”は43首。)
- 現時点のメインテーブルの構造は以下のようになっている。

```
#####
#####
#####
#
# Kokin Waka Shu Database Main 2000
#####
#####
#####
#
# English translation and notes by Laurel Rasplica Rodd
# Database produce by Akifumi Oikawa
# Database design, editing and software development by Hilofumi Yamamoto
# Grant No. xxxxx by Ministry of Education, Japan 2000
#####
#####
#####
#
#
# This file may be distributed freely limited to non-commercial use.
#
# a...waka ID
# b...tag-1 A,B,C,D,E,F,G,H,I
# c...tag-2 0,1,2,3,4,5,etc..
# d...content
#
# a | b | c | d
#####
#####
#####
#
KW10001 | A | 0 | ふるとしに春たちける日よめる
```

```
KW10001 | A | 1 | ふるとしにはるたちけるひよめる
KW10001 | A | 2 | Written when the first day of
spring came within the old year.
KW10001 | B | 1 | 年の内に
KW10001 | B | 2 | 春はきにけり
KW10001 | B | 3 | ひととせを
KW10001 | B | 4 | こぞとやいはん
KW10001 | B | 5 | ことしとやいはん
KW10001 | C | 1 | としのうちに
KW10001 | C | 2 | はるはきにけり
KW10001 | C | 3 | ひととせを
KW10001 | C | 4 | こぞとやいはん
KW10001 | C | 5 | ことしとやいはん
KW10001 | D | 1 | toshi no uchi ni
KW10001 | D | 2 | haru wa kinikeri
KW10001 | D | 3 | hitotose o
KW10001 | D | 4 | kozo to ya iwan
KW10001 | D | 5 | kotoshi to ya iwan
KW10001 | E | 1 | spring is here before
KW10001 | E | 2 | year's end when New Year's
Day has
KW10001 | E | 3 | not yet come around
KW10001 | E | 4 | what should we call it is it
KW10001 | E | 5 | still last year or is it this
KW10001 | F | 0 | 在原元方
KW10001 | F | 1 | ありわらのもとかた
KW10001 | F | 2 | Ariwara no Motokata
KW10001 | G | 1 | The new year, according to the
lunar calendar, generally begins
in
KW10001 | G | 2 | solar February or March. Thus
the first signs of spring, or the
KW10001 | G | 3 | solar-calendar first day of spring,
sometimes occurred before
the
KW10001 | G | 4 | first day of the First Lunar
Month. This poem is a good example
KW10001 | G | 5 | of the disingenuous reasoning
that often appears in Kokinshu +
waka.
KW10001 | G | 6 | Masaoka Shiki 正岡子規 (1867
- 1902), who glorified the
Man'yo + shu +
KW10001 | G | 7 | style, cited it as an example of "
mere grinding away at logic"
KW10001 | G | 8 | (rikutsu o koneta dake 理屈を
```


こねただけ) n "Essay on Reading
KW10001 | G | 9 | Poetry" (Utayomi ni atauru sho
歌読みに与ふる書). Poets' dates
and
KW10001 | G | 10 | other biographical information
will be found in the Author
Index.
KW10001 | H | 0 | 春哥上
KW10001 | H | 1 | Spring (1)
KW10001 | I | 0 | 古今和歌集巻第一
KW10001 | I | 1 | Kokin Wakashu Volume 1

34 A03班・計画研究

古典文献データベースの表記体系確立

研究代表者 徳永 宗雄
京都大学大学院文学研究科 教授

【要旨】

古典学研究分野に於けるコンピュータの導入は、古典文献および研究資料群をデジタルデータとして保有することを可能にし、検索・分析を容易かつ多様にするのみならず、研究成果公開やその他の情報交換の補助手段として一般化するに至ったが、コーディング方式や文書フォーマット等、文献をデジタル化する際の画一的な方法が定まらず、各研究者が独自の形式でデータを蓄積してきた為、従来情報交換の障壁となってきた。本計画研究は、以上のような現状を鑑み、研究者間の普遍的なデータの蓄積・情報交換の方法論および、それらの便宜を図るツールプログラム群を提供することを目的とするものである。以下、これまでの研究で明らかになった点と克服すべき諸問題、かつ、今後予定している具体的作業について報告する。なお、本研究は特定古典文明に限定されない性格を有するため、

【位置付け】

(当該古典との関わり)は省略する。

【研究成果】

(一年半の調査研究で得られた知見と今後の作業)
現状の把握

1. 文書フォーマット

米国や諸外国に追随し、日本国内においても近年、研究者によるインターネットの利用が盛んになり、WWW(ワールドワイド・ウェブ)上でのデータ共有が普遍的な手段の一つとして広まった。WWWで用いられるHTML(ハイパーテキスト記述言語)は、普遍的なマークアップ言語であるSGMLを改良して作られた言語であるが、古典学研究における情報交換手段としては限界があるため、この点を改善し、プラットフォームを選ばないデータ交換フォーマットであり、かつ拡張可能なマークアップ言語として近年開発され普及しつつあるXMLの利用が有力な手段のひとつとして期待されている。

2. コーディング方式

XMLの文字レパートリであり、近年多くのオペレーティング・システムによって採用されているUnicodeは、世界中の多くの言語に含まれる文字を一つのコード体系で表現しようとする意欲的な試みである。しかし、2バイトで表現可能な文字数は所詮65536字であり、特に東洋の言語研究においては、この文字セットに含まれていない文字も少なからずあり、学術研究に用いるに妥当でない場合がある。

本計画研究の方向性

研究者間のデータ交換の方法論を示すことに主眼を置く本計画研究では、複数のコード体系間の橋渡しをするツールプログラム群の提供や、橋渡しの為の中間的なフォーマットの設計を中心的な課題と考えている。

デジタルデータ化された文書に求められる利便性について、

- 1) 編集が容易であること
 - 2) 閲覧が容易であること
 - 3) 印刷が容易であること
 - 4) 配布が容易であること
 - 5) WWW上での公開が容易であること
 - 6) 他のフォーマットに任意に変換できること
- 等をまず挙げることができる。

XMLやUnicodeはこれらの点のある程度満たしているのであるが、古典学研究に於いてはこれらに加え、

- 7) 必要なすべての文字を表現できること
- 8) 研究の分野に応じた拡張が可能であること
- 9) 検索や分析が容易であること

などが求められるが、これらを項目1~6と同時に満たすのは容易ではない。柔軟な拡張性をもたせる為に

は、ユーザ定義領域を残したコード体系を作るのではなく、各自に必要なオプション・コードの画一的定義方法（規格）を定め、この規格に則って定義された多様なコードセットをユーザが自由に着脱して用いられるようにする事が必要であると考えられる。

ひとつの文字に対し複数の定義が行われる事は Unicode に於いては極力避けられているが、実際の研究においては、別個の文字と見なして扱いたい文字に同じコードを割り振られていることがある。文字列の検索においては、これは利点として考えられる特性であるが、学術研究においては欠点として考えられる。

デジタル画像における「解像度」の概念に喩えれば、学術研究に必要な高解像度をもった仕様を一方で用意した上で、検索等に便利な低解像度の仕様（ASCII，Unicode 等，必要に応じた解像度のコードセットを利用する）を基軸コードセットとした、互換の為のツールを提供することで、この問題はある程度解決できると考える。

コードセットの「解像度」と、変換の不可逆性

Unicode は多くの既存コードセットに対しほぼ上位互換性（即ち高解像度）を持つように設計されているので、例えば Unicode を基軸コードセットとするなら、多くの既存コードセットで記述されたデータは Unicode に変換することができるが、Unicode で記述されたデータを既存コードセットに変換する場合には、Unicode にしかない文字が多く存在する為、文書の一部を変換し損ない、元に戻すことのできない不可逆な変換になる恐れがある。これは、縮小処理により解像度を落とした画像を拡大しても元の画像と同じにはならず、モザイクをかけたような荒い画像になってしまうのと同様である。

原典を重要視する学術資料であれば、可能な限り高い解像度の原始データを用意する必要がある。これを作業に便利な解像度に適宜「落とし」て利用するが、変換は往々にして不可逆である為、原始データは必ず保管することを推奨したい。また、印字された文献や手書き文献をデジタル化するにあたって、判読しづらい為に、当該言語の知識やその他の背景知識をもってテキストを確定する必要がある場合があるが、OCR 技術の発展に伴い、文献の画像データとテキスト化したデータがほぼ等価となる時代が遅からず到来する事が予想される上、大量のデータ保持に必要なハードディスクが大容量・低価格化している事から、データ保持の為の余裕があるのであれば、テキストを確定する以前の資料（文献をスキャンした画像データ等）を同時に保管する事が望ましい。

ところで、下位コードセットへの可換性は、解像度の低下を黙認する必要はあるものの、公開の利便性を増すものである。画像処理で言うところの「サムネイル」と似ているが、簡単にはあるがデータの中身を閲覧し、概要を把握する上で少なからず参考になるだけでなく、検索や引用を容易にする利点もある。多くのオペレーティング・システムの支持を受け、検索・編集加工・印刷ツールが充実しつつある Unicode を、この「サムネイル」の目的に利用する事も可能である。

できるだけ正確な変換を可能にするために、上位のコードセット（あるいはオプションコードセット）の定義内容（規格）には、下位規格との互換性を高める工夫が必要である。或いは、検索等の目的で解像度を落とす際に、下位コードセットのどの文字と同一視してよいかを指定するヒント情報や、微妙ではあるが研究の上で無視することのできない文字形状の上での差異を表現する情報を含めることも考えられる。

これらの情報を付加していくことで、データとしては冗長になる可能性があるが、学術的な利用を前提にした一次資料として要求される精度をできるだけ満足する事も考慮していくべきであり、コンピュータの処理能力の向上の恩恵を受けるべく、ツールプログラム等、必要な環境を提供していく事は本計画研究の目的の一つでもある。

ハイパーテキストの可能性について

文章構造の明示や、関連事項の連携の指定が可能なハイパーテキストは、データの付加価値を増すために必要不可欠な概念であり、SGML や HTML，XML 等のマークアップ言語の利用は推奨されるべきところである。しかし、これらの方式で記述する場合、使用できる文字コードセットに制限があるため、注意が必要である。

文献データを ASCII コードで表現可能な範囲に翻字してデジタルデータ化する旧来の手法は、文字コードセットが制限されている XML 等においても有効であるが、使用できる文字の種類が増えていることから、単に翻字が不要な範囲が若干広がったと考えれば、今後とも翻字によるデジタルデータ化をひとつの方法論として選択肢に残しておくべきであろう。この場合、翻字方式自体が拡張コードセットの役割を果たすので、タグ等によりこのコードセットの適用される範囲が示され、コードセットの概要が規定されていれば、XML の範囲内で十分表現することが可能である。XML を基軸フォーマットとして、互換の為のツールプログラムを提供すれば、表現できる範囲はさらに広げられるであろう。本計画研究では、このようなツールプログ

ラム群の提供を今後予定している。

今後の予定

本計画研究では、

- コードセット拡張のための定義方法の提案
- コード変換ツール・補助ツールプログラムの開発・提供
- 文献データ蓄積のガイドラインの提案
- これらの方法論を踏まえた具体的な研究事例のデモンストレーション

等を予定している。

35 A03班・公募研究

平安時代物語文の比較計量的研究

研究代表者 今西裕一郎

九州大学文学部 教授

分担者 小西 貞則

九州大学大学院数理学研究科 教授

分担者 室城 秀之

白百合女子大学文学部 教授

分担者 吉野 諒三

統計数理研究所 助教授

【要旨】

本研究は、我が国平安時代に開花した「ものがたり」というジャンルを代表する二大作品、『うつほ物語』と『源氏物語』とを取り上げ、それらの「ものがたり」とともに生成、確立した、仮名散文を研究対象とする。

研究方法は、上記二作品のデータベースを作製し(ただし『源氏物語』については、本研究開始以前に作製済み)、品詞別等の観点から、二作品それぞれについて、計量分析を行い、両者の比較検討を行う。本研究のテキストには、『源氏物語』は『源氏物語大成』校異篇の底本(主として大島本)、『うつほ物語』は前田本を用いる。

【位置付け】

当該古典の文明中における位置付け

固有の文字を持たなかった日本人は、上代以来平安時代中期まで、文献を漢字の借用によってしか記すことができなかった。しかし、平安時代に入って、漢字を基としながらも、その崩しを、漢字(真名)に対する簡便な文字体系の仮名として確立し、そこに漢字漢文表現に較べて、格段に自由な表現手段を獲得するにいたったのである。

仮名は、まず和歌の表記に自在に活用されて、仮名ならではの表現技法「掛詞」を発達させるとともに、平安時代中期頃から、徐々に散文表現の道を切り開いていった。10世紀中頃の『土佐日記』、『蜻蛉日記』は、その比較的早い時期の実践であり、その蓄積が10世紀末から11世紀初頭にかけて長編物語として実を結んだものが、『うつほ物語』および『源氏物語』である。

当該古典の現代における価値

『源氏物語』は、早く平安時代末期より研究対象となり、中世を通じて『古今和歌集』、『伊勢物語』とならぶ古典学の中心で占める作品であった。のみならず、近代にいたっても『源氏物語』は特に、与謝野晶子、谷崎潤一郎に始まり、昨今の瀬戸内寂聴にいたる著名作家による現代語訳が相次ぎ、代表的古典としての声価にはゆるぎないものがある。

それに対して『うつほ物語』は、伝本もとぼしく、『源氏物語』の陰に隠れて、長らく古典研究の対象となることがなかった。しかし、『源氏物語』の叙述が、名文とはいえ女流の手になる平安時代宮廷女房社会の言語と思考に偏したものであるのに対し、『うつほ物語』は、平安時代男性官人の視点に立脚した叙述を主とし、『源氏物語』が敢えて描かなかった世界を描いて、『源氏物語』を補完する重要な作品である。

『源氏物語』からは窺い知れなかった男性官人社会の、直截的な思考と言語を豊富に含み持つ『うつほ物語』は、従来、ともすれば女性的な『源氏物語』一辺倒になりがちであった今日の平安時代理解に対して、様々な面から修正を迫る貴重な作品である。

【研究成果】

1年半の研究成果

すでに製作済みの『源氏物語』のデータベースと同規格の『うつほ物語』のデータベースを作製するため、前田本『うつほ物語』原文の翻字・校訂、そして校訂本文の入力を終えた。現在は入力本文に対する品詞区分を施している段階である。

採用した新方法、視点など

(別紙 1)

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), likely a transcription of a historical document.

(別紙 3)

②おうふう頁/改行位置付 (*数字は頁、*が改行位置)
く*にかきあつてかは色こそかはれにめるとな*ないし
のすけいとけうらにさうそきて御まへにまいり給ていぬ
宮のいとこひしくおはしつれば*けふあすはと侍つれとい
そきてまいりつるなりおとゝいとゝうれしくなり日ころうし
ろめたかりつる御かたかたはなとておはしつるそあまた御こゑ
せしはいくところには*大将北のかたの御こにしたてまつり
給へはいたくなやみ給しかは式部卿の宮の御かたは御こ*586 をいとや
すくろみ給へはあへ物にとて大納言とのゝ北の方はいつ
れとも本よりいみしき思ひはらからにて心ほそきこゝろ
などときこえ給へるかねてわたらせ給にけるいかなるにか侍らん
大納言殿御なかつかかひにて日ころはよことにおはしてすのこに」一一ウ
なむあかし給める*みかうしはとくおろしてさしめくり人のき
こゆれはいみしうさいなめはたゝひとところなむ*ひとよはとし
かりて中納言の君たいめし給へりしかはそれもおひいてられて
なむけふはきたのおとゝにわたり給ぬらんさるはそれもかやうの
事ありけにおはすめりむへなりけりいはいうそらめ
いたる人のいとまめに見え給しはこのきみの御かたははいかゝ
おはするうちの御方のやうの人のいとおかしけるになむ
大将見たてまつらさん人はしりかたくすけなかけし
きはいとよくそきてけん中納言殿はすけそれは宮の御
やうの人のわかきよらにおはすること御かたきたいと
きよらにおはしまし宮はおとろき給てなにとそ
あれきゝにくゝ大将のゆめ見たまへるか人のものやいひ
つるとて中納言ときみの御中はいかなるそちこま」一二オ
ろかやうにいたくやすけ御中はいとめてたくおもひ聞え
給へりいたうわつらひ給しときはなくくてまどひをそし
給しちこは見にはみたまふをそらしとていたき給はずおとゝ
またみすなどの給ひしかはいふかしきにやなとてないしの
すけいぬ宮いたきていりぬをと宮はおきみ給てよ

③コンピューターによる分割 (コンピューター処理のため、丁数などの記号類は半角に統一した。濁風に認められない単語には自動的に×がつくプログラムだった)

(別紙 2)

作業経過
蔵開/下(巻15 11丁裏3行目~12丁裏5行目)
①前田本翻刻
くにかきあつてかは色こそかはれにめるとな*ないし
のすけいとけうらにさうそきて御まへにまいり給ていぬ
宮のいとこひしくおはしつれば*けふあすはと侍つれとい
そきてまいりつるなりおとゝいとゝうれしくなり日ころうし
ろめたかりつる御かた*はなとておはしつるそあまた御こゑ
せしはいくところには*大将北のかたの御こにしたてまつり
給へはいたくなやみ給しかは式部卿の宮の御かたは御こ*をいとや
すくろみ給へはあへ物にとて大納言とのゝ北の方はいつ
れとも本よりいみしき思ひはらからにて心ほそきこゝろ
などときこえ給へるかねてわたらせ給にけるいかなるにか侍らん
大納言殿御なかつかかひにて日ころはよことにおはしてすのこに」一一ウ
なむあかし給めるみかうしはとくおろしてさしめくり人のき
こゆれはいみしうさいなめはたゝひとところなむ*ひとよはとし
かりて中納言の君たいめし給へりしかはそれもおひいてられて
なむけふはきたのおとゝにわたり給ぬらんさるはそれもかやうの
事ありけにおはすめりむへなりけりいはいうそらめ
いたる人のいとまめに見え給しはこのきみの御かたははいかゝ
おはするうちの御方のやうの人のいとおかしけるになむ
大将見たてまつらさん人はしりかたくすけなかけし
きはいとよくそきてけん中納言殿はすけそれは宮の御
やうの人のわかきよらにおはすること御かたきたいと
きよらにおはしまし宮はおとろき給てなにとそ
あれきゝにくゝ大将のゆめ見たまへるか人のものやいひ
つるとて中納言ときみの御中はいかなるそちこま」一二オ
ろかやうにいたくやすけ御中はいとめてたくおもひ聞え
給へりいたうわつらひ給しときはなくくてまどひをそし
給しちこは見にはみたまふをそらしとていたき給はずおとゝ
またみすなどの給ひしかはいふかしきにやなとてないし
のすけいぬ宮いたきていりぬをと宮はおきみ給てよ

(別紙 4)

*ないし
の
すけ
いとけ
うら
に
さうそき
て
御まへ
に
まいり
給
て
いぬ
宮
の
いとこ
ひし
く
おはし
つれ
は
*けふあす
は
と
侍
つれ
とい
そき
て
まいり
つる
なり
おとゝ
いとゝ
うれしく

『源氏物語』は紫式部という女性の作であるのに対し、『うつほ物語』は作者不詳ながら、その内容、用語、文体等から、男性の手になる作品と見なされてきた。しかし、それは多くの場合、印象的な判断に基づくもので、客観的なデータが示されることはなかった。

本研究は、この2作品の文章が、どの点で異なり、あるいはどの点で類似するか、を、同規格で作製したデータベースを用いての計量分析により、比較検討するものである。

目標と準備状況

本研究の目標は、前田本を底本とする『うつほ物語』データベースの完成、およびそれと完成済みの『源氏物語』データベースを用いての、『うつほ』、『源氏』2作品の文章の比較考察にあるが、この1年半は、もっぱら『うつほ物語』データベースの製作準備に費やされた。

『うつほ物語』データベースの作製は、

- (1) 前田本(別紙1)の翻字及び入力(別紙2)。
- (2) 翻字テキストを、おうふう版活字本に基づき、改行位置付け(別紙3)。
- (3) 翻字テキストの、コンピューターによる単語分割(別紙4)。
- (4) 翻字テキストに相当数見出される、底本(前田本)の誤字、脱字、脱文の処理という作業工程から成るが、現在は、(3)、(4)を並行して行っている。

インド古典天文学書の研究と伝統暦プログラムの改良

研究代表者 矢野 道雄

京都産業大学文化学部 教授

【要旨】

本研究の目的は次の3点にある。

- 1 インド古典文献や碑文に見られる年代を西暦に変換するには当時の天文学・暦法に基づいて暦を再

現する必要がある。この作業が容易にできるようなコンピュータ・プログラムを作成・公開し、ブラウザによってホームページ上で実行が可能になるようにし、さらに改良を続ける。

- 2 上記プログラムの汎用性を高めるために、インドにおける伝統的な太陽暦やイスラム教徒が用いている暦を選択肢の中に加える。
- 3 インドの古典天文学書とイスラム系の天文学書を研究し、そのために、サンスクリットおよびアラビア語原典のデジタル化を進める。

【位置付け】

天文学・暦法はコンピュータがもっとも活躍する分野のひとつであり、無数の便利なソフトが有料あるいは無料で公開されている。インドの暦についてもすでにいくつかのホームページで参照することができるが、それらが提供しているのはいずれも現代のインド暦と西暦の相互変換であり、現代の天文学の理論に基づいている。しかし古代の暦日は古代天文学の方法で作成された暦に基づいているのであるから、現代天文学の方法で逆算して得られる暦の日付と一致するとはいえない。本研究の最大の特徴は、古代インドで最も広く流布していた天文学書である『スールヤ・シッダーンタ』の理論とアルゴリズムにほぼそのまましたがってインド古代の暦を復元しようとしている点にあり、このようなプログラムは世界で初めてである。

しかし現段階ではこのプログラムはまだユーザーにとって馴染みやすいわけではなく、ある程度の予備知識がないと十分に活用できないことは否定できない。そのためか、今年2月29日にこのプログラムが私のホームページ上で実行できるようにして公開したが、まだ余り大きな反響は届いていない。したがって、ホームページのレイアウトもふくめて、もっとユーザーフレンドリーなプログラムに改良していく必要がある。

【研究成果】

ハーバード大学に留学中の伏見誠氏に依頼していた、TurboPascal用のプログラムPANCANG2.PASをCGIで実行できるようなPerlのスクリプトに書き換えるという作業の第一段階はほぼ完了した。

2種類のプログラムを走らせた結果の比較、およびインドで入手した暦との比較については、報告論文「インド暦プログラムPANCANGAについて」(『古典学の現在』第1号(平成12年3月, 35-52頁))として発表した。なおプログラムの構造を十分に理解しなければいけないので、わたし自身もPerlによるプログラ

ミングの勉強を始めた。

これと平行して、まずこのプログラムが『スールヤ・シッダーンタ』の理論にどこまで忠実であるかを確認するために、『スールヤシッダーンタ』のサンスクリット原典をもう一度ていねいに読み直す必要があると感じたので、このテキストを電子化し、和訳しながらプログラムとの比較を開始した。とくに太陽、月、および惑星の補正計算において周転円の大きさが象限によって変化するという独特なアイデアが『スールヤ・シッダーンタ』にみられるが、われわれのプログラムでこれをいちおう無視しうるものとみなして平均値を採用したので、この点に関して考察した。この特異な方法が実際の計算にどの程度影響を与えているかを追跡する必要があるように思われる。しかし古代の暦作成者たちも平均値を用いていた可能性もある。

また学派による天文定数の相違を考慮に入れられるように、一連の定数を別に準備しておいてオプションで選択できるようにすることも考えられるが、学派が異なると暦計算のアルゴリズムも異なる場合が多いので、ひとつのプログラムですべてをカバーすることは困難であることがわかった。

またインドにおけるイスラーム暦も無視できない要素なので、イスラーム天文学・暦法に関する文献も収集し、研究しているが、これを取入れてひとつのプログラムにするのは大きすぎるので、すでに公開されているイスラーム暦プログラムにリンクを張るなどして利用する可能性を考えている。

さらに南インドでは独特の太陽暦が用いられており、これがネパールの太陽暦とほとんど同じであるという興味深い事実が、昨年シンガポールで手にいれた南インドのタミル語の暦と、今年のネパールの暦とを比較検討することによってわかった。このようなインドの伝統的太陽暦についてさらに調査する必要があることを痛感した。そこで本年9月11日より2週間にわたってインドで現地調査を行うことにした。今回は国際科学史学会の会長であるスッバラヤッパ博士のお世話により、現代のインドのソフトウェア産業の中心でもあるバンガロールで私のプログラムについて講演する機会を与えられたので、この機会にインド人学者たちの意見を求める。またマイソールでは実際に伝統暦を作成している人物にインタビューすることになっている。さらにオリッサ地方の太陽暦には他にはない特徴があるということなので、この地方でも調査を行う。この旅行によってできるだけ多くの暦を収集し、分析する。コンピュータの出現によって伝統的な暦計算の技術は急速に忘れられていくであろうことは、すでに1991の

調査において予測できたが、上記報告書にのべたような多様性がこれからどれくらい生き続ける見込みがあるかを確認したい。

先日インドを訪問した森首相が「インドのシリコンバレー」と呼ばれるバンガロールを訪れたことからわかるように、インドは、とくにソフトウェア産業において、世界の情報産業の中心になりつつあり、インド人の頭脳流出が話題になっているが、その文化的な背景は伝統的な天文計算法にも存在すると考えられる。このような関連性についても考察するならば、本研究は古典研究の一貫でありながら、すぐれて現代的な視点を提供するものでもあるといえるだろう。そもそも「アルゴリズム」という現代のコンピュータ用語そのものが、「インド式計算法」をヨーロッパ世界に紹介したイスラームの天文学・数学者アル・フワーリズミーの名前に由来している。このことからわかるように、インドの天文学書に見られる「解へ至るための手続き」はまさにアルゴリズムの世界であるといえる。したがってインド天文学書の論理的な分析はインド人の思考様式を知るための重要な手がかりを与えると思われる。

古典学のための多言語文書処理システムの開発

研究代表者 高島 淳

東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 教授

【要旨】

- 古典研究のような一般には用いられることの少ない言語や文字の処理に関しては、今後相当の期間にかけて、コード体系の統一や汎用的な多言語処理の方法が確立される可能性が存在しない。従って、将来的にはいかなるコード体系にも変換可能であるような多言語多書記法処理系を当面構築する必要がある。
- この目的のために、データ自体は任意に規定されたASCII 転写法で保持しつつ、印刷等の出力において

は TeX に基づく多様な文字表記を可能とするシステムを開発した。

●当面の実装は、ローマ字転写、ナーガリー文字、グラタ文字、カンナダ文字、タミル文字、マラーラム文字に関して達成した。

【位置付け】

●古典研究においては、当然のことながら、現在においては用いられていない言語や文字を使用しなければならないことが多い。研究代表者が専門とするインドの場合では、代表的な古典語はサンスクリット語であるが、ローマ字転写の場合でもコードが統一されているとは言えず、多くの処理上の問題点を抱えている。最古期のヴェーダ語アクセントの問題も一例であるし、写本資料の正確な転記の観点からは、ローマ字転写ではなく、ナーガリー文字、グラタ文字、テルグ文字、カンナダ文字などの多様な文字を用いて表記したいという要望も強い。

●本研究においては、こうした要望に応えるべく、現在研究者が使用している多様な転写入力方法に対応していると同時に、その一つの入力方法からローマ字転写、ナーガリー文字、グラタ文字、カンナダ文字、タミル文字、マラーラム文字を印刷出力とすることの出来るシステムを構築することを目的とする。また、ローマ字転写においては、語の構成要素に出来る限り従うようなハイフネーション区切りの方式も開発する。

●Unicode の制定によってコンピュータ上の多言語処理が可能になったと言われることがあるが、Unicode は一般的な商用利用に限定したコード化を行っているため、将来 ISO が新たなコード体系を制定するのを待つ間は、いまだコード化されていないような文字や言語を使用する古典研究のためには独自の多言語処理体系を開発する必要がある。特に Unicode は、言語と文字種が同一であるとの前提に立っているため、上述したような同一言語多書記法 (script) 表記のような場合に全く対応できないのである。本研究で開発するシステムは、同一言語多書記法 (script) 表記や同一書記法 (script) 多言語表示を可能とすると同時に、研究者各人による容易なカスタマイズを可能にすることで、現在のような過渡期において十分に実用的なシステムとなると言え、古典研究者にとって強力なツールとなるであろう。

●現在、一方では ISO による諸文化に適応した標準化の試みや、他方ではとりあえず Unicode を使用して可能な限りの多言語環境の構築の試み (たとえば Omega Project) が行われているが、前者が実用的な

レベルにと達するには20年近くを必要とすることが確実であるし、後者は Unicode の問題点の故に、2～3年以内に実用化されたとしても、古典研究には不十分である。その点で、本研究は短期間で実現可能であり、将来新しい標準が策定された場合にも、容易にコンバート可能である。

●また、どのようなプラットフォームの上でも運用可能なシステムとするために Perl と TeX を用いた汎用的なシステムを開発することから、広範囲の研究者の利便となると同時に、インド以外の (特に同じインド系文字を使用している東南アジア) 古典研究にも容易に拡張可能である。

【研究成果】

●目的としていた、多様な転写入力方法に対応していると同時に、その一つの入力方法からローマ字転写、ナーガリー文字、グラタ文字、カンナダ文字、タミル文字、マラーラム文字を印刷出力とすることの出来るシステムを構築することを達成した。

転写入力方法への対応としては、サンスクリットに関しては、KH 方式・町田方式・折衷方式に対応しているが、要望次第で他のどのような入力方式にも対応可能である。

●このシステムにおけるサンスクリット語のローマ字転写表記のモードにおいては、TeX 出力が PostScript フォントを利用できるように Virtual Font を作成した。

これによって、現在のインターネット上での電子出版における標準的方法である PDF 形式に変換する際に、標準フォントの使用による国際的互換性とファイルサイズの縮小というきわめて有用な効果をあげることができる。

また、この転写文字システムにおいては、ヴェーダ語のアクセント等の処理も容易に行えるように実装した。

●ローマ字転写表記のサンスクリット語テキストのハイフネーション区切り規則に関して調査した結果に基づいて、第一次試案を策定してこのシステムに実装し、この第一次試案を何人かの研究者にテストしてもらうことによって一応実用になるレベルにまで改良した。

しばしば非常に長大な単語を持つサンスクリット語のテキストを引用する際には、従来人間の判断による以外に自動的にハイフンを付加することは不可能であった。この作業が自動化されることによって、論文を書く際に不要な努力を省いてくれることによって、知的生産性の向上に大きく寄与することになる。

●グラタ文字処理システムに関しては、20世紀前半に出版されたテキストを調査することによって、印刷

本に必要なグラント文字の結合文字の分布，3文字以上の結合の場合の下付き処理のあり方を収集分析する作業を第一に行なった。こうした分析に基づいて，グラント文字のフォントを METAFONT プログラムによって制作して，グラント文字印刷システムを上記システムに統合した。

グラント文字は，南インドにおいて用いられているサンスクリット表記用の文字で，膨大なサンスクリット資料の表記と同時に，南インド刻文資料の表記に不可欠であるが，従来コンピュータ処理システムは存在していなかった。今回の印字システムの開発は世界で初めてのもので，南インド研究における必要性からすでにインド人研究者からの提供要請を受けて，配布を開始している。

- 以上のように，すでに当初設定した研究目的自体はすべて達成したので，このシステムが多くの研究者によって利用可能となるように，現在マニュアルなどを作成中であり，年度末にはインターネット上での公開と同時に，関連する研究分野の研究者への CD R のパッケージによる配布を予定している。

- 今回の研究によって，このシステムの設計思想の汎用性が確認され，今後すべてのインド系文字への応用が可能であることが証明された。来年度以降には，すべてのインド公用語やチベット語タイ語などに拡張していく予定である。

中国における制度と古典

科挙制度と言語史・文学史の相関から

研究代表者 平田 昌司

京都大学大学院文学研究科 教授

【要旨】

1980年代に入ってから，中国の言語史研究と文化史研究は，いずれも多数の優れた成果をうみだしている。しかし，このふたつの領域は必ずしも関連づけられずに存在しており，他領域で明らかにされている成果を充分にとりいれないままであるのが実態ではなからうか。本研究は，このふたつの領域を緋いあわるための研究手法を確立し，中国古典研究に言語史の視点を導入することを目的とする。中国では，6世紀前後から19世紀末期に至るまで，官僚選抜試験である科挙制度が，言語の規範維持に大きな役割を果たしてきた。科挙がどのように文章語・口頭語の規範・規制を支えてきたかを歴代の史料から読み解き，言語史・制度史・古典受容史を総合することを企図している。

【位置付け】

人間の歴史の中で，言語が変化すること，文化・制度が変化すること，いずれも近代以前から常識として知られていたことである。しかし，一方の変化が他のどのような変化として現れうるか，という可能性に関しては，ほとんど検討されたことがない。両者はそれぞれに独立した存在として発展する，とみなすのが20世紀中国言語史・文化史研究の主流だとしてよいであろう。

本研究は，このような現状に対して，言語変化が文化・社会自体の変化を引き起こしうる可能性を示し，ふたつの分野を統合した新しい研究手法の確立をめざすものである。

これまで中国言語史は，それぞれの時代・それぞれの地域でどのような変化が起きたか，その変化過程はいかなるものであったかをめぐり，実証的な研究成果

を豊富に積み重ねてきた。しかし、こうした成果は他の中国学諸領域から軽視されてきたとあってよく、言語史の明らかにしてきた事実を応用した中国古典文化史研究は、国内外いずれにおいてもほとんど全く試みられたことがなく、いかにして言語史と文化史を融合させるかの手法も確立されていない。他方、言語の自律的發展過程を明らかにしようとしてきた中国語史研究は、自律性確保の代償として文化的要因をできる限り排除しようと努めてきており、それが文献学軽視などの欠陥を生んでいる。

両方の分野を統合しようとする際、問題の所在を最も端的に示すことができるのは、国家による言語規範の管理がいかに行われるか、をめぐる調査研究にほかならない。中国は、統一国家としての規模があまりに巨大であるため、文字・音声・語彙・文体すべての面にわたり、国家の一元的管理をめざす態度が、紀元前3世紀末期以来、はっきりと見て取れる。管理の手段として用いられたひとつが、官僚選抜試験としての「科挙」合否判定基準であった。国家は、望ましい字体、望ましい語彙・文体を試験の合否判定基準として公示することによって、自らの期待する言語規範を全国に示し、受験者・受験予定者の文章語を誘導することが可能だった。こうした規範は、その作り手がどの地域の方言を話しているか、によってしばしば大きく姿を変えている。ここ数十年の言語史・方言史研究が蓄えてきた成果を応用して、規範の変動とその原因を読み解くならば、中国が多言語社会として発展してきた全体像、言語を通して読み取れる地域間の利害対立の実態を明らかにすることが可能であると言っていい。

また、従来の古典文献資料は、中国が多言語社会であるということ、国家が制度を通して言語規範を管理してきたこと、に関して注意を十分に払わないまま研究がすすめられてきた場合がある。ある方言を共通に話す／読書に用いる地域集団が複数存在してきたことを前提に古典文献・学派伝承を見直すならば、そこには新しい展望が開けるであろう。

さて、以上のべてきた諸点にもかかわらず、中国は文化的な一体性をもっている。個々の地域がいかなる特徴を有してきたかの解明は、個々の差異を超えた全体としての共通性はなにかという問いへとつながざるを得ない。したがって、本研究は、言語文化史の探求を通じて、漢民族を中心とした中国文化圏が内部的な多様性・全体的な一体性をあわせもつのはなぜかという、長いあいだにわたって各分野から解答が試みられてきた問題へのひとつの答えを示すものとなるはずである。

【研究成果】

11年度には、第一に、19世紀から20世紀という中国近代初期における言語・古典をめぐる意識を文献にもとづいて調査研究をすすめた。西洋近代との接触によって、東洋の古典は価値規準としての地位をおびやかされるが、その影響は言語規範意識にまで及ぶことを具体的に示すことができている。成果としては、古典・古典学がここ100年の中国でどのように変質してきたかを要約した「19世紀末～20世紀初期の中国における古典学の崩壊」(本特定領域研究ニューズレター『古典学の再構築』第5号, 2000年1月)、話しことばにおけるジェンダー規制がいかに維持され、いかに崩壊していったかを検討した「しゃべる女・叱る男 中国の話しことばにみられるジェンダー規制」(『興膳教授退官記念中国文学論集』, 汲古書院, 2000年3月)がある。第二に、5世紀から8世紀中国の言語規範意識の変化を論じ、中国社会の変動と首都の地理的移動によって伝統的貴族の文化規範意識が破壊され、ついでそれが直接に言語規範をおびやかす、突き崩す過程について考察した。「『切韻』と唐代功令 科挙制度と漢語史第三」(『東方語言と文化』第1期, 上海: 東方出版社)は、その成果であるけれども、出版社の都合から現時点でまだ刊行されていない。

つづく12年度には、第一に、文化・制度と言語規範の相関性をめぐる全体像をまとめることを試みた。その成果としては「科挙制度と中国語史」(本特定領域研究ニューズレター『古典学の再構築』第7号, 2000年7月)があつて、文字・音声・語彙・文体すべての面にわたる現時点での見通しをまとめている。第二には、17世紀以前から19世紀に至る中国の史料類、近代初頭の新聞類を調査研究の対象として、当該時期における制度と言語をめぐる流れを明らかにしようとした。具体的な成果としては、19世紀末に近代を迎えた中国の散文が、伝統に含まれない新しい外来文化に直面していかなる質的变化を起こしたか論じた「光緒二十四年の古文」(『文化的制度としての中国古典会議予稿集』, 2000年7月)、17～18世紀における宮廷発音規範の交替とその民族史的・文化史的背景を明らかにした「清代鴻臚寺正音考」(『中国語文』2000年第6号, 論文審査を通過。2000年11月発行予定)がある。現在、まだ調査の不十分な12～17世紀に関して、資料の収集に努めるとともに、その調査・考察をすすめてつある。

著作として公にした以外に、海外の中国研究者との交流を通じた収穫も少なくない。11年度には、カリフォルニア大学ロサンゼルス校から、欧米における中国思想史・科挙史研究を代表するベンジャミン・エルマ

ン (Benjamin Elman) 教授を2週間にわたって招聘し、京都・東京においてそれぞれ1回のセミナーを開催、日本の中国歴史・思想・文学研究者との間で活発な討議を行うことができた。12年度には、7月15～16日の両日にわたって、14名(日本7名・中国7名)の発表者によるシンポジウム「文化的制度としての中国古典」を京都で開催、各地から約140名の熱心な参加者を得ている。講演・発表は、中国社会における古典の意義・古典の形成・古典の伝承・古典と近代を主題としたものであり、いずれもきわめて質が高かった。全ての論文は『文化的制度としての中国古典シンポジウム予稿集』として会議参加者に配布したが、改訂のうで本特定領域研究総括班の叢書『古典学の現在』の1冊としての刊行を予定している。

39 A04班・計画研究

東アジアの科学と思想

研究代表者 川原 秀城

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

分担者 梁 一模

東京大学大学院人文社会系研究科 助手

【要旨】

1) 基本資料の収集

1. 北京大学図書館蔵『黙思集算法』(マイクロフィルム)、『韓国文集叢刊』『朝鮮王朝実録』『国訳叢書』(古典書の影印・韓訳本)など
2. 韓国OS用のCD ROM『三国史記』『司馬榜目』など

2) 新たな知見

1. 和算が豊臣秀吉の朝鮮侵略時の略奪本を基礎として成立したことを明らかにした
2. 従来知られていなかったJ. S. ミル『自由論』の中国語訳本(馬君武訳『自由原理』)について詳細な検討をくわえた

【位置付け】

本研究の目的は、17～19世紀東アジアの科学関連資料・科学古典を収集整理し、それを通して当時の科学と科学思想を、東アジア文明総体の中に位置付けるところにある。そもそも東アジアの17～19世紀とは、ヨーロッパの科学知識がイエズス会(中国名、耶穌会)によって東アジアに伝えられたときにあたっている。反宗教改革運動の中核的団体、イエズス会はカトリックの布教の便に供すべく、西洋の科学技術知識を積極的に東アジアに伝えた。大量の漢訳科学技術書がそれである。だが(1)伝えられた知識は近代科学にくらべて古代中世の科学の方が多く、(2)分野としては天文・数学に大きく偏り、また(3)東アジアの諸科学も当時、各国ごとに独自の展開をみせていたけれども、科学上のウェスタン・インパクトが東アジアの文化にたいし巨大な影響を及ぼしたことは否定することはできない。

本研究は東アジア学の一環であることはいうまでもないが、テーマがテーマだけに、ギリシャ古代科学・西洋中世科学・近代科学にたいする知識のみならず、17～19世紀の中国・朝鮮・日本の政治情況・文化情況についても広範な知識が要求され、そのどれか一つが不足しても十分な研究成果を期待することはできない。そのためであろうか、古典学総括班における他分野の研究者との討論は、わたしたちの悩み、研究の専門化に付随する知識の狭隘化を是正してくれ、実に入がたい経験であったと報告することができる。こういう類の研究情報の交換は従来なかったところであり、当研究の大きなプラス評価の材料になるとわたしたちには思えてならない。

【研究成果】

研究成果は大きく二つに分けることができる。一つは研究基本資料の収集である。

資料収集は、朝鮮本の科学関連資料・科学古典を中心とした。北京大学図書館蔵『黙思集算法』(マイクロフィルム)、『韓国文集叢刊』(全120巻)『朝鮮王朝実録』(全54巻)『国訳叢書』(古典書の影印・韓訳本)など文献資料を収集しただけでなく、韓国OS用のCD ROM『三国史記』『司馬榜目』なども購入した。朝鮮関係史料が特に多いのは、わたしたちの研究目的の一つが世界的に見て研究が手薄な朝鮮科学史の正当な評価にあるからである。他の一つは研究の結果えられた新たな知見であるが、研究代表者は科学史の内的アプローチを採用して、17～19世紀東アジアの数学交流を分析。豊臣秀吉の朝鮮侵略時の略奪本を基礎として

和算が成立したことを明らかにした。研究分担者は科学史の外的アプローチを採用して、従来中国思想史において忘れられていた馬君武という人物について詳細な検討をくわえた。

まず研究代表者の数学史研究であるが、17～19世紀の中国と朝鮮の状況を分析し、籌算および天元術は、

17世紀中葉から18世紀初期においては、もはや中算の範疇には属しておらず、幾世代にもわたる朝鮮の数学者の真摯な学習・継承の結果、東算の重要な構成要素の1つまで昇華していたといわねばならない。洪正夏は、中国の数学者(司曆)何国柱との「数学の他流試合」の際、何国柱が算籌をみていぶかしがり“中国にかくのごとき算子(算籌の異名)なし。得て中国に誇るべきか”とのべたことを記している。中国の数学者は算籌によるすばやい計算をみて驚いたらしいが、朝鮮の数学者は逆に、中国では数学者が算籌のなんたるかを知らず、籌算が完全に過去のものになっていることを知って、同様に驚いたにちがいない。

と、中国数学と朝鮮数学の違いを指摘。その分析結果のうえに和算を分析する。

和算の成立にもっとも深い影響をおよぼした数学書といえば、元の朱世傑『算学啓蒙』と南宋の楊輝の『楊輝算法』をいってほかにない。“和算のルーツは中国にある”といわれるゆえんである。だが和算の中国起源説はむろん、命題として“真”であるけれども、和算の成立前夜、中国においては両書はすでに滅び、天元術の名さえ知られていなかったことも事実である。江戸期の数学者が天元術を学んだのは、舶来の中国書ではなく、秀吉の侵略時に略奪した朝鮮書を介してにほかならない。

と分析。略奪本と判断した理由は、

- (1) 明代は珠算全盛の時期 当時、籌算書の大部分は失伝。『算学啓蒙』もそのとき滅ぶ。だが朝鮮では籌算全盛。『算学啓蒙』などが教科書として広範に使用された。→中国からの直輸入の可能性はない。
- (2) 朝鮮初期(秀吉の朝鮮侵略前)に重刻されたことが確実な中国数学書には、『楊輝算法』(関孝和の写本が存在)のほか、『算学啓蒙』『詳明算法』がある。東京教育大学に蔵する『算学啓蒙』(銅活字本)や国立国会図書館に蔵する『詳明算法』(銅活字本)には、“養安院”の蔵書印がみえるが、養安院とは漢方医の曲直瀬正琳(1565-1611)のことであり、養安院旧蔵本の多くは治療のお礼に宇喜多秀家から朝鮮侵入時の将来

本を贈られたものという。→朝鮮侵略時の略奪本である可能性が非常にたかい。

からである。したがって和算史はつぎのように書き換えねばならない。

朝鮮侵略(1592-93, 1597-98)の直前、珠算(=中算)が輸入される。

同時期の代表書は『算用記』(17世紀初め)や『塵劫記』(1627)。だが日本独自の数学ではない。わずかに中算の応用題を含むといえる程度にすぎない。朝鮮将来本をとおして宋元の略号代数を研究。『算学啓蒙』は当時中国で滅び、朝鮮本のみ存在。秀吉軍の略奪をへて日本に入る。

傍書法の発明 = 和算の成立

関孝和(1640? 1708)は『算学啓蒙』を研究し天元術を改良して、日本独自の記号代数法を発明。

だが従来の日本史や和算の研究者は残念ながら、朝鮮からの個々の断片的影響をわずかばかり論じはしても、和算家の天才のみに目をとられ、中国と朝鮮の数学を細かに分析してはならず、和算が朝鮮略奪本の巨大な影響のもとに成立したことについては、ほとんど注意をはらっていない。本研究の価値は中国と朝鮮の数学書を分析したところにあるといえるであろう。

次は、研究分担者の外的アプローチであるが、研究分担者は19世紀中葉以来、科学と思想関連の西洋書物に対して盛んに行われた中国語翻訳書を取り上げて、分析をくわえた。特に注目したのは、中国の西洋思想受容史において従来の研究で殆ど知られていなかった馬君武という人物である。彼の翻訳書の調査を通じて、次のようなことを解明した。

- (1) 通説ではミルの『自由論』に対する最初の中国語訳は嚴復訳の『群己權界論』と言われているが、馬君武訳の『自由原理』の登場のほうがそれより早い。
- (2) 中国の進化論に関する研究には、公羊学の三世進化説を政治的改革論と結びつけた康有為『天演論』の翻訳で中国に進化論ブームを引き起こした嚴復、日本の漢訳書を通じて社会進化論普及にもっとも貢献した梁啓超などが取り上げられているが、ダーウィンの『種の起源』に対する最初の中国語訳は、馬君武訳の『達爾文物種原始』(1920)にほかならない。馬君武の翻訳にはほかに、ヘッケルの『宇宙の謎』『自然創造史』などがあり、彼は中国の進化論研究において無視することができない思想家である。
- (3) 馬君武の翻訳書のうちには、以上の書物およびルソーの『民約論』のような思想関連の書物だ

けではなく、『実用有機化学教科書』『鉱物学』『微分方程式』など自然科学関連の書物も大量にあった。
以上が現在における主な研究成果である。

原始仏教思想の解明

バラモン教聖典の同時的解明を通じて

研究代表者 中谷 英明
神戸学院大学人文学部 教授

【要旨】

1. 目的と意義：

インド、中国、日本を始め広く文明を超えて流布した仏教思想の原形解明が本研究の目的である。それはまた、後代に種々に展開する諸仏典の原点を確定することになる。

2. 方法：

主として、(1) コンピュータを利用した音韻、韻律、語形、語彙などの分析、および(2) 『リグヴェーダ』以来のバラモン教聖典の思想的発展との比較、という方法による。

3. 成果：

(1) 現存最古の仏典『スッタニパータ』が、アショーカ王以前に遡る部分を最古層とする4層に分かれることの発見。(2) 最古層仏典に優勢な、人間の「欲望」に関する観察は、『リグヴェーダ』以来、原始仏教に至るまで一貫した発展を跡付けられることを指摘した。

【位置付け】

原始仏典のインド思想史中における位置

1. 中央アジアの遊牧民インド・アーリア人は、紀元前17, 8世紀頃からの4, 5世紀間に数次にわたりインドに侵入し、紀元前12世紀から8世紀にかけて次第にパンジャブからガンジス平原の東部へと半農半牧の定住地域を拡大していった。この最終局面において、

インド社会にはインド史上最大の変化である、部族制からカースト制への移行が起こった。

2. この移行と連関して、アーリア人の宗教思想における大変化が現れた。それは社会的側面を強く持っていた素朴な祭祀思想の、個人化、内面化である。それまで祭官の執行に依るとされていた祭祀の効力が祭主の確信に依存するとする説や、行為の結果が後に行為者に影響を及ぼすという「業思想」、それに促されて成立した「輪廻・解脱思想」など、後代のインド思想の中心となる観念が、この期に現れた。

3. 原始仏典の最古層は、紀元前4世紀頃、このような大変化がほぼ完了しつつある時期に成立したと考えられる。そこではこのような新しい思想潮流とともに、伝統的の思惟も認められる。すなわち原始仏典は、考察の中心に人間の基本的欲望を置いたが、それは古く『リグヴェーダ』以来アーリア人の思惟の中心にあったものである。要するに原始仏教思想は、バラモン教聖典である古層ウパニシャッドと極めて近い。

4. ウパニシャッドとの相違は、仏教がバラモン祭官による祭祀を棄却し、広野における孤独な修行を、解脱すなわち涅槃に至る唯一の道と規定したことである。

5. 間もなくアショーカ王(紀元前3世紀)の時代には、仏教教団の拡大とともに修行者の団体としての僧团组织が編成された。僧団内においてカーストの平等が説かれたこととあいまって、このような修行理念が仏教を民族を超えた宗教とする基盤を成したと言える。

【研究成果】

1. 『スッタニパータ』の分析

(1) 従来の研究：

現存最古の仏典『スッタニパータ』の解明は、従来不十分であった。その第1の理由は、『マハーニッデーサ』、『チュッラニッデーサ』(いずれも紀元前1世紀頃)、『パラマッタジョーティカー』(5世紀)等の注釈文献に依存した解釈が行われて来たことによる。原伝承成立から2世紀以上隔った注釈には原意の逸失が少なくない。

第2の理由は、『スッタニパータ』が数世紀をかけて編纂され、その間の教理上の変化を反映する4層が存在するにもかかわらず、それを区別しなかったことである。

(2) 『スッタニパータ』の4層：

現存する『スッタニパータ』は、1149詩と若干の散文を含み、5章から成る。後部2章(I層)は、前部3章(II層)よりも古く成立したと推定される。さらに5章中に散在する因縁詩(ヴァットウガター)(III

層)と散文(Ⅳ層)を区別すれば、これら4層は、(1)文法、(2)語彙、(3)韻律において截然と区別される。その例の若干をここに紹介する。

語形に関しては、a 幹・主格複数 of -āse がⅠ層で多用され、Ⅱ層にも小数ながら見えるが、以降は姿を消す。アショーク王碑文にも西部碑文の2例を除きこの形はなく、この -āse を含む詩節はアショーク時代以前の作である可能性が高い。

語彙に関しては、ブッダ(仏陀)、ピク(比丘)はⅠ層では複数形で用いられない。Ⅰ層において勸奨される修行はひたすら孤独の遊行生活であるのに対し、複数の比丘に対する呼び掛けを含むⅡ層の詩は僧団生活を描写する。

また仏陀自身を指すスガタ(善逝)、タターガタ(如来)の語は、アラカン(阿羅漢)や仏弟子・信者を指すサーヴァカ(声聞)・ウパーサカ(優婆塞)と同様、Ⅰ層には見られない。またアーヤスマット(具寿)、テーラ(長老)はⅠ層、Ⅱ層を通じて見えない。

このように、Ⅰ層における教団の階級に関わる語彙の欠如は仏陀・比丘の語の複数形不使用と符合し、またⅡ層以降の詩節は、教団の急速な拡大と、それに伴う教団規程整備の進捗を証している。

また、ニッパーナ(涅槃)は、『スッタニパータ』中では単に平安の境地を表わしており、「死」と結び付かない。

ブラーフマナから初期ウパニシャッドにかけて、クラトゥ(意向)やカーマ(欲望)が人の行為の根本的動機付けとして次第に鮮明に意識されるようになった。タンハー(渴望)や、後代には「漏」と漢訳されるアーサヴァは、原始仏教において、そのような行為の「動機付け」を指したと考えられる。

この「渴望」が潜在的である事実をより明瞭に名指すアヌサヤ(「潜在するもの」という意味、漢訳は「随眠」という表現はⅡ層以降に現れる。これはⅡ層において「渴望」に関する考察が一層精密となったことを反映していよう。

また基本的仏教教理とされる五蘊(色、受、想、行、識)のうち、「受」と「行」はⅠ層に殆ど見えない。

韻律についても、Ⅰ層とⅡ層の間の懸隔は大きい。簡易言語 Perl によってプログラムを書き、韻律分析を行った結果、Ⅰ層は、ブラーフマナとⅡ層の中間に位置し、Ⅱ層以降に比べ格段に古いことが判明した。

2. 古代インドにおける「思い」

古代インドの思惟の中心概念の一つとして、人間の「思い」、「意欲」、「欲望」などと表現される人間精神

の情的、意的側面がある。これを巡る議論の跡をたどりつつ思想変遷の一端を明らかにした。

紀元前12世紀頃の『リグ・ヴェーダ』最新層中の哲学的考察の萌芽から人間の「思い」が重視され、やがてそれが天上のブラフマン世界への再生に必要なものとされ、次にブラフマン世界の地上への降下とともにむしろ不必要なものとなり、さらに祭祀を否定し、修行を重んじる仏教によっては棄却されるべきものとなった。この流れは、宗教の社会的在り方から個人的、内面的あり方への変遷であり、おそらく部族制からカースト制への移行の流れと対応している。

(1) 『リグ・ヴェーダ』

『リグ・ヴェーダ』の新層に見える「非存在はなかった」の歌」と呼ばれる有名な宇宙創造歌(10.129)は、「ひとつのもの」から、「思い」、「欲望」、「男の力と女の力」を経て「現象界」が出現するさまを詠んでいる。

(2) ブラーフマナ

他方、祭祀に関する考察はまた、祭祀の主催者である祭主の役割の考慮にも至りついている。『シャタパタ・ブラーフマナ』は、初めて祭主の「意欲」を、祭祀による生天の要件として掲げる。『ジャイミニヤ・ブラーフマナ』は、いったん天界に再生を果たしたとしても、自己に関する確信を持たない者は一定期間後に再死することになるとしており、考察はウパニシャッド期に確立する業報輪廻思想の直前段階まで来ていることがわかる。

(3) ウパニシャッド

祭祀における祭主のあり方がブラーフマナ期より格段に明確に問われ、「業」(行為、カルマン)という新概念が、この世とあの世における人の境遇を決定する力として想定されるに至る。人はこの世で積んだ善業の量だけ天界での幸せを享受し、善業の効力が尽きるとこの世に回帰する。悪行の場合にも、その力が尽きるまで地獄等の悲惨な境遇を味わうことになる。こうして、種々の境遇を巡りつつ生死を繰り返す「輪廻」という新概念も成立した。

『プリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』は、もともと天界にあり、死後に参入が許されたブラフマン世界を地上に引き降ろし、欲望を棄却した人はこの世においてその世界に入り、不死となるとする。ブラーフマナに始まった祭主の資質に関する考察は、こうして本来社会的機能の側面の強かった祭祀を、個人化、内面化させることになった。ここにいたれば原始仏教との乖離は、用語の違い(仏教はブラフマン(梵)、アートマン(我)という2原理を放棄し、これをダル

マ（法）などの語で置き換えた）を除けば、ほとんど祭儀執行を維持するか否かの一点である。

（４）原始仏教

ブラーフマナにおいて、人間は「意向」（クラトゥ）から成ると言われ、ウパニシャッドにおいては「欲望」（カーマ）から成ると言われた。ブラーフマナにおける「意向」は、天界再生に必須の確信と考えられていたのであったが、ウパニシャッドにおける「欲望」は、同じく天界再生の契機とされながら、それが無い人がブラーフマン世界に入るとされ、扱われ方が逆転している。ただし『プリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』においては、「欲望のない人」は「すでに欲望を満たした人」とも言われ、「欲望充足」そのものがブラーフマン世界参入の妨げとは考えられていない。

『スッタニパータ』は、この点に関してさらに厳しく、修行生活により欲望そのものを放棄することによって、この世における絶対的平安の実現をすすめる。

オスマン朝における伝承知と理性知

研究代表者 濱田 正美
神戸大学文学部 教授

分担者 野元 晋
慶応義塾大学言語文化研究所 専任講師

【要旨】

キリスト教世界におけると同様に、イスラーム世界にあっても真理は預言者から伝承された啓示と、人間が本来的に神から授けられた理性の二つによってのみ認識可能であるとされる。ひと昔前までの一般的な見解では、ガザリー以降、啓示の理性に対する優越が確立し、それ故にイスラーム世界は近代と無縁の道をたどらざるを得なかったされていたが、例えばオスマン朝の歴史文献に見える政治哲学を分析すると、事柄はそれほど単純ではない。そこでは社会秩序の維持、換言すると国家理性のためには、啓示によらざる統治手段もまた正当性を付与されている。このような政治哲学成立の背後には、一方には古代ギリシャから受け

継がれた倫理学があり、一方には啓示とは全く無縁のモンゴルがイスラーム世界のほぼ全域を統治したという事実に対する深刻な認識があったと考えられる。

【位置付け】

いわゆる原理主義的イスラーム思想とそれを運動として担う人々の存在が強く認識される現在の状況下で、ひたすら啓示に従う宗教としてのイスラームという理解は、欧米でもわが国でも、あるいはイスラーム世界にあってさえ、広く流布していると思われる。この理解は、イスラームは詰まるところ理性とは無縁の宗教であるとの俗流の結論を導きかねない。こうした見解が極めて皮相なものであり、人間理性に対する信頼が、歴史的に見れば、イスラーム世界にも常に存在していたことを示すことは、我々のイスラーム理解に資すばかりではなく、原理主義的思想と対峙しようとするムスリムにもなにがしかの「外野からの声援」となるであろう。

1) オスマン朝の政治論に見える啓示と理性

15世紀オスマン朝の財務官僚トゥルスン・ベグは、コンスタンティノープルの征服者であるメフメト二世の伝記の著者でもあるが、その著書に付した長文の序章において人類にとっての君主の存在の必要性を力説している。

ところで、(現世の)生存の諸条件に(基づく)集合、それをば集住といい、また我らの用語では、町、村、遊牧集団と呼ぶのであるが、これを(人類は)本性よりして欲するのである。援助し合うために互いを必要とする以上(これを)望まぬということがあるだろうか。この相互援助という事柄は、一所に集まることなくしては成就されない。人間 insan(という語)は友愛 uns(という語)の派生語であると言われるが、しかし、その諸々の行為の動機と生存状態の程度は区々様々である。誠に、この差異と多様性が人性の諸要素において本有的であるがゆえに、世界人類の諸々の集団の欲求、アダムの子孫の諸階層の願望が多種多様である(という事実が)必然的に帰結する。[半句]人が好む流儀は様々。[散文]そして、もし人がその本性の欲求のままに放置されるならば、彼らの間に闘争対立が生じて、共同体の本来の目的である互助と援助は結果せず、むしろ互いを破滅させる(ことになる。それゆえ)すべての人を相応しい境涯に置き、自らの権利に自足して、他人の権利に横領の手を伸ばさず、人類の間において相互扶助を引き受け、生業が何であってもそれに

専念させるために、必然的に様々な処置が必要となった。そして、かくの如き処置を政治と呼ぶのである。もしこの処置が叡知の要請と法則に合致するならば、それをば強制力によって人類のあらゆる個人に課して、完璧に実践すべきである。この強制力は現世と来世の幸福の獲得に他ならず、これをば叡知の人々は神の政治と呼び、その制定者を天使であるという。聖法の人々（ウラマー）はこれをシャリーアと呼び、制定者を使徒、即ち預言者であるという。しからずして、この処置がそうした段階にない場合には、即ち単に理性の段階が、可視世界の秩序に関して例えばチングス・ハンの段階の如くであるならば、（この処置を）その（段階固有の）関係に適合させて、（これを）スルターンの政治、君主の禁令という。我らの用語ではこれをば慣習法という。とまれかくまれ、その確立は偏に一人の君主の存在に依存しており、つまるところ、あらゆる時代に聖法制定者の存在が必要とされる訳ではない。なんとならば、神聖なる定めである、例えばイスラームの教えの如きは、その制定者に至善の平安あれかし可視と不可視の世界の秩序のためには、最後の審判に至るまで全人類にとりて十全であるからであり、さらには預言者の存在も必要とはされない。しかしながら、あらゆる時代に一人の君主の存在は必要であり、個々の事柄の処置に際しては彼の権威に依拠しつつ、あらゆる時代の完璧な統治が存在するのである。しかして、もし彼の措置が妨害されるならば、諸個人の存在は十全には体をなさず、逆に完全に滅亡する。そして、「わしがジンや人間を創造したのは、偏にわしにかしづかせるため」（コーラン51章56節）というこの（御言葉）によりて確認されるあの秩序が消滅してしまう。然り而して、必要な秩序の実現のためには君主の存在が必須であり、その存在無くしては、人類という全被造物中の最高の榮譽を受けたものの生存の秩序は達成されない。

一個のムスリムとして当然のことながら、著者トゥルスンは人間のレゾン・デートルは神にかしづくことであり、社会の秩序はこの義務を果たすためにのみ正当化されることを認めている。しかし同時に彼は、この秩序を重視する余り、啓示によらざる秩序維持の手段をも合法化し、啓示による神の命令と現世の君主、しかもチングス・ハンの如き異教徒の君主の禁令とを平然と同列に置いている。そもそも上の引用からも窺えるように、著者は啓示と理性を必ずしも対立的に捉えてはいない。理性の段階が、例えばチングス・ハン

の段階の如くであるならば、という文章は、理性の進展が啓示の獲得を結果することを示唆しているが、この点については上の引用に先立つ部分でより明確に述べられている。

（神は人間に）この三つのもの（鉱物、植物、動物）の長所を集めたより多くの恩寵の飾りを与え、中庸に近づくことをその本性により可能とし、かつは理性を有する靈魂を居着かせられた。そして、「その本質は仲介なくして成熟する」という特殊の性質を有する理性の光の栄光によって、「我らはアダムの子らに恩寵を与えた（コーラン17章70節）との名誉の衣を与えられた。更にはこの種の若干の者どもは、本性の美德の完成の道において、また創造主についての知識追求の段階において、「彼らは天と地の創造について考える」（3章191節）程度に到達した。

理性は神から人間に与えられた最高の恩寵である。それ故に人間はそれを活用しなければならない。

神は御自らの力もてこの地上に、理性の道具より大きく、より美しき宝石は創造し給わず。

そして、著者は大胆にも人間理性が啓示に勝ると述べる地点にまで到達する。すなわち、自らの庇護者であったマフムード・パシャに対する韻文の賛辞において次のように断言する。

もし仮に、（聖なる）書物と預言者たちが存在しなくとも、人民生存の秩序のためには、彼の優れた見識だけで十分。

トゥルスンが主観的には敬虔なムスリムであったことに疑いを差し挟む余地はあるまい。が、その敬虔さは、社会秩序のためには、啓示より人間理性を神の恩寵として重視することを彼に許していたと考えられる。

2) コーランからの断章取義

偉大な思想、およびその具体的な表現としての偉大な書物（これを古典と言い直してもよい）は、様々な解釈の可能性を潜在させるからこそ偉大であるということもできよう。なるほど神の言葉であるという点で、コーランは他の古典とは異なるけれども、伝統的なコーラン解釈学に囚われない理解もまた不可能ではない。すでに、上の引用中にも現れたように、トゥルスンはその著作において、夥しくコーランとハディースの言

葉を引いているが、その引用の仕方は頗る断章取義である。たとえば、上に見た「彼らは天と地の創造について考える」という句は、コーランの文脈では人間性との関連で述べられているのではなく、天地の創造者に対する人間の畏怖の念に関わる句である。このような、コーランのものと文脈とはほぼ無関係にその章句を引用する例は枚挙に暇無い。例えば、メフメト二世の命によりコンスタンティノーブル攻略のために、ボスフォラス海峡のヨーロッパ側の岸に極めて短期間で要塞が建設されたことを述べた件では、

地上の君主、大地に映る神の影が、イスタンプルの北に当たり、アナトリアの岸にあるイエニジェの要塞の向のルーメリアの岸に要塞を建設させよ、とお命じになると、直ちに、「まことに、吾が命令は、我が望んだ時には、それに、有れ、と言いさえすればそれは存在する」という御言葉通り、有能な役人、熟練した家臣たちが資材を準備した。

と述べられる。ここに引用されたコーランの章句は36章83節であるが、原文は三人称であるのを一人称に変えて、神の創造の業の素早さを現世の君主の命令が即時に実行されたことの比喩として用いているのである。コーランを引用するにあたってのこうした自由さは、現今ならば恐らくは流新的であるとの指弾を蒙ることになるであろう。しかし、15世紀のオスマン帝国にあっては、トゥルスンがそうした批判を受けた形跡はない。次の世紀の後半以降、帝国の国力の低下に伴い、保守的なウラマー層は、帝国衰頹の原因をイスラームの軽視に求め、そのための対策を政府に要求するようになる。従って、トゥルスンより後代の著述家たちが彼と同程度の自由を享受しえたか否かは更に検討を加えねばならない。

イラン・イスラーム文献が描くモンゴル時代の世界像の研究

研究代表者 杉山 正明

京都大学大学院文学研究科 教授

分担者 志茂 碩敏

財団法人東洋文庫研究部 研究員

【要旨】

●位置付け

- 1 イラン・イスラーム文献を中心としつつも、東西文明の枠をこえて多言語文献から13・14世紀の世界像を探ることに特徴がある。
- 2 近代西欧を中心とする知の体系と人類史の理解を見直すことに現代的価値がある。

●研究成果

- 1 著書3点、論文など7点に成果の一部を公刊。
- 2 モンゴル時代においてすでにユーラシア規模での確実かつ具体性のある世界についての知見が達成されていたことが判明した。
- 3 根本状態の原典文献にもとづき、東西文明の枠をこえた方法・視点をとる。

【位置付け】

- 1 イラン・イスラーム古典研究における位置とそれを超えた意義

13・14世紀のモンゴル時代は、史上最大の世界帝国モンゴルを中心にユーラシアと北アフリカの各地がゆるやかながらもむすびつけられ、人類史上ではじめて世界が一個の全体像としてとらえられるようになった時代である。この時代に関する原典史料は20数か国語にわたるが、なかでも漢文文献とペルシア語でしるされたイラン・イスラーム文献が双璧の2大史料群をなす。とりわけ、真の意味で世界と世界史を扱った最初の歴史書と称する『集史』以下のイラン・イスラーム文献の研究は、西欧・ロシア・イスラーム諸国において歴大な蓄積があるが、近年とくに日本において東西の多言語関連文献の知見にもとづいて根本からの再検討・読み直しが可能となりつつある。本研究の目的は、これまでのイラン・イスラーム古典研究の伝統

を踏まえつつ、東西の枠をこえた多言語文献の知見を投入して原写本から全くあらたに読み直し、人類史上でも屈指に特別な意義をもつモンゴル時代の世界像を探ることにある。それは、従来ともすれば個別の文明圏や領域ごとに孤立しがちであった近代古典研究にたいして、新しい視座を模索するうえでの有益な例示ともなるであろう。

2 現代における価値

古典学的方法を踏まえつつ、東西の枠をつきぬけたイラン・イスラーム文献の読み直しとそれにもとづくモンゴル時代の全体像の提示は、現在、日本の研究者だけがなす国際貢献であり、同時にそれは近代西欧の視座をこえた真に根本的で客観的な世界像の創出や、さらにすすんで人類史のあゆみについてのより適正な理解を導く糸口となるであろう。

【研究成果】

1 一年半の研究成果

著書

『(モンゴル世界帝国)』, Shinsuwon Publishing Co. 1999年8月(1 461頁)。

『(遊牧民から見た世界史)』, Hakminsa Co. 1999年11月(1 381頁)。

『世界史を変貌させたモンゴル』, 角川書店(近刊予定)。

論文など

「モンゴル世界帝国の成立」, 若松寛編『アジアの歴史と文化 7 北アジア史』, 同朋舎, 1999年4月(69 87頁)。

「蒼き狼たちの歴史観」, 樺山紘一編『歴史と文学』(週刊朝日百科・世界の文学10), 1999年9月(308 310頁)。

「モンゴルによる世界史の時代 元代中国へのまなざし」, 『世界美術全集・東洋編7 元』, 小学館, 1999年10月(9 16頁)。

「足利と曲阜」『足利学校釋奠記念講演筆記』, 足利市教育委員会, 2000年3月(1 27頁)。

「マルコ=ポーロという人物は存在したのか」『世界史のしおり』8号, 帝国書院, 2000年4月(1 4頁)。

「解説」, 田村実造編『大モンゴル帝国』(中国文明の歴史 7), 中央公論新社, 2000年8月(379 394頁)。

「世界を襲った元寇」, 『北条時宗』, NHK出版(近刊予定)。

2 この研究によって明らかとなったこと

イラン・イスラーム文献が描くモンゴル時代の世界像を研究する第一の作業として、入手済みのイラン・イスラーム文献古写本のマイクロ・フィルムの中から、とくに緊急性の高いものを選んで焼きつけ、解読をすすめた。その結果、モンゴル時代のイラン・イスラーム地域における世界認識は、13・14世紀の当時としては極めてすすんでおり、東は中国から中央アジア・インド亜大陸・中東をへて西はヨーロッパにいたるまで、諸文明圏にまたがって文字どおりユーラシア・サイズで、従来の常識的見解をはるかに上回るレベルで確かかつ具体性のある知見を有していたことが克明にわかってきた。これは、人類史の理解を書き換える意義をもつ。15世紀末以降のヨーロッパ人の「地理上の発見」までは、人類は各文明圏の枠のなかで相互に孤立しあっており、文明圏をこえたかたちでの世界の客観的イメージや具体的な全体像をもつことはなかったとする“通念”は、ヨーロッパ近代の知のなかで創作された虚像であったといわざるをえない。

また、これらの諸文明圏のなかで興亡した主要な国家や王朝についても、驚くべき正確さで描かれた「世界諸政権の交代系統図」とでもいっていいビジュアル化した文献がモンゴル時代のイランで作成された。この文献の存在は、13・14世紀において当時のモンゴル帝国の少なくとも支配層については、ユーラシア各地域の歴史と現状に関しての総合的情報とその認識が確実に存したことを証明する。人類史全体をひとまず総括する知的水準が、すでに13・14世紀に達成されていたわけであり、前近代アジアをとすれば低く見がちな19・20世紀型の知の体系は、根本的な誤謬をはらんでいたことを示している。

こうしたイラン・イスラーム文献の解読・分析の一方、これに関連するモンゴル時代の多言語文献のうち、とくに膨大な情報量のある漢文文献についても、完全同時代の元代刊本による元代典籍文献のマイクロ・フィルムからの写真焼きつけをすすめた。その結果、中国史上でも画期となる世界認識のいちじるしい拡大・変化がモンゴル時代に生じていたこと、そしてそれはイラン・イスラーム文献の研究からえられる中東における世界認識とあきらかに連動しており、アジアの東西をつらぬいてかってない真の世界像の出現がモンゴル時代に訪れていたことが判明した。

さらに、以上の付帯研究として、モンゴル時代の世界像を直接に示す「世界地図」について、撮影・焼きつけをすすめてつある。その詳細なデータ整理と分析に取りかかったところであり、次年度以降にその総合

的研究を行なう予定である。

3 採用した新方法・新視点

本研究の推進にあたっては、イラン・イスラーム文献はもとより、関連する漢文文献・モンゴル語文献・中世ヨーロッパ文献などについても、すべてモンゴル時代につくられた原写本・原刊本・原文書など、根本状態の原典文献に溯って行なう。東西の枠をこえた多言語の根本文献による研究は、近年ようやく日本のごく少数の研究者ではじめて可能になったものであり、国内外の関連研究者に新しい地平をひらくことになる。

43 A04班・計画研究

ユダヤ教の法論理的思考の特徴とその形成に果たしたタムルードの影響

研究代表者 市川 裕

東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

【要旨】

a) 本研究の鍵概念である「法論理的思考」を、現代に至までの長期にわたりユダヤ人社会を支配したレトリック（人を説得させる論理）として把握することを試みる。

b) 欧米のキリスト教社会が、古代ギリシャの哲学と論理学を体系化してひとつのレトリックを形成したとすれば、ユダヤ教は独自に説得の論理を発展させた、それがタルムードによって培われたレトリックであった。このことを具体的に提示しかつ論証することが主たる目的になる。

c) 具体的には、以下の4つの項目によってレトリックを提示する。

- 1) 聖典解釈によってユダヤ教の信仰の枠組みを抽出する
- 2) 賢者の格言を通してユダヤ教の伝承のあり方を分析する
- 3) 正統と異端の枠組みを抽出する
- 4) サンヘドリン篇の議論の構造分析を行う

d) 研究成果の概略と成果の発表

- 1) 上記2, 3は本科研のシンポジウム及び研究班会議で研究発表
- 2) 上記1は平12年8月に南アフリカの国際学会IAHRで発表
- 3) 上記3は、平12年9月の日本宗教学会学術大会で研究発表
- 4) タルムードの中の重要なアヴォート篇の翻訳と解説の完成が間近
- 5) サンヘドリン篇第1, 2章の構造分析の作業を継続中

e) 本研究は、仏教学者の中村元氏が東洋人の思惟方法の分析で採用した視点をユダヤ教研究に応用するといえればわかりやすい。

【位置付け】

a) タルムード文学の文明における位置付け

一般にユダヤ人は、彼らの宗教的遺産であるタルムードを、彼らだけに価値がある古典と思いついて、彼ら以外の文化に属する人々には関係がないかのように考えている。例えば、日本でタルムードが翻訳されつつあるといえ、いったいだれがそれを読むのか、読んで分るのか、と真顔で尋ねてくる。しかし、私はそういうとき、タルムードは世界の古典文学として広く読まれ理解されるべきで、実際にそれだけの価値を有していると答える。本研究は、そうした私のタルムード研究の立場を学問的に明らかにする作業として位置付けられる。

その際に採用される視点は、タルムードのもつ独特の「法論理的思考」を本研究の鍵概念とみなし、それを、ユダヤ人社会におけるレトリック、すなわち人を説得させる論理として把握することを試みる。欧米のキリスト教社会が、いわば古代ギリシャの哲学と論理学を体系化してひとつのレトリックを形成したとすれば、ユダヤ教は独自に説得の論理を発展させた、それがタルムードによって培われたレトリックであった。このことを具体的に提示し、かつ論証することが主たる目的になる。

b) タルムード文学の現代における価値

本研究においては、レトリックという概念によって、タルムードの現代における価値を考察する。「レトリック」という概念を、ひとつの文化における価値体系、行動様式、思惟様式を特徴付ける視点と捉えて、神観念、法の支配、倫理的態度、現世の意味などを包括的に扱えるようにしたい。「問答無用」、「長いものには

まかれる」、「理屈」という語彙を生む文化に対しては、ユダヤジョークを生み、「2人いれば3つの意見が出る」、「無人島にたどりついたユダヤ人が2つのシナゴークをつくった」、「2つのトラー」などを生んだ文化が対置される。

これは、世界宗教や国家、民族というような、かなり大きな枠組みで、その特徴や文化を比較する試みと共通する点がある。東洋人の思惟方法、大伝統と小伝統、法文化の比較、など、どこに着目して結論を導いてくるかという点で、方法論的な検討の材料を提供する。その際には、アリストテレスの「修辞学」や中村元氏の「東洋人の思惟方法」への視点などが比較の素材として吟味される。

【研究成果】

a. 国際学会 IAHR で行った発表の題名と概要は以下の通り

Panel Title: Interpretation of Scripture in Comparative Perspective

H. Ichikawa: Two Ways of Communicating with the Transcendence in the Pentateuch and the Lotus Sutra.

Abstract

In this paper the author will make clear how the sages of the Buddhist and the Jewish religions tried to understand the difficult and problematic passages of the scriptures in each religion, finding out the two ways of communication between the finite and the Infinite according to the level of cognition and experience.

In Lotus Sutra, Gotama Buddha was said to declare that he had not revealed the truth before this teaching was taught at the last stage of his life. How could this declaration be interpreted?

In the Bible, we are told that when Moses asked God His name at the dramatic situation of the burning bush, he was given His names in two different ways: first 'I am that I am' and then 'YHWH, the God of your ancestors, the God of Abraham and so forth.' Why in this order? and What the meaning of the first? Even the mysterious name with the esoteric power, 'YHWH', is among the second group of His name. Can we say that 'I am that I am' is a name? What is this different from the second group?

We can assume that upon understanding the profound being and the reality of the Infinite, pre-

ceding ideas and concepts become deprived of their former meanings and significances, but are reassessed within a new broader context of a religious perspective and endowed with new methodological significance as useful devices for leading the laity to the height of religious supremacy.

b. 近代西欧のユダヤ知識人とユダヤ的レトリック

本研究において、「レトリック」という概念は、ひとつの文化における価値体系、行動様式、思惟様式を特徴付ける視点と捉えて、神観念、法の支配、倫理的態度、現世の意味などを包括するものとして定義される。これに関連して、これまで西欧近代のユダヤ知識人の思考の特徴に言及したものをとり上げ、本研究の概念を明確にする助けとして考察する。

1) スピノザによる神の証明

岩波新書『政治家の条件』の中で、著者の森嶋通夫氏は、日本人の論理的思考のなさとは対比して、西欧世界が説得の論理を浸透させたとして、その典型としてスピノザによる神の証明の論理を提示している。これは、ユークリッド幾何学を神学に応用したものであり、その限りでは西欧の説得の論理の典型といえるかもしれない。しかし、スピノザという哲学者は元来アムステルダムのユダヤ人社会出身のユダヤ人であり、その過激な思想のために破門された経歴の持ち主であった。このことは、その当時のユダヤ人社会内部で通用していた説得の論理は、スピノザが提示した西欧的論理とは相容れないものであったという想定を可能にする。

2) 『非ユダヤ的ユダヤ人』(I. Deutscher)におけるユダヤ知識人の系譜

同じく岩波新書に、東欧ユダヤ人社会出身のマルクス主義哲学者のI.ドイッチャー氏が、自身の回想を含めて、20世紀のユダヤ人社会と知識人について著した随筆集が翻訳されている。この中で、本書全体の表題にもなった「非ユダヤ的ユダヤ人」と題する随筆があり、そこに興味深いユダヤ知識人の系譜とその特徴が論じられている。

ドイッチャー氏のいう「非ユダヤ的ユダヤ人」には、次の人々が含まれる。異端者エリシャ(西暦2世紀)、スピノザ、ハイネ、マルクス、ローザルクセンブルグ、トロツキー、フロイト。このうち、最初のエリシャという人物は、西暦2世紀の古代ユダヤ人社会で異端者の烙印を押され、ギリシャ思想に沈潜してユダヤ教を捨てたラビとして、タルムードでも詳しく扱われてい

る。この人を除けば、それ以外は、19世紀のユダヤ人解放の前後から、ユダヤ人社会の殻をやぶって、西欧近代思想を身につけ、新たな発想で社会科学と政治思想を塗り替えていった思想家や革命家たちである。

ドイッチャー氏によれば、これらの人物にはある共通した特徴があった。それは、かれらが、「ユダヤ的なものを越えて、理想とその実現を求めた」人々でありながら、「ある点でかれらは非常にユダヤ的であると思う」という。その共通点として、みな一様に「決定論者」であり、「道徳の価値は相対的」であると信じて、「行動的哲学」を唱道し、「究極的な人間のつながりを確信」していたという。国家や民族の枠をこえて普遍を志向したのは、ユダヤ的出自によるということのようである。

確かに、これらの人々は、近代との格闘の中で、普遍的救済や普遍的思想を追求したユダヤ人たちであるが、いみじくも「非ユダヤ的」という形容が示す通り、かれらは総じて、ユダヤ人社会のレトリックの枠を突破している。では、その堅固な殻であるユダヤ的レトリックの世界とはなんであったのか。そのレトリックは、はたして、かれらが立ち向かった西欧近代との格闘のための思考の道具を提供してはいなかったのだろうか。これが、本研究の目ざす問いである。

3) ユダヤ教的論理とギリシア的西欧的論理の対比

ユダヤ人の歴史は、「エルサレム第二神殿の崩壊(70 CE)から近代西欧における「ユダヤ人解放」(1789CE)までの間が、スッポリと「世界史」から取り残された時代であるが、その時期は、まさにラビユダヤ教の全盛時代である。その間に、ユダヤ人社会の特徴、ユダヤ的精神の特徴が、醸成され発酵した。

タルムードのもつユダヤ的レトリックに関して、ボストン大学の S. Katz 氏に質問したとき、氏がヘレニズム以降、今日までのユダヤ思想を概観して、それをユダヤ教的論理とギリシア的西欧的論理の葛藤と捉え、ギリシア的レトリックからの自立を最後まで追求したのが東欧の伝統的ユダヤ人社会であり、それを支えたのがタルムード的学問伝統であったと総轄したとき、本研究の方向と軌を一にすることが確認できた。

c. ユダヤ教の説得の論理(レトリック)その1:形式に着目して特徴を抽出する。

昨年シンポジウムおよび「アヴォート篇」の翻訳を通してすでに吟味できており、以下の2点を中心にまとめられる。1) 伝承の重視と「二つのトーラー」という概念の成立、および2)「神の意志」をめぐる論争の肯定:互いに根拠を提示し、「ある種の」論理

的整合性を競う中で、聖典解釈による法の発見(Midrash)が行われる。

d. ユダヤ教の説得の論理(レトリック)その2:正統と異端の内容と釈義の方法に着目して特徴を抽出する。

本年度の中心課題と位置付ける。ユダヤ教がエルサレム神殿の崩壊後に直面する危機を通して宗教的共同体を形成する過程を、レトリックの形成という観点から分析する。正統と異端の識別の規準を、2つの Mishnah, Hagigah 2:1, Sanhedrin 10:1, ら吟味して、指標として「神の名譽を重んずる」か、軽んずるか(Manipulation)を識別の規準とみなす。

個々の分析のないようは以下の通り

1. ユダヤ人の文化圏の形成:異端の出現とともに正統なるものの輪郭が形成される。神殿崩壊後の「離散ユダヤ人社会」の出現、祭儀的共同体の崩壊
2. 神の名譽 = 神の意志:神の法の認識と実行が、ユダヤ文化の中心を占める。過度の殉教熱や狂信を拒絶する。

* keyterm として:禁止/許可(asur/muttar),穢れ/清浄(tame/tahor),義務あり/義務なし(chayyav/patur)の判断

3. 異端としての宇宙論,天地開闢論:犯罪人,死刑囚にも「分」はあった(Sanhedrin 10:1): Sanhedrin 7~9章は4つの死刑の方法を論じている。「神の尊厳の重んじない者は生まれて来なかったのがよかった」という表現。

manipulation が否かすれすれの事件として、「樂園」を訪れた4人のラビの話へ発展する。この内の一人に「異端者エリシャ」がいた。ドイッチャー氏の話題に直結する。

古代ギリシア像の再検討

研究代表者 内山 勝利

京都大学大学院文学研究科 教授

【要旨】

- 1) 「理性の王国」と見なされ、それゆえに今日ではむしろ批判的ともされがちな古代ギリシア世界の本姿を明らかにすることが、この研究の主たる目的である。
- 2) ギリシア思想史の全体を見直すとき、プラトン・アリストテレスを中心に考えられてきた古代ギリシア像は、再検討されなければならない。彼らの「ロゴス」性にしても、今日的なそれとは内実を異にしているし、ギリシア全体では、さらに「非理性的」なものへの着目が必要とされる。しかし、それゆえにこそ、本来のギリシア的な「ロゴス」はより豊かな理念たりえているものと思われる。
- 3) 以上のような意図のもとに、当面は、プラトン哲学、初期ギリシア哲学、ヘレニズム期の思想（特にガレノス）に焦点を当てつつ研究をすすめ、同時に通覧的に古代ギリシア思想の根本特質を明らかにするよう努めている。
- 4) 従来のコンセプトを越えた理解を試み、またその考察は古代ギリシアの枠を越えることが多いだけに、今般の共同研究体制はきわめて有益である。

【位置付け】

今般の特定領域研究(A)「古典学の再構築」において、研究項目「古典の世界像(A04)」の研究班に所属し、古代ギリシア・ローマの世界像の解明を担当しているが、特殊的には、われわれの古代ギリシア世界についての理解のあり方を、主として哲学(当時のいみでの)および文芸作品を通じて再検討することを試みている。当面の関心の中心は、今日一般に「ギリシア的理性」「ギリシア的ロゴス性」と言われているものの本性が、元来どのようなものであったかを、根本的に見直してみることにある。それは、古代ギリシアにおいては、きわめて豊かな重層的な内実をもったも

のであったと考えなければならないと思われるが、今日においては、そのわずかな一面のみが拡張受容されて、ときには理想化され、ときには激しい批判的とされているように思われるからである。

しかし、プラトン・アリストテレスの思想に関わるとともに、ここしばらく「ソクラテス以前」の初期ギリシア哲学研究に重点的に携わった上で、ギリシア哲学の流れを大きな総体として捉え直してみると、後者は、むしろソクラテス・プラトン・アリストテレスらによる「アテナイ哲学」を準備するものとして、その中に糾合されていくとともに、実際には、むしろそれとは別個の強力な伝統を継承・維持しつつ、いわゆるヘレニズム諸哲学派の中に、意外に根強く存続されていったことに気づかされる。ギリシア哲学に対するわれわれの視野を大きく占めている「アテナイ哲学」も、その時代の中にあっては、かえって初期ギリシア哲学とヘレニズム期の諸思想とを結ぶ大きな流れの中に取り残された孤島をなしているにすぎない、とも言わなければならないであろう。

そうした新たなスケールに即してギリシア思想史を見直すとき、「ギリシア的理性」「ギリシア的ロゴス性」の実態は、さまざまな仕方で異なった様相を顕わしてくる。そのさい、最近の諸外国における主要な研究動向の一つとして、初期ギリシア哲学のオリエン的な特質との連続性を明るみに出し、その非理性的な側面や魔術的傾向に目を向けることが重要視されているのが注意される。そうした要因が古代ギリシア思想の全般にわたって抜きがたい貴重をなしていることは明白である。しかし、それを単に理性・知性の対極にあるものとして捉えるのではなく、むしろある根本的な意味において、「ギリシア的理性」「ギリシア的ロゴス性」なるものを比類なく活性化させ、その豊かさを付与するものとなっている点を見落としてはならないであろう。他方、ヘレニズム期においては、その伝統はオリエンの思想と一層深く呼応しながら、独自の強力な流れを形成していったことがうかがわれる。これまで、そうした動向は否定的にしか扱われてこなかったが、今般の共同研究体制の中では、より広い専門的知見を糾合しながら、その実像を明らかにしていくことが可能となるであろう。

当面の課題は、古代ギリシアの原典にもとづいてその実相を明らかにし、その中でプラトンやアリストテレスの思想をも新たな視野から再評価しなおすことである。具体的な作業としては、関連論文の執筆のほか、ピュタゴラスに関する著作の執筆、ギリシア古典原典の新たな邦訳公刊などを予定している。目下の最

重点は、プラトンの「対話篇」構造の意味するものの解明に置かれている。これは、プラトンにおける「ロゴス」がいかに現代の脆弱なそれと質を異にするものであるかを端的に明らかにしてくれるはずである。これらの研究にさいなオて、今般の特定領域研究の体制は、多様な古典学の交流の場として、恰好の条件を与えてくれるものとなっている。特に具体的な共同研究の取り組みとしては、後期ギリシア医学を代表するガレノスについて、ギリシア語原典とアラビア語版（これのみが伝承しているものも多い）との比較照合作業によって、新たな解明を試みることに着手している。

【研究成果】

「古代ギリシア像」を「再検討」するために、意識してギリシア的思想文脈と思考様式を重視し、「ギリシアの中でギリシアを理解すること」を基本姿勢にした作業を進めている。特に当面の課題としては、上述のように、プラトン・アリストテレスを中心としたギリシア的「ロゴス」概念の内実を見直すこと、初期ギリシア哲学のもつ意味を捉え直し、むしろその流れがギリシア思想全体の基調をなしていることを明らかにするべく努めている。

これまでの主要な研究成果としては、以下のものがある。

論文「対話と想起 プラトンの方法〔その2〕」（2000年4月刊）は、プラトン哲学の展開において一つの大きな転機をもたらしている「想起説」の導入を主題的に取り上げ、それを従来とは異なった観点から見直そうと試みたものである。特に『メノン』『パイドン』の当該箇所をたねんに読み直すことによって、それがいかに根本的にプラトン哲学全体を方向づけているかを明らかにするとともに、イデア論をはじめとする独自の理論体系の解明と位置づけに新たな進展をもたらすことができたと考えている。最も主要な論点としては、「想起説」はそれ自体を理論的な認識論と見なしその当否を論ずることは必ずしも適切な議論ではなく、この説は、言わばそれ以降の諸理論の成立基盤をなす前提条件として重要な役割を担っているものであり、プラトンはそれをけっして「証明済み」の確定事実としては用いていない点に注意すべきこと、「想起説」の最大の意味は、われわれの「知」が外から「経験的」にあたえられるのではなく、それに触発されつつ「内」なる根拠へと問い返し、内発的な仕方でのみ成立することを明確にしている点にあること、などである。

また、論文「解体する自然のさ中なる生 エンペ

ドクレスの新断片発見によせて」（1999年8月）は、「ストラスブル・パピュロス」から最近新たに解読され、スエンペドクレスの大断片（約80行）の分析とその内容吟味を試みたものである。主な論点としては、これによって、彼の二つの哲学詩『自然について』と『カタルモイ』は、むしろ一つの一体的な著作と見なされるべきこと、詩作品全体がそこに語られている宇宙論的内容に呼応して、円環的・反復的叙述を重ねていること、彼が「現在」を宇宙全体の解体期と位置づけていることがより明瞭にされたこと、などである。

その他、伝存するギリシア哲学文献の紹介に則して、ギリシア哲学史を素描し直した論文「西洋古代哲学案内」（1999年8月）では、さきに述べたような、初期ギリシア哲学からヘレニズム期の諸思想へと連続していく流れにギリシア的なものの本然があり、その中で、プラトン・アリストテレスがいかに特異な、「非古代的」な位置にあるかを、新プラトン派に至るまでの全古代史を通覧する中で明らかにすることを試みた。

さらに現在継続中の作業としては、プラトンの「対話篇」構造の意味するものの解明に関する論文の執筆、プラトンおよびアリストテレスについての論集の編纂、ガレノスの著作の邦訳（アラビア語版との比較・照合を含む）などがある。

中国古典に現れる通常語についての再検討

研究代表者 木下 鉄矢
岡山大学文学部 助教授

【要旨】

- 1) 代表的な中国古典のひとつ『論語』に現れる第一人称代名詞「予（われ）」について考察する。
- 2) 他の通常の第一人称代名詞「吾」「我」に対し、「予」には「天」や「死」に直面している自己を表す例が『論語』に特徴的に現れることを指摘する。

- 3) このことより「予」は人間集団より切り離され切り立てられた「単独者」としての自我意識を基底とする第一人称代名詞であると解釈する。
- 4) 『論語』には別に「己(おのれ)」なる語がキーワードとして現れることにこの解釈を関連づけ、そのような「単独者」としての自己意識の成立が『論語』の「仁」「礼」「学」「文」などの観念群が現わす思想の基底となっていると結論づける。
- 5) この結論より「仁」「礼」「学」などの基本語群へと考察を広げる。

【位置付け】

『論語』は孔子の言行を弟子たちが記録したものを中心に形成されたテキストとされる。このテキストには別して鮮明な言語表出を行う一人の人物を現在でも読み取ることが出来る。それが「孔子」と普通呼ばれている人物である。そしてここに読まれる「孔子」とは、我々が普通「中国文明」と呼んでいる「文明」の、まさにそれが他の「非・文明」から峻別される「文明」であるという自覚(これを以下「文明意識」と呼ぶ)を持ち、その「文明意識」の核心を構成している観念群を鮮明に研ぎ出して、以後の時代へと響き渡る「言語テキスト」を生み出した人物である。

『論語』に研ぎ出されているその観念群とは、「文」「学」「仁」「礼」「君子」「君・臣」「孝」「徳」などである。これらがよってもって示す人間観・社会観・政治観・国家観こそが、古くより「中国」と呼ばれて来た「文明」なる価値意識の中心にある。

『論語』は以上のような「孔子」の鮮烈で核心を突く言語表出の記録として、漢代には「五経(五つの不変的な規範の書)」に次ぐテキストとされ、以後、東アジアの大陸部に展開した「皇帝」国家を支える統治理念へと編成された「中国」なる「文明意識」に触れ行く初等教科書として広く使用された。宋代にはむしろ「五経」よりも端的にその自分たちの実現すべき「中国文明」の核心を明かすテキストとして、「古典」の中心に置かれるようになった。さらに現在「漢字文化圏」と呼んでいる東アジアに展開している地域において、この『論語』は最も基本的な共有文化財として流通し、そこに展開した各地域・各個別の人間観・社会観・政治観・国家観の形成・深化に基本的な用語群と観念群を提供したのである(例えば伊藤仁斎、荻生徂徠など)。

しかし今述べたような歴史的経緯におけるその重要性とは別に、『論語』は、現在の我々にも直接に、そもそも人が、社会が、国家が「文明」的であるとはい

かなることなのか、という問題についての原初的とも言い得る時点での鮮烈・端的な自覚、研ぎ出しの記録として働きかけてくるテキストでもある。現在我々は多様な価値の共存する、あるいは抗争する状況の中に生きており、そのため、わが国においてはむしろ「価値の崩壊」が人々の口端に上ることが多い。しかしこの場合の「価値」とは結局のところ人が生きること根底を与える価値ということであろう。それはまさに、先に我々が「文明意識」と呼んだものに他ならない。思うに人が生きること根底となる「文明意識」を与えるものこそが「古典」と呼ぶに値するものである。そしてその文明意識の姿をその都度の「現在」の問題として「古典」から再生するのが「古典学」の真の課題であろう。『論語』は「文明意識の相対化と崩壊」の内にある現代にあつて、そもそもそのような「文明意識」は如何にして可能なのか、という我々の反省作業に拠点を与えてくれる点、まさしくなお「現代の古典」であると評価することが出来るであろう。

【研究成果】

『論語』に現れる「仁」「学」「文」「礼」などの観念群は、テキストの中では、「孔子」など発話者自身の明瞭なテーマ化の意識の下、他の用語から強い意味で選択されて発話されている。したがって従来からもこれらの観念群は特に「思想史」の観点から取り上げられて検討が加えられて来た。しかし本研究は、「通常語の再検討」を基本的な方法として提示し、彼ら自身の「テーマ化」の視点はひとまず「棚上げ」して、①彼らの言語表出行為においてその「テーマ化」という浮き出しに対して背景である「地(じ)」となっている「通常語」運用のレベルでの語彙選択、弱い意味での、すなわち「テーマ化」による強調が特に掛からない潜在レベルでの語彙選択に焦点を当て、②そのレベルにおける選択行為に伴い働く「意味の地形図」を明らかにし、③先に棚上げにした彼ら自身の「テーマ化」の意識に背後より意味を与え、今も与え続けている深層の「認知地図」の様相を洞察せんとする道筋をめざす。

本研究の方法上強調しておかなければならないのは、このような背後的である深層の「認知地図」の研究は、その対象がまさに背後的、「深層」的であるがゆえに、そこへと繋がっている痕跡に我々が或る時それとして「気づく」という「表層」破綻の瞬間の到来によってしか、それを発見し目撃する端緒が与えられ得ないということである。ここに報告する成果も、「論語」テキストに現れる「天」というキーワードをまとめて考

察していた際に、「天」が出現するテキストには「予」という第一人称代名詞が伴って観察されるという事実気づいたことに始まる。

『論語』中に現れる第一人称代名詞としては「吾」「我」が代表的であり、「吾」は115箇所、「我」は47箇所、「吾」は主格と属格で現れることが多く、「我」は主格などでも現れるが特に目的格で現れることが特徴である。これらの点は既に明らかにされている(尾崎雄二郎『中国語音韻史の研究』創文社、1980、所収「「吾」・「我」の使い分けについて」など)。これに対し「予」は28箇所、①父・君・師などの上位者としての「予」……14箇所、②宰予(宰我、人名)の「予」……5箇所、③「天」に向かい合う「予」……7箇所、④「死」に向かい合う「予」……5箇所、である。逆に「天」は19箇所現れるが、こちらの側からも、「予」と「天」とが向き合っていることが確かめられる。一例だけあげるならば、「顔淵死す。子曰く。ああ。天、予(われ)を喪(ほろ)ぼせり。天、予を喪ぼせり。」(先進篇)など。

他の用例などをも勘案し、我々は、「孔子」において「予」とは、自らが人間集団の一員として埋め込まれている日常的状态から切り離されて「人」という存在の逃れ得ぬ限界を標す「天」や「死」に直面し向かい合っている場合に選択される第一人称代名詞であった、と解釈した。一方通常の、人間集団の中の一員という立場での「われ」は「吾」「我」で表されるのである。「予」には孤独に「天」や「死」と向かい合い、そのことによって鋭く立ち上げられる「単独者」としての自我意識が背景となっている。そのような「単独者」としての自我意識の領野が自我意識一般の地図の中に「吾」「我」系に対立する選択肢の一つとして形成され存在しているが故にこそ、「予」なる語彙選択が言語表出行為の中で行なわれ得るのである。

そしてこの「単独者」として鋭くされている自我意識こそが、実は『論語』において「孔子」が彼の「文明意識」の核心にある「文」「礼」「仁」「学」などの一連の観念群を切り出す際に伴に働く観念形成の根底となっていた、と、我々は結論付ける。なぜならば、これらの観念群が「己(おのれ)」なる語と結ばれているテキストを我々は『論語』の中に見出すことが出来るからである。その例を挙げれば、「仁を為すは己に由(よ)る。しかして人に由らんか。」(顔淵篇)「古の学者は己の為(ため)にす、今の学者は人の為にす。」(憲問篇)など。「人」に対する「己」という確乎たる行為主体・責任主体の確立が「仁」「学」の根底として研ぎ出されているのである。「己」への強い強調

は人間集団に組み込まれ埋没しているだけの日常的な自我意識からいったん「単独者」へと切り立てられ切り離されて成立する鋭い自我意識の存在に媒介されて可能となるものであろう。その意味では「仁」にしても「学」にしても、現に自らが組み込まれている現実の人間集団への埋没を自らの単独者としての自我意識をテコに「普遍」へと乗り越えて行こうとするところに成立している観念だったということになる。

以上が本研究が中国古典中でも代表的とも言い得る『論語』に関して現在までに明らかにし得たことである。

46 A04班・公募研究

朝鮮古刊本及び古鈔本の調査とその文献学的研究

研究代表者 藤本 幸夫

富山大学人文学部 教授

【要旨】

- (1) 日本には多くの朝鮮本があり、その中には本国にもない貴重書が多く含まれる。しかしその所在や書誌学的内容は充分知られていない。筆者は30年程前より総合調査を始めており、それらの書誌学的研究と総合目録作製を計画している。
- (2) 朝鮮本の調査を朝鮮文化理解の一助に位置づけた。
- (3) 朝鮮本の中には中国での佚書が、朝鮮で出版された形で伝存するものがあり、中国文化研究にも資する。
- (4) 日本は朝鮮文化の影響を深く受けており、朝鮮本を底本として多く利用している。日本文化を正しく評価するためには、中国文化の影響のみならず、朝鮮文化の影響を正確に知ることが必要である。

【位置付け】

日本は古代より中国・朝鮮の文化的影響を受けて来た。朝鮮は中国の影響下にあつて、古代に於いては、中国に次ぐ東アジア第二の文化国であった。日本は古

代にあっては、実際的な往来は中国より、朝鮮との間の方が多かった。又朝鮮半島よりの渡来人も、文献学的に、考古学的に確認されている。

文化伝来の一面を代表するのは書籍である。応神天皇時に百済の博士王仁によって、『論語』と『千字文』が伝えられたとするが、いずれも中国書であって、17世紀以降を除けば、朝鮮伝来書の殆どは、中国成立の書籍であった。それらの書籍は、例えば四書・五経のような儒書、『史記』『漢書』のような史書、『文選』『白氏文集』の如き文学書であった。

6世紀前半百済よりの仏教伝来以降、仏書が多く伝えられることになる。8世紀に入ると日本人の新羅留学生も生じ、新羅よりの仏典が多く齎された。残念ながら古代朝鮮3国、即ち高句麗・百済・新羅よりの渡来書は、現物が確認されていないが、記録には残されている。又8世紀前半の新羅留学僧審祥の齎来目録が転写されて伝わっており、そこには中国の仏典以外に、新羅人所撰の仏典も記録されている。

その後平安・鎌倉時代に於ける朝鮮書の齎来は明らかではないが、室町時代にはかなり大量の仏典が流入した。その中心は大蔵経であり、その一部は現在も伝存している。

その後豊臣秀吉の朝鮮侵略によって多くの朝鮮本が将来された。これらの書籍の中には失われたものもあるが、多くは大事に保存されており、本国である朝鮮では既に佚書になっているものも多い。

江戸時代に入るとは、江戸幕府と朝鮮の間に立って交渉を進めたのは、対馬藩宗氏であった。宗氏は自らのため、或いは江戸幕府や諸大名等からも要請を受けたようで、多くの朝鮮本を蒐集しており、目録によれば3000冊余も所蔵していたことが確認される。

明治以降には1910年に日本が朝鮮を植民地化したこともあって、やはり多くの朝鮮本が蒐集されている。

以上に述べた如き事情によって、日本には多くの朝鮮本が伝存し、その中には朝鮮に伝わらないものも多い。筆者は約30年程前から、日本現存朝鮮本の総合的調査を行っている。筆者の調査は従来行われている様に、書名・巻数・冊数・撰者・刊年・刊行書肆等のみならず、同版・異版の区別、初印・早印・後印の識別、刊行者・刊行地、刻手名の調査、更には撰者の経歴までに及んでいるため、多くの日子を要している。従来目録では書籍の存在が確認し得るのみで、研究遂行上不便な点が多々あった。筆者は調査の結果を目録として刊行する予定である。

筆者の朝鮮本調査と研究は、単に朝鮮学にのみ有効なものではない。中国学や日本学にも極めて重要なので

ある。中国所撰書で、中国では佚書となっているものが、朝鮮で刊行されて伝わる場合がある。例えば今世紀初に海印寺から板木の発見された『祖堂集』は、唐代禅宗史の研究の基礎とも言うべき貴重な資料であるが、中国では既に失われ、朝鮮に伝存していた。その他にもこの様な例は多い。又日本学について言えば、16世紀末から17世紀半ばにかけての、所謂古活字印刷の盛行は、豊臣秀吉の朝鮮侵略を契機とする、朝鮮活字印刷の影響を深く受けて成立している。これは日本の近世出版文化の出発点となった点で、重要な意義をもつ。又朝鮮本が日本出版書の底本となることは、古くからあったが、特に江戸時代には秀吉時の将来本が、底本を多く提供したのである。その分野は、経書・史書・医書・本草書・朱子学書・仏書・道教書・文学書等々の多岐にわたる。江戸時代の学術を語る際にも、朝鮮出版文化の影響は触れないで済まされないのである。

【研究成果】

さて、筆者は平成11・12年度の研究助成を受け、下記の如く、調査及び研究を行った。

平成11年度は、関西では京都大学附属図書館・大阪府立図書館・杏雨書屋の蔵書を調査し、約50部200冊を調べた。特に杏雨書屋蔵『玉川先生詩集』は高麗刊本で、天下の孤本である。関東では国会図書館・静嘉堂文庫・尊経閣の調査を行い、約150部500冊を調査した。この中には韓国にも珍しい書籍が20部ほど含まれている。又9月には台湾故宮博物院及び国家図書館の調査を実施した。両所は約20年前に6割ほどの調査を終えていたが、此度は残余の調査と、その後の調査から得た知見を基にした再確認を行った。

筆者の朝鮮本調査は1910年以前の刊本及び鈔本を対象としているが、海外所在のものについては、その対象を江戸末以前日本所蔵本としている。明治期に日本に來た清朝学者楊守敬は、日本に中国古本の存在することに驚き、多量の書籍を購入した。その中には朝鮮本も含まれており、これらは一旦北京に蔵されたものの、現在は台湾故宮博物院の所蔵に帰している。これら朝鮮本は、15世紀刊本を含む、16世紀刊本が主で、養安院本を多く含んでいる。養安院本とは、医師養安院曲瀨正琳が浮田秀家から贈られたとされる朝鮮本を主とする蔵書で、15・16世紀刊の朝鮮本がその中心をなしている。養安院本は明治初頃に散逸したらしく、現在諸処に伝存している。筆者は養安院本の現存確認を行っている。

平成12年度は大阪府立図書館・国会図書館・東洋文庫の調査を行っている。8月末現在では、約250部700

冊の調査を終えている。この中にはやはり15・16世紀の善本を多く含んでいる。

9月にはパリ及びロンドンにて20日間の調査を実施する。パリは国立図書館を中心にして、15・16世紀刊本の調査を行う。ロンドンでは大英図書館所蔵朝鮮本調査を行う。大英図書館蔵朝鮮本は、主に明治期のイギリス人外交官アーネスト・サトウ蒐集に係わるもので、日本書の蒐集が中心ではあるが、少なからざる朝鮮本を含んでいる。サトウの眼力の確かさによって、15・16世紀刊本が多く、その中には前述の養安院本も混在する。従来はカードによる検索で、甚だ困難であったが、近年川瀬一馬氏等監修の目録が出版されており、予め所蔵書が判明している。筆者は同版と見做される既調査カードを持参して調査に当たる予定である。目録から見ても、珍しい朝鮮本の存在が知られ、大きな成果が期待される。

上記調査済みの資料については、現在入力中である。又論文としては、「朝鮮刻手名の研究」(『勝村哲也教授退官記念論文集』平成12年度中刊行予定)、「日本現存内賜本について」(『鄭光博士還暦記念論文集』平成12年中刊行予定)があり、平成12年9月28日には、韓国古印刷国際学術講演会(韓国清州市)に於いて「日本の古活字印刷」について講演する予定である。

B) 古典から見た朝鮮文化の特徴

朝鮮は古くから中国文化の影響を深く受けて来た。紀元前108年に前漢武帝が楽浪を始めとする4郡を朝鮮に設置してから、中国文化が本格的に流入し始めた。

高句麗(BC 37 668)は372年に国立大学とも言うべき「太学」を創設し、儒書や『史記』『文選』等の書籍が学ばれた。百濟(BC .18 660)や新羅(BC 57 935)も、高句麗同様中国文化を受容した。新羅では人材登用のため、788年には科挙制度の前身とも言うべき、読書三品制を設けた。

高麗(918 1392)では958年に文臣に対する科挙制度が実施された。中国古典の知識が単に教養としてではなく、直接立身出世に結びつく手段となり、これが中国文化浸透の徹底化に大いに資したと考えられる。

一方仏教は372年に高句麗に伝わり、百濟・新羅にも伝播して、朝鮮は仏教文化国として栄えた。高麗時代にも大いに崇拝されたが、政治との癒着が高麗亡国の一因ともなり、次の朝鮮朝時代には斥けられた。

朝鮮朝(1392 1910)時代には仏教は排斥され、高麗朝後半に伝えられた朱子学が、為政の基と定められた。朝鮮朝初期には朱子学の導入と消化に力が注がれた。それは政府から出版される書籍(官版)を見るとよく判る。

朝鮮文化の底流を為すのは、儒教(朱子学)・仏教・道教・民間信仰と考えてよいが、その中支配者階級によって重んじられたのは朱子学であり、これはまた支配者階級のみならず、一般庶民階級にまで深く浸透している。

今日の庶民生活における四礼(冠・婚・葬・祭)は朱子学によっており、又思考方式や行動様式もそれに則っている。

従って朝鮮文化を知るには、朱子学を受容を知ることが極めて重要である。筆者は朝鮮朝が本格的に朱子学を受け入れるに際し、具体的にどのような書籍を、どのような順で受け入れたかを、朝鮮朝前期の官版を中心に探りたい。

インド古典における言語論の展開の解明とその比較論的考察

研究代表者 赤松 明彦
九州大学人文科学研究院 教授

分担者 船山 徹
九州大学文学部 助教授

【要旨】

1. 本研究の目的は、5世紀インドの古典『ヴァーキヤ・パディーヤ』の研究を中心にして、インドの言語哲学の展開を解明し、他領域における言語哲学思想との対照を通じて、それを比較論的に考察することにある。
2. 言語哲学が20世紀の哲学の最重要テーマであったことは明らかであるから、インドの言語哲学を解明し比較論的に考察することは、現代思想にとっても有意義である。
3. 『ヴァーキヤ・パディーヤ』の思想の特徴は、「全体は部分に還元できない」という点にあり、これはインド思想史上でも特異である。本研究は、この点をテキスト・データベースの作成と語彙研究を通じて明らかにした。

【位置付け】

本研究は5世紀のインドの文法学者であり言語哲学者であるバルトリハリの著書『ヴァーキヤ・パディーヤ』の研究を中心にして、インド古典期の言語論の展開を、言語哲学とそこに表現される世界像を解明することによって詳細に明らかにするとともに、ギリシア哲学やイスラーム神秘主義の領域における言語哲学、さらにまた現代思想における言語論を参照し、それらの領域の専門家との共同研究作業を通じて、古典インドの言語哲学を比較論的に考察することを目指すものである。『ヴァーキヤ・パディーヤ』は、インド古典の中でも最も重要な古典のひとつである。インド最古の古典である「ヴェーダ」以来、インドの宗教と思想においては、「言葉」についての考察は常に最重要の位置を占めてきた。それは一方では、「聖なる言葉（マントラ）の宗教的・神秘的な「言葉の力」を信じる伝統を形成するとともに、一方では「サンスクリット」（完全なる言語）という言語の体系を確立する文法学の伝統を紀元前6世紀には生み出すに至っていた。本研究が対象とする『ヴァーキヤ・パディーヤ』は、この文法学の伝統の中で最も重要な位置を占めるテキストであると同時に、後世のヒンドゥー教（シヴァ派）の神秘主義的言語観の源ともなったという点で、インドの言語哲学の展開を考える上で、最重要のテキストである。

この『ヴァーキヤ・パディーヤ』において展開される言語哲学の要点をひと言で言うならば、「文こそが単一不可分の意味の全体である」という考えである。言葉の単位として、「単語」ではなく「文」を認めるというこの考えは、世界を分析的に捉えてその構成要素の点から説明しようとする通常の世界観（インドでもこの思想の方が圧倒的で、紀元前後から11世紀にかけて仏教学派や実在論学派によって先導された認識論や論理学はいずれもこれに基礎を置く）とは異なり、世界を「全体」と「連続的な運動」の観点から捉えようとするものであった。このような考えは、インドの思想史の流れの中では正統の位置を占めることはなかったが、現代思想の言語論の中にそれを置いてみると、逆に我々はそれを正当に評価する視点を獲得することになると思われる。なぜなら20世紀の思想の中で「言葉をめぐる議論」は最も重要なテーマとしてあったからであり、今や我々は言語哲学における多様な視座を獲得しているからである。本研究は、それら現代思想の言語論をも参照して、インド古典における言語哲学の展開を、思想的に解明することを目指している。

【研究成果】

本研究者はすでに『ヴァーキヤ・パディーヤ』の第一巻と第二巻について、前者は本文詩節と注釈を、後者は本文詩節と注釈の一部を、日本語訳して公表していた。第二巻の注釈についてはその一部しか翻訳を發表できなかったのは、現在出版されている第二巻のテキストには不備が多く、校訂版テキストというには程遠いものであり、現在A・アクルジュカルによってその校訂作業が行われているからである。アクルジュカルはすでに10年以上も前からこの校訂版のテキスト出版を予告しているのであるが、残念ながらいまだに出版には至っていない。そこで本研究においては(1)まず第二巻の注釈本文のテキスト・データベースを作成し、すでに入力済みの第一巻、第二巻、第三巻詩節本文、および第一巻注釈(自注とプンヤラージャ注)とそれとを対照しつつ第二巻注釈の本文の正確な読みの確定を試みる、(2)同時に第三巻に対するヘーラーラージャの注釈テキストをも入力しデータベース化を行い、それとの対照も行う、という作業目標を立てた。これらについては単純なテキスト・ファイルとしてはすでに完成した。サンスクリットをはじめとするインド学文献については、すでに韻文テキストについてはその入力方式、マークアップ方式はある程度完成しているし、その成果も発表されているといえるだろう。しかしながら散文文献については、どのような形でデジタル・テキスト化するかはいまだ模索中である。たとえば特定の出版テキストを定本にしてそのページ割を参照して本文を改行し割り付けていくのか、あるいはパラグラフごとにまとまりを設定するのか、あるいは注釈文献の場合はそれが基づく本文の詩節番号などに準じて区切りをつけるか、いずれの方法が最もよいか、特にネット上での公開を前提にしてこれを考える場合、いまだこれらのテキスト作成の方式やマークアップの形式については結論が出ていない。本研究では、パラグラフごとに分割する方式をとっているが、これはあくまで次に述べるように本研究が、目下のところ語彙研究を中心に作業を行ったことの結果である。散文注釈文献のデジタル・テキスト化とマークアップ方式については、「本文批評と解釈」(A02)班や、「情報処理」(A03)班などの成果を参照して整備していきたいと考えている。

上述の点はあくまで予備作業である。以上の作業を通じてひとまずパラグラフごとに分割された散文テキストのデータベースを作った上で、主として当時の言語論と存在論とに関わる語彙を抽出し語彙研究を行った。たとえば dravya(「実体」)とか guṇa(「属性」),

kriyā (「運動」), jāti (「種, 普遍」) といった語 (これらの語は, 文法学における語彙であるとともにヴァイシェーシカ学派などの存在論におけるカテゴリーでもある) を取り出し, それらのこのテキストにおける用法を明らかにするとともに, 同時に関連する他のテキスト, 『パダールタダルマサングラハ』, 『ニヤーヤ・カンドリー』, 『ニヤーヤ・ヴァールツィカ』, 『ニヤーヤ・マンジャリー』, 『シャーバラ・バーシュヤ』, 『シュローカ・ヴァールツィカ』 などにおける用法と比較検討した。ここではあくまで正確な理解と, それを日本語に翻訳することの試みを行ったが, さらに明らかにし得たこととして次のことを言うことが出来る。

従来ヴァイシェーシカ学派をはじめとする諸学派のカテゴリー論の背後には, 文法学派の考えの影響があったとされてきた。確かに, 文法学は, 言葉を構成する諸要素を分析して把握することから生まれたものであった。その意味で, 現象世界を諸要素に分析してそれをカテゴリーとして数え上げる思考と文法学が密接に関係したことは確かであろう。しかしながら, 『ヴァーキヤ・パディーヤ』においてもまた同様の思考の中で, 「実体」や「属性」といった語彙が使用されていたのかと言えば, そうではないのである。これは, 先に述べたバルトリハリの根本主張「言葉は文である」を考えれば容易に想像がつくのであるが, 彼にとって, 「文」とは「全体」の謂いである。彼の考えでは, 「部分」をいくら集めても「全体」にはならない, 「全体」は「部分」に分割できないのである。バルトリハリは文法学者でありながら, 分析的思考の限界を認識していたのである。この点で, 彼を神秘主義者と位置付けることもなされるが, 正しくは, 他の思想家の多くが要素還元主義 (原子論) 的に世界を把握しようとしたのに対して, バルトリハリは全体主義 (ホーリズム) 的に世界を把握していたということなのである。この「要素還元主義的」と「全体主義的」というのは, インド言語論, さらにインド思想の展開を考える上で分類概念として有効であると思えるので, 今後の研究ではこれを軸にして各種のテキストに示される言語論について考察を進めることとする。

イスラーム哲学におけるアリストテレス『デ・アニマ』受容と靈魂論の展開

研究代表者 小林 春夫
東京学芸大学教育学部 教授

【要旨】

位置付け

- ①本研究のテーマ アリストテレス『デ・アニマ』の受容と展開
- ②イスラーム哲学史の時代区分
- ③「確立期」の靈魂論 イブン・スィーナーについて
- ④「展開期」の靈魂論 スフラワルディーと照明学派について
- ⑤本研究の意義

研究成果

- ①イブン・スィーナー『救済の書』(「靈魂論」)の解説・翻訳・訳注
- ②スフラワルディー『光の拝殿』の解説・翻訳・注釈
- ③「照明学派」の著作に関する写本調査と校訂

【位置付け】

本研究の目的は, アリストテレスの『デ・アニマ』の受容史をたどることによって, イスラーム哲学における靈魂論の成立と展開を明らかにすることである。

イスラーム哲学は, 9から10世紀にかけてアッバース朝の下で行われたギリシャ古典のアラビア語訳に始まり, イブン・スィーナー (=アヴィセンナ, d.1037) による体系化を経て, 13世紀以降の「照明学派」に引き継がれる。この流れを「移入期」「確立期」「展開期」と3つに区分することができるが, 本研究では特に「確立期」から「展開期」にかけての流れを明らかにする。

ところで, アリストテレスの著作はそのほとんどがアラビア語に翻訳され研究されたが, 「確立期」以降はその著作そのものというよりも, その思想内容が受け継がれ, それをさらに発展させた著作が新たな古典として定着した。この意味で重要なのがイブン・スィーナーである。なぜならば, 彼の靈魂論はアリストテ

レスの『デ・アニマ』解釈の規範として、それ以降のイスラーム哲学の流れを決定したからである。言い換えれば、彼の靈魂論は、アリストテレスの原典訳に代わって、それ自体で一つの古典と見なされるに至ったのである。

そこで本研究では、イブン・スィーナーの体系的著作の一つ『救済の書』の中から靈魂論に該当する部分を日本語に翻訳し、それによって彼がどのように『デ・アニマ』を読み、そこからどのようにして自説を構築していったのかを明らかにしようとした。

次に、「展開期」に関しては、「イスラーム照明学派」を取り上げた。その理由は、「照明学派」の思想はイブン・スィーナーの哲学を批判的に受け継ぎながら、それまで哲学とは独立に発展してきた神学(カラム)や神秘主義(スーフイズム)の思想を統合したものである。これを『デ・アニマ』受容史の観点から見ると、それは従来の哲学的靈魂論をより広範な視野において捉え直し、それをイスラーム的人間論の中心にすえたと言えるだろう。

そこで本研究では、同学派の創始者であるスフラワルディー(d.1191)の著作から、彼の思想を概観するに好適な『光の拝殿』を日本語に翻訳し、それに詳細な注釈と解説を付した。しかしながら、照明学派研究は近年開始されたばかりであり、重要なテキストの多くが未刊のままに留まっている。とくに靈魂論については、スフラワルディーの『開示の書』と『対話の書』の当該部分(自然学部分)が未刊であり、この問題を論じた先行研究も皆無である。また、彼の後継者に当たるシャハラズリー(13世紀末)の著作『比喩と象徴』も未刊である。そこで本研究では、これらのテキストの校訂を目指し、写本調査と資料収集を行い、現在それらに基づいて校訂作業を進めている。

以上の研究は、主としてイスラーム哲学の内的発展に関わるものである。しかしながら、イスラーム哲学はその本質上自己完結した研究領域ではありえず、西洋古典学やイラン学等と不可分な関係にある。また中世ユダヤ哲学やスコラ哲学との関係において、イスラーム哲学の与えた影響が決定的に重要であることは言うまでもない。したがって、アリストテレスの『デ・アニマ』を原点とし、その受容と展開をたどる本研究が、関連する諸領域の研究に多少なりとも貢献できれば幸いである。さらに、イスラーム思想研究の蓄積の乏しいわが国において、原典の翻訳を含むこの研究が、一般の人々のイスラーム理解の幅を広げることができればと考えている。

【研究成果】

現在までの研究成果は次の3点に集約される。
(1) イブン・スィーナーの『救済の書』(al-Najat)の「靈魂論」に該当する箇所(ed. Kurd-Ali, Cairo, 1938)では、pp.157 - 193に対応する。)の解説・翻訳・訳注。

本論考は、イスラーム哲学の「確立期」における靈魂論の標準的著作である。それはアリストテレスの『デ・アニマ』受容の一つの到達点であるとともに、それ以降の靈魂観・人間観に決定的な影響を与えた。翻訳にあたっては、各種の版を比較検討し、本文の確定に努めた。また解説および訳注において、本論考とその基礎となった『治癒の書』(al-Shifa')および『靈魂の諸状態』(Ahwal al-Nafs)とを比較し、本論考の成立過程について論じた。

この研究の成果としては、それが翻訳を主体とするものである以上、可能な限り正確な訳文によって著者の思想を明らかにしたことが第一である。また特に重要な語彙についてはラテン語の対応語彙を示すなど、ギリシャ哲学や西欧中世哲学との関係にも配慮したつもりである。なお、本訳は日本語による最初の翻訳である。

(2) スフラワルディーの『光の拝殿』(Hayakil al-Nur)の解説・翻訳・注釈。

本書は、イスラーム哲学の「展開期」に属する「照明学派」の創始者スフラワルディーの著作であり、同学派の靈魂論を知る上で重要な著作であるばかりでなく、わが国ではほとんど知られていない同学派の思想全体を紹介する上でも格好の著作である。その靈魂論は上記イブン・スィーナーの思想を受け継ぎ発展させたものであるが、さらにイスラーム神秘主義思想や、キリスト教およびゾロアスター教的要素をも加味したもので、この時期の哲学の特徴を端的に示している。翻訳にあたっては、各種の版(写本を含む)を比較検討し、本文の確定に努めた。また、イブン・スィーナーの靈魂論との比較を行うとともに、16世紀の哲学者ダウワーニーおよびギヤース=アッディーン・シーラーの注釈を参照することによって、「確立期」から「展開期」さらに近代に至る靈魂論の発展過程について明らかにしようとした。

本研究の成果としては、第一に、日本語による最初の翻訳として、その思想内容を紹介したことである。また、上記の注釈書のかなりの部分を訳注として翻訳したことで、テキスト伝承における注釈書の重要性と、思想の継承と発展の具体相を明らかにできたものと考ええる。

以上の(1)と(2)については、『中世思想原典集成』(上智大学中世思想研究所,平凡社,平成12年度出版予定)に公表する。

(3)「イスラーム照明学派」の著作に関する写本調査とその校訂。

まずスフラワルディーについて言えば、『開示の書』(al-Talwihat)と『対話の書』(al-Mashari' wa'l-Mutarahat)の写本を調査した。これらの二書はそれぞれ論理学・自然学・形而上学を含む体系的著作であるが、これまでのところ形而上学の部分のみがアンリ・コルバンによって校訂されているにすぎない。そこで本研究では、それ以外の部分を校訂すべく、その写本を調査し、マイクロフィルム等の資料を収集した。

その成果としては、二度のイスタンブールにおける調査によって写本の所在と内容と状態を明らかにし、とくに重要なものについてはマイクロフィルムを取得した。現時点では『開示の書』の「靈魂論」の部分の校訂が完了しているだけであるが、引き続き『対話の書』の校訂にあたりたい。また今後、これらの校訂版と、前者に付された注釈書(シャハラズーリーおよびイブン・カンムーナ)もあわせて、詳細な内容を発表していきたいと考えている。

次に、シャハラズーリーについて言えば、『比喩と象徴』(al-Rumuz wa'l-Amthal)を校訂すべく、その写本を調査した。同書は靈魂論を中心に、その浄化と完成について述べた独創的な著作であるが、先行研究は皆無である。これまでに8種の写本を調査し、そのマイクロフィルムを取得した。現在、そのうちの3写本を基に校訂作業を進めており、全体のほぼ3分の2が完成している。これについても近いうちに、詳細な報告を行う予定である。

古典ハンバリー派法学の成立と発展の比較思想史的研究

研究代表者 中田 考

山口大学教育学部 助教授

【要旨】

- (1) スナ派4大法学派の一つハンバリー派法学の古典的展開の凝縮された綱要として定評。
- (2) アラブ諸国で多くの版が出ている外、テープにも吹き込まれており、現代に至るまで多くの注釈が編まれている。
- (3) 本文の前半部『神事編』の全訳及び、他の注釈を網羅した訳注作成。
- (4) ハンバリー派は教友の合意、イスラーム以前の律法を法源として認めなかった、との通説の反証例の発見。
- (5) これまでオリジナリティーを否定されてきた、要約や注釈の再評価。

【位置付け】

- (1) 当該古典の文明中における位置づけ
イブン・クダーマ(イスラーム暦620年没)はハンバリー派のみならず、スナ派4大法学派全てで今日に至るまで重んじられている比較法学書『アル=ムグニー(大全)』の著者でもあるが、その『アル=ムクニウ(満足)』は、ハンバリー派の最も標準的な古典教科書であり、現在に至るまで読みつがれており、イブン・アビー・ウマル(d.682)の『アル=シャルフ・アル=カビール(大注釈)』、イブラーヒーム・ブン・ムフリフ(d.884)の『アル=ムブディウ(卓越)』、アル=ミルダーウィー(d.885/1480)著『アル=インサーフ(公正)』などの注釈書が編まれる一方、アブー・アル=ナジャー(d.960/1560)によって『ザード・アル=ムスタクニウ(満悦を求める者の糧)』として要約されている。『ザード・アル=ムスタクニウ』にはアル=パフティー(d.1051)による古典注釈『アル=ラウド・アル=ムルビウ(新緑の牧場)』がある。

(2) 当該古典の現代における価値

『ザード・アル＝ムスタクニウ』は現代のアラブ諸国で多くの版が刊行されている外、サウディアラビアでは6巻のカセットテープも市販されている。また『ザード・アル＝ムスタクニウ』には現代の学者による注釈アル＝ブライヒーの『アル＝サルサビール(葡萄酒)』、イブン・ウサイミーンの『アル＝シャルフ・アル＝ムムティウ(喜ぶべき注釈)』、またその上述の古典注釈『アル＝ラウド・アル＝ムルビウにも現代の学者アル＝ナジュディ、アル＝アンカリーが脚注を作成しており、同書が現在におけるまで一般読者のレベルでも読み継がれ、研究が続けられていることが分かる。

【研究成果】

(1) 1年半の研究成果

本研究はこの『ザード・アル＝ムスタクニウ』を中心に据えて、ハンバリー派古典法学の全体像を俯瞰することを試みた。

先ず『ザード・アル＝ムスタクニウ』の本文の前半部「神事編」を全訳すると同時に、上述の同書の諸注釈及びその脚注に加え、イブン・クダーマの『アル＝ムグニー』、イブン・ムフリフ、イブン・ムフリフ(イスラーム暦884年没)の『アル＝ムブディウ(卓越)』、アル＝マルウィー(1033年没)の『ダリール・アル＝ターリブ(学生の手引)』等のハンバリーの古典をも参照し、ハンバリー派内部での学説の発展の中に『ザード・アル＝ムスタクニウ』を位置づけることが可能となるような詳細な訳注を作成した。

更に、「礼拝の纏め」の規定を取り上げ、ハンバリー派のみならず、ハナフィー、シャーフィイー、マーリキーのスンナ派他3法学派、シニア派との異同も具体的に明らかにし、それらはすべてテキスト・ファイルに保存した。

(2) 当該研究によって明らかになったこと

『ザード・アル＝ムスタクニウ』の翻訳、訳注作成の過程で、ハンバリー派が、「類推よりもクルアーン、ハディースの本文を優先する」¹、教友のイジュウ(合意)、イスラーム以前の律法を法源として認めない」といった通説の反証例が発見された。

また現在のサウディアラビアでは1986年の現イスラーム問題・ワクフ・宣教・善導相アブド・アッラーフ・アブド・アル＝ムフスィン・アル＝トルキーによるイブン・クダーマの『アル＝ムグニー』(全15巻)の新しい校訂、前イフターウ常設委員会常任委員アブド・アッラーフ・ブン・アル＝ジブリーンによる1991

年の『シャルフ・アル＝ザルカシー』(全7巻)、1992年のアブド・アル＝ラフマーン・アル＝ナジュディの『アル＝ラウド・アル＝ムルビウ脚注』(全7巻)の校訂が出版されるなどハンバリー派フィクフの古典の校訂、出版が盛んであるが、特にアル＝カーディー・アブー・ヤウラーのアル＝マサーイル・アル＝フィクヒーヤ(法学的諸問題)の1985年の校訂が公刊されたことはハンバリー派法学の発展を跡付ける上で極めて重要である。

また法学各論においては、イスラーム国法学の分野におけるハンバリー派の古典法学書イブン・タイミーヤ(728年没)の『アル＝シャーサ・アル＝シャルイヤー(イスラーム法に基づく統治)』が極めて重要な現代的意味を有しており、アラビア語世界のみならず、それぞれ約2億人の言語人口を有するトルコ語、マレーノインドネシア語にも、当該分野における最重要古典の双璧としてシャーフィイー派法学のアル＝マーワルディーの『アル＝アフカーム・アル＝スルターニーヤ(統治者の諸規則)』と並んで翻訳され市販されており、ハンバリー派古典が、狭くンバリー派内部だけでなく、国法学の分野では現代イスラーム世界全域に大きな影響を与えていることが明らかになった。

(3) 採用した新方法、新視点

ハンバリー派に限らず、古典イスラーム法学についてはそもそも邦訳が全く存在しない。本研究では、本文の翻訳をそれに先行する古典の出典を明らかにするのみならず、それに後続する注釈、脚注との対比において、ハンバリー派法学の発展を詳細に跡付けられるように工夫をしたが、こうした方法は欧米のイスラーム研究にも先行例がない。

また個別の問題を取り上げて、ハナフィー、シャーフィイー、マーリキーのスンナ派他3法学派、シニア派との異同も具体的に明らかにしたが、法学派間の比較もこれまでは法源論などの抽象的レベルでは行われていたが、具体例に沿った研究は殆ど存在していなかった。

また国法学におけるハンバリー派の古典理論のアラビア語世界以外での受容状況、現代のイスラーム政治論に与えた理論的影響についても先行研究は存在しない。

以上、本研究は、イスラーム法学研究として、学説史研究、比較法学研究における新方法、またイスラーム学の古典研究とイスラーム地域研究を架橋する新視点を提供している。

古典古代の弁論家と修辭的伝統

研究代表者 小池 澄夫
滋賀大学教育学部 教授

【要旨】

1. 古典古代の弁論家は、ヨーロッパの教養の根幹である修辭的伝統の源泉に位置するが、この分野の研究はわが国の西洋古典学において著しく立ち後れている。当該研究はその欠落を埋める一助となることを目指している。
2. ギリシアの弁論家は十人が古典（規範・典型として学ぶべきもの）とされているが、このうち遠大な文明論的視野をもつイソクラテスを取り上げて、その著作集を全訳、注解し、従来プラトン哲学との対比でのみ見られることの多かったイソクラテスの全貌を示す。
3. とくにその代表作『アンティドシス』は、法廷弁論の形式を独自に拡張して自伝文学というジャンルを創始したもので、その新しい工夫のありか、また同時代のソクラテスに関する著作群の影響を認めることができる。ここで鍵となるのは、真実を表現するための虚構（ミーメシス）の手法である。

【位置付け】

当該研究対象は、紀元前四世紀のギリシアの代表的な弁論家であり、人文的教養の源泉となったイソクラテスの著作集、とくにその最高傑作である『アンティドシス』であるが、これは「古典古代の弁論家と修辭的伝統」というもっと大きな研究の一部である。

[当該古典の文明中における位置づけ]

ヨーロッパにおいて弁論・修辭学（レトリック）とは、文明の基盤をなす教養の根幹として、ローマ共和国から帝政期にかけて連続と継承発展し、そしてユスティニアヌス帝の治世以降はキリスト教教父の著作や説教に採り入れられ、中世を生き延び、ルネサンスから現代に至るまで続くところの、最も古く最も長い伝統である。この伝統についての知見なしには、西洋の

文学・演劇はもとより、政治家や評論家の演説や文章について理解することは覚束ない。この伝統の源泉であるギリシア弁論術が扱う対象は、およそ文明なるものが創造し表現するあらゆる価値体系を包含している。レトリックの技術こそは、そのような諸価値を社会に浸潤せしめる教育装置であり、継続する文明の根底において機能しているものである。

ギリシア（ヘレネス）とは民族名にあらず、「ギリシア人とは...われらの学問教養（すなわち、弁論・修辭の学）を分かちもつ人を意味している」というイソクラテスの言葉は、蓋しこの伝統の創始者にふさわしいものといえよう。

[当該古典の現代における価値]

レトリックは政治権力および文化を統合するための必須の道具とみなされていた修養であった。裏を返せば、このような技術の精髓を取り出すことによって、それぞれの文明の特性を詳らかにすることができるだろう。今日、人間の生と言語と歴史とが輻輳する現象の理解を獲得するために、欧米では古典古代の弁論術が盛んに研究されている。しかるに、わが国の西洋古典学は弁論・修辭学の部門は緒についたばかりである。ただし、そのような包括的な研究は一人の力には余ることなので、先鞭をつけて他の研究者の刺激になることを念願している。また現今の社会情勢をみると、言語能力と歴史感覚における全般的な衰退の兆候が著しい。原因は映像メディアの発達にも帰せられるが、初等国語教育と新聞・雑誌のマス・ジャーナリズムの年来の劣化によるところが大きい。古代ギリシアのレトリックは、その俗悪性の最低線で測ってみれば、現代における新聞・雑誌ジャーナリズムに最も近い。当該古典には、言論のこのような墮落に対する実効性のある批判が籠められている。

【研究成果】

[一年半の研究成果]

この形成期のギリシアの弁論術・修辭学においては、法廷弁論、政治演説、追悼もしくは顕彰演説（演示弁論）の三部門の区別があったが、これらを横断あるいは統合し、言語表現の可能性を広げる試みもなされている。とくに、イソクラテスの『アンティドシス』は、法廷弁論の様式から自伝文学という新しい表現形式を創始したといえる。

翻訳作業と並行して、以上のような新しい表現形式がどのようにして可能になったかを探る過程で、あらためて「ミーメシス」概念を再検討する必要に迫ら

れ、その考察の結果を本年6月の西洋古典学会で、プラトンの『国家』第十巻におけるミーメーシス概念の検討について研究発表した(「プラトンのミーメーシス論再読 『国家』 Resp. X. 595A-602C」の表題で『西洋古典学研究』XLIXに掲載予定)。

[当該研究によって明らかとなったこと]

一般に、プラトンのミーメーシス論は、『国家』の「形而上学的考察」(595A - 602C)において包括的に提示されていると理解されているが、そこでのミーメーシス=影像制作(したがって、排除されるべき虚構)

という概念は、プラトンにおいても一定の条件と範囲の中で構成されたものであり、ミーメーシスとは基本的には、「作者と区別される他の語り手を導入し、いかにもその語り手にふさわしい叙述を展開すること」である。この意味でのミーメーシスは、哲学の著作や歴史書も含む広義の文学の基本因子である。

一方、『アンティドシス』はイソクラテスが彼自身に対する訴訟を仮構して、弁明を行なったもので、プラトンの『ソクラテスの弁明』を先行モデルにしていることが明白である。しかし後者が自伝的スケッチを装った、第三者による伝記的スケッチであるのに対し、真正の自伝である。イソクラテスの試みは、自己の著作からの引用、また架空の語り手を登場させて作者を批評させるなど、斬新な手法を効果的に駆使している。ここでの虚構の利用には、一つにはソクラテス文学(ソクラテスの真実を追求するために、虚構を用いたプラトンやクセノポンの著作)の影響がある。もう一つは、弁論の内包する可能性が、新しい表現ジャンルに結実したことを意味する。法廷弁論は、そのほとんどすべてが訴人や被告になりかわって書かれたものであり、また一般に弁論の技術は、政治演説の場合も含めて、自分自身の、また他の人の生を適切に描き出す能力にかかっていたのである。

[採用した新方法 新視点など]

哲学と文学を統一的に扱う視点を貫いたこと。上記の論文では、従来の解釈が詩と哲学が別個のジャンルであることを当然のように前提していたため、基盤に生成途上の哲学があることを見損ない、哲学的には貧弱な(間違った)議論であるとされ、プラトン自身の心理的傷跡を探るなど見当違いの方向に走る学者が少なからずあった。他方、イソクラテスは、それが取り上げられる場合でもプラトン哲学との対比に終始することがほとんどであったが、その全著作を翻訳注解し、その全体像を捉える方向を示した。

古典期ギリシア哲学の変容

新プラトン主義による文献的・思想的改竄の問題

研究代表者 中畑 正志

京都大学大学院文学研究科 助教授

【要旨】

- (i) 古典期ギリシア哲学のテキスト、とりわけアリストテレスの哲学は西洋の思想に対して思考のための基本的諸概念と枠組みを提供してきたが、そのアリストテレスによって提示された思考のあり方、とりわけ言語と心にかかわる基本的ヴィジョンが何であったのかを、あらためて厳密な文献学的手続きを踏んで確認する。
- (ii) 同時にそれらのヴィジョンが新プラトン主義者を中心とした紀元後の注釈と解釈という受容過程を通じて、文献学的にも思想の上でも、どのように改作されたのか、そしてその改作がどのような影響を与えたのかを解明する。
- (iii) この二つの作業を通じて、西洋古代の世界観を明確化と、中世以後の西洋の思想にとっての「古典」像の多元的あり方を提示することを目指す。

【位置付け】

ここでは、一つのケーススタディーとして、アリストテレスの哲学、とりわけ重要著作である De Anima (『魂について』)について、(i) 西洋古代文明における位置づけと、(ii) 現代における価値についてそれぞれ概括的に論述する。

- (i) アリストテレスの哲学が、西洋古代文明において、彼以前の思想に対しても彼以後の思想に対しても、決定的な規制力を持っていることは疑いえない。「ソクラテス以前の哲学者たち」については、「哲学者」のリストの作成など、そもそも「哲学史」という構想を創出したとも言う。また、彼以後の古代哲学に対しても、アリストテレスの個々の見解に対する賛否の立場を問わず、思考のための諸概念や装置を提供しており、とくに古代後期の新プラトン主義においては、アリストテレスの著作の研究が教育過程にプログラム

化され、制度的にもその影響力が保証された。

(ii) その現代的価値については、少し歴史的背景を確認する必要がある。中世哲学、とりわけスコラ哲学は、非神学的理論に関するかぎりはアリストテレス哲学の継承と展開として構築された。近代哲学は、そのような中世哲学からの脱却の試みであり、逆に言えば、アリストテレスは、論敵として近代哲学にとって重要な理論的跳躍台だったのである。たとえばデカルトによるコギトの確立の際に、その主たる批判対象は、アリストテレスの魂の理論である。しかし現代哲学は、逆に、このような近代哲学、とりわけその根幹を構成するデカルト主義に批判的であるだけに、いくつかの点で明白なアリストテレスへの回帰が見られるが、とりわけ、心の哲学（反二元論、機能主義、目的論的機能主義、その他）そして倫理学（徳の倫理、共同体主義）においてその傾向は明白である。また他方で、ブレンターノを重要な出発点とするドイツ・オーストリア圏の哲学に対しても確かな影響を与えており、実際ブレンターノはアリストテレスこそ師であると言明している。また最近ではハイデガーの哲学が、アリストテレスの解釈（とりわけ De Anima）をその最も中核に据えたものであること、が強調されている。

このような事情は、しかし、アリストテレスの影響の大きさを物語るといってもできるが、逆にそれぞれのアリストテレス解釈に、各時代・各思想家のものの見方、あるいは偏見やイデオロギーを映し出されているとも言える。つまり実際には、アリストテレスの哲学は、さまざまな立場や観点に応じてきわめて多様な仕方でも利用され続けきた。たとえば、新プラトン主義者も現代の心の哲学に携わる論者も、ともにアリストテレスの魂論を重要視するが、その評価の方向は180度異なると言ってもよい。

【研究成果】

(i) まず、古典期において、それまでの魂 (psyche) に対する見方を集約しその後の魂や心の理解に対して最も影響を与えたアリストテレスの著作 De Anima について、テキストの校訂、翻訳、注釈の作業を進めた。そしてこの作業を通じて、アリストテレス自身の魂の捉え方を明確化するとともに、長い伝統をもつ従来の校訂や注釈、諸解釈に多くの問題が存在することを確認した。このうち校訂及び翻訳については、ほぼ作業を終え、翻訳は、ある程度の注釈とともに、2000年度中に刊行される予定である。

(ii) このアリストテレスの魂論の伝承と受容の過程できわめて影響力ある役割を果たした新プラトン主義

について、新プラトン主義者たちがアリストテレスのテキストをどのように読解したその基本思想をどのように変容させているのかを、個々のパッセージの解釈の分析を通じて具体的に解明した。さらに近現代において、このような新プラトン主義者による変容あるいは改作が近現代哲学の主要な議論にどのように影響しているのかを、現在検証しつつある。この方向での研究の具体的な成果としては、たとえば新プラトン主義者が本来一元論的なアリストテレスの魂論をプラトンの二元論へと投影させて解釈することによって、魂を身体及び外界から分離した存在と見なし、アリストテレスにおいては一体的であった認知的はたらきと因果的過程を乖離させ、ある意味で近代哲学における二元論の素地を準備したことなどを確認した。

(iii) さらに、こうした伝承と受容の過程をたどることを通じて、認知の「対象」object というきわめて一般的な概念や、現代の心の哲学において問題的なキー・コンセプトである「志向性」intentionality の概念なども、以上の伝承過程と関連した歴史的経緯と思想的背景を通じて成立していることを、確認しつつある。その結果、現代の心の哲学の基本的な問題設定（たとえば、「心的状態の指標である志向性は生理的、物理的状态へと自然化することは可能か」など）そのものを成立させている諸前提の形成過程についても、いくつかの示唆をえた。

(ii),(iii) については、関連する研究発表を現在準備中である。

(iv) また他方で、以上のような思想の受容と変容の問題を、より広い社会的コンテクストから考察することを進めつつある。とくに、新プラトン主義者たちが、哲学の研究と教育において、具体的にどのような教育と研究のプログラムを組織し、そのなかでプラトン及びアリストテレスの著作をどのように教育し研究したのかを考察する発表を近くおこなう。

現在では、古代ギリシアの哲学、とくにプラトンとアリストテレスの哲学については、西洋はもとより日本においても精緻な研究が進められており、また中世哲学やキリスト教の思想家によるギリシア哲学の受容というテーマについても、すでに多くの研究が存在する。しかしそれらをつなぐはずの、紀元後数世紀にわたるギリシア哲学への注釈と解釈の伝統については、古典期ギリシア哲学や新プラトン主義あるいは中世哲学を研究するうえでの資料としての利用が中心と言わざるをえない。さらに、単なる解釈史の系譜づけではなく、古典期の思考が注釈や解釈の過程において、テキストそのものの「改訂」の可能性までも含めて、ど

のように受容されまた改竄されたのか、そしてその改竄においてはたらいっていた思想やイデオロギーは何か、という点を精確に測定するという研究は、本格的な形では海外においてもようやく一部で開始されたばかりであり、日本においてはいまだこの点についての十分な問題意識さえ獲得されていないのではないかと危惧される。本研究は、そのような状況において、一方で西洋古典期の基本ヴィジョンを取り押さえ、他方でそのヴィジョンの改変の過程、を解明するという複数の視点から「古典」を考察することを目指すものであり、さらにこのような作業は、同時にわれわれにとっての「古典」の意義について従来とは少し異なった角度から光を当てる試みでもある。

52 A04班・公募研究

ギリシア哲学における倫理思想の再検討

研究代表者 朴 一功

甲南女子大学文学部 助教授

【要旨】

- ①本研究の考察対象であるプラトンの『クラテュロス』は、古代ギリシアにおいて、言語哲学の分野を確立した最初の作品である。
- ②プラトンの『クラテュロス』は言語を真理論の観点から問題にしており、名前（語）のレベルにまで真偽を認めるその視座は、今日十分な考慮に値する。
- ③本研究によって第一に、従来の見解とは違って、プラトンが言語の「規約説」の立場をとっていること、第二に、プラトンは名前の真偽を、言明行為における名前と事物・事象の本質との対応関係に認めていることが明らかになった。
- ④③より事物の名前と価値語の差異はカテゴリー的な差異ではないという重要な見解が導かれるが、この点については現在作業中。

【位置付け】

本研究における第一の課題は、プラトンの言語哲学

の特質を明らかにし、その作業を通じて彼の倫理思想の基底にある価値と事象の把握をめぐる問題を考察することである。研究の対象とする中心テキストは、プラトンが彼の言語哲学をまとめたかたちで論じている唯一の作品『クラテュロス』である。古代ギリシアにおいて、言語そのものへの関心はすでに前8世紀のホメロスから顕著であるが、言語の機能と本性を問う言語理論あるいは言語哲学の分野は、一方で世界観との関連でヘラクレイトス（前500頃）以後の「ソクラテス以前の哲学者たち」によって、他方で弁論術との関連で前5世紀に活発な活動を展開した一群のソフィストたちによって、次第に切り開かれて行った。しかし、本格的な言語哲学は、前5世紀後半のソクラテスの対話法による哲学活動を契機として、プラトンに至って初めて確立される。彼の『クラテュロス』は、ギリシアにおいて言語哲学を組織的に展開した最初の作品である。以後、言語に関する「規約説」と「自然説」の分析をはじめとする『クラテュロス』の内容は、アリストテレスやヘレニズムの哲学者たちに大きな影響を与えることになる。

言語哲学は言語学とは異なる。言語を哲学的に問題にすると、様々なモチーフが考えられるが、最も重要なのは、言語と真理論との関係である。プラトンの言語哲学の主要な関心は、言語の歴史的由来や構造そのものにあるのではなく、世界理解と真理探求の手段としての言語の本性にある。言語と真偽との関係の問題は、すでにソクラテス以前の哲学者やソフィストたちの言語理論に、そしてソクラテスの探求活動に内包されていたものであるが、『クラテュロス』もまたその問題に動機づけられている。その中心主題は「名前の正しさ」なのであり、有意義なコミュニケーションとそれの前提をなす事象把握の問題を射程におさめている。この連関で、言明の真偽という哲学的問題が浮上するが、『クラテュロス』はこの問題を原型的なかたちで示しているばかりか、名前の真偽という、現代の言語哲学には見られない視座を提供している。

【研究成果】

本研究は、さしあたってプラトンの言語哲学の特質を『クラテュロス』の考察を通じて明らかにしようとした。『クラテュロス』では、名前（語）の正しさを「取り決め」と「同意」に求めるヘルモゲネス（ソクラテス学徒の一人）の「規約説」と、名前はもともと事物に自然によって定まっており、その正しさは習慣や「取り決め」ではなく、名前と事物との自然的関係に求められるとするクラテュロス（ヘラクレイトス派

の哲学者)の「自然説」とが検討され、いずれの説も対話者のソクラテスによって論駁されてゆく。そこで、こうした議論の展開から、今日までの大方の解釈は、プラトンは「規約説」と「自然説」のどちらにも加担しておらず、それぞれの難点を指摘し、両説の批判を企てていると認定してきた。

本研究はまず、このような従来の解釈の妥当性を『クラテュロス』の議論に即して検討することにした。その結果、プラトンは『クラテュロス』においてヘルモゲネスの「規約説」を批判しているのではなく、むしろそれに加担していることが判明した(プラトンが「規約説」の立場をとっていることは、彼の晩年の書簡『第7書簡』の記述とも合致する)。従来の解釈は、ヘルモゲネスが言語成立における私的な恣意性を認めているところから、その「規約説」には言語の公共性・社会性の観点で欠落しているとして、プラトンはその立場を採用していないと考えてきた。しかしながら、ヘルモゲネスの主張の核心は、名前は、「取り決め」(必ずしも複数の人間関係を含意しない)それがどんなに恣意的なものであろうとによって成立するものであるとする点にある。プラトンはこの点には批判を一切加えていないばかりか、他方、クラテュロスの「自然説」の論駁において、名前と事物・事象との対応は「取り決め」によらざるをえないことを論じ、ヘルモゲネスの「規約説」をはっきりと支持している。これが、本研究によって明らかになった第一の点である。

それでは、プラトンのヘルモゲネス批判のねらいはどこにあるのか。ヘルモゲネスは名前制定(命名)と名前使用とを明確に区別している。ある事物に定められた名前を、当の事物に対して用いるところに彼は名前の正しさを認める。すなわち、ヘルモゲネスによれば名前の正しさとは「取り決め」に由来するのであり、その基準は定められたルールに従って名前を使用する点にある。しかし、プラトンは名前の正しさを「取り決め」そのものから派生するとは考えない、従って、定められたルールに従って名前を使用するところに名前の正しさを認めるわけでもない。ここに、プラトンのヘルモゲネスに対する批判点がある。名前は「取り決め」によって成立する。この点をプラトンは承認する。けれども、その「取り決め」あるいは名前の制定は、事物・事象の把握を前提とする。プラトンによれば、名前の機能は事物・事象の区分(分節化)と教示にある。教示という行為は単なるコミュニケーションではない。その行為は何らかの仕方で、事物・事象の真実を明らかにし、伝える行為である。すなわち、プラトンは名前の正しさを事物・事象の正

しい把握に、言い換えれば真実の把握に求めるのである。われわれは通常、社会慣習や個人的な取り決めによって定められた言語を用いている。しかし、そうした言語は、事物・事象の日常的・通念的な輪郭を指示するものにすぎない。もちろん、そのようなレベルでも「名前の正しさ」を考えることはできる。たとえば、「正しい言葉づかい」、「間違った表現」というふうに言われる場合の、いわば辞書的・文法的次元での、すなわち規約的次元での言葉の正しさのことである。「名前の正しさ」に関するヘルモゲネスの視点はこの次元のものである。その種の正しさはしかし、プラトンによれば、表層的なものにすぎない。つまり、たとえばわれわれがあるものを「人間」と呼ぶ場合、そのものの内実は「人間」ではないかもしれない、プラトンは「名前の正しさ」を事物・事象の本質との関連で捉えようとするのである。

ここから、本研究は第二の論点に係わる。プラトンは『クラテュロス』で言明の真偽から、言明の部分をなす名前の真偽を導き出す議論を提出しているが、アリストテレスの真理論以来、名前には真偽はありえないとする見解が、今日まで公認のものとして受容されてきた。確かに、名前には真偽がない。しかし、プラトンは名前を「語られる」ものとして、すなわち言語使用の場面で捉えており、このとき名前は事物・事象の本質との対応関係において真偽の性格を帯びることになる。これが、本研究の明らかにした第二の点である。

さらにその場合、言明は必ずしも「主語」を立てる必要のないことが判明する。これは倫理思想の再検討を行なう本研究にとって重大な帰結をもたらす。なぜなら、物の名前も、物の性質を表わす名前も、「美しい」や「善い」などの価値を表わす名前も、いずれもいわば「事象」の名前として同じレベルに位置付けられることになるからである。ある図形を「円」と捉えるか、「美しい」と捉えるかの相違は、物と、性質とのカテゴリー的な差異ではなくて、事象そのものの本質をどのように捉えるかによって生じる差異だと考えられる。このようなプラトンの見解については現在まだ作業中である。

ギリシア・ローマ文献の形成・伝承・受容史の研究

研究代表者 中務 哲郎
 京都大学大学院文学研究科 教授

分担者 エリザベス・クレイク
 京都大学大学院文学研究科 教授

分担者 南川 高志
 京都大学大学院文学研究科 教授

【要旨】

この計画研究は中務哲郎「古代寓話の形成と受容」、エリザベス・クレイク「ヒポクラテス集成の伝承」、南川高志「帝政ローマ期の歴史書の伝承と受容」の三課題からなる。南川は特に「ヒストリア・アウグスタ」と呼ばれる帝政ローマ期の史書群に焦点を当てた。古代寓話の代名詞である「イソップ寓話」、「ヒポクラテス集成」、「ヒストリア・アウグスタ」の共通点は、いずれも単一の著者が特定できず、長く複雑な成立の経過をもつことである。いずれも後世に多大の影響を及ぼすもの故、受容史の研究も重要であるが、それにもまして形成過程の解明が重要である点で、他の古典とは際だっている。

【位置付け】

プラトンがホメロスを100回以上、200行余りを引用しているのは例外として、ギリシアの作家が先行の文学作品を引用ないし言及するのは稀である。しかし、寓話は叙事詩人ヘシオドス、抒情詩人アルキロコス、ステシコロス、シモニデス、劇作家アイスキュロス、ソポクレス、アリストパネス、ヘレニズム期のカリマコス、テオクリトス、多くのエピグラム詩人、歴史家ヘロドトス、ディオドロス、修辞学・弁論術作品、プラトン、アリストテレスを初めとする哲学者、プルタルコスの随筆、ルキアノスの小説、等々、実に多くの作家によって利用されている。寓話は作家や学者なら

ぬ無名の民衆によって伝えられたが、絶えずギリシア文学に刺激を与え続けたのである。ギリシアの寓話が全て「イソップ寓話」と呼ばれるようになる伝統はアリストパネスの頃（前5世紀末）には確立していた。このイソップ寓話が1世紀のパエドルスやバブリオスといった模倣者を生み、近代のラ・フォンテーヌやクルイロフなどの翻案・改作者を得て、世界中で愛好される文芸になっていることは周知の通りである。

ヒポクラテスの活躍した前5世紀のギリシアには、クロトンのアルクマイオン、クラゾメナイのアナクサゴラス、アブデラのデモクリトス、アクラガスのエンペドクレス、ピュタゴラス派のピロラオス等々、多くの医師の名が伝えられるし、クニドス派やイタリア派といった医師集団の活動も知られているが、ヒポクラテスを代表とするコス派のみが今日に伝わる膨大なテキストを遺した。これは年代も傾向もかなり異なる多くの論述がヒポクラテスの名の下に集められたものであり、その腑分けを行うことが重要な課題であるが、「ヒポクラテス集成」はそれまでの民間医療・神殿治療を脱して観察と実証に基づく医術をうち立てた精神の輝かしい記録である。ヒポクラテスの医学はガレノスを経て近代に連なるばかりでなく、「ヒポクラテスの誓い」の高い倫理は、今日でも「ジュネーブ誓約」を初めとして、各地の医師の誓いに活かされている。そしてまた「ヒポクラテス集成」は、初期自然哲学者や前5世紀の哲学者・ソピストにおける医学思想を知る手がかりとなるばかりでなく、質量共に優れたイオニア散文としてギリシア語史の研究にとっても貴重なテキスト群なのである。

ラテン語の歴史記述はタキトゥスの『同時代史』『年代記』、スエトニウスの『ローマ皇帝伝』(2世紀)の後停滞期に入る。4世紀に著されたアンミアヌス・マルケリヌスの『歴史』31巻も前半が散逸したため、帝政末期については史料が不足している。「ヒストリア・アウグスタ」と呼ばれる伝記集はその欠を補うものとして貴重である。事実のドキュメントというよりゴシップやエピソードに満ちた史書であることは否めぬが、作者、成立年代、創作意図等について学界の定説がなく、研究の待たれる作品である。

【研究成果】

寓話の前身をシュメルスの諺・修辞的表現に求めるとするならば、寓話は最古の文芸形態ということになり、従って、寓話ほど永く生き続け、諸々のジャンルに利用され、言語や文化を越えて翻案・模倣・再創造された文芸はない、ということにもなる。しかも寓話の伝

承は主に民衆レベルで行われ、口承で流布することから細部の変化が生じやすく、写本から筆写を行う場合でさえ、通常の文学作品よりはるかに自由に書き換えが行われたと考えられる。それ故、イソップ寓話の写本の系統樹を作成することは、他のギリシア文学と比べて格段に困難だとされる。このような理由から、そしてまた日本ではイソップの写本に近づくのが容易ではないところから、中務は B. E. Perry, *Aesopica* (Univ. of Illinois Press 1952) を最も信頼できるテキストとして研究を進めた。

寓話はそのものとして読んでも味わいが深い、文学作品の中に引用されることにより、文脈との関わりが生じて新たな意味が付与されるので、中務はあらゆるギリシア文学の中に引用されるイソップ寓話を探し出し、そのリストを作成した。これは寓話の受容あるいは変容を考える場合の基礎資料となる。G. J. van Dijk, Ainoi, Logoi, Mythoi. *Fables in Archaic, Classical, and Hellenistic Greek Literature* (Leiden 1997) はホメロスには寓話は現れないと結論づけるが、中務は『イリアス』22 261以下や『オデュッセイア』8 329の背後に、形を変えた寓話が残っていることを考察した。

クレイクは先に *Hippocrates. Places in Man* (Oxford 1998) でヒポクラテスの重要なテキストの校訂・注解・研究を発表したが、引き続き文体論および内容の検討から、「ヒポクラテス集成」の中のヒポクラテスの要素とそうでないものの腑分けを行った。悲劇作品の場合には年代を確定する古代の証言や、韻律変異の頻度(例えば、長音が短音二つに分解する、等)を用いる方法もあるが、「ヒポクラテス集成」にはそのような指標を適用できないので、同時代の文学・哲学作品との比較が有効である。そのような作業として、プラトン『饗宴』185C 193D に展開されるエリュクシマコスとアリストパネスのスピーチには、「集成」中の『養生法』『古い医術について』『風気(体内の風)』に見える医学用語が用いられていることを指摘した。また、エウリピデス『ヒポポリュトス』『狂えるヘラクレス』『バッカイ』などにも、医学用語、病理学に関わる語、解剖学用語が見えることから、「ヒポクラテス集成」の初期テキストからの影響を論じた。

「ヒストリア・アウグスタ」は作品中には6名の著者によると謳われているが、単一の作者の手になるという説が19世紀末に出されて以来、作者・年代・創作意図・真偽問題についての議論が紛糾している。この作品については未だ纏まった注釈書も現れていない段階であるので、南川は伝承されたテキストから正確な翻訳を作成し、散在する研究を集めて克明な注解を施した。

ユースティニアヌス帝「学説彙纂」研究 元首政期法学著作の伝承と受容

研究代表者 西村 重雄
九州大学法学部 教授

分担者 児玉 寛
九州大学法学部 教授

【要旨】

- 1) 「学説彙纂」は、ローマ法古典期の法学者の法としての効力のある意見の集大成である。
- 2) 編纂したユースティニアヌス帝の意図は、当事者の利用する法資料の限定による法の安定にあった。
- 3) 勅法彙纂と合まって中世・近世においてヨーロッパでは現行法としての効力を持ち、近代法典形成の基礎となっている。
- 4) 古典期の正当価格は、価格決定自由の原則と並存し機能したものと考えられる。

【位置付け】

東ローマ帝国ユースティニアヌス大帝は、法の安定をはかるために、勅法の集成に引続き、法としての効力をもった古典期法学者の意見の集成を命じ533年に完成し、交付し、同時に、収録されなかった意見を以降利用することを禁じた。これによって、古典期ローマ法学者の意見の選別がなされ、以降、中世・近世、ローマ帝国の承継者をそれぞれ自認した東ローマ帝国および神聖ローマ帝国において、現行法として効力を有すると共に、法学の基礎理論を記述したのとして尊重された、近代法典は多くはその伝統の中で成立したものである。その結果、共通法として認識され、現代ヨーロッパ統一法形成の基礎としての役割を担っている。のみならず、将来、東アジアの共通法制定のための共通の土俵となるものと期待される。

【研究成果】

- a) 古典期ローマ法では、現代よりはるかに若者の社会的経験が多いにもかかわらず、(今日の未成年者取

り消しの原型とされる) 25歳未満者の法律行為に対し、法務官の原状回復を認めている。この点の解明には、古典期における取引の構造、とりわけ「正当価格」がいかにかえられていたかを究明することが重要と考えられる。

このいわゆる *interpolatio* 問題は、現在のローマ法研究の直面する最も困難な問題である。とりわけ、原理的にもユピターの集成は編纂委員会に対する明示の指示であり、それはまた、法律を現行のものに合わせて字句を修正するのは今日の目から見ると極めて自然である(従って、例えば、リーウィウス「ローマ建国史」あるいは日本書紀の改変修正とは趣を異にする)。従って、修正が極めて広汎になされたと推測することも可能であり、とりわけ、ユピターの勅方の趣旨を忠実に実行したと推定すると、そうならざるをえない。そのような立場から、ドイツ民法制定の後、ドイツにおいてこれをうけ更にイタリアにおいて多くの学者が修正を数多く主張した。これに対する批判は当時からないわけではなかったが、本格的な反省が始まるのは1964年 Kaser の学会での講演以降である。以降、基本的には削除部分はあっても古典期のものないし、そのまま収録したものと見なすべしとの見解が主流になりつつある。

もっともこの立場からは、ただちに別の問題が生ずる。なぜユピターは、変更を加えずに現行法として古い法文・学説を収録したのか、ということとなる。これに対する明確な答えはまだない。私見によればユピター法典編纂が(近代の考える立法ではなくて)現存の法資料のそのままの集成・簡易な目指し、かつ満足した。すなわち、法典編纂は当事者が裁判所で採用しうる法根拠の制約にとどまり、それでそれなりの法的安定性をもたらされたと考える。ユピターでの、古典期法文の採用は古典期への復帰を目指したものではないこととなり、これによって、従来の多くの疑問が解消するように思われる。

b) 従来、インテルポラーティオー研究の中で、古典期における「正当価格」の表現は、殆どがユピターヌス帝による介入の結果であり、古典期学者はこの考えをもっていないとの見解が有力に主張されてきた。

c) 本研究では、「正当価格」に関する各法文を丹念に検討した結果、古典期には「高いものを安く買い、安いものを高く売ることが許されている」(パウルス D.19,2 22,2) は認められると、同時にその物が通常値とする価格は想定されており、これに著しくはずれた場合は若年者に現状回復、それ以外では悪意

がある場合に現状回復の救済が与えられたものと考えられていたと理解すべきとの見解に至った。

d) ユピターヌス帝の編纂にかかる、それまでに公布された勅法の集成である勅法彙纂には、土地を不当に安く、すなわち正当価格の半額で買った買主は、売主に不足額の支払か土地の返却をすべきと定めたディオクレティアヌス帝(在位284-305年)の二つの勅法 C.4 44,2 (285年) および 8 (293年) を収録する。この規定は、中世以来、莫大損害 *laesio enormis* と称され、カノン法大全 3,17,3 (Alexander 3世1170年) 同 6, (Innocentius 3世1208年) とともに、近代初頭の二大民法典、フランス民法(1804)1674条、オーストラリア民法(1811年)934/5条に引き継がれている(ちなみに、我が国においても仏人ボアソナードの起草した民法草案には条文を有したが、旧民法には採られず、また、ドイツ民法の影響をうけた現民法にもない)。

このディオクレティアヌス帝勅法のいわゆる莫大損害による契約解消について、同帝が他の勅法では契約維持を強調していること、西部卑俗法ではこの制度を採用していないことなどから、むしろ、6世紀のユピターヌス帝の政策遂行(弱者保護、キリスト教的思想の実現)のために、修正を加えたものとの見解が今日でもなお根強い。

e) しかし、「学説彙纂」中「正当価格」の表現が、古典期のものとするなら、ディオクレティアヌス帝の2勅法は、25歳未満者の代理の場合にも現状回復を認めるパウルス(D.4,4 24pr) および、同じ285年に公布の25歳未満原状回復を、成年者にも拡大する旨の(今日に至るまで殆ど無視されつづけている)勅法を背景として、家財産たる土地の父又はその子による不当に安い売却の取り消しを認めたものと考えられる。買主が不足額の支払により物の返却を免れる例は嫁資の不当に安い評価の場合につき、こゝで古典期法学者が、すでに認めている(ウルピアーヌス, D.23,3,12,1) ので、十分理解しうる制度である。

f) もし、ローマ法の「正当価格」「莫大損害」を以上のように理解するのが正当であるとするならば、近時私法学者から契約の均衡回復のために「莫大損害」による契約解消を理論的根拠としての援用が示唆されているが、直ちには採り得ないこととなる。

g) ちなみに、ローマの哲学思想における「正当価格」論とりわけ、キケロ「義務論」3,12,49ff で表明され、教父アンブロシウス「義務論」に受け継がれている議論が、法実務にいかなる影響を与えたかは今後の課題である。とりわけ、キケロの挙げる、飢饉のロド

ス島に最初に到着した穀物商人の後続の船に言及すべき義務が、法実務家にどのような評価をうけたかは法思想史の観点から深められてよいテーマであろう。

(付) なお、本研究の一部を1999年9月古代法史協会国際会議(エクスター大学)で報告し、批判を仰いだところである。

ビザンツ帝国と古典継承・創造活動

マケドニア朝期の古典再生とその歴史的意義

研究代表者 大月 康弘

一橋大学大学院経済学研究科 助教授

【要旨】

- 10～11世紀ビザンツ帝国の国家生活に関する古典作品について研究した。
- 当該期は、諸皇帝による文芸振興政策の結果、多くの古典作品が作成された。作者、内容梗概、成立の契機、写本状況にわたってその具体相を総覧し、主要古典の日本語訳を準備した。
- 特に、国家統治について論じた古典(外交分野も含む)、行財政に関わる法令を中心にテキストの分析を行った。
- ビザンツ帝国、皇帝は、「キリスト教世界」の統治者を自任していた。同帝国の古典作品は、その普遍的世界観を反映している。この必要から、関連する同時代のラテン語古典をも視野に入れながら、ビザンツ社会における古典創造の内在的理解に努めた。

【位置付け】

- 当該古典の文明中における位置付け
10～11世紀のビザンツ帝国は、政治と社会が相対的に安定した時期であり、諸皇帝による文芸振興政策の結果、幾多の古典作品の再生・創造が見られた(マケドニア朝ルネサンス)。皇帝自身による有職故実の編纂や、法集成、また文人による歴史、世界年代記の執筆、聖者伝など、注目すべき多くの古典が今日まで伝

承されている。ビザンツの古典制作は常に既存の古典作品に範を求めたので、彼らの「文学」活動はそれ自体「古典の再生」という側面を伴った。

コンスタンティノス7世ポリフュロゲネトス(在位913-959年)の『帝国の統治について』De Administrando Imperio、『儀礼について』De Ceremoniis、『テーマについて』De Thematibus、『続テオファネス年代記』Theophanes Continuatusをはじめ、国家活動のための公文書など、いずれのビザンツ古典にも、キリスト教の「神の摂理」がこの世界を支配する、との独特の「世界秩序」像が垣間見られた。その彫琢、深化こそが、当時の彼らの「使命」であったとすら見える。

その世界秩序像は、ビザンツ内に限定されず、西欧・ロシアをも含めた「中世キリスト教世界」を全体として規定していた。つまり、ビザンツ世界の国境を、物理的空間で仕切られる近代主義的国家・文化世界と捉えることはできないのである。西欧のいわゆる「12世紀ルネサンス」は、この東方帝国との交渉の中で醸成された。また、15世紀のイタリア・ルネサンスもまた、フェララ・フィレンツェ公会議等(いわゆる「教会合同問題」)をめぐる、この東方ギリシア世界の思想家(ベッサリオンなど)が伝来したことにより惹起された。

10世紀のビザンツ古典は、またロシア・東欧正教世界にも直接の影響を及ぼしている。ロシアをはじめとするスラブ人の近現代における思想と古典創造は、ビザンツ古典の直接の延長線上にあると見てよい。近代ロシアの思想史は、ビザンツで醸成されたキリスト教古典の解釈と再生の歴史であり、さらにまた、東西冷戦構造崩壊後=1990年代のロシア社会での宗教活動の活発化もまた、かかる歴史の文脈にあると言える。

ビザンツ文明は、このようにいくつかの契機を経て、ギリシア・ローマ古典文明をキリスト教的モチーフに組み替え、ヨーロッパ近現代の思想・文献に多大の影響を及ぼした。

● 当該古典の現代における価値

ビザンツ学は、ルネサンス期以降の西欧社会において成立、発展した。まず初めに、ビザンツの滅亡(1453年5月)の前後に大量のギリシア人がイタリアに亡命し、多くのギリシア古典をもたらした。それは、西欧世界において、彼らに対する直接的関心を発生させた。イタリアには、15～16世紀に、古代ギリシア古典とともに、大量のビザンツ古典がもたらされている。例えば、ヴェネチアのサン・マルコ教会文書館に収蔵されるギリシア写本は、この時期に到来したものを中核する。

揺籃期にあった印刷術は、イタリアでも盛んに行われた。とりわけ16世紀になると、「古代」の古典とともに「中世ギリシア＝ビザンツ」古典も数多く印刷された。歴史、世界年代記、またキリスト教会教父の諸作品などが多く印刷され、その後の人文学全般（古文書学 Paleography、公文書学 Diplomatics、教父学 Patristics 等）に多大な影響を与えた。

いわゆる「イタリア・ルネサンス」の知的活動が、「古代」の古典文学作品のみを対象としたのでなかったことは、十分注意されてよい。「近代」ヨーロッパ社会は、自らの文化価値を「古代」のギリシア、ローマに基礎を置いた。そのポジティブティを担保するために、「近代人」は「中世キリスト教世界」をネガティブな世界として設定した。この認識は、近代の学問体系にも如実に投影されている。「中世古文書学」は長らく発達を見ず、それが確立するのは17世紀のことだった。また、晴朗で自由な「古代」世界は、キリスト教が浸透した4世紀を境に「没落」する、という。東地中海地域を舞台としていた「歴史」は、突如「西ヨーロッパ」へと跳躍し、未熟なゲルマン人社会は、キリストの神に統括されることとなる。17世紀初頭に形象する近代人のこのような歴史意識は、古典学の分野にも端的に反映した。

ビザンツ古典研究は、このような西欧近代主義的学問伝統の一翼を担いながら、それを相対化しうる視点を提供する。それは、近代ヨーロッパの精神的揺籃地としてのギリシアの直接の連続であり、かつキリスト教世界の母体だった。今日のヨーロッパ社会、またこの文明をスタンダードとする現在の世界情勢を考える上でも、不可欠の考察対象である。

【研究成果】

● 1年半の研究成果

10～11世紀のビザンツ帝国で作成された文書について研究した。とりわけ、歴史記述や、国家生活に関わる古典的公文書（勅法・財政文書）に即して調査を行った。この時期は同帝国のルネサンス期とされ、多くのギリシア語文献が再生・創造されたことで知られる。「マケドニア・ルネサンス」と称されるこの文化活動の実態を、個別の古典史料の作成事情、テキスト分析を通じて研究した。

現段階における成果はおよそ以下の通りである。

- (1) 作品の成立・内容についての総覧。国家生活に関わる古典文書について、要録を作成中である。
- (2) 日本語訳の作成。注目すべき作品について、写本伝承を顧慮しながら、日本語訳の準備に着手した。

(3) ラテン語史料との連関。ビザンツの古典作品は、自らの国家形象および「皇帝」を「世界」の中心と認識していた。しかし、それからのみでは、当時の「古典世界」の全体像を十全に把握できないことが判った。「中世キリスト教世界」に固有の世界像を定位する必要に至り、西欧ラテン史料への顧慮も視野に入れた。年代記、外交使節記等について、ビザンツ古典の影響、またテキストの比較考量を行った。その成果は、近く刊行予定である。

● 当該研究によって明らかとなったこと

ビザンツ帝国で作成・創造された広義の文学作品は、ギリシア・ローマ文明の継承の上に、キリスト教的世界観に規定されて独自の思想世界を出現させた。この社会は、ギリシア語を公用語とした。しかしそこは、ギリシア語を母語とするいわゆる「ギリシア人」ばかりでなく、アルメニア、グルジアなど早くからキリスト教を受容した近隣諸民族、また7世紀以来新来のスラブ諸族がともに生活を営む世界だった。この社会は、ギリシア語を公用語としながらも、多民族・多文化を包含する「世界帝国」だった。その文学活動もまた、民族主義的、国民主義的な活動ではありえなかった。後者は近現代のヨーロッパ社会に固有の現象であり、そのような各国史的文脈でビザンツの社会や古典を理解しようとすることは、ビザンツ古典の性格を見誤らす危険がある。ビザンツ古典には、より普遍的な価値・目的が含意されていた。その中核には、諸民族、諸文化を統合する「神の摂理」Oikonomiaの観念があったことが確認された。

● 採用した新方法、新視点など

欧米の伝統的古典学が行ってきた作業は、主に、個別の古典作品についての写本収集・分析、テキストの伝承および批判・校訂作業だった。ビザンツ学にあっても事態は同様である。むしろ、正統派古典学としての「古代ギリシア学」や「古代ローマ学」が19～20世紀に一つのピークに達したのにくらべて、ビザンツ学は、その副次的研究対象とされた経緯もあって、かかる作業の展開がまさに現在進行中である。それは、近代主義的学術方法としての古典学である。

ところが、ビザンツの古典作品は、自らの国家形象および「皇帝」を「世界」の中心と認識していた。その固有の世界観の内在的理解のために、いくつかの試みを行った。ビザンツ古典の内在的理解に加えて、それが想定する「中世キリスト教世界」の全体像を把握するために、西欧ラテン史料をも視野に入れた。差し当たり、世界年代記、外交使節記等について、ビザンツ古典の影響、またテキストの比較考量を試みている。

その成果は、近く刊行予定である。

これによって、キリスト教ローマ皇帝を中心とする当時の世界認識の構造、その反映としての古典分析の一層の深化を期待している。

●成果が未成の場合は、目標と準備状況（方法論、到達段階、入手資料・機材など）

10～11世紀に限定しても、ビザンツ古典を内容面に立ち入って総覧することは、そう容易なことではない。現在、要録作成に努力中である。ただし、外交面での注目すべき作品、また皇帝発給の行政文書（残存するのは財政関連事例にほぼ限定される）については、立ち入った研究を行うことができた。そのうち、クレモナ司教リウドブランドによる『コンスタンティノープル使節記』Relatio de Legatione Constantinopolitanaについては、日本語訳、注、解説をほぼ完成し、平成13年度中に刊行の運びである。

56 B01班・公募研究

李氏朝鮮における中国古典の受容と学問知の形成

研究代表者 吉田 光男

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

【要旨】

- ①中国から流入した古典籍なかんずく儒学古典が政治・社会・文化エリートである士族の必須教養となり、李氏朝鮮時代（1392～1897）の支配的価値となった。
- ②儒学古典が韓国近代化の性格決定に大きな役割を果たし、現代文化の基礎となっている。
- ③文献資料分析と韓国の現地調査により、中国からの古典流入過程、士族の学問知形成様相、中国古典籍の流布と活用状況等を分析し、成果の一部を『東洋史研究』に発表した。
- ④李氏朝鮮における学問知が主に中国古典籍によって形成され、とりわけ儒学古典の理解・修得が士族の社会的地位決定の要因となった。

- ⑤文献調査と聞き取りを融合させた。戸籍台帳と族譜をデータベース化して解析した。

【位置付け】

（1）李氏朝鮮における儒教古典の位置付け

朝鮮は古代から中国文明圏の一角を占めてきた。とりわけ13世紀以降、元帝国支配下の北京に留学した士大夫たちが、儒学の中でも朱子学（これを朝鮮では性理学と言った）を持ち込んできた。これが李氏朝鮮王朝（1392～1897）全時代を通じて拡大発展をした。

李氏朝鮮の政治・社会・文化エリートである士族（士大夫）は、父方・母方双方の家系に蓄積された学問を自己の存在を正統化する根拠にしていた。非士族に対しては支配エリートとして君臨するため、また士族集団の内部では競争に勝ち抜くために、中国古典籍の学問的習得が士族たちの生涯目標となった。こうして儒学古典は李氏朝鮮時代の支配的価値の位置を占めるようになった。

本研究は、中国から受容した儒学古典によってどのように李氏朝鮮の学問知（学的教養）が形成されたのか、またその学問知が社会の中でいかなる役割を果たしたのかを、学問知の担い手である士族に焦点をあてて考察をした。

（2）現代韓国における儒学古典の価値

朝鮮は、一九世紀後半になって中国文明から近代西欧文明へと価値の位相転換を余儀なくされた。しかし、知識人の学問知が儒学によって強く基礎づけられており、いわゆる近代化において日本に対して後れをとる原因の一つとなった。一方で、儒学古典の教養に裏打ちされて学問的修練に価値が置かれており、物事の論理的理解と学的探究を尊重する意識が存在していた。これが近代化に対する促進要因として働いたと思われる。

朝鮮の伝統社会の独自性は儒学古典を大きな要素として形成されている。伝統社会を基盤にして形成された近代朝鮮社会、とりわけ現代韓国社会の価値体系の中に儒学が大きな比重を占めている。現代韓国において、儒学古典は単なる外来の文化ではなく、自らの伝統社会の不可欠の要素である。儒学古典の理解は韓国伝統文化そのものの理解につながる。近代西欧文明を受け入れて形成された朝鮮の近代文化は、同じく近代文化と言いながら日本・中国のそれとは異なった様相・性格をもっているが、その原因は伝統社会のあり方に帰することができる。

しかしながら、1970年代以降、顕著になった韓国の

高度産業化・近代化の原因を単純な「儒教社会」論で説明することはできない。朱子学における論理性、学問知に高い価値を見いだす社会意識、儒学古典の学習を通じた高い識字率、儒学古典で説明された倫理規範の実践による社会秩序の形成など、儒学古典籍の受容によって発生した多くの要因が複合的・重層的に作用しているところに着目する必要がある。

【研究成果】

(1) 現在までの研究成果

本研究では、学問知の担い手である士族と中国古典籍とりわけ儒学古典とを結びつける経路に着目し、古典がもっている社会的役割を主な分析対象とした。中心的課題としたのは、1) 中国からの古典流入過程、2) 士族の学問知形成様相、3) 中国古典籍の流布と活用状況、という3点である。

本研究開始以来、以下のような研究活動を行ってきた。

①慶尚道丹城県の土着士族である安東権氏18世権継祐家門のうち、丹城に居住する6派に対する文献史料調査と現地調査を行い、その成果の一部を「朝鮮近世士族の族的結合と「邑」空間 慶尚道丹城県の安東権氏の場合」(『東洋史研究』58巻4号、2000年3月)として発表した。

②月沙李廷龜(1564~1635)の子孫で、首都漢城にあって大提学四人を含む大量の科挙合格者・高級官僚を輩出した延安李氏館洞派家門の末裔たちの聞き取り調査を行った。この調査研究は続行中であり、研究成果は論文のかたちで発表する予定である。

③文献史料の調査と収集を行った。

1) 日本：天理大学附属天理図書館今西文庫・東京大学総合図書館阿川文庫・大阪府立中之島図書館・沖縄県立図書館。東京大学総合図書館阿川文庫については、すでに公刊した「東京大学総合図書館阿川文庫リスト」(『朝鮮文化研究』5号、1998年3月)の補訂を行った。

2) 韓国：ソウル大学附属奎章閣・韓国精神文化研究院附属蔵書閣・韓国国史編纂委員会・韓国国立中央図書館古典運営室

④関連発表

1) 李氏朝鮮の首都漢城の王都としての構造分析を手がかりとして、朝鮮の士族が中国文明に対して抱いていた意識を分析し、「朝鮮近世の王都と帝都」(『年報都市史研究』7号、1999年10月)を発表した。

2) NHK教育テレビ「歴史で見る世界」において

「学問の時代」と題して李氏朝鮮時代の士族と学問知の関係について講義を行った(1999年9月)。

3) 放送大学テキスト『朝鮮の歴史と社会』(放送大学教育振興会、2000年3月)を上梓し、李氏朝鮮時代の学問的世界について執筆した。

(2) 本研究によって明らかになったこと

①李氏朝鮮における学問知が、主として中国古典籍とりわけ儒学古典によって形成されていた。

①中国古典籍はまず王立図書館である奎章閣に入り、それが活字によって翻刻され、国王から臣下に「内賜本」として下賜される。士族たちはこれを主に筆写によって入手し、一定程度の需要集団が存在する家門や書院では、さらに木版などで翻刻した。

②儒学をはじめとする中国古典籍に対する学問的達成度が士族の社会的階梯を決定する際に大きな要因として作用した。

③学問知に裏付けられた士族としての正統性は、最終的には儒学古典の理解度・修得度を試験する科挙によって確認された。

④儒学古典は単に学ぶだけの対象ではなく、行動規範として実践されることで学問的成就と見なされた。

(3) 本研究における新たな方法・新たな視点

①文献史料と現地調査を併用し、歴史学的手法と文化人類学的手法の融合を試みた。

1) 慶尚道丹城県(現慶尚南道山清郡丹城面ほか)で文献史料の調査と合わせて、子孫に対する聞き取りと遺跡調査を行った。

2) 延安李氏館洞派の長老から聞き取りを行い、士族の儒学古典・学問知・家門に対する意識を調査した。

②戸籍大帳と族譜の内容をデータベース化、コンピューターによる解析を行い、士族層における血縁ネットワークの形成と拡大を分析した。

シャーンティデーヴァ作『入菩薩行論』の 伝承と変容

研究代表者 斎藤 明

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

【要旨】

- 後期インド仏教史，ならびに11世紀以降の後期仏教伝播期のチベット仏教史において，シャーンティデーヴァ作『入菩薩行論』の与えた影響は計り知れないものがある。その秀麗な文章と鋭い洞察力にくわえて，近年にまた，研究代表者による同論の初期本テキストの発見等もあって，同論に対する関心は内外において高まり，研究も深められている。
- 本研究は，敦煌出土チベット語写本にもとづく同論の初期本テキストの作成とともに，同論のテキストおよびシャーンティデーヴァの思想史的な位置づけの変容，ならびにその背景の解明を目的とする。
- 1年半におよぶこれまで研究により，初期本テキストの9章中の5章の校訂テキストがすでに完成した。
- また，同論の思想史上の受容という点では，8世紀から11世紀初頭にかけて，同論が，当時の思想史上の問題関心 認識対象の外在性を認めるか否か，認識対象を内なる形象と理解したうえでその実在性を認めるか否か，という主として認識論上の関心のもとに受容されていた事実を明らかにした。

【位置付け】

シャーンティデーヴァ (c. 690 - 750) の主著『入菩薩行論』 別名『入菩提行論』は，菩提心，六波羅蜜，廻向という大乘の菩薩のあるべき振る舞いを，流麗な詩文にのせて謳いあげた後期インド仏教を代表する論書である。ただし，論書とはいえこの作品は，ただ単に正しく読解することのみを目的とした論書ではなく，むしろ700余りの詩頌からなる同書を，読誦し暗誦するなかで六波羅蜜等のあり方を体読するという実践的なネライをもつ。その意味で同書は，後期大乘仏教における，一種の経典的な性格を帯びたユニークな論書であったといえる。しかもその秀麗な文章は，

随所に透徹した人間観察をうかがわせ，近年における研究の高まりもまた，本書のもつ現代的な価値の大きさを物語っている。

【研究成果】

本研究は，後期インド仏教史，さらには11世紀以降の後期仏教伝播期のチベット仏教史において多大な影響を与えた同書の伝承過程をたどり，そのテキストおよびシャーンティデーヴァの思想史的な位置づけの変容，ならびにその背景の解明を目的としている。

1999 (平成11) 年度から本2000 (平成12) 年度前半にかけて，本研究者はスタイン収集のチベット語写本 (大英図書館蔵) にもとづき，初期本 (9章本) の第1, 2, 6, 7, 8章の5つの章のローマ字化テキストを作成した。また，これと併せて，11世紀初頭に活躍したジュニャーナシュリーミトラが，その『有形象証明論』に同書の一詩頌を引き，シャーンティデーヴァを「有形象論者」と見なしている事実を指摘し，その思想史的な背景を考察した。この点については，第36回国際アジア・北アフリカ研究会議 (2000.8.27 - 9.2 於モントリオール) において研究発表した。

これまでの1年半におよぶ研究により，以下の諸点が明らかとなった。

- ①初期本テキストの具体的な内容と，それに依拠することが判明している著者不明『入菩薩行論解説』の思想史上の重要性。
- ②サンスクリット，チベット語訳，漢訳に伝承される現行本は，おそらくは時代もやや下って 8世紀後半頃に 詩頌の出入りと増広の手が加えられて成立したのものであること。
- ③また同論は従来，ブラジュニャーナカラマティによる注釈 (『入菩提行論細疏』) の多大な影響のもとに，チャンドラキールティ (c. 600 - 650) に引き寄せて解釈される傾向があった。しかしながら，初期本 (8世紀前半) の内容と上述の『入菩薩行論解説』の注釈内容，ならびに先にふれたジュニャーナシュリーによる「有形象論者」としてのシャーンティデーヴァ理解等を検討することにより，8世紀から11世紀初頭にかけての同論の受容は，当時の思想史上的な問題関心 認識対象の外在性を認めるか否か，認識対象を内なる形象と理解したうえでその実在性を認めるか否か，という主として認識論上の関心 を色濃く反映したものであることが判明した。

本年度後半は，702.5 詩頌から成る初期本テキスト全体の作成を中心として，併せて，初期本から現行本にいたるテキスト変容の経緯を考察してみたい。

古ジャワ版『マハーバーラタ』の伝承と受容

研究代表者 安藤 充

愛知学院大学文学部 助教授

【要旨】

サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』を古ジャワ語で翻案した散文作品群「パルワ」は、詩や影絵芝居などに多くの題材を提供したが、その伝承と受容の特質は未開拓の研究分野であった。これまで「モーサラ」、「プラスターニカ」の2つのパルワの読解およびサンスクリット原典との対照をおこない、次の点が明らかとなった。

- パルワ中のサンスクリット引用詩節には、『マハーバーラタ』校訂版やその異読にも相応しない読みが含まれている。
- パルワの物語は概して原典に忠実で、異名の同定、エピソードの補足的説明などにパルワ作者の原典理解の深さが読みとれる。
- 原典にはない、古ジャワ独特のサンスクリット派生語も用いられている。

【位置付け】

古ジャワ版『マハーバーラタ』は、インド古典サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』18巻の各巻を古ジャワ語で翻案した、パルワと通称される散文作品群である。9世紀以降、ジャワやバリでは、法制から宗教文化にいたるまで広範囲にヒンドゥー教が受容される中で、宮廷文化として古ジャワ文学が発展したが、それはサンスクリット古典の題材や韻律、膨大な借用語の受容といった影響のもとで成立し、さらに独自の現地的展開をすすめていった。パルワは単なる翻案として軽視されるきらいがあるが、古ジャワ文学世界において、多くの韻文作品（カカウイン）がパルワに取材しているし、教訓・金言集の主要な典拠にもなっている。また、現代なお盛んに上演される多くの影絵芝居や舞踊の枠物語の源もパルワである。

このようなテキストの重要性、サンスクリット文化の影響の大きさにもかかわらず、パルワの文献学的研

究は、20世紀四半世紀までに不十分なローマ字転写テキストと翻訳が出されたまま、それほど進展をみていない。従来の古ジャワ文学研究は、古ジャワ文学をインド文学の末端とみて軽視するインド学と、土着主義に偏りすぎてインド古典の正確な解釈の重要性を認識しないインドネシア研究のはざまにあったといっても過言ではない。近年、密教研究の分野で、インド原典に照らして古ジャワテキストを正しく読み解き直す必要性が認知されてきているが、パルワ研究においても、あらためて古ジャワテキストを読み解くこと、さらには、それをもとにして批判に堪えうる校訂テキストを作ることが求められている。

【研究成果】

本研究は、いかなる系統のサンスクリット伝承が古ジャワ世界に伝えられたのか、古ジャワ的受容の特徴はいかなるものであるのか、また、諸々のパルワ間にいかなる差異がみられるか、サンスクリット原典との比較対照によって捉えようとするものである。研究期間の制約上、特に後代成立と従来言われてきたパルワに焦点を絞ることにし、これまで1年半の間で、『マハーバーラタ』第16、17巻にあたる、「モーサラ・パルワ」、「プラスターニカ・パルワ」の2つの古ジャワ語テキストの読解およびサンスクリット原典との対照をおこなった。これまで、このような比較研究は、パルワに引用されるサンスクリット詩節と原典との対応関係が示されるだけにとどまっておき、古ジャワ語で翻訳・翻案された物語の部分まで、双方の言語のテキストを、異読も含めて対照させるという試みは初めてといえる。

本研究で明らかになったこと、課題として指摘されたことを、(1)パルワ刊本の問題、(2)サンスクリット引用詩節にみる伝承と受容、(3)物語の内容比較からみる伝承と受容の3つに分けてまとめておく。

(1) 引用詩節にみる伝承と受容

パルワの現行3刊本（ユインボルのテキスト・蘭訳・注、ズトミュルデルの読本テキスト、パルグナーディのテキスト・英訳）はいずれも、情報開示（写本情報、異読の明示）と読みやすさ（本文の文章の内容と体裁）という校訂テキストの二大必要条件に関して大なり小なりの問題をはらんでいる。細部についてサンスクリット原典と対照させるためには、少なくとも現存写本の当該箇所を参照する必要がある。さらに、入手できるすべての写本を参照し、批判にたえる校訂テキストを構築することが期待される。その際、パル

グナーディ版のように、各写本に共通する読みを無視してサンスクリットテキストの方に無批判に引きずられるようなことは論外である。もちろんサンスクリット原典の記述を十分理解することは前提である。引用されたサンスクリットテキストの復元、現行各版で異なる描写（特にユインボルⅡ版中に挿入されるエピソード）、および読本という性格上ズトミュルデル版が注記なしに割愛している部分については、今後のテキスト校訂をまって再検討する必要がある。

(2) サンスクリット引用詩節にみる伝承と受容

引用詩節の対照から、現行のマハーバーラタ校訂版とその異読にも一致しない読みをもつことが明らかになった。今後、プーナ校訂版以外のマハーバーラタテキストおよび、サンスクリット写本、特に南方版のものを照合することで、原典について何らかの手がかりが得られる可能性がある。

引用されたサンスクリット詩節じたいは伝承の過程で意味が通らない形になったり、語中語末の音韻が転訛している例が多いが、それに続く古ジャワ語翻訳（抄訳）では、ほとんどの場合、もとのサンスクリット詩節の意味を忠実に写し取っている。したがって、パルワの底本が現行テキストと内容的にそれほど大きく異なっておらず、またパルワ作者がそのサンスクリットを的確に理解していたものと考えられる。

(3) 物語の内容比較からみる伝承と受容

モーサラ・パルワでは凶兆、戦闘、都落ち、盗賊の襲来などの場面を原典より簡略に描き、プラスターニカ・パルワでは、巡礼の場面で訪問先を改変し、また、天界に犬を連れていくことをめぐるユディシュティラとインドラの対話の内容も微妙に異なっている。しかしこうした細部の省略・改変以外は、パルワは概してサンスクリット・マハーバーラタに忠実であり、物語の中心的な流れはそのまま受け継がれている。

サンスクリット伝承の系統を探る上で興味深いのは、「モーサラ・パルワ」中でいくつかの凶兆を描く場面に、プーナ校訂版の本文にはないがその異読に対応箇所があることである。ほとんどの北方版および一部の南方版の読みと対応するものであり、これは、他のパルワ研究で指摘された特徴と一致する。

マハーバーラタの他の巻で詳しく描かれる出来事に言及するような場面がプラスターニカパルワに2カ所出てくるが、そこでパルワの作者はあたかもオリジナルのエピソードを知っていることをほのめかすがごとく、言葉を補ってそのエピソードの理解を助けている。

登場人物の異名を通りやすい呼び名で統一したりということも、パルワ作者の原典理解が深いことを示す事例といえる。

パルワのいくつかのシーンでは、原典の表現とは異なるサンスクリット派生語が用いられている。それらはサンスクリット文化の影響のなか古ジャワ文学世界で培われた古ジャワ独特の表現といってもよい。一方的なサンスクリット文化受容にとどまらず、内外の影響を受けながら、古ジャワ文学内部で、本来のサンスクリット語とは異なる意味や新たな合成語が生成され、それが一般化してこのパルワにも用いられているのである。

このように、「モーサラ・パルワ」、「プラスターニカ・パルワ」とも、サンスクリットの伝統を忠実に継承しながらも、古ジャワ文学独特の要素も取り入れた作品となっている。テキストの成立年代については、作者も年時も作品中に明記されず、古ジャワ語の時代別の言語学的特徴がじゅうぶんに研究されていない現段階では、現存写本の書写年代を最下限として、18世紀中期より前という程度である。しかしサンスクリット原典の比較によれば、一貫してこのパルワが十分な原典理解のもとに制作されていることが明らかである。したがって、後代成立だとしても、古ジャワ世界（ジャワあるいはバリ）におけるサンスクリット語・サンスクリット文学の伝統、および古ジャワ文学の伝統がしっかりと残っている時期に、サンスクリットに堪能な作者が翻案したものと思われる。

旧約聖書における歴史伝承の研究

特に「サムエル記」、「列王記」、「歴代誌」を中心に

研究代表者 山我 哲雄
北星学園大学経済学部 教授

【要旨】

1. 旧約聖書の歴史伝承中でもメシア思想の成立との関連で非常に重要なサムエル記下7章のいわゆる

「ナタン預言」を中心に研究を行っている。

2. 補助金によりパソコンを導入し、IT時代の研究環境に対応する態勢を整え、またドイツへの出張によりヨーロッパにおける最先端の研究状況を視察した。
3. これまでに行った研究によれば、ナタン預言の本文は、ダビデ時代の神殿建設をめぐる出来事を歴史的な基盤としながらも、その後複雑な伝承経過のなかで次々と新しい意味付けや解釈を与えられ、ほぼ4層から5層の編集史的段階をへつつ最終的に現にある形に仕上がったものと考えられる。

【位置付け】

旧約聖書中の歴史伝承でも、今回取り上げたサムエル記下7章のいわゆる「ナタン預言」は、ヨシュア記から列王記下にまで至るいわゆる「申命記史書」全体の歴史神学を理解する上で鍵となるテキスト（F・M・クロス）であるだけでなく、ダビデの子孫への神の永遠の加護を説くその思想は、旧約聖書のメシア思想の最も重要な源泉（G・フォン・ラート）であると言える。その思想的影響はキリスト教に受け継がれて現代でも形を変えて生き続けている。また、王権という人間による支配制度を神の意志に基づくものとして絶対化するその思想は、現代における宗教と政治の問題を考えるうえでも重要である。

【研究成果】

1年目は、私が学内で共通部門委員長（一般教育の教務責任者）と宗教部長を兼務することになり非常に多忙であったため、研究活動に十分な時間が取れず、主として機材の導入や資料や情報の収集に終始することになってしまったが、補助金によりパソコン一式を研究室に導入することができたため、充実しつつある電子ソフト資料に対応したり、インターネットを通じた国際的な研究状況についての情報を容易に入手することができるようになった。また、ドイツへの出張（ゲッティンゲン大学、ミュンヘン大学）により最先端の研究状況に触れることができ、多くの知見と刺激を得ることができた。2年目は、1年目に収集した資料に基づき、現在サムエル記下7章のいわゆる「ナタン預言」の成立についての伝承史的、編集史的研究を中心に研究活動を行っている。この研究の結果、サムエル記下7章の本文が、ダビデ時代の神殿建設をめぐる出来事を歴史的な基盤としながらも、その後4層から5層にわたる複雑な歴史的発展過程を経つつ次々と新しい意味付けや解釈を与えられ、最終的には捕囚後の時

代に現にある形に仕上がったこと、また従来この部分の中心と見られてきた「ダビデ王朝への神の絶対的加護」の約束の要素が古い伝承には含まれておらず、王国分裂時代以降に南王国のダビデ王朝側の支配権利要求を反映する形で付け加えられたものであることが明らかになった。なお、この研究成果の一部は2000年7月24日、北海道基督教学会代39回大会（於、北海道大学学術交流会館）で「永遠の王朝 - ナタン預言の編集史的研究」と題して口頭発表したほか、9月18日に日本聖書学研究所9月例会で「ナタン預言再考」と題して発表する予定であり、その後、本年度中に論文化する予定である。また、その後の研究としてこの最終的なサムエル記下7章の本文が歴代誌上17章でどのように再解釈されたかを明らかにする予定である。

60 B01班・公募研究

初期ギリシア文学におけるゼウスの主権

研究代表者 安村 典子

金澤大学工学部 教授

【要旨】

- (1) 本研究は、初期ギリシア文学における語りの手法を、ゼウスの主権獲得というテーマに焦点を当て考察する試みである。
- (2) 『ホメロス風讃歌』第三番の『アポローン讃歌』の中で歌われる「テュポーンの物語」が入れ子構造の形式で本文に組み込まれており、しかもこの物語を中心として、前後の物語は円環構造をなしていること、これらの手法により、ゼウスの主権獲得に対するアポローンの貢献が効果的に表現されていることが解明された。
- (3) 『イーリアス』第一巻のテテイスの嘆願の背後には主権交代神話が働いており、用語や構成に、きわめて入念な工夫がこらされていることが考察された。

【位置付け】

本研究は、『イーリアス』『オデュッセイア』『神統記』など、初期ギリシア文学における語り的手法を、ゼウスの主権獲得というテーマに焦点を当て考察する試みである。初期ギリシア文学は文字の助けによらず、口承詩として発展したため、その語り的手法には独特の工夫がみられる。モチーフの変型、重複、展開、円環構造、入れ子構造など、様々な手法をこらして多大な効果をあげている。これらを説明することにより、ギリシア文学のより深い理解と解釈が可能となるのである。

ゼウスがオリュポスの主権を獲得するまでには様々な挑戦があったとみられる。初期口承文学が成立していた時点では、そのような相克を語った叙事詩も複数存在していたと思われるが、すべて散逸してしまった。しかし現存する作品のなかにはその痕跡が認められるものもある。それらを考察し、失われたゼウスの主権獲得の物語を再構成することは、ギリシア文学全体を理解するうえで、極めて興味深い試みと思われる。また、ウーラノス、クロノス、ゼウスと、三代にわたる神々の主権交代神話は、オリエントの叙事詩『エヌマ エリシュ』との関連も指摘されている。その類似点と相違点を考察し、オリエント文明との接触の過程やギリシア神話の独自性を探ることもまた、興味深く、有意義な試みと思われる。

【研究成果】

1年半の研究成果として、次のような2論文を作成した。

(1) 『アポローン讃歌』における語り的手法

『ホメロス風讃歌』第三番の『アポローン讃歌』の中で歌われる「テュポーンの物語」(305-355行)は、伝統的に物語の本筋から逸脱した挿入部分として取り扱われてきた。しかしこの「テュポーンの物語」の内容や前後の文脈を詳細に考察すると、讃歌全体の中でこの物語が明確な意図を持って語られた、重要な部分であることが分かる。

テュポーン物語の前後には、アポローンによる雌蛇退治の話が語られている。この雌蛇退治の話を中断する形でヘーラーがテュポーンを出産し、雌蛇に養育された話が展開されているのである。雌蛇は多くの点でテュポーンと類似しており、テュポーン物語は入れ子のように雌蛇物語に組み込まれている。しかも雌蛇の話はテュポーン物語の枠組をなしており、その前後の文脈には、ヘーラーの語る話を中心とする見事な円環構造がみられる。

この円環構造の中心主題は誕生である。ヘーパイトスの身体的欠陥に対するヘーラーの憤りはアテーナー誕生に対する憤りによって増幅され、その憤りがヘーラーにテュポーン出産を決意させたことを、この円環構造はよく説明している。ヘーラーの憤りの結果として生まれてきたテュポーンは、当初からゼウスに敵対する存在であったのである。

ギリシア神話におけるウーラノス、クロノス、ゼウスの三代にわたる主権交代の際に決定的な役割を果たしたのは、ウーラノスの妻、クロノスの母、かつゼウスの乳母であるガイアであった。ゼウスが主権を獲得した時、ガイアは主権者を追い落とすことをやめた。今度はゼウスの妻ヘーラーが自分の息子に働きかけてゼウスの主権を断ち切り、新たに主権交代のサイクルを始めようとしたとしても不思議はない。

ガイアはゼウスの乳母であり、雌蛇はテュポーンの乳母であった。ゼウスが乳母ガイアに助けられてクロノスを倒したように、テュポーンも乳母雌蛇に助けられてゼウスを倒すことができたかも知れなかった。つまりアポローンの雌蛇殺りくは、単にその武勇を示すエピソードに留まらず、主権交代の観点からみると、ゼウスの主権確立を助ける決定的な役割を果たしたのである。

このようにテュポーン物語が入れ子構造という語り的手法をとっていると考えることによって、この物語に新たな意味づけを与えることができた。また従来解釈が困難とされてきた本讃歌の冒頭部分も、主権交代神話の連鎖というテーマを物語の背後に読むことにより新しい解釈を示すことができ、讃歌全体にも深い意味付けを行うことが可能となった。

(2) テティスの嘆願

『イーリアス』はアキレウスの憤りから始まる。第一巻には、戦いを退いたアキレウスの願いを聞きいれ、母テティスがオリュポスに赴きゼウスに嘆願する場面が描かれる。全24巻の冒頭を成すこの有名な場面の奥にもまた、主権交代神話が働いている。

テティスの嘆願は極めて重要な意味を持っている。この嘆願がゼウスに聞き入れられることによって初めて『イーリアス』の全物語が動きだすからである。したがってこの嘆願が聴衆にとっても充分納得のいくような、強い説得力のあるものであるために、語り的手法として周到な準備と配慮が行われている。

まずアキレウスがテティスに助けを求める言葉の冒頭からその伏線がみられる。アキレウスは「あなたが私を命短きものとして産んだからには」(1, 352)と

語り始め、自らを短命なものと規定する。アキレウスの運命は誉れある短命か、誉れなき長寿か、自らの選択にかかっていたし(9 A10~16)、実際に名誉を得ることなく故郷に帰る可能性も指摘されている(1,169~71)。しかしここではアキレウスは短命であることを選択の余地のないものとし、その動かしがたい運命を、ゼウスの助けを要求する根拠として主張している。なぜ彼が短命であることがゼウスにとってそれほど意味を持ち得るのか。それは短命がゼウスによってもたらされたものだからである。つまり、もしテティスが人間ペーレウスと結婚することをゼウスによって強制されなければ、アキレウスが短命なものとして生まれ得ることはなかった。もし当初のゼウスの思い通りにゼウスがテティスと結婚していたなら、その息子は不死であったばかりか、ゼウスより強大でその主権を脅かすものとなるはずであった。なぜならテティスの息子はその父を凌ぐものとなるという定めであったからである。したがってアキレウスがテティスに語りかける言葉の第一行目から、彼は父と子の相克と主権交代神話の物語を背景にして、その力関係を武器に問題の解決をはかろうとしているのである。

このアキレウスの要請にテティスもまた全く同様に、息子の短命を嘆く言葉で語り始める(1 A14~17)。同じ位置に語られる、この二人の嘆きは見事に呼応し、重なり合って極めて効果的である。

アキレウスは過去にテティスがゼウスを助けた話を持ち出し、その恩義に報いてゼウスが願いを聞き入れてくれるようにと頼む。神話の伝承の中に生きていた当時の聴衆にとっては、我々が理解する以上の意味をこの話から受け取っていたと思われる。すなわちアキレウスの主張の真の意味は、ゼウスの主権獲得に関わる要求であった。つまりアキレウスもまたプリアレオスと同様、父ゼウスより強きものである可能性があったこと、さらにテティスがそのように命じればプリアレオスが、今度はアキレウスを助けてゼウスを縛る可能性があることを強く暗示したのである。

このような提案にもかかわらず、テティスは実際の嘆願の場ではゼウスにこの話をしない。むしろ驚く程寡黙に、ただわが子が短命であることだけを主張し、自分がゼウスに対して何か役立ったことがあるのなら願いを聞き入れてほしいと嘆願する(1 503~6)。この言葉でテティスが意図しているのはアキレウスの短命とひきかえにゼウスが最高権力を獲得できたことをゼウスに思い起こさせることであった。つまり彼女がゼウスに対して与えた最大の恩義は「自分の息子はゼウスより強大な者となり得る」という彼女の運命的

な力を、彼女が行使しなかったということだったのである。

ゼウスはテティスのこの嘆願を聞いてすぐには答えることができない。2度目のテティスの言葉は再び短く簡潔であるが、しかし実際には強迫に近い。なぜこのようにテティスはゼウスに強く迫ることができたのか。それは「父より強き者」であるプリアレオスの力を背景にしているからである。つまりテティスの嘆願は、ゼウスとテティスの結婚に関わる秘めた事情を背景にして行われているのである。

その後のゼウスの答えやゼウスとヘーラーの間の会話は、テティスの嘆願がどのような性質のものであったのかをよく表している。ゼウスはヘーラーの意向を気づかい、ヘーラーは疑惑のまなざしを向ける。それはあたかもこの会見がゼウスとテティスの秘め事であったかのような様相であり、テティスがゼウスとの結婚に絡む問題を嘆願の根拠したことを、明確に示している。したがってテティスの役割は単にアキレウスとゼウスの橋渡し役に留まるのではなく、はるかに重要な彼女自身の運命に絡む問題をになっていること、しかもそれは結婚問題を通してゼウスの主権維持にも関わる重大な問題であったことがわかる。

テティスの嘆願をこのように父と子の相克や主権交代神話の問題に引き込むことは『イーリアス』作者の意図であったと考えられる。当時語り継がれていた神話の全貌を知ることのできない我々は、多くを想像で補う他はないが、このようにテティスの嘆願を解釈することにより、当時の聴衆が感知した『イーリアス』の背後の意味を理解することができるのではないかと思われる。

ラテン文学におけるギリシア神話の受容と継承

叙述技法から見た研究

研究代表者 高橋 宏幸

京都大学大学院文学研究科 助教授

【要旨】

口承伝統や民族的基盤を離れて創造的活力を保持したというギリシア神話の特質を本研究はその異文化間の伝承の大きな継ぎ目であるラテン文学に着目し、その特質を自覚的に表現する叙述技法に焦点を当てて考察する。現在までに作業を終了した成果には、歴史家リウィウスの神話範例に関する論文、キケロー『義務について』とウェルギリウス『アエネーイス』の原典訳および解説がある。残りの期間には、主にウェルギリウス『アエネーイス』とオウィディウス『変身物語』とを取り上げ、そこでの「照応」の技法に関する考究をまとめる。

【位置付け】

一般に神話は口承伝統に属する。その伝統を生んだ民族の特質と深く関わりつつ豊かな発展を示し、口承から書承への移行が神話を文字の上に固定したところからその創造性は失われてゆく。しかし、ギリシア神話は口承伝統が失われても、ギリシアという民族の基盤を離れても、広く西欧全体に浸透し、また、時代を越えて芸術諸分野一般、文学にかぎらず、音楽から美術までの創造の源泉となり続けた。この特異な創造的活力を考える上で、ラテン文学によるギリシア神話の受容と継承がきわめて重要な意味をもつと本研究は考える。なぜなら、ローマに受け継がれることを通して、ギリシア神話は異質な文化の中にも強い生命力をもつことを最初に実証したからである。また、ローマ人はギリシアを文化的模範とする中で「人間性」(humanitas)の概念を発見したと言われるが、とりわけウェルギリウスやオウィディウスなどラテン文学黄金時代の詩作はギリシア神話にこの普遍的な価値観を織り込んで見せたからである。

本研究は課題の達成のために神話を語る技法に注目した。それは、ギリシア神話を語り継ぐことを通して伝承そのものへの自覚的意識を伝えるあり方がこれら叙述技法から窺えるからであった。たとえば、範例の場合であれば、その説得力は、引き合いに出す神話について目前の問題との関連で新たな意味づけを与えることによって得られた。つまり、神話はそうして語られるたびごとに批判的に思い起こされている。また、エクブラシスと呼ばれ、絵画や彫刻など造形物に描かれた場面を叙述する技法がある。そこでは、描写される造形物をめぐって、描かれた対象、これを作った者、現に見ている者、その全体を叙述する詩人、詩作品の聞き手(読み手)というように幾層にも視点が重ねられ、この重層的な視点のそれぞれはそこに想定される認識の食い違い、歪み、そして、そうしたズレを生む構造そのものに着目して詩的效果が意図された。

このような異文化を越えての創造のモデル、および、異なる人間の心象と心象を媒介する構造に対する批判的意識は現代においても、あるいは、現代においていっそう考察に値する意義をもつと考える。世界は日々ますます狭くなり、ますます多様な他者との直面を迫られるのであるから。

【研究成果】

これまでに公表した、もしくは、公表までの作業を終えた成果は、(1)論文「リウィウス第5巻の神話範例 ob unam mulierem」(『西洋古典論集』16(1999), pp.9-38), (2)原典訳および解説「キケロー『義務について』」(『キケロー選集』9, 岩波書店, 1999年12月所収), (3)原典訳および解説「ウェルギリウス『アエネーイス』」(京都大学学術出版会, 印刷中)の三件である。(1)は個別的な考究として、ラテン文学黄金時代の歴史家リウィウスが用いた神話の範例について、その機能と効果を検討した。範例は人々を説得する際に神話から例を引く形式で、すでにホメーロスの叙事詩において高度な技法の成熟を見せ、その後も古典文学の伝統の中でジャンルに応じて様々な展開を示したが、リウィウスでは、詩とは異なり、基本的に創作を排する歴史作品であるにもかかわらず、その枠組みいっぱいのところ、ローマ的要素も盛り込みつつ、叙述に歴史家の史観を表現する装置の一つとして神話範例が働いていることを観察した。すなわち、第5巻の冒頭で歴史的人物の演説に用いられる神話の範例がその演説と歴史的文脈に即した意義とともに、これらを離れて、第5巻全体に叙述される歴史展開に対して重要な暗示の機能を果たし、さらには、リウィ

ウスの同時代の歴史状況との対応によって読者に対する警鐘の働きを担われていることを明らかにした。(2)と(3)は対象とする古典テキストの再検討という基礎的作業の一部を構成する。この作業過程で、(2)に関連しては、一方に、キケロの哲学著作における神話からの引用を、他方で、国家との関わりにおいて個々の人間がなすべき行為という作品の主題を通してキケロが提起する「人間性」を観察した。また、(3)に関しては、このラテン文学を代表する国民的英雄叙事詩について、モデルとなったホメロスとの相違を確認し、あらためて、その意義を吟味した。とりわけ、口承伝統に属するホメロスと書物の時代のウェルギリウスという詩作形態の違いに留意しつつ、詩人が、登場人物の担う社会的責務とその立場の相違に由来する重層的視点を物語の装置として、神話の歴史化と呼ぶべきような叙述、および、ウェルギリウス独自と思われるエクブラシスの工夫を示していることを観察した。

この他、基礎的作業として、ギリシアの叙事詩における神話の叙述技法とその構造についても考究を加えたが、そうした観察と検討を踏まえ、現在、まとめに向けて取り組んでいる主たるテキストと叙述技法はウェルギリウス『アエネーイス』とオウィディウス『変身物語』とにおける「照応」である。照応は類似の物語パターンを互いに反映させ合うことにより物語全体の構想を広げるとともに、語られる物語の枠組みを越えた奥行きを加える技法で、叙事詩の詩作の中核をなし、神話の創造的活力の源とも考えられる。

『アエネーイス』の場合、照応はホメロスの物語パターンを作品に取り込むという形で用いられているが、これまでも、この照応の中に、一対一というような単純なものではない、輻輳した関係づけ、あるいは、登場人物の視点を通しての歪んだ対応が認められてきた。しかし、まだ十分な注意が払われていないと思われる箇所、また、その効果の認識について不十分な部分があり、この点に関して、とくに作品の後半部分について焦点を当て、詩全編の解釈とも関連させながらテキストに即して検討している。

オウィディウス『変身物語』は、そのジャンルと詩人の詩作意図という点から作品解釈の議論が分かれるが、本研究では、この作品が叙事詩の詩作そのもの、あるいは、叙事詩によって伝えられる神話伝承とその伝承形態そのものを詩の主題としている、という見方に立つ。従って、本研究課題にとって大きな鍵となる作品である。その立場から、とくに第1巻に焦点を当てて考察する。第1巻が作品全体の詩作企図を提示し、

とくに、その際、照応の技法をふんだんに、あるいは、過剰な仕方でも用いていると思われるからである。全15巻からなる作品全体で250あまりも語られる大小さまざまな変身譚を通じて、物語そのものの変化の妙味とそうした変化が神話伝承の本質にあることを機知を利かせながら詩人が暗示していることをあとづけてみたい。

62 B01班・公募研究

ヨーロッパと日本における西洋古典文学の伝承と受容

研究代表者 西村 賀子

名古屋経済大学法学部 助教授

【要旨】

①西洋古典のヨーロッパ文化における位置付け

西洋古典はヨーロッパ文化の源泉として、とくにルネサンス以降において西欧文化の形成に大いに貢献した。かつては特権的な位置付けをされ、明治時代からの日本の文化にも間接的ながら影響を及ぼした。

②西洋古典の現代における価値

西洋古典は現代ではもはや従来のように理想郷と見なされることはあまりないが、その文化的価値が低下したわけではなく、今世紀の研究成果を取り入れることによって古典は新たな世界観と文化を創造する源泉となる。

③本研究の目標

本研究の目標は、西洋古典テキストの西欧と日本における伝承と受容の解明である。

④本研究の到達段階

西洋古典テキストのヨーロッパにおける伝承と受容に関しては、前年度に予備的考察を口頭と紙面において発表した。その後、研究過程で生じた事情により、日本における伝承と受容の問題への取り組みを延期し、当面は西欧における問題に限定する。

【位置付け】

Ⅱ 西洋古典の位置付けと価値

Ⅱ 1 西洋古典のヨーロッパ文化における位置

西洋古典とは、古典古代の時代にギリシア語およびラテン語で書かれた文学・歴史・哲学などの文献の総称である。ギリシア・ローマの多神教は一神教の西欧中世において異教であったにもかかわらず、古典の文献はキリスト教の教義を補強し教養階級育成の知的バックグラウンドとして大いに利用された。また、西洋古典がルネサンスという精神革命を経由することによって、近代・現代ヨーロッパ文化の源泉となったことは周知の事実である。

ルネサンス時代の意義を過小評価すべきではないが、西洋に古典というものがないければ、ヨーロッパの文化が今日とは異なった形で発展したであろうことは容易に想像される。

西洋の古典を研究対象とする学問はおおよそ百年以上前にドイツ・フランス・イギリスなどを中心として発達したが、そのころから今世紀のなかばあたりまで、ギリシア・ラテンの古典的世界はあくまでもヨーロッパ文明の文化的源泉と見なされた。より厳密に言うと、古典的なものはそこに内在する理性的・理知的あるいは審美的価値によって「理想化」され、西洋が帰趨すべき精神的な理想境あるいは見習うべき模範という役割を担っていたのである。

いっぽう我が国について考えるとき、日本文化における西洋古典の位置は決して低いものではない。我が国は西洋近代の影響の下に文明開化を遂行し、政治・経済・法律・教育などの諸制度やシステムはヨーロッパのそれを手本に近代国家としての整備が進められた。同時に芸術・文化面でも我が国は西洋から多大の影響を受けてきた。したがって間接的にはあるが、ヨーロッパの古典は明治以降の日本の文化形成にも少なからず関与している。そういった意味で2500年以上前の過去に成立したものであるとはいえ、西洋古典の意義は、極東の現在にあってもなお決して失われていないのである。

Ⅱ 2 西洋古典の現代における価値

西洋古典はかつてヨーロッパにおいて「理想化」された古代として、もっぱら「模範」という役割を担ってきた。当然、古典研究もそのような視点から行なわれていた。

しかしながら、現代における古典研究は前世紀までとは異なったスタンスとパースペクティブをとらざるをえなくなっている。というのは一つには、今世紀に

入ってから西洋古典の位置付けに変化が生じたからである。オリエントやエジプトなどギリシアの先行文明や地中海世界文化圏の解明が進んだ結果、かつて「奇跡」とさえ見なされたギリシア文化も決して無から突如として出現したものではないことがわかってきた。つまりギリシア文化は近隣諸文明や先行文化から多大の恩恵を受け、その影響を蒙りつつ成立したことが次第に明らかになってきたのである。

一言で言うと、もはや古典は現代ヨーロッパにおいて「理想化」されていない。だがそれは古典の価値そのものを減じるものではない。むしろ逆にこのような平準化によって、古典文化もまたさまざまな文化のなかの一つであるという相対的な視点、つまり学問研究に本来必要な公平かつ客観的な視点が獲得されるのである。

現代の古典研究が過去のそれとは異なったパースペクティブを必要とするようになったもう一つの理由は、ジェンダー論の導入に求められる。歴史学、社会学、言語学、中世・近代・現代の各国文学研究などの分野で、この30年余りの間にジェンダー視点を導入した研究がようやく市民権を得るようになった。これは、20世紀後半に起こった「知の枠組み」の地殻変動のなかでもっとも重要なものである。このような広範な学問領域を包含する全世界的な知的再編成の試みは、当然のことながら、古典研究にも及ばないわけではない。「女性」、「男と女」、「家父長制」などをキーワードとしてジェンダー観点からギリシア・ローマの神話および芸術作品、文学・歴史・哲学の資料や文献が研究されており、日本ではこのようなタイプの研究はまだそれほど多くないが、欧米ではその成果が近年続々と発表されるようになってきた。

ジェンダー・アプローチによる西洋古典研究は、従来の男性研究者中心の研究とはまったく異なった世界像を呈示する。同時にまたそれは、西欧中心主義のかつての世界史に批判的な観点を投げかけるものともなっている。しかしこのような古典研究は古典がもはや無価値になってしまったことを意味するのではない。むしろ逆に、ジェンダー視点による古典の解明は、21世紀に向けて新しい世界観やより人間的に豊かな文化の創造に寄与しうる可能性を秘めており、西洋の古典が近未来の文化の活性剤となることを示している。

【研究成果】

Ⅲ 1 本研究の目標

西洋古典学は19世紀ヨーロッパにおいて近代的な学問として成立したが、我が国では明治時代以来、

ヨーロッパ文化の源泉としての西洋古典文学・哲学などが紹介され始めた。そして現在では、ギリシア・ラテン文学の本格的な研究が進み、世界的な水準に達する高度な成果をあげつつある。

原典の本文批評や解釈に関しては我が国における研究もかなり高い水準に達しているものの、テキスト伝承と受容の問題に関して言うと、従来においては看過されがちであったという事情がある。そこで本研究ではまず、アレクサンドリア時代以降の古典文学テキストの伝承・保存・研究・普及などがどのような価値観・世界観のもとで、具体的にいかなる過程を経てきたのかを検討する。そのさい、それがヨーロッパという文化統合体の形成にどのように作用したかという問題をも視野に入れておきたい。

本研究が解明をめざす二番目の問題は、日本における西洋古典文学受容の黎明期についてである。先に述べたように、ほとんどのギリシア語とラテン語の文献は明治時代になってから日本にもたらされたが、このような本格的受容よりも前に、実は西洋古典文学は我が国に受け入れられていた。イエズス会の宣教師たちが聖書やキリスト教関係の書物とともにイソップ寓話をもたらしていたのである。イソップ寓話の受容と翻訳は早くも16世紀末から17世紀初頭にかけて行なわれていた。しかしこの最初期の受容はキリスト教弾圧や鎖国などの事情によって文献が散逸している。したがって極東文化圏のなかでの西洋古典文学の最初の受容と伝承の具体的状況はまだ十分に解明されていない。ギリシア・ラテンの本来の原典と『イソポのハプラス』および『伊曾保物語』を比較・分析することによって、我が国における初期の西洋古典文学受容の問題を明らかにしたい。

Ⅲ 2 本研究の到達段階

本研究の二つの目標のうち、最初の目標に関しては昨年11月に「伝承と受容（世界）」班の班会議においてその研究成果の一部を発表した。そしてそれを『古典学の現在Ⅰ』に掲載したので、内容の詳細についてはここでは省略する。『古典学の現在Ⅰ』に記したことはおおむね本研究の予備的考察の領域に属する内容で、今後、具体的なテーマを限定して分析したい。

ヨーロッパにおける古典文献の伝承と受容に関しては、『古典学の現在Ⅰ』に記した段階で問題が解消されたわけではなく、その後むしろ、解明すべき問題点が増え続けた。また、本研究の研究計画書を提出する段階ではジェンダー視点の導入の重要性はあまり認識されておらず、意識下に漠然ととどまっていた

にすぎなかった。しかしその後、とくに文献の「受容」の問題に関しては、受容する側の世界観や意図による無意識的取捨選択や故意の削除などの問題がきわめて重要であることという認識にいたった。そしてこの問題に関しては具体的な作品分析が必要であることを痛感している。

そこで本研究の研究代表者としては、あまりにも膨大であった当初の二つの目標を縮小し、第二の目標に関しては本研究の期間内に終了させることは困難であると判断した。日本におけるイソップ寓話の受容の問題に関しては後年度回しとし、時間をかけてじっくりと資料収集・分析したほうがよいと考えるにいたった。

Ⅲ 3 本研究における入手資料など

平成11年度に科学研究費補助金で購入した主な資料の題名は、次の通りである。

- ① Oxford Classical Texts 99点
- ② Literacy and Power in the Ancient World
- ③ Encyclopedia of Greco-Roman Mythology
- ④ History of Graeco-Latin Fable, vol. 1
- ⑤ A History of Classical Scholarship, vols. 1-3
- ⑥ The Library of Alexandria

63 B01班・公募研究

西洋古典文献の伝承史と中世東西地中海世界の修道制をめぐる実証的研究

研究代表者 秋山 学
筑波大学文芸言語学系 講師

分担者 桑原 直己
筑波大学哲学思想学系 助教授

【要旨】

西洋古典文献の伝承史に関しては、既に欧米の研究者によって研究が進められている。だがその伝承者たるキリスト教修道士・聖職者たちが、それら異教文献をいかに伝承し受容しえたのか、彼らの神学にまで踏み込んで伝承との関係が問題にされることはこれまで

なかった。本研究ではこの点に注目し、古典伝承の主体であった中世キリスト教思想家たちを、特に西洋古典との関わりに置くことにより、古典伝承を可能にしたキリスト教神学の特質を明確にするとともに、古典の側に「キリストを指し示す予表性」が潜むことを明らかにしようと試みた。それによって、古代中世地中海世界を統一的・連続的に捉える新たな文化史観を提示することができた。

【位置付け】

当該古典の文明中における位置づけ；

本研究において対象となった主たる古典作家としては、通例「キリスト教古典」として分類される人々が含まれる。それはすなわち、アレクサンドリアのクレメンス、コンスタンティノス大帝、バシレイオス、ニュッサのグレゴリオス、マクシモス・コンフェッソル、カイサレイアのアレタス～以上ギリシア教父、アウグスティヌスおよびトマス・アキナス、ポスト・トマス（16世紀）のスコラ神学者たち～以上ラテン神学者である。

上記以外に伝承史的に論じられた古典作家としては、ホメロス、ヘシオドス、ソフォクレス、プラトン、アリストテレス（以上ギリシア古典）、およびウエルギリウス（ラテン古典）が挙げられる。

当該古典の現代における価値；

上述のキリスト教古典は、いずれも通常「西洋古典」として分類される作品からは外される傾向にあり、思想史・哲学的な観点でキリスト教世界観が論じられる場合に、「中世思想史」という名の下に解説がなされるのが慣例である。けれども、古典作品を文献伝承史・受容史的な観点から扱う場合、あるいは今後「古典学」の内実が、西洋におけるような写本学・伝承史等の分野をも含むものになった場合、単に古典古代とは異質な世界観の持ち主として彼らキリスト教著作家を客観視するだけでは足りない面が出てくると思われる。古典の伝承者として、彼らも文献伝承に直接的に関わったのである。したがって、本研究において採ったような「受容」の視点から彼らキリスト教古典著作家を捉えることによって、キリスト教神学の精髓たる救済論・終末論のあり方も明確となり、逆に古典のうちに潜む、言わば「旧約」的な諸要因も明らかになってくることが予想される。以上のような理由から、当該古典すなわち「キリスト教古典」の価値は、現代において改めて再評価される可能性が残されていると思われる。

【研究成果】

1年半の研究成果；研究成果は2名の論文・著作のかたちでほぼ尽くされていると思われるので、論考名を列挙することにする。

- 秋山学「バシレイオスとルネッサンス～神学と人文主義の関係をめぐって～」（地中海学会編『地中海学研究』XXII, 65～86頁, 1999年5月）。
- 秋山学「Vergilius, Aeneis VI, 601～622～冥界譚とテキスト批判～」（『エポス』第18号, 66～73頁, 木魂社, 1999年9月）。
- 秋山学「ヘシオドス『神統記』における詩人の召命～預言者と自然啓示～」（筑波大学文芸言語学系紀要『文藝言語研究』文藝篇第36号, 1～16頁, 1999年10月）。
- 秋山学「聖域としての悲劇～『コロノスのオイディプス』の開示する世界～」（筑波大学文芸言語学系紀要『文藝言語研究』文藝篇第37号, 71～88頁, 2000年3月）。
- 秋山学「西洋古典の伝承史における予型的視点の影響について～『牧歌』IVと『オデュッセイア』を中心に～」（科研費特定領域研究「古典学の再構築」総括班編『古典学の現在I』99～102頁, 2000年3月）。
- 秋山学（共訳）『中世思想原典集成20 近世のスコラ学』（上智大学中世思想研究所編訳／監修, 平凡社, 2000年8月）。
- 秋山学「証聖者マクシモスにおける終末論と神化」（筑波大学文芸言語学系紀要『文藝言語研究』文藝篇第38号, 47～64頁, 2000年10月刊行予定）。
- 秋山学『教父と古典解釈～予型的の射程～』（創文社, 2001年2月刊行予定）。
- 桑原直己「トマス・アキナスにおける親和的認識について」（筑波大学哲学・思想学系『哲学・思想論集』第25号, 152～166頁, 2000年3月）。
- 桑原直己「アウグスティヌスと千年王国論」（哲学会編『哲学雑誌』第115巻787号所収, 2000年10月刊行予定）。

当該研究によって明らかになったこと；

桑原によれば、中世ラテン世界の教父・スコラ哲学者（アウグスティヌス、トマス・アキナス）たちによって、古代ギリシア倫理思想の諸概念（愛、自由意志、憐れみ、共同体理念、知、親和的認識など）がキリスト教的な変容を遂げ、キリスト教神学体系の中でも基軸となる位置を確保した。

秋山によれば、それら典型的な中世西欧キリスト教世界の創始者としてのアウグスティヌスの思想形成に

際して、特に古典受容の面で、意外にもギリシア教父神学の影響が隠れた形で及んでいたものと推測される。そこから遡って、初期・盛期・後期にまたがるギリシア教父たちの作品テキスト、およびビザンティン時代のヒューマニストによる著作を「アポカスタシス」〔普遍的救済論〕の視点から読み通すことにより、異教文化をも十全なかたちで受容しうる、真に正統的なキリスト教神学と終末論の内実が浮かび上がるとともに、古典の側に潜むキリスト到来を予表する性格が明らかになった。

採用した新方法・新視点など

桑原は新刊のラテン教父 CD ROM の援用をも含めて、原典テキストに現れる語彙・用法等を丹念に追う基礎的な研究方法を採っている。これは機械化・電算化が進んだ現今にあっても変わらない堅実な方法だと言えよう。

秋山はそのような基礎的方法を遂行するとともに、手写本のマイクロフィルムを可能な限り入手し、中世の人文主義的修道士たちが、異教古典・キリスト教教父著作の双方に関して、共に筆写させ欄外注を付していることを実証的に確認するという方法を採用した。

中世における外国文化の受容と展開

研究代表者 木田 章義

京都大学大学院文学研究科 教授

分担者 鈴木 広光

九州大学文学部 講師

【要旨】

日本では、宗教・思想として仏教が早くから輸入されていたが、仏教の受容というテーマは膨大な人員と時間が必要であり、また、これまで多くの研究者の手によって連続と続けられている。本研究班では、その中で、特に中世の禅宗の移入とキリスト教の移入との問題を、関連させつつ研究するのが目的である。

禅宗の輸入に際して、禅宗での重要な經典として『碧巖録』を選び、その受容のさまを中心に考察した。特に、東国の資料と思われる寿岳章子氏旧蔵の『碧巖録』の注釈書に着目し、その注釈書としての性格と、その依拠した先行注釈書がどのようなもので、それらの注釈書がどのような流派に属しているのかなどを中心に考察した。

キリスト教については、聖書がどのように日本で受け入れられたのかという問題を扱い、特にキリシタンによる福音書翻訳がいかに行われたのかという実態の解明を試みた。資料としてはヴァチカン図書館蔵のパレト写本の聖書抜抄句集を分析し、表記、術語、用途などを中心に考察した。

【位置付け】

五山文学・五山文化については、その根底にある日本人の禅宗の受容の仕方という問題は、禅宗の不立文字という性格や古い資料の欠落から、あまり考察されておらず、日本人の禅宗理解がどのようなものであったかということ、時代による変容を考慮しつつ分析してゆくことは、これからの五山文化研究の基本となる。

キリスト教の受容については、どのように聖書を理

解していたか、どのような聖書を利用していたかという基本的な考察はまだ行われていない。そういう考察にはもっともふさわしいバレット写本についても、研究は語学的なものに偏っており、より基礎的な研究を進めて行く必要がある。

【研究成果】

禅宗は日本の中世の文化や文学に大きな影響を残し、その思想は武士に受け継がれ、「武士道」の形成に大きな影響を与えた。貴族化した幕府の要人たちも禅宗に帰依し、五山の社会的地位は急上昇した。同時に五山僧は裕福な庶民たちに教化することによって、新しい知識階層を形成する糸口を作った。この五山文化の基盤となった禅宗の受容の問題を考察するために、当時、重要な経典として尊重されていた『碧巖録』とその注釈書について調査した。

日本では『碧巖録』の版本が古くから存在し、山城、美濃、能登、越後、日向など、地方版が多いことが特徴的である。これほど地方版の多いのは、いかに『碧巖録』が経典として重要視されていたかを物語っている。

『碧巖録』がどのように日本の禅僧に受容されていたかを調べるため、寿岳章子氏旧蔵の『碧巖録集抄』を取りあげ、その内容について考察してみた。

『碧巖録集抄』は、第二、四、五、八巻のみ残存しているが、濁点が豊富で、「ゾロ(ヨ)」という形が現れることで有名なもので、東国で編纂されたものようである(天正十三年書写)。本書に引用された注釈書の著者名を調べると、関山慧玄・宗峰妙超・竺仙梵僊・椿庭海寿・岐陽方秀・日峰宗舜・一休宗純・悟溪宗頓・東陽英朝・大休宗休・大宗宗弘・道寿(景聡興島?)・景叟(和尚)などであるが、これは碧巖録の注釈の一つである「虎哉本」に表れる人名と、宗峰妙超・日峰宗舜・大宗宗弘・東陽英朝・悟溪宗頓・竺仙梵僊・椿庭海寿・岐陽方秀が重なる。虎哉本にあって、本書にないのは、南浦紹明・桃隠元朔。仁濟宗恕・仁軸宗寿・玉浦宗珉・南陽宗耕であり、本書にしか表れないものは関山慧玄・大休宗休・一休宗純・景聡興島である。これだけの引用書が共通しているのであるから、何らかの関係はあるはずであるが、注釈文では一致することが無い。一致しないというのは、注釈する場所が異なっている場合が多く、注釈方法が異なっているのであって、決して両者の関係を否定するものではない。これはおそらく、たとえば宗峰妙超の説として引用されているのは、宗峰妙超が碧巖録全体に注釈を施した本があったというのではなく、宗峰妙超が注釈を書き込んだか、宗峰妙超の講義を聞いた人がその

説書き込んだ本があり、同じ本にたとえば関山慧玄が注釈を加えていった、もしくは関山慧玄の講義を書き留めていったというようにしてできた証本のようなもの、つまり、代々、大応派が積み重ねて来た注釈の集成したようなものから引用したと考えることができる(これは必ずしも一本とは限らない)。そのように考えれば、虎哉本と本書とで、注釈文が一致することがないけれども、依拠する注釈書は同じという現象の説明がつく。

これらの注釈書の引用は、巻によってかなり偏りがあり(たとえば関山慧玄の注釈は、巻二、四では「関山」として引用され、巻五では「関山下語」として引用されている。巻八には引用がない。また宗峰妙超の引用は巻八にしかない)、これらの人々が全巻に注釈を施していたのではなく、部分部分に注釈を加えたものが伝来しており、あるいは複数の人物の注釈がある本や、また、抜き書きなどを利用して、これらの注釈はできていたのではないかという推測の傍証となる。虎哉本に景聡興島の名前が「某云」という形で出てくるのは、流派意識ではなく、大応派が代々解釈を積み重ねてきた注釈を指していると考えべきであろう。そしてたまたま注釈者の名前の分かっているもののみ、人名を付したと考えれば良い。

典拠とした文や説明の例文として引用された漢籍・仏典は90種近くあるが、ほとんどは一、二例の引用しかなく、また、名称も、「聯灯」(1例)「聯灯録」(1例)、「会元」(7例)「五灯会元」(1例)というように、少しずつ異なっており、やはり、これらの引用を含んだ、代々の注釈が存在していたと解釈するのが合理的である。

13世紀から、連綿と『碧巖録』の注釈が行われ、『碧巖録』の解釈は、天正十三年(一五八五)に到ると、日本人の注釈だけで十分に理解できるほどになっていたことが分かる。さらに他の注釈書と比較することによって、どの程度の理解がなされ、それが中国本土の理解とどのように異なっていたのかという点を明らかにすることができるであろう。

キリスト教の受容については、ポルトガル人イエズス会士バレット、M. が、日本語学習のため、当時既に日本で作られていたキリシタン物語、日本語訳されていた聖書抜抄句集、聖人伝をローマ字で書写した「バレット写本」(1591年)の分析を通じて、その受容のありさまを追跡している。

「バレット写本」の中、「聖書抜抄句集」の部には、待降節第一主日から始まる「年中の主日並びに年中の主なる祝ひ日のエワンゼリヨ」、四福音書の抜粋した「わ

れらが主ゼズ・キリシトの御受難」,「諸々のサントスの特定のエワンゼリヨ」など,主日と祝日の典礼において朗読,解説される福音書や書簡の聖句が含まれており,キリシタンによる福音書翻訳の一つの成果として注目に値するものである(キリシタンによって聖書が日本語訳され,刊行されたという記録はあるが,現存しない)。この資料を漢字仮名交じり文に翻字し,翻訳論の見地から注釈を施すことによって日本語訳された聖書抜抄句の性格を見極めることを基本作業と位置づけて,作業を行っている。そして,キリシタンが日本布教にあたって採用した典礼における日本文化への適応方針が,言語の分野にどのように反映しているか。またキリスト教の教義に関わる術語に原語を用いることの意味を検討している。この日本語訳は読者によって「読まれる」ことを想定したのではなく,典礼の場において「朗読される」ことを目的としたものであったが,このような享受のあり方は日本語訳の性質とどのように関係しているかという点もテーマとしている。

本研究では,「パレト写本(Reg. Lat. 459)」の訳文をヴルガタ聖書のラテン語文と対照から得られる情報を全ての考察の基礎にしている。対照に使用しているヴルガタ版テキストは Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1983であるが,パレト写本の成立時期が,ヴルガタ聖書の公認本文が確定された「シクスト・クレメンティーナ版」の出版(1592年)以前のことであり,直接的な原典を探ることが大変困難であるために,便宜的にこの本に依らざるを得ない。またパレト写本同様,ヨーロッパでもかなり早くから教会暦に沿った説教朗読用の Evangelia(典礼書としての福音集)が編集されているので,聖書そのものではなく,抜抄句集が原典である可能性がある。そこでドイツ聖書教会版の異文資料欄を参考に対照作業を進め,さらに現在大英図書館に複写申請中のオロスコ, A. が編んだ Evangelia(調査の結果,現段階で年代的,地域的に最も適切であると考えられる)を参考資料に活用する。

どのように作業を行っているかを示すために,以下に現在進行中の翻字と注釈のサンプルを掲げ,続いてその問題点について述べる。

○御公現後の第四主日(Mt. 8:23-27)

- 23 ゼズス御船に召されければ ゼシボロも御跡より参られける処に
- 24 俄に風波起つて,此船打隠さんとし 逆風人々に吹き向ふ也。ゼズス御睡眠(スイメン)ありけるに
- 25 ゼシボロ御傍に参り驚かし奉り 如何にドウミネ我等既に死するに及びければ扶け給へと申さる

るに,

26 ゼズス 如何にヒイデス弱き輩 何の故に恐れられけるぞとて起直らし給ひ,風波に静まれと宣へば即穏やか也。

27 其時人々大きに驚き かかる風波までも御辞に随ひ奉るは誰にて在ますぞ 互に申合ひける也。

(13v2 13v15)

【24 俄に風波起つて,此船打隠さんとし 逆風人々に吹き向かふ也】VG: et eccemotus magnus factus est in mari ita ut navicula operiretur fluctibus(すると見よ,海に大きな変化が起こり,その結果船が波に覆われる程であった)。底本では in mari(海に)が訳出されていない。旧約よりガリレヤ湖は「海」と表現されており, Mt. Mc. 共にもこれを受けて mare を用いるのに対して, Lc. だけは厳密に stagnum(湖)を使用している。イエスが突風を静める話は, Mc. 4:35-41, Mt. 8:23-27に並行して Lc. 8:22-25にもあることから,訳者は Lc. の用語を意識し,混乱を避けるために敢えて訳出しなかったか。「俄に風波起つて」は,平家物語巻第五-文覚被流の「俄に大風ふき大なみたつて,すでに此舟をうちかへさんとす」を意識した表現か。「逆風人々に吹き向かふ」にあたる表現は, VG のラテン語文に見えない。Mt. 14:22から始まるイエスが水上を歩く話にも,弟子達が湖で波に悩まされる場面があり,24節に erat enim contrarius ventus(風が逆であったから)という表現が見える。日本語訳にあたってこの表現が取り入れられた,あるいは混入したものか。【26 風波に静まれと宣へば即穏やか也】VG: imperavit ventis et mari et facta est tranquillitas magna(風と海に命じると,とても静かになった)。VG に imperavit(命じた)とあるところを,底本は「静まれ」というイエスの言葉を付加している。Mc. 4:39の dixit mari tace obmutesce(海に静まれ,黙れと言った)と対応。

- ①日本語訳はヴルガタ聖書のラテン語聖句を必ずしもそのまま翻訳しているわけではなく,上記サンプルの注釈から明らかなように,マタイの本文を日本語訳する場合でも,他の福音書の並行本文を取り入れている。他にも旧約の聖句をもとに書かれた文の場合,新約よりも旧約によく対応する日本語訳も数多く見られる。
- ②聖書に全く出現しない表現が見られることがある。例えば,ヨハネ福音書20章19-23節のユダヤ人を恐れて隠れていた弟子たちの前に復活したイエスについて,「御手の疵と右の脇の御疵を顕し給へば」と訳されており,聖書に全く見られない「右の」という言葉が付け加えられている。それは,キリスト教で神の右手が

絶対視されており、キリストの場合も右手が左手よりも優位とされたという解釈学的事情と、キリストの磔像や「不信のトマス」図で右手に傷があることが背景にあるためと考えられる。他にもイエスの墓が「石棺」と訳されるなど、図像や宗教劇などの視覚的要素を考慮に入れて解釈する必要がある日本語訳が見られた。これらは、朗読の場において、聴衆が聖書に描かれた現場に身を置くことを可能にする、臨場感を狙ったものではないかと考えられる（原典となった聖書抜抄句集にすでにそのようなラテン語文が編集されており、それを日本語訳しただけという可能性も否定できないが）。

この作業は、研究目的を遂行するためのごく基本的なものであるが、あまりにも膨大な作業になるために、これまで行われてこなかったものである。この基礎的研究を完成させるためには、数年の歳月を要するであろう。

65 B02班・計画研究

キリシタン文献の文化横断的研究

研究代表者 米井 力也
大阪外国語大学外国語学部 助教授
分担者 エンゲルベルト・ヨリッセン
京都大学総合人間学部 助教授

【要旨】

- キリシタン文献には、日本文化がはじめて西洋文化と接触したときに生じた軋轢や融合の様相がはっきりと刻印されている。
- 本研究では、日本における西洋の古典の伝承と受容の一環としてのキリシタン文献を、言語・文化・歴史の横断的な視座から総合的に分析することを主眼とする。
- キリシタン文献ならびにその原典の収集と対照、ヨーロッパ人宣教師や日本人キリシタンが直面した異文化間の軋轢等の実証的分析、大航海時代のヨーロッパと日本の歴史的な位置、江戸幕府の迫害によ

て潜伏せざるを得なかったキリシタンによるキリシタン文献の変容など多角的に研究する。

- また、同時に、従来一部の研究者しか触れることのできなかったキリシタン文献をデータベース化することによって、研究を深めるための基礎とする。

【位置付け】

当該古典の文明中における位置付け

キリシタン文献は、西洋古典の根幹をなす聖書ならびにキリスト教書をふまえている。それは時空を隔絶したヨーロッパにおいて何世紀にもわたって語りつがれた古典の翻訳の試みとし受容された。この文献には、ヨーロッパ文化をどのようにして日本語に翻訳したか、また宣教師の活動を媒介としてどのように歴史意識を受けとめたか、という問題が含まれている。

当該古典の現代における位置付け

したがって、これらの文献は、大航海時代の異文化コミュニケーションの実相を反映しているばかりでなく、現代において宗教抗争が各国で繰り広げられている現状を再考するきっかけともなりうるという点で高い価値を有している。

【研究成果】

1年半の研究成果

研究代表者は、『どちりなきりしたん』『ヒイデスの導師』『ぎやどべかどる』『コンテムツスムンヂ』などのキリシタン文献のなかに引用された聖書の言葉と『サントスの御作業』と題する聖人伝の翻訳について、翻訳原典との比較対照を通じて、言語にあらわれた軋轢や融合の様相を分析すると同時に、江戸時代におけるキリシタン文献の変容について、潜伏キリシタンによって記された文献の分析をおこなった。また、大航海時代に日本とおなじくキリスト教を受容したフィリピンにおける翻訳の問題の分析に着手した。その成果は、平成12年度仏教文学学会大会における報告「複数形の地獄：キリシタンの翻訳」などのかたちで公にされた。

研究分担者は、ポルトガル インド マカオ 日本と連なるイエズス会の活動とスペイン メキシコ フィリピン 日本と連なるドミニコ会・フランシスコ会等托鉢修道会の活動の比較対照を通して、ヨーロッパ人宣教師や日本人キリシタンが直面した異文化間の軋轢、大航海時代のヨーロッパと日本の歴史的な位置にかんする実証的分析をおこなった。とりわけ、インドの研究者との共同研究を開始することによってこれまであきらかにされていなかったアジアにおけるキリスト教の歴史の裏面に光を当てることができた。

当該研究によって明らかとなったこと

日本とフィリピンにおけるキリスト教文献の翻訳の問題を考察することによって、統一国家の形態をまがりなりにも整えつつあった日本とバラガイという部族集団が分散していたフィリピンではキリスト教文献の翻訳方法に差異が認められる。また、仏教をはじめとする宗教が根づいていた日本とアニート信仰というアニミズムが主流だったフィリピンとでは訳語の選定において異なっている。

日本とインドの比較においては、両地に滞在した宣教師、とりわけ巡察師ヴァリニャーノのヨーロッパ中心主義の問題があきらかになった。そのなかにはユダヤ人排斥の姿勢も含まれる。これは、現代におけるユダヤ人問題にもつながる大きな課題である。

採用した新方法、新視点など

研究代表者は、とくに教理入門書『どちりなきりしたん』の比較対照の際に、ポルトガル語・スペイン語・タガログ語・日本語を比べるという方法をとった。そのため、タガログ語学習の必要があり、もと留学生で現在、在日のフィリピン人にタガログ語の点検を依頼した。タガログ語・スペイン語対訳の『どちりなきりしたん』はこれまでほとんど研究されてこなかった文献であり、日本語文献との比較により、大きな成果が期待される。

研究分担者は、おもにインドにおける修道会の活動について、ヨーロッパの言語で記録された Documenta Indica を中心に調査をすすめる一方、インドの研究者との議論をくりかえしながら、大航海時代の実相をあきらかにした。今後も国際協力によって、大航海時代の多角的・文化横断的な研究が進展することはまちがいない。

近代日本における西洋古典文化の受容と教養文化の変容に関する歴史社会学的研究

研究代表者 筒井 清忠

京都大学大学院文学研究科 教授

分担者 田中 紀行

京都大学大学院文学研究科 助教授

【要旨】

西洋の文学・思想の古典は、近代日本の知的エリートの文化としての教養主義文化の中心であった。日本の古典の場合と異なり、西洋の図書を古典（正統的文化）として選別する過程には、国家の政策的関心が介入する度合いが低く、そのため、学校教育よりも出版メディアが中心的要因として関わってきた。昭和初期における出版市場の飛躍的拡大によって西洋の古典の読者層が大衆化し、その際出現した「全集」と「文庫本」という出版形態が「古典」の制度化の中心的制度となった。

【位置付け】

当該古典の文明中における位置付け

本研究で対象とする西洋の古典（狭義の古典、つまり古典古代に書かれたテキストだけではなく、教養人が読んでおくべき標準的テキストとして評価が定まっているテキストという意味での古典）は、昭和期以降の日本の知的中間層（主として高等教育を受けた上層ホワイトカラー層）にとって、教養の中心部分をなすものであり、とりわけ青年期的人格形成において重要な役割を担ってきた。近代日本のエリート文化としての教養主義文化の中心であり、したがって近代日本の指導者の精神形成に重要な影響を与えてきたのが西洋の文学・思想の古典であった。

当該古典の現代における価値

古典的テキストの読書を中心とした教養（主義）文化が衰退しはじめてから久しく、何が読まれるべきスタンダードとしての古典かが不明確になっている現代日本において、当該古典の価値はあらためて見直される必要がある。

【研究成果】

本研究では、近代日本における西洋文化の一連の受容過程のなかで、文学・思想の特定の著作が「古典」として選択的に受け入れられ、日本人の教養文化を変容させていった過程を、主に社会的・制度的側面から解明することをめざしている。現在までのところ、近代日本の出版文化や高等教育などに関わる資料の収集を進めながら、思想史・文学史・メディア史・教育史・比較文学など関連諸分野における先行研究および社会学的分析視角の検討を主に行なってきた。現在、大正期から昭和初期にかけての時期　つまり、教養の大衆化が始まった時期　を中心に資料の分析を始めている段階である。

本研究は「古典」の内容に立ち入ったものではなく、むしろ社会学の立場から「古典」の選択・受容過程を分析するものであり、社会の中での古典の機能を問題にしている点で、この特定領域研究全体の中でもユニークな位置を占めているのではないかと思われる。上述の思想史・文学史等の分野で従来行なわれてきた研究と異なり、「古典」とされるテキストがどのような社会的・制度的ルートをとおって正統的なものとして選択され、社会の中のいかなる集団・階層によって受容されていったのか、またその結果として日本人のスタンダードな「教養」のあり方にいかなる変化をもたらされたのか、といった問題の解明をめざしている。したがって、ここでは「古典」は主として日本人の「教養」文化の構成要素として考察される。

研究はまだ継続中であるため、まとまった研究成果が披露できる段階ではないが、暫定的に次のようなことは言えそうである。日本の「古典」の制度化過程においては学校教育制度(特に中等教育のカリキュラム)が中心的機能を果たしたのに対して、西洋の「古典」の受容過程においてはむしろ古典の翻訳・出版が最も基本的な要因であった。というのは、日本の「古典」の制度化には日本の国民文化の創出という国家の文化政策上の課題が関わっていたのに対し、西洋の「古典」についてはそうした政治的要請が直接向けられることはなかったため、民間の出版活動と読書によって受容のあり方が決まると考えられるからである。

西洋の古典の場合、学校教育制度の中にその制度化に関連する要因を求めると、おそらく旧制高校における外国語の授業で使われたテキストが重要になるだろう。とりわけ、ドイツ語の授業を通して読まれたゲーテ、シラー、カント、ヘーゲル等々の著作が知的エリートの必読書として、「古典」の地位を確立していった。これらはいままでもなく、大正期に形成された

「教養主義」文化の中核をなすものであった。ただ、旧制高校での西洋的古典の伝達は、あくまできわめて少数の知的エリートを対象とする「密教」的活動であり、社会全体へのインパクトは間接的なものにとどまった。

そのようなわけで、西洋の古典が日本人に広く読まれる古典として定着する過程については、出版メディアに目を向ける必要がある。明治期から続いてきた西洋の文学書・思想書の翻訳の流れの中で、昭和初期に起こったいわゆる「円本革命」(1冊1円という廉価で予約販売された全集ものの出版ブームとそれにつづく大量出版時代の到来)は画期的な意味をもった。これによって出版の大衆化が一気に進み、欧米の文学・思想にふれる読者層が飛躍的に拡大したためである。

改造社の『現代日本文学全集』刊行に端を発する円本ブームにおいて西洋の古典の制度化と普及にとりわけ大きな役割を果たしたと見られるものに新潮社の『世界文学全集』(第1期全38巻,1927-30年,第2期全19巻,1930-32年)がある。これはアメリカで刊行されていた叢書『ハーヴァード・クラシックス』(全51巻,1919年)をモデルとした木村毅の企画によるものだが、これによって、それまで少数の知識層ないし文学愛好家によって読まれていた外国文学が、その読者層を一気に数百倍に拡大したといわれている。また、同じ時期に出版された西洋思想の全集としては、春秋社の『世界大思想全集』(第1期全124巻,1927-36年,第2期全29巻,1929-31年)がある。ただ、両者とも古典とはいえない同時代の作品も含んでおり、とくに後者は現在では読まれることもなくなった著者の著作をかなり収録していた。

同じ時期に古典の普及を促進したメディアとして、全集と並んで重要なのが文庫本である。とりわけ、当初刊行点数の3分の1以上を西洋文学の古典に充てていた岩波文庫(1927年刊行開始)は、これ以降の読書人の必読書目の選別において中心的な役割を果たした。教養人が読んでおくべき「古典」の選別にあって、良くも悪しくも岩波書店の「権威」が大きく作用したことは否定しがたいのである。岩波文庫の企画に際しては、その発刊の辞にもあるように、ドイツのレクラム文庫がモデルとなり、初期には三木清がブレーンとして深く関与していた。

昭和初期に出現した「全集」と「文庫」という出版形態は、第二次大戦後も踏襲され、1960年代頃まで教養人の必読書の決定に大きく関与した。ただ、教養人の必読書がすべて「古典」というわけではなく、常に同時代の作品が含まれており、それらはその時代の流

行にも左右されていた。また、翻訳書の刊行点数の増大に伴って、各種の必読書リストが求められるようになり、河合栄治郎編の『学生と読書』に代表されるようなブックガイドが書かれはじめたのも昭和戦前期であった。

こうした昭和初期の出版市場の拡大によって、当初は外国語の知識のある学歴エリートにほぼ独占されていた西洋の言語文化が、知的中間層の正統的階層文化に組み込まれていったと考えられる。

禅林聯句に関する基礎的研究

研究代表者 朝倉 尚

広島大学総合科学部 教授

【要旨】

- 一．本研究の目的は、いまだ未開拓である室町期の五山文学の一分野である「禅林聯句」において、外国文化（禅思想や漢文学など）がどのような形で影響を与えているかを解明することにある。
- 一．五山文学の特性として、作品中に禅的発想と博引旁証の徹底が指摘されることを再確認する。
- 一．禅林聯句の作者は、極力、先行の諸文芸より典拠を用いて表現したことを指摘する。（禅林聯句の定義）
- 一．禅林聯句の代表として「江東避乱聯句」（仮題）を取り上げる理由を述べる。
- 一．「江東避乱聯句」を特定する。
- 一．「江東避乱聯句」の本文と抄文を固定する。
- 一．「江東避乱聯句」の解釈を試みる。

【位置付け】

本研究の位置付けについて、前項で示した各箇条に添って詳しく詳述する。

本研究のテーマとして「禅林聯句に関する基礎的研究」を設定した。究極の目的は、いまだ未開拓である室町期の五山文学の一分野である「禅林聯句」を解明

することにあるが、本科研の段階では基礎的研究の一環として、聯句資料を収集の上で、特に外国の文化、具体的に言えば漢文学や禅の思想がどのように受容され、表現されているかの解明に焦点を合わせて作業を進めている。未開の分野の開拓は、学会が速やかに手を付けねばならない課題であり、上述の目的は、特定領域研究「古典学の再構築」の「伝承と受容（日本）」班への要請と合致する。

そもそも、禅林の文学の特性として、従来の価値観の転換を内容とする禅的発想と、観念的世界の展開による博引旁証の徹底を指摘し得ることを主張して今日に至っている。前者は主として禅僧の宗教的基盤に拠るものであり、インド、中国を経て日本に伝来した禅宗の宗旨・思想の受容の結果である。後者については、主として文学的基盤に拠るものであり、中国からの先行文芸の受容の結果である。これらの特性を禅林聯句の作品内においても検証することになる。なお、上記の特性は、中世国文学一般の特性とも、方向性としては一致している点に注目したい。和歌における本歌取り、連歌の隆盛、能（謡曲）の創出などを想起されたい。

今回の研究対象に取り上げた「禅林聯句」について、作者の眼前の景や、座衆が共通に理解の可能な心情を素材として、先行の諸文芸より密接に関連した典拠を用いて表現し、二句一聯によって最小単位のまとまりある世界を共同で築き上げようとする文芸である。のように定義されるのではないかと考えている。特に五韻一句を一巻とする長聯句においては、当座的な性格が濃厚に発揮されるために、禅的発想と博引旁証が毎聯に指摘し得るとは言い難い。が、博引旁証についてはかなり明白に認め得る。そしてそれは、禅林聯句興行の目的・需要、さらに聯句会の性格の一つに「修練性」が顕著であることに起因する。禅林聯句は、一方で禅林・禅僧にとって必須の要件である、主要公式文書の文体である禅林四六文の構成要素をなす、対句と機縁に習熟するための手段として有効であった。機縁（の法）とは「表面上は叙情なり叙景なりの語として用いているが、さらに裏面において同座している相手の存在をしらせている（という法）」である。裏面において同座の聯衆の存在を知らせるには、先行文芸によってそれに示される人物・事件・事柄・心情などに比するのが簡便で、有効な方法の一つであった。禅僧は平素より自己の観念的世界を磨く必要があった。禅林聯句の中で「江東避乱聯句」（仮称）を特別視するのは、作品集として成立直後より著名でありながら、その実体が不分明であったことによる。連衆とし

ては、当代を代表した横川景三（1429 - 93）、桃源瑞仙（1430 - 89）に、後に「湯山聯句」を興行する景徐周麟（1440 - 1518）も時に随侍した。応仁元年（1467）八月から翌二年四月にかけて、近江國山上の永源寺を中心に三巻三句が製されている。応仁の大乱によって京洛よりの避乱の途次に興行するという、異常な環境で成立していることも、禅林聯句の特性を探る上で有益である。

『梅花無尽蔵 句集』（内閣文庫所蔵。全八冊）、『聯句集』（足利学校遺蹟図書館所蔵。全八冊）、『聯句集』（京都大学・平松文庫所蔵。全十二冊）、『聯句集』（京都大学・平松文庫所蔵。全十一冊）などの禅林聯句の総集の収集、整理により、「江東避乱聯句」の実体を特定する中で、これを解説した抄物が『湯山聯句』（大谷大学図書館所蔵。一冊）と『対仗詩集』（龍谷大学図書館所蔵。一冊）であることが判明した。一方で、本聯句が興行された時期に相当する横川の作品集『小補東遊集』によって、聯句が成立した経緯や背景も判明している。これらによって、作品における当座性、禅的発想、さらには観念的世界の展開・博引旁証の解明のための条件が整備されてきたことになる。

聯句本文の固定は、主として総集に収められる作品の本文を校合・校訂することによって行う。抄文については、抄文付きの本文として収める場合が存する『聯句集』をふくめて、いずれの本も成立の事情が異なり、体裁も異なるために、忠実な翻刻に努めたい。作業を遂行する上での困難さは、圧倒的に後者にある。三本が、写真・複写に拠るだけでは判読困難の物理的障害を持ち、このために草稿を作成した上で原本と照合する必要が存する。三本は貴重図書扱いであるために、閲覧許可に手間を要し、一定期間出張して判読しなければならない。先人の古典遺産として新たに存在を主張し、文学史上に位置付けを与えるための生みの試練である。

本文の確定・固定と並行して、聯句の解釈を試みたい。先年の新日本古典文学大系53『中華若木詩抄・湯山聯句鈔』（岩波書店、平7）においては、いわゆる前句との「付合」の実態、さらには当座性や典拠の指摘を行うために注・鑑賞注を施したが、解釈を示すまでには至っていない。今回は、敢えてこれに挑戦することになる。この際に大きな障害になるのが、前述の「機縁」の処遇である。聯句の抄物の解説中における、現代人にとっては一見不可解・不必要に思える先行文芸（漢籍・仏典）からの典拠の指摘は、実は読者に「機縁」の理解を少しでも助けるための配慮として受け取れる。表の意味は語釈の積み重ねからもある程度まで

理解が可能であるが、裏の意味は当座性と先行文芸に求められる典拠の意味とをうまく融合することができなければ理解、解釈が不可能である。そのためには、聯句の語句を解釈した可能性が高い『蕉窓夜話』や『蠹測集』をはじめとする抄物類、さらには禅林における機縁（の法）に資するために編まれたと解される『機縁』の収集と整理に努めなければならない。

未開拓の分野の作品の解釈を試み、その解釈法を確立しようとする訳であるから、如上の困難のほかにも新たな問題が生じる可能性も存するが、それについてもいかにしても克服したい所存である。

【研究成果】

研究計画に添って諸機関に出向き、禅林聯句資料の調査、収集を遂行した。主な収集先は、国立国会図書館、内閣文庫、足利学校遺蹟図書館、京都大学図書館（平松文庫、谷村文庫）、大谷大学図書館、龍谷大学図書館、永源寺、建仁寺両足院などである。「江東避乱聯句」については、実体の把握・証明に見通しが付き、発表原稿が用意可能な段階である。本文と抄文の固定・確定は、草稿を作成して、一部分については原本との照合に移った段階である。解釈については、抄文に示される解説と典拠について調べながら、機縁の実体の解明に努めている。

機縁については、前項で述べたが、建仁寺両足院を中心に、その理解を助ける抄物や機縁書（仮称。『

機縁』の類）を収集して、具体的に解釈する際の利用方法について模索中である。これらの諸書は、その大半が従来放置されていたものである。

いまだ研究途次の段階であるが、本課題でこの間に得られた知見を反映して、論文として公表したものとでは、以下がある。

イ。「戦乱における禅林の文芸 応仁の大乱をめぐる 禅僧（横川景三）の軌跡」（『中世文学研究』第25号 終刊、平11・8、p. 112 - 30）

ロ。「景徐周麟の文筆活動 延徳二年」（『地域文化研究』第25巻、平11・12、p. 1 - 39）

ハ。「『江東避乱聯句』（仮称）の第唱句と入韻句について」（『日本文化研究』大連外国語学院日本文化研究中心、平12・2、p. 59 - 83）

イは横川景三の応仁の大乱期における文芸活動、ロは景徐周麟の文筆活動、ハは「江東避乱聯句」の各巻の冒頭一聯についての解釈に関する論考である。

「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献

インド・コンカニ語諸文献との対比を中心にして

研究代表者 丸山 徹

南山大学文学部 教授

【要旨】

- ① 日本語の「古典」ということばは、西欧の(ラテン語に遡る) Classicus, 中国語の「古典」という表現を二つの大きな流れとして、そしてもしかしたら日本において「小点」から派生した「古点」(「古典」という表現なども小さな支流として取り込んで行く形で、成立したものである。
- ② 古典が絶対的の行為規範となるキリスト教世界の文献(語学書)が、日本においてどのように受容されたのかを、アフリカ・ブラジル・インドの場合と比べながら考察を進める。
- ③ キリシタン文献(語学書)の「規範」が受容の過程でどのように変えられてきたかを、
 - a. キリスト教要理の翻訳
 - b. (ローマ字)表記
 - c. 品詞分類
 - d. 辞書記述
 という四つの観点から考察する中で、これまでに下記(3 ⑤に記載)のような成果を上げる。

【位置付け】

現代においてはもちろんのこと、これまでの人間の歴史においてもキリスト教世界の古典が果してきた役割には大きなものがある。そうした古典の日本における受容を考える上で、16世紀から17世紀にかけて来朝したイエズス会士の手になる「キリシタン文献」について考えることは極めて大切である。本研究はその中の「語学書」を中心に考察を進めるものである。

「キリシタン文献」(語学書)には少なくとも次の三つの角度から光を当ててみる必要がある。

- ① (16・17世紀の)ラテン語・ポルトガル語語学書成立の背景

- ② 同時代のアフリカ・ブラジル・インド、そして日本における(ポルトガル語で書かれた)現地語文法書・辞書成立の背景
- ③ 中世日本語の姿

これまで日本においては主として上記③の観点から研究がすすめられてきたが、こうした語学書が、同時代のヨーロッパにおける語学書の構成に倣って(世界各地の現地語について)書かれているからには、上記①, ②の観点を研究に導入することは不可欠である。一方、外国、主としてヨーロッパにおいては、上記①の研究が独立した形で進めら、その中では数々の成果があがっている。本研究はそうしたヨーロッパ・日本における研究成果を土台として、(16・17世紀の)ポルトガルにおけるラテン語・ポルトガル語研究史を縦軸に、同時代のアフリカ・ブラジル・インドにおける現地語文法書・辞書成立史を横軸にとり、日本における「キリシタン文献」語学書に光を当てようとするものである。(今回は特にインドにおける語学書との対比を中心に考察を進める。)

本論においては、ドチリナキリシタン(カトリック要理)、文法書、辞書の三種の文献を「語学書」と呼ぶ。カトリック要理を「語学書」として扱うことについては、下記の論文を参照されたい。

「大航海時代の語学書」としてのキリシタン文献(南山国文論集 17・1993年)

【研究成果】

- ①「古典」ということば、成立の背景
 - a. 1595年イエズス会編纂の羅葡日辞書(ラテン語・ポルトガル語・日本語辞書)における Classicus の項目には、「兵船」(ひやうせん)「集中」(あつまりぢゅう)といった日本語が当てられ、概略、「艦隊」、「団体」、「古典作家」という説明が見られる。

[Classicus, a, um. Lus. Cousa De armada. Iap. Fi-oxenni ataru coto. Item, Cousa de classe, ou ordem. Iap. Cumi, atcumarigiuni ataru coto. Classici autores. Lus. Autores classicos. Iap. Latin no xouo iyaxiqi cotobauo majiyezu xite caqi voqitaru fitobito...(p.123)]

これは、本来、Classicus が Classis 「艦隊」(国家の危機に際し艦隊を寄付することのできる人)に由来し、そこから「人間の精神の危機を克服するに足る言葉や考えを内蔵する書物」という意味が派生したこと(注1)を反映するものである。

- b. 一方、同じくイエズス会編纂の日葡辞書(日本語・ポルトガル語辞書(1603-04))における Coden の項

目には「古(いにしへ)の典(のり)」「昔の法度・典令」とある。

[Inixiyeno nori. Leis antiguas . (54v.)]

これは「古典」ということばが、古く中国で「尊重されるべき(規範的)巻物が台の上に乗っている姿」に由来し「古い規範・模範・前例・制度・法度などを伝える文献」の意であったこと(注2)を反映するものである。

c. また、日本においては、同じ頃、和歌の世界で「こてん(小点)のことば(詞)」という表現が使われていた。その由来は「用捨すべき言葉に目印として小さな点を施したことにある」ようだが、それが一部では「古点の詞」と捉えられ享受されるようになり、たった一例ではあるが「古典の詞」という表記も報告されている。(注3)

この「古典」の意をどう解釈するかには慎重でなければならないが、今日の「古典」に通じ得る表現が、日本においても小さな支流として生れつつあったことは、心に留めておくべきであろう。

②キリスト教要理の受容と変容

コンカニ語キリスト教要理 Doutrina Christam em lingua Bramana Canarim (1622) 全文の計算機への入力を終え、語形による検索が可能な形をほぼ整える。日本語のドチリナとその内容を比べるなかでヒンドゥー教の影響による加筆などを明らかにし、下記の論文を公にする。

「Thomas Stephens とコンカニ語 研究序説とその展望」(南山国文論集23 1999.9.)

③文法の受容と変容

古典(規範)としての文法は、400年前の欧州、特にポルトガルにおいては、ラテン語のそれであった。16世紀という、規範としてのラテン文法を基にいわゆる「俗語」の文法がポルトガルでも誕生し始めた時期、ポルトガル人の進出したアフリカ・ブラジル・インド・日本では、ラテン文法の枠組みでそれぞれの土着語の文法が書かれることになる。その際、基本的には規範としてのラテン文法の枠内で書かれるものの、日本のようにラテン文法の規範と、そこから派生したポルトガル語文法の「規範」にも影響されつつ、一方で、その土地(日本)における文法学の伝統にも影響されながら、はじめての西洋人による文法の誕生するところがある。

ローマ字表記における受容と変容に関しては、まずヨーロッパでラテン語にないポルトガル語の音をどう

表すかが問題であった。16世紀にはアルファベット(ラテン語)という「規範」を基に「準規範」としてのポルトガル語表記が成立する。その点に関しては下記の入力済みデータを何とか今年度中に公開したいと考える。

「16世紀ポルトガル語正書法書全4点の翻刻および検索可能なデータベース」

なおラテン語・ポルトガル語にない現地語の音をどう表すか、コンゴ・ンドンゴ・トゥピ・キリリ・コンカニ各言語と日本語の場合については、これからの研究である。品詞論における受容と変容については、ラテン語八品詞とポルトガル語九品詞、それにロドリゲスの日本語十品詞(助詞と冠詞)が、一つのテーマとなる。国語学会シンポジウム(2000年5月27日・専修大学)で報告したように、ロドリゲス日本語十品詞における「助詞」については日本語「てにをは」研究からの影響が、「冠詞」(日本語で格助詞に当てる)についてはポルトガル語パロス文典からの影響が見て取れる。

④辞書の受容と変容

16・17世紀にイエズス会によって編纂された辞書の中で印刷された形のはインド(タミル語)と日本(日葡辞書・羅葡日辞書)のものだけで、ブラジルについては一点、写本の翻刻あるのみである。

今回、ポルトガル国エヴォラ公立図書館における第一次文献調査(1999年8月)の途上、リスボンの古書店倉庫でコンカニ語・ポルトガル語語彙集写本(1626)のタイプ版を入手する。帰国後、同語彙集原本(写本)のゼロックスコピーをミネソタ大学(Ames Library of South Asia)より入手、上記タイプ版と対照させながら、同語彙集写本の計算機入力を開始、約14000の全語彙及びポルトガル語訳を含む同語彙集データベース作成を目差して作業中で、これまでのところA Dまで入力済みである。残念ながら今年度中にすべての入力は終わらせられないが、将来、全ページの入力を終えたところで翻刻を公開する予定である。

⑤これまでの研究成果の公表とこれからの公表予定

「Thomas Stephens とコンカニ語 研究序説とその展望」(南山国文論集23 1999.9.)

ポルトガル国際学会における研究発表(2000年5月11日・エヴォラ大学)

国語学会シンポジウムにおける報告と議論(2000年5月27日・専修大学)

「16世紀ポルトガル語正書法書・検索可能なデータベース」(2001年3月までに公開予定)

「古典としてのキリシタン文献語学書」(2001年3月までに発表予定)

コンカニ語・ポルトガル語語彙集写本(1626)翻刻(数年後の入力完了後に公開予定)

(注1) 今道 友信 「ヒューマニズムとしての古典研究」(古典学の再構築5 平成12年1月)

(注2) 堀池 信夫 「中国文明と中国古典」(古典学の再構築7 平成12年7月)

(注3) 大谷 俊太 「コテンノ詞」覚書(南山国文論集 12 昭和63年)

69 B02班・公募研究

日本における唐律令・礼の継受と展開

研究代表者 大津 透

東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

【要旨】

日本古代国家の形成において、中国の古典文化がどのように影響したか、唐の律令や儒教教典に基づく礼制がどのように日本に継受されたかをかんがえる。

- 1) 唐の律令について。龍谷大学所蔵の大谷文書の復原を行い、均田制関係文書を中心に唐律令制の支配の実態を復原する。また寧波天一閣で発見された北宋天聖令写本を調査して唐開元令の復原も試み、日唐律令比較研究の基礎を築く。
- 2) 日本古代の天皇制について。天皇制を中心に、律令や礼の継受を考え、大宝律令が成立する8世紀初頭にはなお土俗的、固有な国制が残り、9世紀を通じて礼を継受するなかで天皇制の唐風化が進み、日本の古典的国制が成立することを解明した。

【位置付け】

日本において、何が古典であるのかは必ずしも自明ではない。日本の歴史をつうじて明らかに古典であったのは中国の古典、漢籍であった。しかし日本の文明化という視点で考えるとき、個別の儒教の古典がどのように日本に輸入され影響を与えたかというよりも、

法律や制度を含めて中国の国制全体がどのように日本に継受され、あるいはされなかったのかを考えることが重要である。したがって唐の律令や礼の影響を研究することが必要であり、そこから国制の中に構造化されている中国の古典があらわしている儒教的イデオロギーや官僚制・均田制など、中国文明が日本の古代国家の形成、文明化にどのように影響したかを明らかにすることができる。

この問題は、日本に現在までつづく天皇制が、どのようなものとして中世・近世に続いたのかを解明することになり、現代における意義も大きい。朝廷に代表される近世まで継続する伝統的国制が、どのようにして、いつ成立したのか、解明が求められている。

また龍谷大学所蔵の大谷探検隊将来の大谷文書は、世界的な文献学の基礎をなしている敦煌吐魯番学の基礎資料のひとつである。しかしスタイン・ペリオのコレクションにくらべて国際的にも調査研究が遅れている。今世紀初めに日本人がトゥルフアンから持ち帰った経緯から考えても、科学研究費を用いて基礎的な復原研究を進めることは、国際的にも期待されているといえるだろう。

【研究成果】

現在までの一年半の期間にえられた研究成果は、以下の通りである。

著書

- ①『古代の天皇制』岩波書店、1999、12、304頁

編集

- ②早川庄八『天皇と古代国家』講談社学術文庫、2000、2、解説(285-301頁)

論文

- ③「韓国国立中央博物館所蔵アンペラ文書についての覚え書き」『東京大学日本史学研究室紀要』4、2000、3、239-244頁

口頭発表

- ④「日本古代租税制の特質」唐代史研究会夏期シンポジウム、1999、7。
同報告要旨『唐代史研究』3、2000、6、128-131頁
- ⑤「パネルディスカッション 文明における古典の役割」「日本固有の古典とは」古典学の再構築第3回公開シンポジウム、日本学術会議、2000、3。
『古典学の再構築』7、2000、7、27-29頁
- ⑥「大谷文書中有関均田制的文書の復原工作」中国中古社会変遷国際学術討論会、天津、2000、8。

書評

- ⑦『重近啓樹著『秦漢税役体系の研究』』『東洋史研究』58 4 2000,3, 121 128頁

新刊紹介

- ⑧『律令研究会編『訳註日本律令 十一』』『史学雑誌』108 12, 1999,12 .
⑨『大曾根章介 日本漢文学論集 全三巻』
同109 4, 2000,4 .
⑩『唐代史研究会編『東アジア史における国家と地域』』同109 9, 2000,9 .

調査としては、中国寧波の天一閣で発見された北宋天聖令の写本の研究を進め、公開されている田令を中心に具体的な唐令の復原作業を進めており、本年11月の史学会大会でシンポジウム「律令制研究の現段階」を開催し、議論する予定である。また龍谷大学所蔵の大谷探検隊が西域より将来した大谷文書のうち、唐開元年間の西州の退田文書、欠田文書、給田文書からなる一連の均田制関連文書について、精力的に復原研究を進め、最低八重に張りあわされて青龍の形をなして表面に彩画が描かれていたことを発見し、多くの断簡接続を発見し、旅順博物館所蔵の大谷文書との関連も明らかになり、大谷文書の整理に貢献している。これについては、口頭発表⑥として天津で報告し、中国の唐史学会の研究者に高く評価された。この復原研究を基礎にして唐律令制の土地支配・民衆支配が解明され、日本の田令との差異が明らかになるだろう。またソウル国立中央博物館所蔵の大谷探検隊将来アンペラ文書については、写真を入手し、論文③において接続を補訂し釈文を作成し、唐財政の一面を解明した。今後の原本調査を期待している。

日唐の律令制の比較研究としては、古代の天皇制をめぐる研究書①をまとめ、律令法に規定された奈良時代の天皇のあり方は、実際には大化前代あるいは古墳時代以来の固有なあり方、氏姓制度のあり方を継承しているものであることを明らかにした。しかし当初継受できなかった中国的な律令法について、八世紀中葉以降、礼の受容による唐風化という形で天皇制の変化がすすみ、弘仁年間に儀礼が中国的な形に改められ、貞観年間に唐風化の到達点を見る。これは八世紀以来律令制が段階的に継受されたということができ、天皇制は奈良時代にはなお濃厚に残っていた神話的秩序から平安時代によく脱することを明らかにした。さらに編著②の解説で、早川庄八氏の研究にそくして、政治史的側面を中心とする奈良・平安時代の天皇のあり方について、研究史的に位置付けた。

口頭発表⑤でのべたように、この平安時代に成立す

る天皇制は江戸時代までつづく「古典的国制」であるが、その成立の背景には唐の律令や礼の継受があった。そして藤原道長に代表される摂関政治期に、中国文明の継受が一段落していわゆる国風化、成熟していき、安定したレジームがもたらされる。国制全般を考えれば、この時代が近世までを規定する「古典的国制」であるといえるだろう。さらに、藤原行成など三跡が和様書道を完成させたことや、和歌と漢詩漢文を並列させて後世までの美意識を規定した藤原公任撰のアンソロジー『和漢朗詠集』などにみえるように、この時代に日本の古典文化が形成されたということもできるだろう。

以上は、日唐の律令法の異質さを前提にして、平安時代に日本の文明化を考えたものだが、一方で、日唐の律令法には、共通する古代的な部分があり、それに注目する必要もある。口頭報告④や書評⑦で述べたように、調庸制や課役制などの人頭税は、おおまかに人数だけがわかればよいという程度の支配のレベルに対応する税制であり、個別人身支配といわれる人民一人一人を強力に国家が把握しているというのは虚構である部分があると思う。日本古代国家の分析を通して導きだされた特質は、同時に中国古代国家の本質である部分もある。

70 B02班・公募研究

古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究

研究代表者 金水 敏
大阪大学大学院文学研究科 助教授

分担者 李 長波
京都大学大学院人間環境学研究科 助手

【要旨】

漢文訓読文体は、日本における中国古典・仏典の受容過程で生じた特殊な翻訳文体であるが、単に翻訳にとどまらず、日本の学術・思想を支える基本的な文体として近代にまで受け継がれた。この漢文訓読文体の

形成・発展過程を具体的資料に基づいて明らかにしようとするのが本研究である。これまでに、「高山寺蔵」恵果和尚之碑文」の研究、近代白話小説の翻訳から見た三人称代名詞「カレ」の起源の考察等を進めている。

【位置付け】

日本は遅くとも六世紀までに大和朝廷が成立、文明化されていた。その文明の実態は、中国文化の輸入に他ならない。六世紀中に、百済から五経博士、医・易・暦の博士が来朝、また百済の聖明王が仏像と経論を伝来したと言われる。さらに607年には遣隋使が、630年には遣唐使が派遣された。その都度、多くの漢籍・仏典が招来されたわけである。

すなわち、中国古典（漢籍）および仏典を読むことが日本の学問の実態であった。

奈良時代までにも、漢籍・仏典は当然読まれていたが、どのような読み方をしてきたかは定かでない。『古事記』の文体などに古い漢文訓読文体の面影を見る程度である。

しかし平安時代になると、訓点が施された文献が遺されるようになり、組織的な漢文の読解の技術が進んでいたことが分かる。

現存の古訓点資料で主要なものを挙げると次の通りである（築島裕『平安時代語新論』東京大学出版会、1969 による）

【漢籍】

- * 周易抄（東山御文庫，寛平九年日付の紙背文書あり）
- * 漢書楊勇伝（上野淳一氏蔵，天曆二年点）
- * 古文尚書（東洋文庫他，平安中期加点）
- * 毛詩（東洋文庫，平安中期加点）
- * 蒙求（保阪潤治氏蔵，平安中期加点）
- * 文選（東山御文庫，康和元年書写，当時加点）
- * 白氏文集（神田喜一郎白氏蔵，天永四年加点）
- * 医心方（半井氏蔵，天養二年移点）
- * 古文孝経（猿投神社，建久六年書写・当時加点）
- * 莊子（高山寺，鎌倉中期加点）
- * 史記（高山寺，鎌倉中期加点）

【仏典】

- * 大方広仏華嚴経（聖語蔵，平安極初期点）
- * 妙法蓮華経（京都国立博物館，平安初期点）
- * 大唐西域記（興聖寺，平安中期加点）
- * 大毘盧遮那経（大日経）（国立国会図書館，治安二年点）
- * 大般涅槃経（石山寺，治安四年加点）

【国書】

- * 日本書紀（東洋文庫，平安中後期加点）
- * 将門記（真福寺，承德三年書写，当時加点）
- * 文鏡秘府論（宮内庁書陵部，保延四年移点）

漢文訓読は、漢文という外国語に一定の訓や記号を加え、規則的な方法でそのまま日本語として読み下すという翻訳法である。今日の日から見れば特殊な方法であるが、朝鮮やチベットでも行われていたと見られ、古代日本では漢文を読解するための唯一の方法となっていた。

しかも単に読解の方法であっただけでなく、日本語の文体として伝承されて行った。平安時代には仮名による和文が起り、独自の文体を形成した。その後、漢文訓読体と和文体の混淆も生じたが、結局学術・宗教・法律等の分野では、近代に至るまで、漢文訓読文体の流れを汲む文体が用いられ続けたということになる。

すなわち、漢文訓読文体は、日本における古典（漢籍・仏典）の文体であつたばかりでなく、古代から近代までの日本の学術・思想を支えた文体であつたと言つてよい。

現代の日本語の文体がいかなる歴史を背負って成立したものであるか、特に漢文訓読文体からどれほどのものを受け継いでいるか、ということを知ることは、そのまま日本語の思想の骨格を知ることであり、古典研究、古典の受容にとっても欠くことの出来ないステップであると考えられる。本研究は、そのような文体的観点から、漢文訓読の歴史について具体的に考察することを目標とする。

【研究成果】

1 高山寺における典籍の調査

具体的な漢文訓読資料の実態を知る作業として、「恵果和尚之碑文」（重文第1部211号）を中心に調査を進めている。本資料について先に発表されている山口佳記氏の論文「高山寺蔵恵果和尚之碑文古点」（『訓点語と訓点資料』）から引用する。

高山寺重文第1部第211号として、「恵果和尚之碑文」がある。本文12丁の粘葉装で、縦26.1センチ、横15.0センチ、1面は7行又は8行よりなり、界の上1.5センチ、界の下2.0センチ、界幅1.7センチとなっている。表紙に「大唐神觀青龍碑文」とあるが、内容的には、1丁表から6丁裏までがそれに当たり、7丁表裏は白紙、8丁表から11丁表までは「大儀後序」なる文を載せ、11丁裏から12丁裏まで仏書

の抜き書きと思しき文を記している。また、表紙の裏には、出所不明であるが、漢字にその和訓を付したものが集めてあって、「賛《カヘタリノタイ》」と助動詞の付いたもの、「喪《ホロホシテ》」と助詞の付いたもの、「喘《アヘキノセキ》」と連用形のものなどある所を見ると、点本からの抜き書きと思われるが、明らかでない。

識語はなく、書写年代は不明であるが、前文同筆で、延久承暦頃(1070-1080)の写と考えられ、「恵果和尚之碑文」には本文と同じ墨筆の訓点が付されている。「恵果和尚之碑文」は空海撰遍照發揮性靈集巻二の中の一編であるが、本書の体裁より見て、性靈集の断簡ではなく、抜き書きして独立したものと考えられる点は、前項「東大国語研究室蔵 恵果和尚之碑文古点 解説文と調査報告」(訓点語と訓点資料第33輯)で紹介した東大本と同様である。書写状態は粗雑の傾きがあり、訓点も詳密丁寧とは言い難いが、性靈集の古訓法を示す数少ない資料の一として貴重と思われるので、ここにまた紹介を試みる。

今回の研究を経て、本書の影印、訳文、解説、要語索引が『高山寺古訓点資料第四』(高山寺資料叢書 2002年刊行予定)に所収されることになっている。訳文はほぼ完成している。これに基づいて、「東京大学国語研究室蔵恵果和尚之碑文」との対比なども行う予定である。途中の作業の経過を、年度末の研究報告書およびホームページで公表する。(金水)

2 漢文訓読文関係研究文献データベースの作成

すでに、骨子となるデータは収集済みである。現在、整理の方法について検討している。

今年度中にホームページに公表したい。

このデータベースに基づいて、特に、古代・中世と近世以後を結ぶ研究の動向に注目し、必要な研究の方向性について検討する。

3 文体指標となる訓点語彙の調査

1. 現代標準語の「いる」の活用に組み込まれている「おる」の用法のうち、連用中止用法「おり」「おらず」が漢文訓読文に由来することを具体的に検証する。今年度中に論文として公表の予定。なお、これに先立ち、「日本語指示詞研究文献データベース」をホームページに公開している。(金水)
2. 「AはこれをBする」式の文型が近代文体に導入された過程を検証する。(金水)
3. 代名詞「彼」が近世白話小説の受容において準備されていたことについて、実証する。この件

については以下の論文で公表済み。第3-5節で改めてその概要を示す。(李)

李 長波(2000)『『カレ』の語史とその周辺：三人称代名詞が成立するまでの道筋』『DYNAMIS』4(京都大学大学院人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座)[1-33]

4 明治文語文に漢文訓読文が与えた影響について

漢文訓読文体から近代文体への橋渡しとなる資料として、「明六雑誌」に注目し、その本文データベースを作成する。現在入力を終わり、本文校訂の段階である。(李)

5 三人称代名詞「カレ」の起源に関する研究

近代の言文一致小説において外国語翻訳の必要から導入され、遂に話し言葉に定着を見た三人称代名詞(単数・男性)「カレ」は、古くは遠称の指示詞として既に『万葉集』に登場する。この「カレ」の語史には、上代語の指示体系とその史的变化、ひいては上代語の人称体系とその史的变化という日本語史のみならず、日本語文体史の一端をいまみせる手がかりが秘められている。

上代語の「カレ」は用例数こそ少ないが、「誰そ彼(カレ)と我れをな問ひそ九月の露に濡れつつ君待つ我れを(万葉集：2240)」、「誰そ彼(カレ)と問はば答へむすべをなみ君が使ひを帰しつるかも(万葉集：2545)のように、話し相手を指す用法(万葉集：2240)と、第三者を指す用法(万葉集：2545)を持っている。遠称指示詞の「カレ」が二人称を指す用法をいかにして持ち得たのかについては、従来遠称「カレ」の特殊用法として解釈される傾向があった。しかし、これは、上代語のみならず中古語以降、『宇津保物語』、『源氏物語』、『枕草子』、『曾我物語』など一貫して認められる用法であり、しかも、中古語以降かかる用法はひとり「カレ」に限らず、「アレ」(『源氏物語』、『枕草子』から中世後期は『天草版伊曾保物語』まで)にも認められることを考えれば、上代語以降の指示体系そのものにその原因を帰すべき現象としなければならない。「指示詞」はいわゆる人称代名詞の中の「三人称」としてではなく、事物を指示するものとして人称代名詞とは別個の体系をなすものとする立場に立てば、遠称指示詞の二人称を指す用法は、その指示体系において未だ二人称と三人称とが分化せずに融合し、指示詞と人称との関わりは未だ「一人称対非一人称」という対立をなしていたことに起因すると解される。従って、人称代名詞に転用された「カレ」も指示体系の側から見れば、あくまでも「非一人称」の指示詞から「非一人称の代名詞」への転用であって、この「非一人称の

代名詞」から「三人称代名詞」が生まれたのである。この段階は時代的には『曾我物語』(流布本系統)が成立するあたりにその終焉を迎える。そして、我々は、中世後期のキリシタン資料から、近世は通俗物、漢文笑話翻訳本、読み本に至るまで、会話において、中国語同様男女の区別を知らないことと、話し言葉に基盤を持たないことの二点を除けば、三人称代名詞として頻繁に用いられる「カレ」に、現代語の「カレ」の直接的な前身を見いだすことができる。

盗人万民の中で、いかにも高声にののしつたは、
「わが母ほどの慳貪第一な者は、世にあるまじい。わがこの分になることは、かれが業ぢや。……『天草版平家物語・母と子の事』(476 - 7 ~ 10頁)三人称・人)
我跪まりし背の方より。大なる法師の。面うちひらめきて。目鼻あざやかなる人の。僧衣かいつくろひて座の末にまゐれり。貴人古語かれこれ問弁へ給ふに。詳に答へたてまつるを。いといと感させ玉ふて。他(カレ)に録とらせよとの給ふ。『雨月物語・仏法僧』(六十六の四)(三人称・人)

要するに、書き言葉に限れば、三人称代名詞の成立は遠く近世期の読み本においてそれを見ることができ。現代語の「カレ」が成立するまでには、日本語文体が成熟するための長い時間があつたのである。三人称代名詞の成立はひとり人称代名詞の問題だけでなく、文体史の問題でもあるとする所以である。

しかし、この問題は単なる指示体系と三人称代名詞との間にとどまらず、恐らく上代語の人称体系とも密接に関わる問題であろう。そこで注目すべきは、中古語において敬称の二人称代名詞に定着した上代語の「キミ」にも二人称・三人称の別なく用いられていたこと(「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君(キミ)が袖振る(万葉集:20)」、「沖辺より満ち来る塩のいや増しに我が思ふ君(キミ)がみ舟かもかれ(万葉集:4045)」)、上代語の「ヒト」は「自分」に対する自分以外の人を指す語であつたらしいこと(「か行けば人(ヒト)に厭はえかく行けば人(ヒト)に憎まえ老よし男はかくのみならしたまきはる命惜しけどせむすべもなし(万葉集:804)」、「雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人(ヒト)もがも(万葉集:850)」、「娘子壮士の行き集ひかがふ呀歌に人(ヒト)妻に我も交はらむ我が妻に人(ヒト)も言問へ(万葉集:1759)」)、『遊仙窟』の諸本では、古代中国語の三人称代名詞「渠」・「他」はそれぞれ「汝・ミマイトコロ」と「ヒト」の訓を与えられていること、などであ

る。今後は、以上のことを踏まえ、上代語の人称体系についての解明が急がれよう。

今年度の後半は上代語の人称体系と人称体系の史的变化の解明に宛てたい。(李)

古典和歌データベースにおける表現技法の歴史的研究

研究代表者 南里 一郎
純真女子短期大学 助教授
分担者 竹田 正幸
九州大学大学院システム情報科学研究院 助教授
分担者 福田 智子
福岡女学院大学 非常勤講師

【要旨】

日本の古典の生成は、漢字を日本語内に受容し、仮名による表記体系の方向が定まってから。

和歌は、仮名で書かれた古典の代表、日本人の伝統的な美意識を具現化したもの。

現代における和歌は、日本人自身が日本文化を問い直し、日本の伝統文化を海外に提示するための好材料。

本研究の主眼は、和歌表現の受容史を明らかにすること。

研究方法は、和歌を単なる文字列として捉えるという独自の発想で類似性指標を定め、これに基づいて約45万首の和歌データから計算機により自動的に類似表現を抽出し、結果を検討するという手法。

研究成果

- (1)全体論 日本初の勅撰和歌集『古今和歌集』の表現受容の史的把握。
- (2)各論 1.(1)の結果を通じて着目した歌人の表現分析。2.看過されてきた本歌取りの発見。3.歌集の成立年代推定。

【位置付け】

中国文明の生み出した文字、漢字が日本にもたらされたのは、紀元一世紀ごろと言われている。その後、漢字文化が深く浸透し、日本の知識層は中国古典を享受して、高度な模倣をするに至る。そうした中国文明の受容の一方で、中国語の文字である漢字を、日本語の表記にも適用したいという欲求から生み出されたのが、仮名であった。文字の使用なくして、古典の伝承もありえない。その意味で、仮名の発明は、日本の古典の歴史の始まりと言えよう。日本人は、東アジアの漢字文化圏にありながら、仮名によって独自の古典を持つに至るのである。

とはいえ、仮名が成立してからも、日本が絶えず中国文明の影響を受けてきたことは、言うまでもない。仮名文学の中にも、漢籍の受容は常に行われている。そしてそもそも、漢字が男性の使う公的な文字であるのに対し、仮名が、女性の私的に用いる文字であるという一種の価値基準は、現代に至るまで、その輪郭を失ってはいない。つまり、漢字と仮名は、日本文化を表裏に支える文字であると言えよう。そして、漢字で書かれる漢詩に対する文学ジャンルが、仮名で書かれる和歌なのである。

和歌は、奈良時代に成立した『万葉集』において、その形式が、おおむね5音の句と7音の句を基調とする歌体に整っている。ここで用いられた文字(万葉仮名)は、漢字の表音的使用の域にとどまるものであったが、その過渡的な表記法はしだいに整理が進み、平安時代初期になると、現代の平仮名のもとになる草仮名が使われ始める。このように、漢字を日本化した受容が一段落し、日本語の表記体系に一つの方向性が与えられるに至って、いわゆる仮名による古典が生み出される土壌が整った。

そうした状況のもと、延喜五年(905年)に、日本初の勅撰和歌集『古今和歌集』(以下、『古今集』)撰進の命が下る。この『古今集』の成立は、日本的古典の誕生ともいえる刮目すべき出来事であった。これにより、和歌文学の方向は決定づけられ、いかなる歌人も、多かれ少なかれその影響下に置かれることになる。「梅に鶯」「紅葉に鹿」といった取り合わせは、現代人の我々にも馴染みの景物であるが、そのような日本人の美意識を具現化したのが、この『古今集』だったのである。その後詠まれた膨大な数の和歌は、ここに収載された歌の表現を、さまざまな形で受容し、脈々と継承していく。これが、和歌の伝統である。

したがって、古典和歌は、現代社会において、日本の伝統文化を問い直す、身近なきっかけとなるばかり

ではなく、海外に対しても、それを具体的に明示する資料となりうるであろう。実際、伝統を重んずる欧米の人々の和歌に対する関心は、並々ならぬものがある。

【研究成果】

本研究は、和歌間や歌人相互、または歌集間における表現受容の問題を扱う。和歌のデータは、『新編国歌大観』CD ROM版(角川書店、1996年)に収録される約45万首を用い、それを情報科学の方法によって機械処理する。その際、いわゆる形態素解析などの自然言語処理はいっさい行わないことが、従来の研究と大きく異なる点である。すなわち、和歌を単なる文字列として処理し、和歌の類似性を、共通する仮名文字列を多く含むという観点から捉えた。そして、和歌間の類似性指標を独自に定め、任意の歌集間において類似度の高い歌の対を自動抽出するという手法を案出したのである(*1)。そうして抽出された類似歌の対を、和歌研究者の目で検討していくことによって、新たな文学的発見を目指した。

このように、着目すべき歌や表現について、計算機プログラムが何らかの指針を与えてくれたとすれば、そこから研究の糸口が得られることが期待できる。情報科学の一分野として最近誕生し、注目を集めている発見科学(Discovery Science)(*2)は、まさにこのような形での研究支援を目指すものである。

以上のようにして得られた類似歌を検討した結果、次のような成果が得られた。

(1) 全体論 最初の勅撰和歌集『古今集』の表現受容の史的把握。

考察の対象は、『古今集』と、平安時代から鎌倉時代初期にかけて成立した『新編国歌大観』第三巻所収の私家集(個人歌集)、全134集である。その結果、『古今集』の和歌の表現を、そっくりそのまま利用して歌作りをする歌人と、そうでない歌人のいることを、具体的に把握できた。従来言われてきたような、時代性による差も看取されたが、一方、歌人の個性に帰すべき要素も指摘でき、個々の歌人論への発展が予想される注目すべきデータが得られた。この内容は、「古典和歌における類似表現の自動抽出の試み」(『純真紀要』41号、2000年12月)に掲載予定である。

(2) 各論

1.(1)の結果を通じて着目した歌人の表現分析

(1)のデータを鑑み、恵慶という歌人に特に着目して、『古今集』歌の表現受容のあり方を考察した。恵慶の歌は、彼の活躍した十世紀半ばという時代にしては、『古今集』歌との間に、きわめて高い類似性が

見られたからである。個々の用例を検証した結果、恵慶が『古今集』歌から表現を摂取する際には、『古今集』の表現世界をそのまま踏襲していこうとする態度が看取された。これは、たとえば、同じ十世紀の歌人、藤原元真が、『古今集』世界からの逸脱を試みたのとは、全く質を異にする作歌姿勢であるといえよう。

この内容は、「恵慶の歌と『古今集』平安中期一歌人の歌作り」(『純真紀要』41号、2000年12月)に掲載予定である。

2. 看過されてきた本歌取りの発見

勅撰和歌集相互の表現の授受関係を見いだすため、『古今和歌集』とそれ以後の勅撰集について、類似歌の抽出を試みた。その結果、三十六歌仙のひとり、藤原兼輔(877-933)の代表歌に、これまで指摘のなかった本歌が存在することを発見した。

人のおよの／心はやみに／あらねども／子をおも
ふ道に／まどひぬるかな／
『後撰和歌集』1102番

この歌は、兼輔の、子を思う親心を詠んだ名歌として、人口に膾炙している。ところが、これが、次に示す先行歌を踏まえて作られた替え歌であるという点は、看過されてきた。

人をおもふ／心はかりに／あらねども／くもみに
のみも／なきわたるかな／
『古今和歌集』585番

これら二首の和歌は、「ひと.../こころは...に/あらねども/.../...るかな/」という、共通した骨組みをもっている。この場合、双方一致して用いられた句は、第三句「あらねども」という、ありふれた表現のものしかなく、『新編国歌大観』の各句索引(一首の和歌を5 7 5 7 7に句切り、句頭から五十音順に並べたもの)による検索では、これら二首間の表現の授受を見いだすことは、これまで困難であった。この内容は、『『人の親の心は闇にあらねども』藤原兼輔の歌再考』と題し、現在執筆中である。

3. 歌集の成立年代推定

『為忠集』という私家集の成立年代をほぼ確定することができた。この集は、当初、大原三寂の父である、丹後守為忠の集と紹介され、平安末期の成立と言われていた。だがその後、『俊成卿女集』との類似歌が多数指摘され、その成立年代は、少なくとも鎌倉中期まで下るとされた。そこで今回、類似歌抽出を試みたところ、

『為忠集』と、南北朝時代の歌人、正徹の家集『草根集』との間に、少なからぬ類似歌を発見、さらに、正徹門下である桜井基佐の私家集と、『為忠集』との共通点を見出すことができた。その結果、『為忠集』が、室町前期(十五世紀)の私家集であることを推定し、歴史史料によって、その点を裏付けることに成功した。この内容は、既に「古典和歌における類似歌発見断章」(古典学の再構築ニューズレター第7号「研究ノートから」、平成12年7月)として報告しているが、今後、『為忠集』再考」(和歌文学会第46回大会、平成12年10月発表予定)、「類似歌抽出に基づく歌集の成立年代推定」(第48回人文科学とコンピュータ研究会、平成12年10月発表予定)というかたちで公表していく予定である。

- (* 1) 山崎真由美、竹田正幸、福田智子、南里一郎「和歌データベースからの類似歌の自動抽出」(情報処理学会「人文科学とコンピュータ」研究報告、Vol 98, No 97, pp 57-64, 1998)
- (* 2) 文部省科学研究費補助金特定領域研究(A)「巨大学術社会情報からの知識発見に関する基礎研究」(平成10~12年度、領域代表者:有川節夫)

近衛家熙考訂本『大唐六典』の研究

研究代表者 礪波 護
京都大学大学院文学研究科 教授

【要旨】

日本における中国古典の伝承と受容の歴史において、摂政と太政大臣であった近衛家熙(1667-1736年)が、致仕後の二十数年、その精力を傾倒して綿密に考訂し、一旦稿本が成った後もその死に至るまで側近の侍臣と検討を続け、没後三周忌の前日に漸く上梓された、いわゆる近衛本『大唐六典』30巻は、最良のテキストと目され、京都が世界に誇り得る空前の業績である。新井白石(1657-1725年)から贈られた嘉靖本(1544

年刊)の写本に、考訂し続けた家熙の稿本を、数年前に京都大学附属図書館の古川千佳が発見した。この稿本を精査して、近衛家熙考訂本『大唐六典』の成立過程を跡づける地味な作業を続けており、不分明であった多くの疑問が氷解しつつある。

【研究の経過】

唐以前における中国の行政機構と官僚制を考察するに当たって、最も有用な書である。

『大唐六典』30巻は、唐の玄宗の御撰で、勅を奉じて宰相の李林甫らが注をつけたもので、最良のテキストは、摂政かつ太政大臣という、位人臣を極め、予楽院と呼ばれた、近衛家熙(1667-1736年)が、致仕後の二十数年、その精力を傾倒して綿密に考訂し、稿本が成った後もその死に至るまで側近の侍臣と検討を続け、没後三周忌の前日に漸く上梓された、いわゆる近衛本であることは、世界の東洋学界で周知の事柄である。

近衛家伝世の名宝を収蔵する「陽明文庫」については、週刊朝日百科『日本の国宝』017号(朝日新聞社、1997年6月15日)で紹介されたが、現在の陽明文庫の建物を建築する段階で、近衛本『大唐六典』全巻の龐大な版木が、京都帝国大学に寄託された。文学部はその版木を用いて、大正3(1914)年と昭和10(1935)年に印刷した。

先年、その縮刷の海賊版たる洋装本が台北で出版されていたが、昭和48(1973)年にいたり、近衛本『大唐六典』の全巻に対して句読・訓点および書き入れをした広池千九郎の成果が、内田智雄による補訂をともなって、広池学園事業部より出版されて、広池本と呼ばれるようになり、その影印本が西安の三秦出版社からだされたのである。ところが、広池本の句読や書き入れに妥当でない箇所が散見されるので、吟味し直さなければならない。

そして、1992年には、北京大学の陳仲夫によって、詳細な注記をともなった待望の点校本『唐六典』が中華書局から出版されたが、その凡例において、前人の功績として、日本の近衛家熙を特記して顕彰しているのである。

ところで、内藤湖南(1866-1934年)は、大正13(1924)年5月3日に開かれた、新井白石二百年記念講演会で「白石の一遺聞に就て」と題する講演をし、京都大学に寄託されている近衛家熙と新井白石との間で交わされた書簡類を紹介した(『歴史と地理』第15巻第5号、のち『先哲の学問』に収録された。『内藤湖南全集』第9巻)。その際、

「家熙公は大唐六典を校正したのが一生の大事業になつてゐて、出来上つたのは白石の死後になるが、随分長くかゝつたので、其頃から着手してゐて、色々六典のよい本を集めてゐた。白石がそれを聞いて、自分も一本持つてゐると、急飛脚で江戸から取寄せて献上した。どれだけよい本か、案外つまらぬ本だつたかも知れぬが、兎も角一つ材料になつたには違ひない。その本に就て色々講釈を云つて跋を家熙公に書かせた。何でも元禄の末の大地震に、これは今度の大地震とどつちかといふ位の地震でしたが、その本を保存するに非常に苦心したことを、手紙で乍恐言上で始まつて詳しく書いてある。本に泥のよごれのあるのは当時の記念であると、効能を述べたが、それが大変家熙公のお気に入つたので、すぐ何か題跋を加へてくれとの注文で、家熙公が跋を書いた。尤もそれは白石が江戸に帰つてから後で、家熙公としては大いに奮発して漢文で書いてよこした。白石がそれに意見を加へ、所々直して返却し、家熙公が直しの通り清書して白石に下された。その直した原文も清書の下書も近衛家に今もあります。」

と述べていた。そして参考として、「乍恐言上」で始まる、〔宝永七年十二月十三日附書状〕などの書状の全文を移録していた。新井白石が『折たく柴の記』上で、元禄末の大地震の際に、坑を掘って埋めた「賜りし所の書ども、また手づから、抄録せしものども」のなかに、この『大唐六典』が含まれていたのである。

これらによれば、内藤湖南は書状は見えていたが、新井白石が宝永七年すなわち1710年に近衛家熙に贈った、泥でよごれた『大唐六典』そのものを確かめることは出来なかった。ところが数年前、京都大学附属図書館の古川千佳が、部屋の棚の上におかれている未整理の該書を発見し、私に相談されたのである。まぎれもなく、内藤湖南が言及していた本そのものであったので、京都大学附属図書館の近衛文庫に加えて貴重書扱いにしていた。近衛家熙は、新井白石から贈られた嘉靖本(1544年刊)の白石自筆の写本に、跋文を清書した上で、二十年にわたって考訂を書きつけたことが判明した。

今回、研究費を与えられたので、全文をマイクロ複写するとともに、家熙自身の手によって正史や『通典』などと対校され、朱と墨のみならず、藍色などの多色の筆づかいがなされているので、多色による注記や張り継ぎの箇所など160枚については、特にカラー撮影することができ、泥で汚れた部分も目のあたりにすることができた。

参考までに、新井白石の添削を経たという近衛家熙の跋文の概要を移録しておこう。

【近衛家熙考訂『大唐六典』稿本の自跋】

「唐六典者、明皇敕宰臣李林甫等所撰、百官経緯、千古典刑也。余蚤歳搜索四方、未嘗購得、以為遺憾。今茲幕下士新井君美、脚命来洛、其為人豪邁卓偉、讀書不撰何書、學以適用為本。余一見之、如舊識垂青話、心不覺日之暮夜之旦。只恨相見之晚。一日譚及六典之事、君美云、昔講習之暇、偶得一本、手寫以珎藏焉、請備于覽可乎。余甚喜之。無幾送致之。盖飛馭以取來也。且其言云、此典卷未斑文蘭乎、有泥汚之痕也。往年江府地大震山崩、屋側書庫、四壁迸裂、若龜文拆、而後震動未息者弥月、上下皆不安逸。竊自以為、不久必有鬱攸之變。乃命匠泥其壁隙、以脩補之。果大火、藏書於庫中而去。……故有匱中書典、多泥水所染汚、然免池魚之殃、亦一幸矣。所以不忍削其痕者、冀諒察焉。余甚感之。其人宏才謹慎。今觀此典、正楷端肅、可謂勉矣。……苟非大略過人、孰能若斯哉。古云、歲寒然後知松栢之後凋。余於彼亦云。宝永庚寅歳季冬日。撰政家熙誌。」

なお、近衛家熙が晩年に正徳本を得て欣喜雀躍した模様は、山科道安筆録の『槐記』、享保11(1726)年12月5日の条に見える(『日本古典文学大系96』『近世随想集』)。

B03 「近現代社会と古典」

73 B03班・計画研究

「シャーナーメ」の伝承とイラン人意識の形成

研究代表者 羽田 正

東京大学東洋文化研究所 教授

分担者 枅屋 友子

東京大学東洋文化研究所 助教授

【要旨】

- 1) ペルシア語世界における屈指の古典、フィルダウスイーの「シャーナーメ(王書)」を研究対象とし、文献学、美術史、歴史学という三つの異なった方向からのアプローチを試みる。11世紀の成立時から現代に至るまでの各時代において、「シャーナーメ」の有した社会的意義を明らかにすることが目的である。
- 2) 目下、いずれのアプローチにとっても重要な刊本、翻訳、写本類、研究書などを収集し、研究の基礎的な条件を整える作業を続けている。
- 3) 具体的な研究成果は、今後学会での研究発表や論文によって公にされる。作品の和訳は当面考えない。

【位置付け】

10世紀から11世紀にかけての人、フィルダウスイーが著した「シャーナーメ(王書)」は、イスラーム以前のイラン高原に栄えた諸王朝の盛衰とそこで活躍した英雄たちの生涯を描いた歴史叙事詩である。著作にあたって彼は、イスラーム以前からイラン高原に伝わる中世ペルシア語の英雄叙事詩類を参考にしたとされる。従来、この作品の価値は以下のように考えられてきた。

1) 7世紀にイスラームを奉じるアラブ系の人々が進出して以来、公的言語としてアラビア語が用いられていたイラン高原から中央アジアの地域において、9 - 10世紀に新しく誕生した近世ペルシア語による最初の本格的な作品である。

2) 「シャーナーメ」で用いられているペルシア語は、

アラビア語の語彙をほとんど含まない純粋なペルシア語である。

3) 作品の主要なテーマは、イラン高原の王朝が表象する「イラン」の王と、漠然と中央アジア地域を指す「トゥラン」の支配者の対立・抗争であり、最終的にはイランのトゥランに対する勝利で幕を閉じるところに意味がある。そこに見られるイラン民族意識の伝統と強さこそ、アラブ系の人々からの政治的・文化的自立を志向するフィルダウシーが最も強調したかったことである。

「シャーナーメ」はその誕生以来今日に至るまで、ペルシア語を話す人々の間で最も人気のある文学作品の一つで、「シャーナーメ詠み」という専門の職業が成立するほど人口に膾炙してきた。とりわけ1979年のイラン・イスラーム革命以前のパフラヴィー朝時代には、この作品に見られるイラン人意識が、複雑な民族構成を持つ「国民国家イラン」統合の精神的支柱とされ、政府はこの作品をイラン民族意識高揚のために積極的に利用していた。この作品を総合的に研究することによって、イランという多民族共存の長い歴史を持つ地域で、それぞれの時代に古典がどのような社会的役割を果たしたかが明らかになることが期待される。

【研究成果】

本研究では、古典としての「シャーナーメ」がイラン社会において持つ意味を総合的に研究するため、以下の3つの異なったアプローチを組み合わせ、この古典作品に対して異なった角度から光を当てることを試みる。作品の日本語への翻訳は当面考えていない。

1) 文献学的研究

今日世界中の図書館や文書館に保存されている「シャーナーメ」の写本の数は、十四世紀に書写されたものから十九世紀のものまで総計二百数十点に上るが、写本間でのテキストの異動がはなはだしい。そこで、写本の系統を確定し、系統ごとにテキストがどのように異なっているのかを明らかにする作業を行う。また、なぜこのように写本間で大きな異動が生じたのか、その原因を歴史学や文学研究の方法を用いて検討する。

2) 美術史的研究

「シャーナーメ」の写本には、作品の一場面を表現した極彩色の挿絵がしばしば含まれている。これらの挿絵を整理・分類し、時代別、テーマ別にどのような特徴が見られるかを明らかにする。また、タイルを含む陶器や金属器など美術作品の装飾には、しばしば「シャーナーメ」からの詩句が用いられたが、どのような引用詩句が多いかは、時代によって異なる。引用詩句

の意味と時代別傾向を調べることによって、各時代に生きた人々の心性を明らかにする。

3) 歴史学的研究

「シャーナーメ」の近現代イラン社会における意味と役割を再考する。上でも述べたように、近現代イラン社会では、「シャーナーメ」はいわゆる「イラン人意識」を高揚させる文学作品として重要視されてきた。しかし、考えてみれば、近代イランのような「国民国家」を生み出す核となった国民意識や民族意識は、17-19世紀の近代ヨーロッパにおける産物である。10-11世紀のイラン高原に生きた人々が抱いた古典的な意味での「イラン人意識」とこの近代的な「イラン人意識」とはいかなる整合性を持つのだろうか。また、現代イランにおいて、ペルシア語を母語としないトルコ系、アルメニア系などの人々に、「シャーナーメ」とこの作品が表象する「イラン人意識」はどのように受け取られているのか。これらの問題の解明は、「国民国家」への道を歩んだ近現代イランにおいて、古典が持った意味の再考へとつながると期待される。

これらの研究を効果的に進めるにあたっては、まず前提として、すでにアメリカやロシアで刊行されている「シャーナーメ」の主要な刊本や翻訳を集めること、筆写の質が高く、保存状態の良い善写本を探し出し、そのマイクロフィルムを入手すること、これまでに出版された関連研究書を購入すること、そして、関連する研究を行っている外国人研究者とコンタクトを取り、情報の交換を行うことがどうしても必要である。昨年度から、研究代表者と分担者、それに研究協力者は、研究を円滑に進めるために、これらの課題の実現に向けて努力してきた。その結果の主な点は以下の通りである。

1) 現在刊行中で最良の刊本と言われるアメリカ・イラン協会編のテキストを購入。

2) 研究協力者・山本久美子を写本調査のためにイギリスとドイツに派遣し、英国図書館蔵の挿絵を含む善写本のマイクロフィルム18点を購入。一部は焼付け済。

3) ハンブルク大学で「シャーナーメ」の文献学的研究を進めるエメリック教授、ケンブリッジ大学でコンピューターを用いて「シャーナーメ」の画像データベースの構築を試みているメルヴィル博士と連絡を取り、協力して研究を進める体制を作った。メルヴィル博士は今秋来日し、コンピューター・ネットワークを通じての協力関係について話し合いがもたれる予定である。これらの基礎的な作業はなお継続中で、研究体制の整備は今年度一杯続けられる。

研究体制の整備と平行して、研究自体も昨年度から

ゆっくりとはあるがスタートしている。まだ明らかとなった点はそれほど多くないが、以下主な論点を簡単に紹介する。

1) 文献学的研究の分野では、研究協力者の山本久美子が精力的に研究活動を展開しており、「シャーナーメ」写本、とりわけ善写本の所在についてのデータがほぼまとまった。主に、イギリス、ロシア、そしてイランに良好な写本が多いが、イギリス以外のものは、マイクロフィルムを入手することに困難が伴う。

2) 写本間の異動についても、山本が調査を続けており、その成果の一部は近く英文論文で発表される予定である。

3) 写本に挿入されている挿絵は、写本の作成された時代によって、一定の傾向を持っていることが明らかとなった。なぜ、「シャーナーメ」のある場面が、ある時代に好んで描かれたのかは美術史上の大きな問題で、当時の人々の心性を知る上でも興味深い。研究分担者の榎屋友子は、現在このテーマに取り組んでいる。

4) 榎屋はまた、モンゴル時代のタイル装飾上に、現在のテキストからは抜け落ちている詩句が書かれていることを発見し、そのことの美術史的・社会史的意味についても考察を進めている。

5) イラン・イスラーム革命以後、イランの教科書からは「シャーナーメ」のテキストが外され、イスラームを重視するイラン・イスラーム共和国とイラン人意識を称揚したパフレヴィー朝の政策との間に大きな断絶のあることが分かった。イラン・イスラーム革命以後、現在のイラン社会で「シャーナーメ」がどのような位置を占めているかについては、早急に現地調査を行う必要があるだろう。

6) トルコ系の人々が多く居住するアゼルバイジャン地域において、「シャーナーメ」は大いに人気を博し、トルコ系の人々の「イラン国民意識」を高めるために大きな意味を持っていることが分かった。アルメニア系、クルド系、バルーチ系など、元来ペルシア語を母語としない人々の間で、「シャーナーメ」がどのような意味を持っているのかも、引き続き検討されなければならない。

近現代社会における西洋古典学の継承

フランスにおける文学研究と文学史の成立

研究代表者 中川 久定

京都国立博物館 館長

分担者 多賀 茂

京都大学総合人間学部 助教授

【要旨】

1. 近代ヨーロッパ人の文化的自己意識を目覚めさせた契機として、18世紀フランスにおける『百科全書』、『百科全書補遺』の刊行と、サン・ジェルマン・デ・プレ図書館の整備をあげることができる。
2. 前記図書館は、従前から各領域の印刷された古典、古文書類の収集に努めていたが、フランス革命後は、かつて亡命貴族や修道会の所有物だったものもこれに加えることになった。これは、古典的伝統を継承するための自覚的努力である。
3. また前記『百科全書』、『百科全書補遺』の諸項目をとおして、「批評（批判）」意識が自己確立をとげ始める一方、当時の知識人は、ギリシャ、ラテンの古典の現代的適応にも努めている。古典の継承と古典の現代への適応との最も望ましい相補的形態がここに認められる。

【位置付け】

1. ヨーロッパ文明における古典の位置

本研究グループ（中川・多賀）では、フランスに焦点を絞って、中川が文学研究の成立を、また多賀が文学史の成立を、それぞれ中心的主題として、しかし同時にそれに関連する問題（例えば、多賀における近代的図書館の成立の問題）にも目を配りながら、研究を進めている。

ヨーロッパでは、ヘレニズム時代に、テキストの確定の仕方、およびテキストの批判的読み方を対象とする学問として、文献学が成立してくる。それと同時に、それと並行する形で、ギリシャ、ラテンの文献の一部が、他の文献よりも、学問的、あるいは美的価値の高いものとして規範化され、古典としての地位を確

立し始める。こうした古典は、近現代にいたるまで、ヨーロッパ文明の内部で受容され、継承され続ける一方、各時代は、その時代ごとに新しい古典を伝統的古典群に加え続けることをやめなかった。

こうした新旧の古典は、ヨーロッパ文明の中でどのような役割を担っているのだろうか。それは、ヨーロッパ人に対して、自分たちがもっている共通の文化的起源の意識を目覚めさせ、それによって、自分たちが同じ文化的共同体に属している、という自覚を生み出す役割を果たしてきたのであった。

近代ヨーロッパにおいて、このような自意識の覚醒をうながすようになった諸契機のうちで、代表的なものをあげるとすれば、一つは、ディドロ／ランベール編『百科全書』（本編17巻、1751-1765年；図編11巻、1762-1772年）、およびパンクーク編『百科全書補遺』（5巻、1776-1777年）の出版であり、もう一つは、17-18世紀に聖俗を含めてヨーロッパ全体の知的交流の中心となっていたパリのベネディクト派修道院付属サン・ジェルマン・デ・プレ図書館の整備であった。

近代的図書館の先駆であるこの図書館をモデルにするかのように、公私の図書館の整備が進み、フランス各地の図書館において、印刷された古典、貴重な古文書類の収集が自覚的に進められていった。他方、『百科全書』、および特に『百科全書補遺』は、古典文献学を中心として進められてきた人文学が、批評としての文学研究に姿を変えてゆく、その局面を具体的に示す一種の記念碑ともいべき形を示している。

2. 現代における古典の価値

価値観が現代ほど多様に分岐した社会に人間が生きたことはかつてなかった。自然科学と技術に関していえば、細分化した諸分野が、それぞれの自己発展を最高の目的とするかのように前進し続けてとどまるところを知らず、他方、世界の先進国すべては、あらゆる領域での統制を嫌って、ひたすら自由化を目指しているため、人々は、精神的無秩序状態に陥りかねない状況にある。

こういう混迷した現代であればこそ、ともすれば崩壊しかねないこの社会に求心力を与える「なにものか」の必要性がますます強く感じられるであろう。古典は、その「なにものか」の役割を果たすものとして、一つの重要な意味をもつことができる。なぜなら古典は、一つの文明圏に生きる人間に、共通の文化的起源を思い起こさせ、この共通の起源への帰属意識を高めうるからである。

さらにまた古典は、人間の生き方にかかわる諸問題とそれに対する回答を、複雑な諸要素をさまざまに抱えこんだ現代とは異なり、単純な、しかし深い含蓄のある形で提示している。しかも古典は、こうした諸問題へのさまざまな解答のいわば宝庫なのであって、その中には、現代の社会が見捨てて顧みなかった幾つもの価値の選択肢が埋もれている。道に迷っている時、現代の私たちは、古典が内包するこうした豊富な可能性に立ち戻ることによって、新たな一步を踏み出すことができるであろう。

最後にまた、次の点も指摘しておかねばならない。それは現在はまだ存在していない「比較古典学」が、現代において果たしうる役割についてである。諸文明圏それぞれの古典を比較し、共通理解の場をつくり出す「比較古典学」が成立しうる可能性と条件は、現在すでに十分に存在している。もしそのような学問が成立しえたならば、20世紀末の今日、世界のいたるところであらわになっている異文明間の衝突を解決する知恵を現実から遠くはなれた、異なる伝統に属する過去の古典間の共通的理解の道を探るといふ一見きわめて迂遠には見えるが、しかし実際はきわめて確実な経路をとおして求めることができるはずである。

【研究成果】

中川は次のような研究を行った。18世紀のフランス社会において、ギリシャ、ラテンの古典は、一体どのような役割を果たしたであろうか。ディドロ、ランベール編『百科全書』、パンクーク編『百科全書補遺』の諸項目の分析をとおして、次のようにこの問題の解明を行った。古代から18世紀にいたるヨーロッパにおいて、さまざまな著作が生み出されてきたが、それらのうちで、「古典的」という修飾語を冠するに足りるものは、どれであるかについての合意が成立したのは、18世紀半ばであった。すなわち、この時期のフランスで、初めて「古典」という規範的概念が、明確な形で成立してきたのである。

それとともに、ギリシャ、ラテンの特定の文筆家たちの著作が、コレージュ（現在の中・高等学校、大学一般教養課程までを含む教育機関）における教育カリキュラムの中に組み込まれる。同時に、こうした作家たちを、まさに「古典的」と称しうる内的条件はなにかを分析する学問が成立してくる。すなわち、「批評（批判）」の成立である。

この時代にいたるまで、長く人文的著作に関する価値判断を支配してきたのは、「権威」（具体的にいうと、権威があると見なされていた人物たちによる発言）で

あった。18世紀になって、権威が通用する領域がしだいに狭められてくる。ただし、その際注目すべきことは、権威が価値をもち続けている分野に関しても、権威は特定の人物の名前に直接結びつくのではなくて、むしろ逆にその人物の発言や著作の内容にこそ意味があるのであり、内容こそがその人物に権威を賦与するものである、という合意が成立してきた、という点である。言説の内容に関する判断が優先するようになってきた、という点を考慮していえば、権威さえも「批評（批判）」に従属する時代が始まり出した、ということができる。

それと同時に、18世紀フランスは、「権威」から「批評（批判）」へという大きな流れを作り出すことで、古典の受容と継承をコレージュ教育によって保証する、ということにも成功した。しかも「古典的」著作の受容・継承は、この時代の古典学者たちの研究と教育の努力によって、ますます強固なものになっていった。

他方また、18世紀のフランス社会は、ギリシャ、ラテン古典を、同時代的状況に適用する試みを多数生み出すことにも成功していた。例えば、プラトン『ソクラテスの弁明』は、ヴォルテール、ルソー、ディドロの3人によって、18世紀フランスの状況に適應するような形で、それぞれ独自の仕方でも読み直され、解釈されていったのであった。すなわち、アテナイ社会を支配していた世論の犠牲になったこの人物のうちに、18世紀フランスの3人の哲学者は、それぞれの仕方でも自己自身を投入する。それによって彼らは、プラトンの作品の主人公を、いわば現代化しえたのであった（ヴォルテールの戯曲『ソクラテス』、ルソー『エミール』におけるソクラテスへの言及、およびディドロによるソクラテスを主題とした2つの戯曲プラン、など）。

このようにして、18世紀フランス社会は、古典を媒介とすることによって、ヨーロッパ文明の連続性を継承しつつ、しかも同時に自己革新をはかることに成功した、特異な世紀であった。ここには、文明社会における最も望ましい古典のあり方が認められるのである。

多賀は、次のような研究を行った。17、18世紀におけるベネディクト派修道会士の学問的業績は、ブルターニュなどの地方史の編纂、史上初めてかつ類を見ない編纂法に基づいた「フランス文学史」、ジャンセニストからの要請による聖アウグスティヌス全集の刊行など、おもに歴史的調査の正確さと該博さにおいて卓越していた。またこれらの学問的調査には、ヨーロッパ中の系列修道会との連絡網が駆使されていた。著名な学者僧としては、マビヨン、モンフォーコンな

ど一般にも知られたすぐれた学者を輩出しており、そのいずれもがいわゆる「歴史批評学」の大家であった。

当時は、蔵書の作り方に関する書物が多く出版されていたが、特徴的なのは、それらがいずれもある専門領域だけを扱うのではなく、あらゆる学問領域を網羅しながらそれぞれについて最良の書物を紹介するという体裁を取っていることである。書物を巧みに選択することで、100冊の本で立派な蔵書を作ることさえできると主張する書物さえあった。一般に知識人に対して求められた知識のあり方は、専門的領域内における卓越よりむしろ全般的、かつ要点を押さえた理解であった。しかもこのことの意味は、書齋や図書館の建築的構造そのものにも反映している。すなわち書齋の周囲の壁に書棚をこしらえ、そこにさまざまな領域の最良の書物を秩序立てて並べることによって、書齋は知の総体を代表／表象する空間となり、その内部にいる人間は、自分が集めた書物を通して宇宙の全体を眺めることになるのである。

18世紀末、フランス革命期に没収された逃亡貴族や修道会の財産・収集物については、パリから全国に報告書作成の命令が出されていたが、添付された目録書のモデルは正確を期したものであった。実はそうした任務にはベネディクト派修道会士をはじめ多くの修道会士が関与していた。また、この点に関して、彼らの図書館経営が、いわゆる「古典主義的な知」の構造を反映した前記の蔵書ないしは図書館のあり方と一線を画した、より近代的なものになっていることに注目したい。ベネディクト派修道会において図書館はむしろアーカイブ（古文書館）としての性格を付与されていた。書物は知の総体の代表ではなくむしろ個々の事実の記録となる。蔵書は閉じた空間ではなく無限に増え続ける記録となるのである。

ヨーロッパのレトリック教育

古典との関わりにおいて

研究代表者 月村 辰雄

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

分担者 葛西 康德

新潟大学法学部 教授

分担者 浦 一章

東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

【要旨】

レトリック（修辞学）は古典古代から19世紀に至るまでヨーロッパの学校教育プログラムの中核に据えられ、ホメロスやキケロなどの古典をディスカールの見本として提示することにより古典の伝承装置として機能した。本研究は、このレトリックの学校教育の中における役割や教授法の検討を通して、古典の伝承の社会的なメカニズムの考察に寄与することを目的とする。具体的には、現代と似た学校教育の激動期であったルネサンス期を対象とし、16世紀初頭にはスコラ学が主流であった学芸学部の中に、時に旧制度と拮抗し、時にその内容の再編をとめないながら、レトリックという教科目がいかに取り入れられていったのかを明らかにした。

【位置付け】

古典古代から19世紀に至るまでヨーロッパの学校教育プログラムの中核に据えられていたものの、レトリック教育の実際の状況となると研究は少ない。教育史はもっぱら教育制度に関心を寄せ、教育内容については避けて通る傾向があるし、思想史は学説史であることに終始して、それが教育のレベルでどう教えられたかという問題には関与しない。また、近代以降に誕生した各国文学史は本来レトリックの抹殺の上に成立したものであったし、さらにラテン語文献にはいたって冷淡である。レトリック教育史はこうして、各種の学問領域の埒外に放り出されている。しかしながら、近年、我が国において、ヨーロッパの修辞学を国語、

なかでも作文教育に応用しようという試みや、また修辞学の現代的形態ともいえるディベートを英語教育の中に据え付けようという動きも見られる。本研究はそれらの新たな傾向をも考慮して、特に16世紀におけるレトリックの教育プログラムへの導入、その社会的背景を明らかにするものである。なお、レトリック学説史という分野は確かに存在するが、本研究はレトリックを教育の場において捉えることを特徴とするもので、このため学説史においては通常見過ごされてしまう問題を多く拾い上げ得たと思われる。

【研究成果】

（1）学校制度の展開とレトリック

ルネサンス期のヨーロッパにおいて、神学・法学・医学という大学上級3学部は依然として旧来のカリキュラムを守り続けていたが、その準備課程というべき学芸学部は、ギリシア学の復活を契機とするギリシア・ラテン両古典語の学習ブーム、また、異教古典古代の教育の最終目標であったレトリック（修辞学）の流行という新しい現象を背景に、わずか1世紀のあいだに教育プログラムを一新させる激動にさらされた。まず15世紀イタリアに興隆したガアリーノ・ガアリーニやヴィットリーノ・ダ・フェルトレなどの人文主義者の学校は、古典語学ならびに古典作家講読を通じてのルネサンス的の全人教育を目指すものであったが、旧来の学芸学部にとって代わろうと意図するものではなく、一種の補完的な私塾として、学生を学芸学部のバカロレア試験課程ないしは直接に上級学部へと送り出した。レトリックはなお古典作家講読の枠内にとどまっていた。同じ時期に北方の低地地方を中心に展開した共同生活兄弟会（デヴォティオ・モデルナ）経営の学校も、制度上は私塾であり学芸学部の教育の補完的な役割をはたすものであったが、爆発的に増大した学生数に効率的に対処するため、同一学力レベルにある学生同士をグループに分けて、そのグループごとに易から難へ、次第に難しくなる教材を学ばせるという教育システムを作り出した。クラス制の端緒であるが、別の面から見れば、易から難へと段階を追っての練習を要する語学学習が西ヨーロッパ諸国に古代末期以来千年ぶりに復活し、この新しい練習法が新しい教育システムを要求したともいえる。旧来の大学学芸学部もこうした外部の傾向に無関心ではなかった。たとえばパリ大学学芸学部では、午後のエクストラオルディナリウス（課外）の授業枠でこれに対応し、古典作家の講読、中世前期以来のレトリック教科書である『ヘレンニウス修辞学』やキケロ『発想論』の講読、および

16世紀に入ってからギリシア語の講義を設けたが、修業要件であるリケンティア・ドケンディ（教授資格試験）のためのオルディナリウス（正規）授業枠においては、依然としてアリストテレス『オルガノン』講義が絶対視された。急激な変動は、1530年代後半以降、ジュネーヴ、シュトラスブルク、あるいは南仏ニームなど、新教地域ないしは新教勢力が市参事会を握る地域に相次いで成立したプロテスタント系学芸学部において実現する。たとえばヨハン・シュトルムは共同生活兄弟会経営の学校のシステムをより徹底して効率化し、7～8年制の学芸学部をシュトラスブルクに作り上げたが、ここにおいてラテン語学習、ギリシア語学習、両古典語作家の講読、レトリック学習の順に進むカリキュラムが策定され、その上で最終の1、2年をアリストテレスの論理学系著作、次いで形而上学・自然学・倫理学の哲学系著作の講義に充てる教育システムがはじめて試みられた。この段階ではカトリック圏の大学の対応は鈍く、パリ大学ではルフェーヴル・データブルによるアリストテレス講義の刷新（スコラ学的なカエスティオー練習から意味をたどる講読型の講義への転換）や、ペトルス・ラムスによる一種の総合講義（ラテン語作家講読の授業において、作品中の例文を用いて『オルガノン』の三段論法を教える）という試みはなされたものの、主流はなお依然としてカエスティオーとディスプタティオー中心のスコラ学的講義であった。カトリック圏における教育改革は1540年代後半以降、新興のイエズス会によって着手される。これは、宗教上の対立にもかかわらず、共同生活兄弟会経営の学校ないしプロテスタント系学芸学部を範としたもので、ラテン語・ギリシア語学習、古典作家講読、レトリックをこの順に並べるカリキュラムが採用されている。最盛期には西ヨーロッパ全体で600を数えた学院（コレギウム）で同一の『学則』に従い、キケロの『親しき者への手紙』からウェルギリウスまで、アイソポスからホメロスまで、もっぱら10代の若者向きに選ばれた人生を肯定的・理想的にとらえる著作群が教えられた。これら教室（クラス）で読まれる著作から、古典（クラシック）という觀念の多くが形成される。ただ、イエズス会のテキスト選定については、学習の一層の効率化を計るために原典主義が放棄され、イエズス会の故地ともいえるスペインのコインブラ大学学芸学部に委嘱して、適切な箇所を抜き出した抜粋版と、若者向きでない不穏当な部分を隠した削除版とが盛んに作成された点に注意する必要がある。このイエズス会の学院の隆盛に対抗するため、大学学芸学部はようやく改革に乗り出し、たとえばパリ大学は教会

勢力に代わった国王・高等法院グループの手により、16世紀末から17世紀初頭にかけて古典語・古典講読とレトリック学習とを2本の柱とし、アリストテレス論理学を付け足りとして最終学年で講義するカリキュラムを正式に採用した。

（2）レトリック教育をめぐる問題

キケロ派について 古典語学習が15世紀のイタリアでブームになった当初から、その目的について、2つの考えの対立が顕著であった。一方は古代人と同じような美しい文体を操るために古典語を学ぶ、いわば実作派であり、他方は古典古代の著作をより正確に解釈するために学ぶ、いわば学究派である。ロレンツォ・ヴァッラとポッジョ・ブラッチョリーニの反目はこれにあたるが、近代的な意味での研究という觀念が未成熟なルネサンス期から近世にかけて、古典語を諸学校で学ぶ者の大多数は前者の目的を有し、実際またカリキュラムもその目的のために策定されていた。その文体模写の対象としてとりわけキケロが選ばれ、独占的な地位を築いて、やがてキケロの用いた語彙・語法以外は使わないというキケロ派が形成されるが、15世紀後半から16世紀前半のイタリアにおいてこのキケロ主義に組み込んでいたのがもっぱら諸学校の教師層であった点は注目されてよい。エラスムスは対話篇『キケロ派』の中で、キケロ語彙集や作文のための逆引きのキケロによるラテン語表現辞典作成に一生をかける人間を揶揄しているが、実際にこうした辞書類は多く作られ、学校教育の中で多用された。学校教師としてみれば、教育の基準、採点の拠り所としてこうした権威を必要とした。

レトリックの諸派閥 キケロの文体がルネサンス期に評価されたのは、それが従属節を連ねる重々しい総合文（ペリオドゥス）を特徴としていたからである。レトリック教育の目的の一つは総合文の作成にあり、それを専門とする教科書も作られている（ヨハン・シュトルムなど）。しかし古代以来、含意に富む濃密な単文を重んじる文体もあった。この、セネカの『ルキウス宛書簡』を理論的根拠としタキトゥスを模範例としてキケロ主義に叛旗をひるがえすネグリゲンティア・ディリゲンス（巧まれた粗放）型の文体の理想も、16世紀に入って復活したが（マルク・アントワーヌ・ミュレ、モンテーニュ）、こちらは本来各人の文学的才能に依拠するもので、教室における練習になじまず、16世紀の時点では教育には取り入れられなかった。一方、同じ教室の外でも、フランスの高等法院による法曹家のグループには、職業上の修練から、さまざまな例示を重ねて事実の重みによって相手を説得す

る「例証のレトリック」が一種の伝統として成立していた（たとえばエティエンヌ・パーキエ）。教室の中でも、たとえばイエズス会はキケロ主義を採用せず、キリスト教的雄弁を重んじる姿勢を見せているが、ただし各種の呼びかけや絵画的描写によって対象を眼前に彷彿するように表象する「描写のレトリック」を特徴とする。

レトリックとディアレクティック 旧来の大学学芸学部のスコラ学教育が強固に残存したアルプス北方の諸国では、アリストテレスの『オルガノン』によるディアレクティック（弁証学）のカリキュラム内容が最後までレトリックと競合した。15世紀後半のロドルフ・アグリコラの『弁証学的発想論』は、そもそもディアレクティックの枠内にレトリックの材料を盛り込もうとする試みであり、また16世紀のメランヒトンのレトリック教科書はレトリックの諸概念の説明の他は比喻と文彩を列挙する措辞論のみで、発想論・配置論はディアレクティックのほうに回されている。同じくペトルス・ラムスの教科書でも措辞論のみに還元されている。発想・配置・措辞の各部を備えるのは、もっぱらイエズス会系の教科書であった。

レトリック教科書 ルネサンスの古写本探索の成果として、クインティリアヌスの完全本やギリシア語でもヘルモゲネスの『修辞学体系』など多くの古代修辞学書がもたらされたが、クインティリアヌスは「初学者には長すぎ、また複雑すぎる」し、キケロの『修辞学分類』は「あまりに簡潔で、修辞学の豊かさが凝縮されすぎている」し、対話篇『弁論家について』は「長さは申し分ないが、この対話という形式は成人の興味をそそる分だけ、若者にとっては理解の妨げともなりかねない」し、『発想論』は「キケロ自身が認めているように、アリストテレスの学説を反映させていないし、それになにより措辞の部分は含んでいない」し、『ヘレンニウス修辞学』には「キケロやクインティリアヌスの教えと反することが散見される」という具合に、不思議なほど学校向けの著作はなかった。初めて学校教科書としての総合的修辞学書を発案したのはイエズス会であり、やはり16世紀後半、コインブラ大学の修辞学教師であったソアレスが委嘱され、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスからの抜粋を編集する形で著作された。ここにもまたイエズス会の抜粋主義を看取することができる。

西洋世界における古典の伝承と解釈

研究代表者 中川 純男
慶応義塾大学文学部 教授

分担者 西村 太良
慶応義塾大学文学部 教授

分担者 高橋 通男
慶応義塾大学言語文化研究所 教授

【要旨】

西洋古代末期から中世における古典解釈の方法を、中世におけるアリストテレス解釈、およびヘレニズム期におけるホメロス研究を中心に、個別テキストに即して、検討し解明した。中世に関しては、とくにトマス・アキナスにおけるアリストテレス解釈の独自性、ヘレニズム期に関しては、ロドスのアポロニオスにおけるホメロス解釈、近現代におけるギリシア解釈に関しては、ピンダロス解釈を中心として研究した。

【位置付け】

古典と呼ばれる書物にとって、本質的な事態は二つあると思われる。ひとつはテキストの伝承であり、もう一つはその解釈である。現代の学的方法は、この二つを厳密に区別しようとするが、しかし、歴史的に見るなら、テキストの伝承と解釈は密接に結びついていた。これはある意味で当然のことである。なぜなら、テキストを理解可能な形で伝承しようとするとき、内容についての理解をも問題とせざるを得ないからである。

本研究は、古代末期から中世にかけてテキスト解釈がどのような形で行われてきたかを解明することを通して、ギリシア古典の伝承過程を解明することを目的としている。

【研究成果】

イスラム文化圏を経由してラテン西欧に流入したアリストテレスの著作は、その広範な問題領域により、新たな領域の知識へと好奇心を呼び覚まただけでなく、学問の方法も大きく変えることになった。アリス

トテレス解釈は、形成期にあった大学での講義の方法や著述の形式に変化をもたらした。このことが西洋中世後期の思想に大きな影響を与えたことは言うまでもないが、そこに内包された知識の体系化という指向は、ルネサンスおよび近世の思想的潮流を準備するものでもあった。

具体的にはたとえば、中世の大学で用いられた「問い (quaestio)」と呼ばれる講義および著述の形式は、ある問題について相容れない二つの立場を提出した後、その問題の適切な解決を探るという方法であるが、これはアリストテレスのテキストを読みすすむにあたり、複数の異なった解釈のいずれを選ぶべきかが決定しなければならないという実際的な必要が生み出したものである。また、もともとは「要約」を意味した「スンマ (summa)」が、「大全」と訳されるような、ある分野の知識の包括的体系的叙述を意味するようになったのも、アリストテレスの影響であると考えられる。なぜなら、アリストテレスの学問的方法は、先行研究の批判的検討から学問領域の確定と、そこで取り扱われるべき問題の提示を行おうとするものだからである。

しかし、このようなアリストテレスの影響は、たんにその著作内容による影響だけではない。論理学、自然学、形而上学 (神学)、倫理学といった学問領域の区分はアリストテレス自身の区分というよりむしろ、ヘレニズム時代の末期に編纂されたアリストテレス全集の著作分類によるところが大きい。この意味で、西洋におけるアリストテレスの伝承は、テキストの伝承であると共にテキスト解釈ないしテキスト解釈の枠組みの伝承でもある。

このように、テキストを媒体としてさまざまな伝統の継承しようとする傾向はヘレニズム期の学的研究態度に発すると考えられる。アポロニオスの叙事詩『アルゴナウティカ』はホメロスの叙事詩に用いられた語彙を中心に構成されているが、次のような特徴が認められ。すなわち、ホメロスにおいて一度しか現れない語彙あるいは希なの多用、定型句の変形使用、使用語彙を通してのホメロスへのアリュージョン、言語の使用頻度の逆転などである。アポロニオスは主としてホメロスの叙事詩言語を使用するが、可能な限りホメロスの言語表現を避けてホメロスとは異なる表現を模索しているように見える。したがって、すべてがホメロスのヴァリエーションになっているのである。また、これが同じくヘレニズム期の叙事詩におけるホメロスを主とする古代叙事詩言語の形象の仕方であり、また模倣のあり方でもあった。アポロニオスの場合はとくに、この傾向が極端な形で現れているように思われる

が、それはその後の叙事詩において支配的となる傾向であり、ラテン叙事詩にも受け継がれる傾向である。

主要業績

- 中川純男 イデアと存在 『パイドン』の想起説、『古代哲学研究』31号, 1999, 4 14ページ
- 中川純男 アリストテレスと西洋中世、『古典学の再構築』5号, 1999, 50 51ページ
- 中川純男 『存在と知 アウグスティヌス研究』創文社, 2000, xi + 292ページ
- 西村太良 aotos Revisited - Some Aspects of Pinder*s Vocabularies, 『古典古代における語彙と語法』慶應義塾大学言語文化研究所, 2000, 47 77ページ
- 高橋通男 ヘレニズムの詩におけるアリュージョンとホメロス研究3, 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, 2000, 55 74ページ
- 高橋通男 叙事詩における言語表現の形象と模倣 『古典古代における語彙と語法』慶應義塾大学言語文化研究所, 2000, 5 45ページ

「古典学の再構築」研究成果中間報告集
平成12年10月1日発行

[編集・発行]

特定領域研究「古典学の再構築」総括班
〒651 2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518
神戸学院大学人文学部
Tel .(078) 974 1551 内線2359
Fax (078) 976 1715
E mail. Nakatani@human.kobegakuin.ac.jp